

# 堂の前・福沢・青木沢

塩尻東地区課営園場整備事業

発掘調査報告書

1985

塩尻市教育委員会

# 堂の前・福沢・青木沢

塩尻東地区県営圃場整備事業

発掘調査報告書

1985

塩尻市教育委員会

## 序

塩尻東地区は市内でも有数の遺跡の宝庫として知られており、以前より学術上貴重な資料を数多く提供してまいりました。昨年度から始まった塩尻東地区の県営ほ場整備事業は今年2年目を迎え、2地区3遺跡が工事区域内にあり、遺跡の一部が破壊されることになったため埋蔵文化財を保護するという立場から工事に先立って緊急発掘調査を実施することになりました。この調査は長野県中信土地改良事務所から塩尻市教育委員会に委託され、地元の考古学研究者・市教委・信州大学考古学研究会員を中心に地元の方々の御協力により実施されました。

調査は5月から9月にかけて行われ、その結果数多くの成果をあげることができました。長畝の堂の前遺跡では全国でも数少ない縄文時代早期末の住居址群が確認され、同じく長畝の福沢遺跡においては縄文時代早期末と弥生時代初期という県下でも空白とされているこの時期の一括資料が出土したほか、東山の青木沢遺跡でも貴重な旧石器時代末期の石器が多量に出土しました。これらの資料はいずれもこれまであまり報告例がないもので、今後該期の研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供したと思います。また同地域の歴史の解明にも大きな前進をもたらしたといえましょう。

この発掘調査が無事完了するについては、地元土地改良区役員の方々をはじめとして作業に献身的に御協力いただいた多くの地元の方々の深い御理解と暖かい御援助によるものであり、ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

報告書の発刊にあたっては調査員の先生方をはじめとして多数の方々の御尽力によるものであり、重ねて謝意を表するものであります。

昭和60年1月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優一

## 例 言

- 1、本書は、昭和59年度県営圃場整備事業塩尻東地区に伴なう、中信土地改良事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて昭和59年5月16日から9月3日にわたって行われた塩尻市内2地区3遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2、調査経費については、中信土地改良事務所からの委託金および国庫・県費補助金による。
- 3、本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。
  - 遺構…整理、トレース：鳥羽、小林、北原。
  - 土器…復元：市川、三村。
    - 実測：三村、前田、百瀬、寺島。
    - 拓本：百瀬、前田、三村、池田、小林、鳥羽、金田、小澤、五十嵐、三井、中村、山本。
    - トレース：百瀬、前田、三村、寺島
  - 石器…実測、トレース：小林、前田、三村。
  - 図版組み…小林、鳥羽、前田、三村、百瀬、寺島、池田、三井、五十嵐、金田、中村、小澤、山本、上田。
  - 写真…鳥羽。
- 4、本書の執筆は各調査員・調査補助員が分担して行ない、文責は文末に記した。
- 5、本書の編集は小林・鳥羽が行なった。
- 6、調査にあたり次の方々の御指導を得た。記して感謝申し上げたい（敬称略）。
  - 中島章二、大参義一、神村 透、会田 進、山田晃弘、森山公一、西沢寿晃、石川日出志、百瀬長秀、柴垣勇夫、久永春男、佐々木藤雄。（順不同）
- 7、本書の土器観察表に使われている胎上の略語は次のとおりである。
  - 石…石英 長…長石 雲…雲母 黒…黒雲母 金…金雲母
  - 岩…岩片 砂…砂粒 小石…小石 白…白色不透明粒子 黒曜石…黒曜石 せんい…植物繊維 褐…褐鉄鉱土器観察は各担当者ごとに行なったため、上記の中には重複するものもある。
- 8、本調査の出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

# 目 次

## 序

### 例 言

第I章 調査状況	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	4
第4節 遺跡の状況と面積	10
第5節 工事施工後の遺跡の現状	11
第II章 遺跡周辺の環境	13
第1節 自然環境	13
第2節 周辺遺跡	17
第III章 調査遺跡	20
第1節 堂の前遺跡	20
1 位置	20
2 過去の調査経過	20
3 調査概要	20
4 発掘区の設定	24
5 土層	25
6 遺構	26
1) 縄文時代	26
(1)住居址	26
(2)小竪穴	43
(3)集石	44
(4)性格不明の遺構	47
2) 平安時代	47
(1)住居址	47
3) 中 世	52
(1)中世遺構	52
(2)独立柱建物址	53
(3)柱列址	53
(4)墓 址	53
(5)集 石	56
7 遺物	57
1) 土 器	57

2)	石器	115
3)	鉄器	134
4)	人骨	134
8	調査の成果と課題	144
1)	縄文時代の土器について	144
2)	縄文時代早期後半の石器群	149
3)	縄文早期末の住居と集落	155
4)	堂の前・福沢遺跡の周辺について	162
9	まとめ	163
第2節 福沢遺跡		
1	位置	164
2	過去の調査経過	164
3	調査概要	166
4	発掘区の設定	167
5	土層	169
6	遺構	170
1)	縄文時代	170
	(1)集石	170
	(2)小竪穴	171
2)	縄文晩期～弥生初頭	171
	(1)小竪穴	171
	(2)ピット群	172
3)	平安時代	172
	(1)住居址	172
	(2)小竪穴	181
	(3)竪穴状遺構	181
7	遺物	182
1)	上器	182
2)	石器	240
3)	土製品	251
8	調査の成果と課題	253
1)	福沢遺跡における初期弥生文化の立地環境	253
2)	土器について	256
3)	石器について	265
9	まとめ	268

第3節 青木沢遺跡	269
1 位置	269
2 過去の調査経過	269
3 調査概要	271
4 発掘区の設定	273
5 上層	273
6 遺構	275
1) 凹形硬化面	275
2) ロームマウンド	278
3) 小竪穴	278
7 遺物	279
1) 先土器時代	279
2) 縄文時代	283
(1)土器	283
(2)石器	292
(3)土偶	296
3) 弥生時代	296
(1)土器	296
(2)石器	303
8 調査の成果と課題	303
1) 遺跡の地形環境	303
2) 遺跡立地の変遷	305
3) 土器	308
9 まとめ	308
第IV章 結語	310
参考引用文献	311

## 挿図目次

第1図	工事施工後（長畝地区）	11
第2図	工事施工後（東山地区）	12
第3図	遺跡位置図	13
第4図	垣尻東地区地形新断面	14
第5図	長畝付近における片丘礫層と赤城山礫層の関係	16
第6図	垣尻東地区遺跡分布図	18
第7図	堂の前・稲沢遺跡調査地区図	21
第8図	堂の前遺跡遺構全体図	22
第9図	堂の前遺跡層序断面図	24
第10図	堂の前遺跡と現河床の礫種割合	25
第11図	第1号住居址	26
第12図	第4号住居址	28
第13図	第6号住居址	30
第14図	第3・5・7号住居址	32
第15図	第8・9号住居址	33
第16図	第10号住居址	35
第17図	第11号住居址	37
第18図	小竪穴群(1)	38
第19図	小竪穴群(2)	39
第20図	小竪穴群(3)	40
第21図	小竪穴群(4)	40
第22図	小竪穴群(5)	41
第23図	小竪穴群(6)	41
第24図	小竪穴群(7)	42
第25図	小竪穴群(8)	43
第26図	第1・2号集石址	45
第27図	性格不明の遺構	46
第28図	第2号住居址	48
第29図	中世遺構・第1・2・3号建物址・第12号住居址・小竪穴群	49
第30図	中世遺構覆土セクション図	51
第31図	第12号住居址および小竪穴群セクション図	52
第32図	第1・3号火葬墓	54
第33図	第3・4号集石	55
第34図	第1号住居址出土土器	58



第35图	第4号住居址出土土器	59
第36图	第3·5号住居址出土土器	61
第37图	第5·6·7·8号住居址出土土器	62
第38图	第8·10号住居址出土土器	63
第39图	第10号住居址出土土器	64
第40图	第11号住居址土器出土状态图·第5号集石	66
第41图	第11号住居址出土土器(1)	67
第42图	第11号住居址出土土器4展开图	68
第43图	第11号住居址出土土器(2)	69
第44图	第11号住居址出土土器(3)	70
第45图	第11号住居址出土土器(4)	71
第46图	小整穴出土土器(1)(第1~19号小整穴)	73
第47图	小整穴出土土器(2)(第20·24号小整穴)	74
第48图	小整穴出土土器(3)(第24·27·29·30·32号小整穴)	75
第49图	遺構外出土土器(1)	78
第50图	遺構外出土土器(2)	80
第51图	遺構外出土土器(3)	82
第52图	遺構外出土土器(4)	84
第53图	遺構外出土土器(5)	85
第54图	遺構外出土土器(6)	87
第55图	遺構外出土土器(7)	89
第56图	遺構外出土土器(8)	90
第57图	遺構外出土土器(9)	91
第58图	遺構外出土土器(10)	92
第59图	遺構外出土土器(11)	94
第60图	遺構外出土土器(12)	95
第61图	遺構外出土土器(13)	96
第62图	遺構外出土土器(14)	98
第63图	遺構外出土土器(15)	99
第64图	遺構外出土土器(16)	100
第65图	遺構外出土土器(17)	102
第66图	遺構外出土土器(18)	103
第67图	遺構外出土土器(19)	104
第68图	遺構外出土土器(20)	105
第69图	遺構外出土土器(21)	107
第70图	遺構外出土土器(22)	109

第71区	遺構外出土石器03	111
第72区	第2号住居址出土石器	113
第73区	中世遺構出土遺物	114
第74区	第1号住居址出土石器	116
第75区	第4・6・8号住居址出土石器	118
第76区	第8・10・11号住居址出土石器	119
第77区	第11号住居址出土石器	121
第78区	第12号住居址・小竪穴出土石器	122
第79区	遺構外出土石器(1)	124
第80区	遺構外出土石器(2)	125
第81区	遺構外出土石器(3)	126
第82区	遺構外出土石器(4)	127
第83区	遺構外出土石器(5)	128
第84区	遺構外出土石器(6)	129
第85区	遺構外出土石器(7)	130
第86区	遺構外出土石器(8)	131
第87区	遺構外出土石器(9)	132
第88区	遺構外出土石器00	133
第89区	遺構外出土石器01	135
第90区	遺構外出土石器02	136
第91区	遺構外出土石器03	137
第92区	遺構外出土石器04	138
第93区	遺構外出土石器05	139
第94区	遺構外出土石器06	140
第95区	遺構外出土石器07	141
第96区	遺構外出土石器08	142
第97区	古銭・土製品	143
第98区	石器出土分布図(1)	150
第99区	石器出土分布図(2)	151
第100区	石器出土分布図(3)	152
第101区	特殊磨石分類区	153
第102区	早期住居址(1)	159
第103区	早期住居址(2)	160
第104区	福沢出土の古鏡	164
第105区	福沢遺跡遺構全体図	165
第106区	縄文遺構確認のトレンチと押型文土器出土区	165

第107図	福沢遺跡グリッド設定図	167
第108図	福沢遺跡層序断面図	168
第109図	押型文土器出土区及び第8号小竪穴	169
第110図	押型文期集石	170
第111図	第2・3・4号小竪穴及びピット群	173
第112図	第5・6・7号小竪穴・ピット群・竪穴状遺構	174
第113図	第1号住居址	175
第114図	第2号住居址	176
第115図	第2号住居址煙道	177
第115a図	第2号住居址カマド付近	177
第117図	第3号住居址	179
第118a図	第4号住居址	180
第118b図	第4号住居址カマド付近	180
第120図	第1号小竪穴	181
第121図	押型文・無文土器	183
第122図	押型文土器	185
第123図	押型文土器	186
第124図	押型文土器(1)	187
第125図	押型文土器(2)	188
第126図	押型文土器(3)	189
第127図	押型文土器(4)	190
第128図	押型文土器(5)	191
第129図	押型文土器(6)	192
第130図	押型文土器(7)	193
第131図	押型文土器(8)	194
第132図	押型文土器(9)	195
第133図	押型文土器00	196
第134a図	縄文・撚糸文土器01	198
第135a図	撚糸文土器02	200
第136a図	撚糸文・無文土器03	201
第137a図	早期条痕文土器(1)	203
第138a図	早期条痕文土器(2)	204
第139a図	早期条痕文土器(3)	206
第140a図	縄文前・中・後期土器	207
第141a図	土器集中区遺物出土状況	209
第142a図	出土土器接合関係	209

第143図	晩期土器出土位置図	210
第144図	弥生土器出土位置図	211
第145図	壺形土器出土状態図	212
第146図	小竪穴・ピット群出土土器	213
第147図	土器集中区出土縄文晩期土器(1)	215
第148図	土器集中区出土縄文晩期土器(2)	216
第149図	土器集中区出土縄文晩期土器(3)	217
第150図	土器集中区出土縄文晩期土器(4)	218
第151図	土器集中区出土縄文晩期土器(5)	220
第152図	土器集中区出土縄文晩期土器(6)	221
第153図	土器集中区出土縄文晩期土器(7)	222
第154図	土器集中区出土縄文晩期土器(8)	223
第155図	土器集中区出土弥生土器(1)	225
第156図	土器集中区出土弥生土器(2)	226
第157図	土器集中区出土弥生土器(3)	227
第158図	土器集中区出土弥生土器(4)	228
第159図	土器集中区出土弥生土器(5)	229
第160図	第1・2号住居址出土土器	234
第161図	第2・3・4号住居址出土遺物	235
第162図	遺構外出土土器	236
第163図	押型文土器包含層出土石器(1)	241
第164図	押型文土器包含層出土石器(2)	242
第165図	土器集中区出土石器(1)	243
第166図	土器集中区出土石器(2)	244
第167図	土器集中区出土石器(3)	245
第168図	土器集中区出土石器(4)	246
第169図	土器集中区出土石器(5)	247
第170図	土器集中区出土石器(6)	248
第171図	土器集中区出土石器(7)	249
第172図	土製品	252
第173図	縄文晩期～弥生遺物密集出土地域	255
第174図	ちんじゅ遺跡出土土器	261
第175図	平出遺跡出土土器(1)	262
第176図	平出遺跡出土土器(2)	263
第177図	銭宮遺跡出土土器	264
第178図	石器組成変遷図	266

第174図	青木沢遺跡調査地区図	270
第180図	青木沢遺跡遺構全体図	272
第181図	青木沢遺跡層序断面図	274
第182図	第1号円形硬化面	276
第183図	第2号円形硬化面	277
第184図	第3号円形硬化面	277
第185図	ロームマウンド・第1号小竪穴	278
第186図	第2号小竪穴	279
第187図	先土器時代出土石器(1)	281
第188図	先土器時代出土石器(2)	282
第189図	先土器時代遺物分布図	283
第190図	遺構外出土石器(1)	285
第191図	遺構外出土石器(2)	286
第192図	遺構外出土石器(3)	287
第193図	遺構外出土石器(4)	290
第194図	遺構外出土石器(5)	291
第195図	遺構外出土石器(6)	293
第196図	遺構外出土石器(7)	294
第197図	遺構外出土石器(8)	295
第198図	遺構外出土石器(1)	297
第199図	遺構外出土石器(2)	298
第200図	遺構外出土石器(3)	299
第201図	遺構外出土石器(4)	300
第202図	遺構外出土石器(5)	301
第203図	土偶	301
第204図	弥生土器	302
第205図	磨製石鏃	303
第206図	旧石器出土範囲	305
第207図	遺物出土変遷図	306

## 表目次

第1表	発掘調査経過表	10
第2表	堂の前遺跡小竪穴一覧表	44
第3表	県内早期後半住居址一覧表	158

第4表	福沢遺跡小竪穴一覧表	172
第5表	塩尻東地区各遺跡の地形による分類	253
第6表	押型文土器出土表	257
第7表	押型文土器出土表	257

# 第I章 調査状況

## 第1節 発掘調査に至る経過

- 1月10日 昭和59年度文化財関係補助事業計画について（提出）
- 3月22日 長欽地区區場整備役員、市耕地課、市教育委員会により、堂の前遺跡と福沢遺跡発掘の調査時期および調査箇所についての協議
- 4月10日 昭和59年度文化財関係図書補助事業の内定について（通知）
- 4月10日 昭和59年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）
- 5月1日 中信土地改良事務所、市耕地課、市教育委員会により今年度予定されている発掘調査についての協議
- 5月1日 昭和59年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）
- 5月14日 茨尻東地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約について
- 5月14日 埋蔵文化財包蔵地堂の前遺跡の発掘調査について（通知）
- 5月23日 昭和59年度文化財保護事業県費補助金交付申請書について（提出）
- 6月2日 埋蔵文化財包蔵地福沢遺跡の発掘調査について（通知）
- 6月20日 昭和59年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）
- 6月20日 昭和59年度文化財保護事業県費補助金の交付決定について（通知）
- 7月11日 埋蔵文化財包蔵地青木沢遺跡の発掘調査について（通知）
- 7月17日 堂の前遺跡・福沢遺跡埋蔵文化財の取得について（届）
- 7月30日 堂の前遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）
- 9月5日 青木沢遺跡埋蔵文化財の取得について（届）
- 9月29日 青木沢遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）
- 10月3日 福沢遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

### 発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

- 2、遺跡名 堂の前遺跡、福沢遺跡、青木沢遺跡
- 4、発掘調査の目的及び概要 開発事業現場整備事業に先立ち2,300m<sup>2</sup>以上を発掘調査し、記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和59年10月20日までに終了する。調査報告書は昭和60年3月31日までに刊行するものとする。
- 6、発掘調査の作業工程 発掘作業73日 整理作業73日 合計146日
- 7、発掘調査委託費 発掘調査費全額 14,000,000円 文化財農家負担軽減額(-)3,150,000円  
計 10,850,000円
- 8、報告書作成部数 300部

## 第2節 調査体制

### (1)堂の前遺跡

団長	小松 優一	(塩尻市教育長)
担当者	小林 康男	(日本考古学協会、市教委)
調査員	鳥羽 嘉彦	(長野県考古学会、市教委)
	山本 紀之	( " )
	寺島 俊郎	( " )
	百瀬 忠幸	( " )
	島田 哲男	( " )
	降旗 俊行	( " )
	三村 肇	( " )

調査補助員 前田清彦、三村 洋、松本建速、中村伸一、宮澤富美恵、木内和枝、上田貴洋、小林 享、山本淳子。

参加者 市川二三夫、石川秀雄、清水半男、百瀬正寿、保高愛明、百瀬阿さ江、百瀬里子、樋口行武、米窪久美、各務理奈、一ノ瀬豊、笠原智実、笠原崇明、小口達志、百瀬峰子、中野久行、中島房美、米窪三保、川上奈美江、増淵 修、青木玲子、百瀬桂貴、百瀬良子、松崎陽男、柳沢千寿子、小林ひろ、川上良二、佐倉潤一、中野成治、川上秀雄、北原好文、今井とめ子、須山千才、横山尚志、小室文彦、今村和浩、小山祐二、小林 稔、内山雅紀、川上隆幸、白木成実、中島春世、内山明子、田中瑞穂、小松 学、二澤茂子、小松鈴子、林 重子、溝口悦子、坂井七重、金田和子、五十嵐しづえ、三井公子、山本敬子、小澤秀子、中村ふき子、米窪納子、伊藤みつる、林けさみ、米窪ふさ江、米窪芳江、古厩智之、川上ますゑ、菅野良子、井田旬子、袖山富吉。

### (2)福沢遺跡

団長	小松 優一	(塩尻市教育長)
担当者	鳥羽 嘉彦	(長野県考古学会、市教委)
調査員	小林 康男	(日本考古学協会、市教委)
	百瀬 忠幸	(長野県考古学会)
	寺島 俊郎	( " )
	島田 哲男	( " )
	石上 周蔵	( " )
	山本 紀之	( " )

調査補助員 前田清彦、三村 洋、松本建速、出河裕典、小林 享、上田貴洋、櫻原典明



参加者 清水年男、市川二三夫、百瀬阿さ江、百瀬里子、樋口行武、百瀬峰子、中野やすみ、中島房美、米窪三保、増洗 修、川上秀雄、柳沢千寿子、小林ひろ、白木成実、三澤茂子、小松鈴子、北原好文、坂井七重、三井公子、五十嵐しづえ、金田和子、中村ふき子、山本敬子、小澤秀子、伊藤みつる、米窪ふさ江、米窪芳江、一ノ瀬温、松崎房男、林けさみ、横山尚志、須山千才、小室文岳、春田義満、小林注連の、林功、米窪昶子、小松 学、小口達志、米久保勇、小松幸美、宮崎公子、川上ますゑ、増田登志江。

### (3)青木沢遺跡

団 長 小松 優一 (塩尻市教育長)  
担当者 小林 康男 (日本考古学協会員、市教委)  
調査員 鳥羽 高彦 (長野県考古学協会員、市教委)  
百瀬 志幸 ( " )  
山本 紀之 ( " )  
寺島 俊郎 ( " )

調査補助員 三村 洋、前田清彦、松本達速、小林 享、上田貴洋、腰原典明、中村伸一、宮澤富美恵、山本淳子、藤田英博

参加者 小松幸美、清水年男、市川二三夫、中野やすみ、三井公子、五十嵐しづえ、金田和子、中村ふき子、山本敬子、小澤秀子、小林ひろ、中島房美、柳沢千寿子、北原好文、須山千才、横山尚志、小室文岳、今村和浩、小山祐二、小林 聡、小松 学、小口達志、長瀬 真、内山頼明、百瀬規和、田中伸一、波切昭子、中村哲也、田中登至也、林 功、永瀬正直、坂井宗治、小沢 誠、大和清志、岩垂智彦、仲二見智、酒井 充、酒井 浩、小口 優、初沢健一、大槻恵子、花岡信二、浅村賢充、笠原康稔、笠原史恵、小野一志、吉江賢一、須田浩季、酒井 敦、黒須真児、細田秀一、中村 史、青柳年泰、一ノ瀬温、高木優治、高橋 尚、降旗真美、柏原 勉、等々力純子、菅田憲治、二木利幸、須田美夏子、小岩井千文、田中みのり、奥原秀雄、松崎 修、内山明子、中島春世、有賀弘和、小松信一、中村誠治、青柳祐司、明間健一、安藤 学、市川清二、伊藤 保、大和文浩、小澤文彦、笠原崇明、笠原浩一、川上良二、小松 容、小松啓吾、関沢和男、千村隆夫、西沢君子、西村 格、古畑和弘、三石科雄、三村俊雄、山田 洋、中村美子、小澤祥明、吉江 悟、中野正三、波切 勇、山岸英雄、鎌倉 妥、赤羽徳久、鮎沢和彦、等々力長雄、降旗紀章、宮坂おる、荻上一敏、三村英雄、岩下哲典、黒崎征男、藤田 敦、小松直幹、一ノ瀬敦博、赤羽俊一、土川知義、西沢香織、西沢慎太郎、原田 純、宮川 浩、赤羽仁雄、米久保文義、小澤秀子、池田しのぶ。

## 事務局

市教委総合文化センター所長	二木三郎
” 文化教養担当課長	清水良次
” 文化教養担当副主幹	中野 栄
” 文化教養担当主事	鳥羽嘉彦
” 平山遺跡考古博物館学芸員	小林康男

## 協力者

塩尻東土地改良区理事長	平林袈裟男
塩尻東土地改良区工事委員長	笠原和晃
塩尻東土地改良区理事（長畝地区地区長）	保高直樹
” （東山地区地区長）	岩垂 男
塩尻東地区工事委員（長畝地区補助監督員）	吉江昭次
” （東山地区補助監督員）	古畑淑博
塩尻東土地改良区事務長	青木文明
地権者（堂の前遺跡）	保高庄重
”	保高利男
”	吉江昭次
” （福沢遺跡）	樋口みつる
”	吉江光朝
” （青木沢遺跡）	金子 隆
資料協力者	小松定男

## 第3節 調査日誌

### (1) 堂の前遺跡

○昭和59年5月16日（水）曇のち晴 発掘調査に先立ち遺跡付近の表面調査、試掘を行う。8ヶ所の試掘坑の中で東区より赤成文、緑線土器片が出た。また西区より角釘が出土。曇から雨が激しくなったため、博物館にて発掘器材の点検を行う。

○5月17日（木）晴 テントおよび発掘器材を現地へ搬入。

○5月18日（金）曇のち晴 テント設置。遺跡の表面踏査。縄文早期条痕土器片、中割土器片、黒曜石フレークを多数採取。少なくとも3時代以上の複合遺跡であることを確認する。

○5月19日（土）晴一時雨 周辺の地形・地質調査と表面踏査。午後、博物館において調査員、調査補助員が集まり発掘方法等についての打合せ。

○5月20日（日）曇 発掘建設のブルドーザーにて表土除去。東区の表土はびきた。宗尾の寺西庭藤氏、今日の発掘調査を記録に収めるための本日よりビデオ録り開始。

○5月21日（月）晴 本日より本格的作業開始。朝参加者の受付を行った後、

文化財担当課長より挨拶。小林調査担当より経過説明。調査区北東隅から助産により削平をする。北縁は10cm掘り下げたところで早くもローム面露出。畑地拡張のため斜面を削平したものである。塩尻日報記者取材に来訪。

○5月22日(火)晴 東区に5m間隔のグリッド設定。E-6のクイをレベリング原点とする。B-C-1を5m掘り下げ。B-2の南側に土器片を多数伴出する集石を検出。簡易便所をテント横に設置。県理文センター職員来訪。

○5月23日(水)晴 B-D-2を5m掘り下げ。D-5で黒色土の落ち込みを確認。第1号住居址とする。C-4で遺物の硬化面を検出。更にC-5にかけて数センチの小堅穴を確認する。表土が南側ほど厚くなるため地層状況を把握するためにA-B-1に幅40cmのトレンチを南北に入れる。ブルドーザーにより調査区西側の表土除去を行う。中央部付近で炉石状の巨礫を引っかける。東側と同様。北側はローム面が浅く南側ほど深くなる傾向がある。ローム直上で止める。塩尻東土地区改良区2名来訪。風がなく暑い日だった。

○5月24日(木)晴 B-C-3を6m掘り下げ。C-6で焼土、炭化物が密集。B-6にて構内土器片出土。第1号住居址を十字にベルトを残して掘り下げ。

○5月25日(金)晴 B-5で漸移層の中から黒色の落ち込みを確認。土器片を出土。第2号住居址とする。第1号住居址掘り下げ。藤内系土器片多数出土し深さ10cmで床面を検出。B-5で山形文。B-6で構内土器片出土。

○5月26日(土)晴 B-5に検出された黒色落ち込みの南隅を確認するためBラインまで調査区を拡張。C-6およびD-6に黒色落ち込みを確認。C-5に尖底土器底部が出土し。A-1に早期の半定形土器が出土。調査区西側に東側の延長でグリッドを設定する。

○5月27日(日)薄曇 風があり遠く見かけたため作業諦める。C-6〜7で早期の住居址を検出し第3号住居址とする。D-7で円形黒色の落ち込みがあり第4号住居址とする。E-8で線石状の集石が検出され。またD-10で糸切底のかわらけが出土するなど調査区西側に中世の遺構の存在が伺えた。

○5月28日(月)晴のち曇 第2号住居址を掘り下げ。約10cmの深さで床面が検出され。灰釉陶器の杯が出土。B-3〜4でロームマウンドが確認されベルトを残して掘り下げる。1号〜11号小堅穴の半割掘り下げを行う。午後、田川高校の石川・中村両先生来訪。

○5月29日(火)雨のち晴 朝、雨天のため現場作業を中止し、博物館にて遺物整理を行う。昼から雨が上がったため現場へ向かう。1号・2号集石の平面図およびセクション図化。1号〜3号小堅穴のセクション図化。県理文センター青木沢班3名来訪。

○5月30日(水)晴 第1〜第4号住居址の掘り下げ。第4号住居址の北側床面に煙灰が出土。4号〜11号小堅穴のセクションを図化し。終ったものから掘り下げる。ロームマウンドのセクション図化。集石は裸を外して掘り下げたが下に何ら遺構なし。市新地課来訪。

○5月31日(木)曇 第1号住居址セクション図化。ベルトを外し掘り下げ。第4号住居址の床面を迫ったところ東側および南側が欠陥し、黒色土の落ち込みとなる。別の住居の切り合いが考えられる。1号〜11号小堅穴の写真撮り。12号〜14号小堅穴の検出。釜体みに一時雨が降る。

○6月1日(金)晴 第2号住居址セクション図化。ベルトを外し掘り下げ。第4号住居址の下にC-5、C-6で2軒の住居址が重複。第5号住居址覆土セクション図化。12号〜16号小堅穴セクション図化。3号〜4号集石の検出。写真撮りと実測。西区に南北3本、東西1本のベルトを残し掘り下げ。県理文センター、塩尻日報記者取材来訪。

○6月2日(土)晴 第1号住居址ビット掘り下げ。第2〜第4号住居址壁、床面精査。E-7〜10で方形の黒色土落ち込みを確認し、掘り下げる。E-10で墓石、骨片出土。

○6月3日(日)晴 長野県考古学会総会出席のため定休日。

○6月4日(月)晴 第3号住居址中央のベルトを外し床面精査。第4号住居址の南側立ち上がりベルトを確認。下の2軒の住居址の上に陥り床で構築している。第5号住居址の東側に小規模の黒色土落ち込みを確認し第6号住居址とする。

○6月5日(火)薄曇 第1、第2号住居址半割、セクション図化。第4号住居址東西セクション図化。床面を精査し写真撮り。16号〜18号、20号小堅



堂の前遺跡表土除去



堂の前遺跡調査開始時の説明

穴掘り下げ。中世土地区改良区、埴原東土地区改良区来訪。

○6月6日(水)晴 曇い日だった。第1号住居址の4本柱土柱穴、周溝を確認。第4号住居址測図、埴原が実測。第6号住居址の覆土セクション図化。E-7-F-10で直線状の落ち込みを検出。落差60cmで下段は幅3mの平頂床。中世皿出土する。市立掘削当取材のため来訪。

○6月7日(木)薄曇 第4号住居址の南側に円形プランの住居址を確認。第8号住居址とする。第6号住居址のベルトをはずし掘り下げ、北壁付近にある黒石を固化。20号小竪穴を完掘する。早期の第7号住居址によって切られる最も古いものと思われる。西地区中世遺構の北壁精査、大セクションの土層録引き。本日は長敷区の老人会旅行のため作業員が少なかった。午後、埴原日報記者取材に来訪。

○6月8日(金)曇 第8号住居址の掘り下げ。第6号住居址を完掘し写真撮り。中世遺構掘り下げ、北壁沿いから五輪塔の地輪に続いて火輪が出土。市文化財調査委員、中島章二先生に現地にて長福寺と中世遺構の関係を教示していただく。11号-19号小竪穴の写真撮り。黒土文センター7名来訪。

○6月9日(土)晴 風が強い日だった。第8号住居址の掘り下げ、周囲に段が存在しプランの確認ができない。中世遺構の大セクション図化。終わったところからベルトを外し掘り下げ。E-11から表裏縄文を施す完形突底ミニチュア土器出土。A-1~5で縄文時代早期の土器片が多出するため住居址の存在を伺い南側へ拡張する。

○6月10日(日)曇時々小雨 昨日に引き続き強風、時々雨が降り作業が難行する。昨日の拡張部の掘り下げ。第8号住居址床面に群小のピットが検出される。C-10に黒色落ち込みが確認されたため南側へ拡張するが自然傾斜と判明する。D-10~11付近で中世遺構に付随すると思われる多数のピット出土。

○6月11日(月)薄曇 第8号住居址の床面ピットの検出断続、ピット内から早期土器片が出土。第6号住居址測図、中世遺構のピットセクション図化。岡谷市教委2名来訪。

○6月12日(火)快晴 A-1~5拡張部から早期埴原土器片、中期初頭土器片多数出土。

○6月13日(水)雨のち曇 雨天発掘作業中止。博物館にて洗浄済の遺物および図面の整理を行なう。

○6月14日(木)快晴 A-1~5掘り下げ、山形土器片出土。第8号住居址完掘。床面を清掃し写真撮り。併せて第3・5・6・7・8号の早期住居址群の写真撮り。中世遺構のピット掘り下げ、固化。第22号小竪穴のセクション図化。第4号住居址の礎壁を半割し写真撮り。

○6月15日(金)晴 第8号住居址を取り巻くように住居址を確認し、第9号住居址とする。壁・床面を精査したところ盤際にて26号~29号小竪穴を確認。A-2から早期の方形住居址を検出し、第10号住居址とする。24・25号小竪穴のセクション図化。中世遺構の礎壁を現したまま全体写真。

○6月16日(土)晴 昨夜の豪雨のため南側の低所は水が溜り作業不可能となる。第3・5・7号住居址の床面を実測のため再精査したところ小ピット群、および周溝が確認される。第4号住居址埴原がセクション図化。中世遺構にて火葬墓を検出。

○6月17日(日)曇時々雨 A-1~5遺物取上げ。第4号住居址埴原取上げ、内外2個体の礎壁が使用されている。中世遺構のピット掘り下げ、火葬墓の実測。本日から全体図の測図を開始。東側半分を完了。

○6月18日(月)薄曇 A-5に円形プランの住居址を検出。中期初頭の土器を出土し第11号住居址とする。30・31号小竪穴検出。

○6月19日(火)曇 本日から隣接する福沢遺跡の本格的作業が始まったため作業員を2班に分ける。第10・11号住居址遺物出土状況写真。火葬墓の掘り削りを行なったところ古銭6枚出土。第3・5・7号住居址測図。蒸し暑い一日だった。

○6月20日(水)薄曇 第10号住居址完掘。写真撮り。第11号住居址石群実測。33・34号小竪穴のセクション図化。中世遺構ピット群測図。

○6月21日(木)曇 第10号住居址測図。34~36号小竪穴セクション図化。光臨。第11号住居址石群実測。遺物取上げ。中世遺構ピット群測図。

○6月22日(金)曇時々雨 第11号住居址掘り下げ。24・25・30・31号小竪穴



室の前遺跡作業風景



福沢遺跡桑畑の柱根

- 清掃、写真撮り。中世遺構ビット群測図。西端に半円形の住居址を検出し、第12号住居址とする。塩尻東土地改良区3名来訪。
- 6月23日(土) 雨天中止。
  - 6月24日(日) 第11号住居址測図。中世遺構ビット群測図。遺構全体図測図完了。
  - 6月25日(月) 雨天中止。
  - 6月26日(火) 雨時々曇 第12号住居址測図。昼頃から雨が散しくなったため現場作業を中止し、午後、博物館にて図面整理。
  - 6月27日(水) 曇のち晴 火葬墓の骨片、古銭の発掘、取り上げ。全体写真。

## (2) 福沢遺跡

- 昭和59年6月4日(月) 晴 青柳建設のバックホーにより北側桑畑の抜根。抜いた桑は南側の畑で焼却。
- 6月5日(火) 薄曇 桑の抜根継続。完了する。
- 6月7日(水) 薄曇 地層の地層状態を把握するために調査区の8ヶ所に試掘穴を入れる。遺物の出土皆無。
- 6月9日(土) 晴 アルドラーによる表土除去作業を北側畑から開始する。
- 6月11日(月) 薄曇 表土除去作業継続。黒色土層から弥生・土師の土器片多数出土したためこの面で重機を止める。
- 6月12日(火) 快晴 表土除去作業継続。南側は川原砂になり遺構の可能性は薄い。表土はど定完了。
- 6月19日(火) 曇 本日から本格的な発掘作業を開始する。鳥羽調査担当より経過報告。堂の前遺跡に近いため器材のみ搬入し作業を開始する。奥道の北側をA地区、南側をB地区とし、A地区から助業により削平する。弥生・土師器の他、弥生土師の須恵器出土。グリッド設定の基準クイを2m間隔に打つ。
- 6月20日(水) 薄曇 A地区掘り下げ。黒色土の方形落ち込みを3ヶ所確認。いずれも土師器を伴出する。
- 6月21日(木) 曇 遺構検出作業継続。
- 6月22日(金) 曇時々雨 朝方雨が残ったため作業員の集まりが悪い。A地区北西隅に新たに土師器の伴出した住居址を検出。南側の黒色土層から縄文晩期-弥生の遺物を多量に出土。
- 6月23日(土) 雨 雨天中止。
- 6月24日(日) 晴 A地区に5m間隔のグリッド設定。掘り下げ作業継続。
- 6月25日(月) 雨天中止。
- 6月26日(火) 雨天のため堂の前遺跡の調査のみ午前中を行なう。
- 6月27日(水) 曇のち晴 北東隅の黒色落ち込みを掘り下げたところ住居址床面を確認し、第1号住居址とする。C-5~6の黒色落ち込みを第2号住居址とし、掘り下げ床面を追う。北壁、東壁、西壁中央にそれぞれ地土を確認する。第1号住居址西側の黒色落ち込みを掘り下げる。県道センター3名来訪。
- 6月28日(木) 晴 第1・2号住居址掘り下げ。B-2に床面、壁を確認し第3号住居址とする。床面南東部より土師・須恵器が一括出土。C-1の黒色落ち込みを1号小竪穴とし掘り下げる。セクション・平面図固化、写真撮り。A-2~3にて出土した弥生式の多量の土器片を撮影し取り上げ。
- 6月29日(金) 曇 第2号住居址床面精査。第3号住居址覆土のセクション固化。C-4にみられる黒色土落ち込みを掘り下げる。
- 6月30日(土) 晴 第3号住居址のベルトを外し掘り下げ。2号-4号小竪穴を検出。
- 7月1日(日) 晴 7月に入り曇りも減ってくる。第2号住居址の遺物出土状況を写真撮り。2号-4号小竪穴の掘り下げ。C-5の黒色土に試掘穴を入れたところ100cmで清水。遺構は存在しなかった。寺西定雄氏来訪。
- 7月2日(月) 快晴 今宵一番の曇り。第3号住居址床面精査。測図。東側の黒色落ち込みを確認するため幅20cmのトレンチを入れる。A-1の黒色土面に暗褐色土の落ち込みを確認し、第4号住居址とする。B地区の削平作業を開始する。
- 7月3日(火) 快晴 第3号住居址のカマドを半削する。第4号住居址を完掘し、カマドの写真撮りを行なった後、平面図・セクション固化。
- 7月4日(水) 快晴 第3号住居址のカマド固化。A-5で半円形の弥生壺



福沢遺跡縄文トレンチ掘削



青木沢遺跡全体図測図

出土。

○7月5日(木)晴 第4号住居の床面清掃、カマド固定。B地区の出土遺物はほとんどなし。

○7月6日(金)曇 第2号住居の床面精査、全体写真のあと測図。第4号住居の全体写真と測図。2号～5号小竪穴のセクション固定。B地区にA地区の続きでグリッド設定。

○7月7日(土)晴 第4号住居東側の土手際に一括土器が出土したため拡張する。

○7月8日(日)雨 雨天中止。

○7月9日(月)晴 第2号住居北壁に検出された燻道区画。第4号住居一括土器の出土状態固定。Y-3に検出された焼土中に黒褐色土の落ち込みを確認。住居址と小竪穴の可能性をもつ。遺構全体測図。

○7月10日(火)晴 D-3の落ち込みを6号小竪穴とし固定。写真撮り。2号～5号小竪穴写真撮り。弥生包含層の下位を把握するためA地区に東西および南北方向に幅1mのトレンチを2本入れ掘り下げる。

○7月11日(水)晴 Y-6で小竪穴を抽出し、第7号小竪穴とする。A地区トレンチのA-1から縄文時代早期の赤文土・山形文土器片出土。信大・佐々木助教校外1名来訪。

○7月12日(木)晴 A地区トレンチ掘り下げ、セクション固定。A-1で山形文、楕円文、格子目文、市松文土器片出土。B地区全体写真。

○7月13日(金)曇 押型文集中区掘り下げ。浅谷底より黒石礫を抽出。

○7月14日(土)曇 押型文区の遺物取り上げ。器材を現地より撤収し、次の調査地、青木沢遺跡へ搬入する。



青木沢遺跡西区掘り下げ

### (3)青木沢遺跡

○昭和59年7月13日(金)曇 表土の堆積状態を確認するため試掘穴を入れる。耕作土の下位におびただしい礫群が分布しており出土遺物はなし。

○7月17日(火)曇 米俵組のバックホーにて表土除去を行う。表土下から径80cmもある巨礫が多数。調査地東半分を終了。

○7月18日(水)雨 雨天であるが昨日に続きバックホーによる表土除去を行う。西区で弥生期の完形甕が出土。他にも該期の土器片が周辺に散っているため弥生の遺構が期待される。

○7月19日(木)曇 重機による表土除去終了。調査区南東隅にテント設置。器材の点検と修理。周辺の雑草刈りを行う。

○7月20日(金)晴 遺跡周辺の表面踏査を行う。縄文早期、中期土器片の他、多量の黒曜石フレックを採集する。

○7月21日(土)曇時々雨 表面踏査および周辺地形を調査。

○7月22日(日)晴 調査区の表面踏査により縄文早期、中期、後期および弥生期の土器片が採集され、かなり時期的に混在する遺跡であることが判明する。

○7月23日(月)晴 本日より発掘作業を開始。文化教委担当中野副主幹の挨拶のあと、小林調査担当より経過説明。終了後、作業に入り助業による削平作業を行なう。礫が多く作業が難行する。

○7月24日(火)晴 調査区の南側から中央にかけて検出作業を行なう。南側から縄文早期、後期の土器片、石礫出土。中央部は巨礫が多く遺物の出土が少ない。

○7月25日(水)晴のち曇 中央から西側へも検出作業に入る。東側で土器片、黒曜石片、刀の鏝、旧石器に属するポイント尖頭部出土。本日より黒曜文センターによる青木沢遺跡発掘調査が隣接地にて再開される。

○7月26日(木)曇 西区で弥生壺頸部、磨石出土。東区北東端で早期土器片が集中出土したため十字にベルトを残し掘り下げる。午後、グリッド設定の基準キを打つ。

○7月27日(金)晴 調査区全域に5m間隔のグリッド設定。東区のE-12でポイント出土。西区のD-2で弥生期の石礫出土。

○7月28日(土)曇 B-3-4にて焼土を伴う硬化面を抽出。中央域にほとんど遺物が出土しないためD-5-10に幅2mのトレンチを設定し掘り下げる。午後2時頃、激しい夕立があり作業を中断する。

○7月29日(日)晴 定休日。



青木沢遺跡器材撤収

○7月30日(月)晴 B-3~4で硬化面の範囲を確認し、第1号円形硬化面とする。他にC-3-4、E-1にも同様の硬化面を確認する。D-1から発土器片、器台出土。中央東西トレンチをAトレンチとし、昨日に引き続き掘り下げ。黒褐色土は薄くすぐにロームが露出する。塩尻日報記者取材のため来訪。

○7月31日(火)快晴 E-2で黒褐色土最上面に硬化面とロームマウンドを検出する。

○8月1日(水)快晴 昨日の継続作業。C-14縄文早期出土区は壁が多くなり、遺構が検出されないまま掘り下げを中止する。

○8月2日(木)晴 第1号円形硬化面の床面上に群小のピットの存在を確認。E-2の硬化面にも同様のピットが検出される。黒文化課、日本道路公団、県理文センター、塩尻東土改改良区来訪。

○8月3日(金)晴 C-3~4にも群小のピットが全面、第2号硬化面とする。またE-2の床面を第3号円形硬化面とする。Aトレンチでは深さ145cmで湧水あり。

○8月4日(土)晴 東区のC-12からナイフ型石器2点、D-12から細石刀が出土。Aトレンチ掘削終了、セクション固化。連日のカンカン照りに作業員疲労気味。

○8月5日(日)晴 定休日。

○8月6日(月)晴 第1・2号円形硬化面写真撮り、平面図測定。終了後、南北に1本、東西に2本のベルトを設定し床面を掘り下げる。第3号円形硬化面の床面精査、遺物取り上げ。

○8月7日(火)晴 無風で暑い一日だった。E-1で早期縄文島台式土器片出土。塩尻日報記者取材のため来訪。

○8月8日(水)晴 西区の黒色土層の厚さのみるためAトレンチの延長上に幅50cmのトレンチを入れる。東区テント北脇で細石刀出土。

○8月9日(木)晴 昨日の継続作業。

○8月10日(金)快晴 第3号円形硬化面の床面清掃、写真撮り、平面図測定。東区ではローム断層層が出土し、出土遺物量減少する。

○8月11日(土)晴 昨日に引き続き、東区と西区の掘り下げ。

○8月12日~8月16日 お盆休み。

○8月17日(金)快晴 C-14から縄文中期初頭の一括土器出土。

○8月18日(土)快晴 東区D-11に黒色土浅谷地形がみられたため、幅50cmのトレンチを入れる。西区の北面ではすでに第III層が現われ始めたが、南側は依然として黒色土層が続く。今夏一番の猛暑、雨が降らないため地面がカラカラになり連日散水をする。

○8月19日(日)晴 定休日。

○8月20日(月)快晴 東区の掘り下げをテント北脇に絞る。黒曜石片が多量に出土。

○8月21日(火)晴のち曇 D-2よりナイフ型石器出土。夕方から台風10号の影響により降雨となる。

○8月22日(水)雨 台風10号による豪雨のため発掘中止。

○8月23日(木)晴 昨日の継続作業。市跡地課2名来訪。

○8月24日(金)晴 東区テント北面および西側で黒曜石片出土。E-2で硬化面を検出するが性格不明。朝方曇りがずついていたが10時頃から回復する。

○8月25日(土)快晴 E-3で硬化面を検出するが局所的なもので連続性は認められない。

○8月26日(日)晴 定休日。

○8月27日(月)曇のち雨 昨日の継続作業。10時頃から雨が降り出したが昼頃強くなってきたため作業を中止する。

○8月28日(火)晴 陽差しはまだ強いが涼風が吹くようになり作業捗る。E-12で特殊磨石・黒曜石片出土。E-F-1で前期末の土器片出土。B-2で検出された小壜穴を2号小壜穴とし掘り下げる。

○8月29日(水)晴 ロームマウンド。1号・2号小壜穴のセクション固化。調査区中央に地形形成とローム層下位を調査するためB~Dの3本のトレンチを重ねにより入れる。

○8月30日(木)晴 2号小壜穴掘り下げ。東側および西側の土手にて土層セ



室の前遺跡土器復元



掘沢遺跡神村浩氏指導

クッションを固化。昨日に機械して重機によりトレンチ掘削。Bトレンチセクション固化。

○8月31日(金)晴 2号小堀穴完掘、測深。ロームマウンド、1号・2号小堀穴写真撮影。全体固削区。重機によるトレンチ掘削終了。

○9月1日(土)晴 C・Dトレンチセクション固化。遺物取り上げ。全体測深完了。器材の片付け。

○9月2日(日)晴 定休日。

○9月3日(月)曇 テント取り壊し。器材撤収。

(1)~(3)の各遺跡の整理作業は洗浄作業のみ現場作業と平行して行なわれ、その他の整理作業は9月~3月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の記記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の拓本、実測、写真撮影、図割作成。また報告書の原稿執筆を行う。

## 第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	現況	種類	遺跡番号	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
堂の前	畑	包蔵地		4,800 <sup>㎡</sup>	3,200 <sup>㎡</sup>	800 <sup>㎡</sup>	2,200 <sup>㎡</sup>	4,700,000 <sup>円</sup>
堀	畑	包蔵地	23-130	20,000	2,500	500	800	3,200,000
青木沢	畑	包蔵地	24-21	4,200	3,800	1,000	1,800	6,100,000

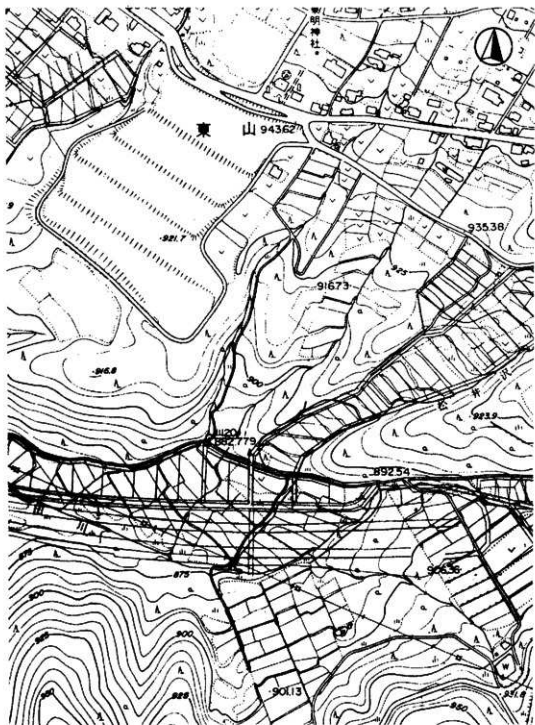
第1表 発掘調査経過表

遺跡名	5	6	7	8	9	10-3	主な遺構	主な遺物
堂の前	5	27					縄文早期土器 5 縄文中期土器 3 平安時代土器 1 時代不明土器 3 小堀穴 36 番 石 5 半段遺構 1 礎物止 3 火葬墓 2	縄文早期土器、石器 縄文中期土器、石器、土製土 平安時代土器 中世土器、石版
堀		4	14				縄文早期土器 1 平安時代土器 4 小堀穴 8	縄文早期土器、石器 弥生前期土器、石器、土製土 平安時代土器
青木沢			13		3		円形硬化面 3 ロームマウンド 1 小堀穴	先土器時代石器 縄文早期土器、石器 縄文中期土器、石器 縄文前期土器、石器 縄文後期土器、石器 弥生時代土器、石器





第1図 工事施工後（長畝地区） 1 : 5000



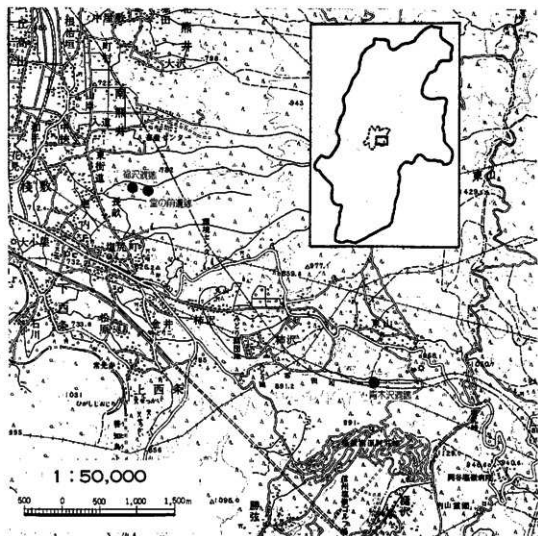
第2図 工事施工後（東山地区） 1 : 5000

（事務局）

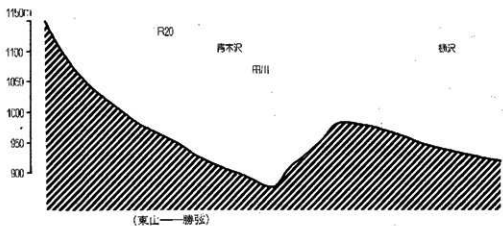
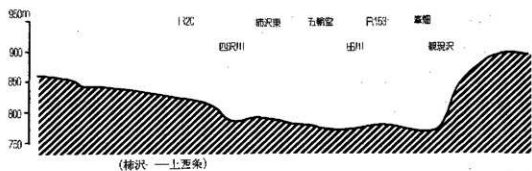
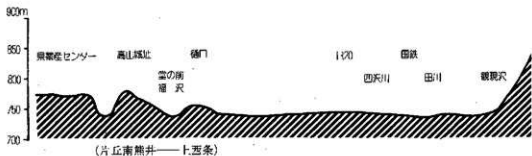
## 第II章 遺跡周辺の環境

### 第1節 自然環境 (第3, 4圖)

長野県のほぼ中央部に位置する塩尻市は地溝盆地をなす松本平の南端を占有し、北を除く三方を山地によって囲まれている。即ち、西側には飛騨山脈から分岐する山々が連なり、鉢盛山(2446.4 m)を最高峰としている。東側には英ヶ原を最高峰とする苅摩山地の一角をなす鉢伏山(1928.5 m)、高ボッチ山(1664.9m)、東山(1429.5m)などが連なり、また南側には木曾山脈の北端を



第3図 遺跡位置図



第4図 塩尻東地区地形断面図 (N20°E)

占める山々が連なり霧訪山（1305m）を最高峰としている。鈍頂地形を形成しているこれらの山陵は、また太平洋と日本海の分水嶺を構成しており、支流を集め遠く天竜川や木曾川あるいは信濃川の末流となって海へ運ばれている。

盆地地域には洪積世後期に木曾谷から流出する奈良井川によって形成され、その後の地盤隆起により高地化した桔梗ヶ原台地（隆起扇状地）と、それを挟む形で北流する奈良井川、田川の両河川によって形成された2段ないしは3段の河岸段丘が分布している。

筑摩山地の南端を占める東山から勝弦峠にかけての山塊は塩尻山地とも呼ばれ、松本盆地と諏訪盆地を隔てているが、そのほぼ中央に塩尻峠がある。この峠に立つと西には松本平が一望に臨まれ、前方には穂高岳の雪嶺を中心とした飛騨山脈の勇姿が立ち並び、また東には眼下に諏訪湖を中心とする諏訪盆地が、そして正面はるか遠くに秀嶺な富士山の姿を臨むことができる。かつて中山道を江戸へ上京する旅人が初めて富士山を眺め得ることができたのは、この峠に立った時である。また「塩尻」の地名の由来も、この地から眺めた雪嶺の富士山が、たまたま塩田に設けられた「塩尻」に似ていることから付けられたとされる向きが強い。このように塩尻峠は古来より交通の要所であり、また歴史的にも数々の運命の鍵を握っていた。

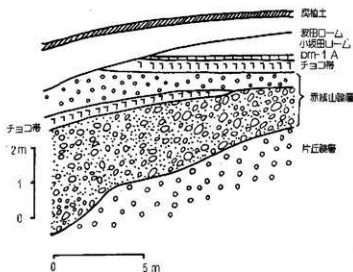
塩尻峠から国道20号線を降りていくと、伊那路へ連絡する国道153号線と交差するが、ここから塩尻市街地方面に向かって古い町並を通過する。中山道69宿のうち江戸から30番目の塩尻宿である。たび重なる火災により往時のおもかげはほとんど残っていないが、この塩尻宿を中心に繁栄したのが塩尻東地区である。

現在は東山、柿沢、金井、上西条、中西条、下西条、堀ノ内、長畝、棧敷、町区、松原、みどり湖の12区より構成され、市内7地区の中では最も区数が多い。日照、水利、交通の便とすべてがそろっていたため、古くから塩尻の中心として栄えてきたが、国鉄中央線開通に伴い隣りの大門地区に駅が開構されたことにより以後、塩尻市の繁華街はそちらへ移っている。

地質学的には、ちょうど領家変成帯とフォッサ・マグナ西縁（糸魚川―静岡構造線）とが接する地域にあたり、複雑な様相を呈している。

東北日本と西南日本を隔分する糸静線は、諏訪盆地から勝弦峠を経て、塩尻東地区の地下を通過し、松本平に沿って北上する活断層であるが、洪積世中期（約70万年紀）に現在の松本盆地を形成する断層運動が生じ、現在に至っては2000mにも及ぶ比較差を生じている。このため断層西側の下西条、中西条、上西条付近では硬砂岩、珪質粘板岩、石灰岩に代表される古生層が露出しているが、これに対して断層東側の長畝、町区、柿沢、東山地籍の山地では古生層を覆って新第三系の貫入岩体である閃緑岩類や塩嶺層が広く分布する。

塩嶺層は比較的高所に分布する鮮新世末～洪積世前期の安山岩質溶岩で、地形的により低所の山麓部にはその凝灰角礫岩を主とする火山砕屑岩類および崖錐性堆積物の分布がみられる。第5図は長畝の地表付近における模式断面図であるが、片丘礫層あるいは赤城山礫層と称せられるものがそれにあたる。特に片丘礫層は長畝を模式地としており、古生層や塩嶺層を不整合に覆って約30mの層厚を有する。礫は古生層起源の砂岩、粘板岩、珪化作用を受けた第三紀の石英閃



第5図 長敷付近における片丘礫層と赤城山礫層の関係 (松本盆地図研, 1977)

緑岩、塩嶺累層の安山岩などの歪角礫が多く、堂の前遺跡、福沢遺跡の南側を流下する鈍物師屋川の河床に顕著に見受けられる。

小坂田ローム、波田ロームはそれぞれ御岳、乗鞍岳を噴出起源とする火山層で、一般に信州ロームと呼ばれており、層厚は2～3mを刻る。各遺跡で縄文時代の遺構が構築されるのはこの波田ローム層最上面であり、褐色で緻密な土層を呈する。

河川はこのような礫層や火山灰層を浸食し、扇状地形に堆積して塩尻東地区の平地部を形成しているのだといえよう。

次に塩尻峠から塩尻市街地まで広がるこの西向斜面を概観すると、高ボッチ山塊に展開する広大な山麓斜面と田川によって形成された扇状地形、およびその中を開析する田川、四沢川、権現沢など数本の小河川によって代表される。扇状地は長さ約4.5km、幅約2kmの広大な規模を持ち、その扇端は下四条西福寺の付近から棧敷、入道部落に至る狭長な低窪地を挟んで奈良井川扇状地(桔梗ヶ原台地)に連なっている。標高は扇頂で900m、扇端で710m、平均斜度3°である。田川およびその支流である四沢川、権現沢によって開析された所謂、開析扇状地であるが、これは河川の勾配が浸食を助けているのに加え、この付近が著しい地盤隆起地帯にあることに起因している。隆起量は中央部の柿沢付近で1.6mm/年であるが、峠に近づく程その数値は高くなる傾向にある。

田川は東山山麓に源を発しており、塩尻峠の山間溪谷を西へ下り、四沢川、権現沢などの諸河川を集めながら下四条で流れの向きを北にかえ、松本市の西部で奈良井川に合流している。塩尻東地区では大扇状地形を形成しており、現在広く水田畑地に利用されているほか旧塩尻宿もこの

上に乗せている。みどり湖より上流では極めて浅い谷を形成しているだけの截頭扇状地であるが、湖より下流では地盤隆起に伴ない浸食量が大きく、一種の開析扇状地を形成している。田川沿いに発達するこれらの台地の縁部には柿沢東（柿沢）、五輪堂（金井）、峯畑（上西条）、剣ノ宮（上西条）、田川端（下西条）などの縄文時代中期を代表する遺跡が数多く分布し、古代よりかなり好条件な立地環境にあったことが伺える。

（鳥羽嘉彦）

## 第2節 周辺遺跡（第6図）

今年度調査された塩尻市東山所在の青木沢、長畝所在の堂の前、福沢遺跡は、筑摩山地東麓に位置し、周辺には数多くの遺跡が存在する。松本平でも最も遺跡の稠密地帯であるこの地域には筑摩山地をその源とする幾つかの小河川が山麓の末端を北流する田川に流入している。この小河川によって形成された扇状地ないし舌状台地に多くの遺跡が営まれている。塩尻地区を中心にして周辺遺跡を概観したい。

先石器時代では今回調査された青木沢のほかに、神子柴系文化期の尖頭器を多数出土した柿沢、尖頭器を出した池ノ入がある。松本平には先石器時代の遺跡が少なくとされている中においてこの地域はこの時代の濃密な分布地域ということが判明してきた。

縄文時代に入ると、早期には青木沢、栗木沢、八窪、福沢、堂の前、剣ノ宮などの遺跡がある。中でも押型文甕の住居地が2軒検出された八窪、条痕文土器を出す5軒の住居址が発見された堂の前、集石と多量の押型文土器が出土した福沢など、この時期の遺跡の在り方もここ数年でかなり明確になってきたといえる。前期には御堂神社西がある程度で少ない。中期に入ると、この地域でも大規模な遺跡が多く、発掘調査され、住居の検出されたものには柿沢東、焼町、峯畑、中島、御堂垣外がある。柿沢東では中期後半に属する21軒の住居址と130基の小竪穴が発見され、小竪穴群を中央に配置し、その周辺を同心円状に住居がとり囲むという縄文時代の典型的な集落形態を示している。特に小竪穴の1つからはヒスイの大珠が出土し、墓埴としての用途が推定されることから、中央に墓城をもち、周囲に住居群がとり巻く集落形態が明らかにされた。また、日本海沿岸を中心として分布する馬高式土器の影響を強く受けた土器の出土した焼町では中期でも余り例の多くない前半期の住居が、14軒発見されている。後期に入ると御堂垣外で、前半期の敷石住居址4軒が調査され、また、1号土壇からは燧板葬と考えられる堀ノ内式の土器が出土した。晩期に入ると、青木沢、堂の前・福沢・館・ちんじゅで土器、石器、土製品が出土したが、量的には少ない。

弥生時代では、その初期のものとして福沢での良好な資料の発見があり、下西条方面では枝宮、ちんじゅなどで豊富な内容の遺物が採集されている。松本平の弥生文化を考えると、田川のもつ意義は大きく、この流域を中心に弥生文化が展開したともいわれている。弥生中期の遺跡は少ないが、後期に入ると下西条を中心として幾つかの遺跡が知られている。久野井、西福寺前、砂田、大門3番町、中島、銅鐸を出土した柴宮などがある。これらの遺跡は田川が低地域に流下し



- 1、青木沢 2、青木沢奥 3、八達 4、孤塚 5、青木市 6、軍畑岡ノ宮 7、紀常塚 8、駒形  
 9、根ノ神 10、大原 11、御堂清外 12、北山 13、社河寺 14、朽沢栗 15、中島 16、小坂出  
 17、栗木沢 18、磯口 19、堂の前 20、福沢 21、高山塚

第6図 塩尻東地区遺跡分布図



た地域に営まれたものであるのに対し、今回発見された青木沢での土器、石器の存在は、山間地帯での遺跡であり、前記した遺跡群とは性格が若干異なるのではないかと推定される。

古墳時代に入ると、柿沢根の上、上西条配常塚、狐塚、下西条銭宮1、2号などの古墳があり久野井では住居の発見もある。奈良時代の遺跡は殆んど見当らない。平安時代には数多くの遺跡がある。調査されたものでは、剣の宮、久野井、初久保・堂の前、福沢、栗木沢、樋口、中島があり、それぞれ住居址が検出されている。しかし、低地に立地する吉田向井、川西、平出、丘中学校などの集落址と比較し、発見される住居址も10軒以内で小規模なものが多い。

平安時代以降では中世に属する遺構が調査され始めているが、その成果は極めて断片的なものである。柿沢中島では館址の1部が、剣の宮では墓塚が、そして堂の前では寺院址と思われる遺構の1部が調査されている。いずれも遺構の全貌を現わすには至っておらず極めて局所的な調査にとどまっている。遺構が大規模化しているため小範囲の調査では性格を明確に把握することが困難であるためと考えられる。

(小林康男)

# 第三章 調査遺跡

## 第1節 堂の前遺跡

### 1 位置

堂の前遺跡は長畝区の東方にあり、田川の支流、鑄物師屋川によって開析された谷あいの南向き緩斜面に位置する(第7図)。

付近は片丘陵の南端に位置し、群小の河川により東西方向の小支谷が発達しており本谷も例外ではない。北側には中世の山城跡である高山城跡が存在し、その占有する尾根(785,3m)から分岐して「前山」が盆地部へ延びている。この「前山」の先端部(735,5m)は現在、「前山公園」として区民に親しまれている。「堂の前」という地名は中世の頃、「前山」の頂上に存在していたといわれる胸形観世音堂に由来しており、実際には遺跡のある地点から300m西方にあたる現在の福沢遺跡付近である。これに対し「福沢」という地籍名が現在の堂の前遺跡付近にあり、遺跡名と実際の地籍名が相反して混同を招き易くなっている。

遺跡と前山の間には現在2mの崖をもって農道が走っているが、この崖は畑地造成の際、切り崩されたものと思われ、当初は遺跡の背後に急峻な斜面が迫っていたことが推察される。南側には約100m隔てて鑄物師屋川が流れており、その間に不明瞭な段丘が2～3段認められる。全比高差は5mである。

発掘地点は現在、畑地に利用されており、平均標高は735mである。

(鳥羽嘉彦)

### 2 過去の調査経過

先述したように以前は総称してこの付近に「福沢遺跡」の名称を用いていたため、文献等に「堂の前遺跡」の名称をみつけることはできない。しかし以前よりこの付近では縄文土器、石鏃、石斧などが多く採取でき、古くから遺跡として知られた地域であった。

中世遺構が確認された強では以前「石棒状の石」が耕作の際に掘り起こされ、形の特異性から御神体として道祖神の横へ祭られたという話であった。さっそく案内していただき現地へ行ってみると、道祖神の脇に蓄むした一体の「石棒」が安置されていた(図版参照)。裏側に掘り起こされた際ついたと思われる掻き傷が見られたが、ほぼ完形のものである。凝灰岩質のズングリ形態で、奇妙なことに頭部に孔が開けられている。その後発掘区の調査が進むにつれて五輪塔の一部が出土し同石材であったため、あるいは石棒ではなく五輪塔の頭部(空輪と風輪)である可能性も考えられたが、いずれにしても断定するに至らなかった。

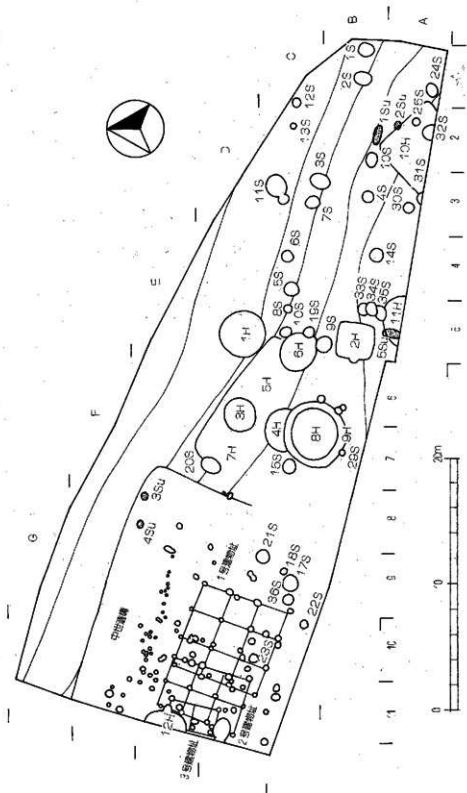
(鳥羽嘉彦)

### 3 調査概要(第8図)

今回発掘調査の対象となった堂の前遺跡は、塩尻市の東方、田川の支流である鑄物師屋川に面して存在し、南に緩く傾斜する扇状地に占地している。本遺跡と同時報告されている福沢遺跡と



第7図 釜の前、福沢通砂調査地区図 (1:5000)



第8図 築の南遺跡遺構全体図

は西へ約200m離れるのみであり、両遺跡の関連性については当初より注目されていたことは言うまでもない。

遺跡北端部を中心とする調査の結果、1200㎡に及ぶ発掘総面積のほぼ全域に拡がって、住居址12軒、小竪穴36基、集石5基、中世遺構群が検出されたほか、縄文時代早期～中期におよぶ遺物も多数出土した。詳細については各項で述べるとおりであるが、ここではそれらの概略について全体的な観察を試みたい。

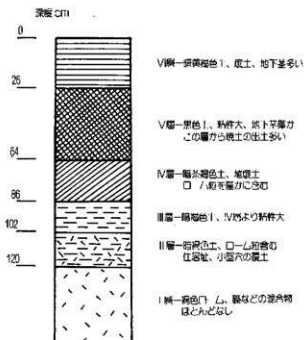
住居址12軒中11軒は縄文時代に属するのであり、残る1軒は平安時代の所産である。縄文時代住居址11軒のなかでその約半数にあたる5軒（第3号、5号、6・7号、10号住居址）が早期の所産であることが確認されたほか、中期に帰属するもの3軒（第1号、4号、11号住居址）、不明3軒（第8・9号、12号住居址）という内容になっている。この中で特に注目されるのは、先に示した早期に伴う5軒の住居址であり、本遺跡例のように該期の住居址群が小竪穴等とともに景観的規模をもって検出された例がきわめてまれであることから、それらが重要な意義を内在させていることは後に示すとおりである。とりわけ、他の4軒とともに早期後半～末葉に位置づけられる第7号住居址例は、長径13m余りにおよぶ大形住居址であり、平面規模のみをもって比較すれば、縄文時代前期～中期に伴い、近年、東日本各地でその例を増しつつある長方形大形家屋址にも匹敵し、その用途・性格といったものが、該期の時代性とともに留意されよう。このほか、中期に属する住居址では、竈内Ⅰ式期の埋燵炉を伴った第4号住居址、さらに、いわゆる“吹上パターン”を呈していた第11号住居址などが注意された。わけても後者の第11号住居址は、従来共伴例の乏しかった「平出二類A系土器」・「捺沢式土器」、さらに、本地域で類例が増加しつつある「沈線文を特徴とする土器」の三者が共伴関係をもって出土したことは、土器研究のみならず、本地域の地域性ならびに松本盆地・伊那谷北部・諏訪盆地という三地域の要所に位置する本遺跡の性格を考える上からも、きわめて重要な意味をもつものとして評価される。

小竪穴は調査区域のほぼ全域に拡がって検出されている。これらのうち第14号・20号小竪穴など一部を除き、その多くは縄文時代中期初頭～前葉にかけての遺物を伴うものであり、墓塚的性格を示すものもいくつか認められたことから、調査区の南側斜面部にその存在が予測される該期住居址群の外縁部をとり囲むように分布する墓塚群としての性格が伺われた。

発掘区西半部を占める中世遺構群からは、寺院址と目される独立柱建物址や火葬墓などがまとまって検出されたが、これらについては堂の前という字名からも推察されるように、これらの遺構群がこの地籍を中心とした村落形成の歩みや宗教史といったものを明らかにしてゆく上での好資料を提供しえたものとする。

以上、今時の調査によって明らかにした本遺跡について、遺構を中心に述べてきたが、今回の成果により、人々が縄文時代早期から中世にかけての長きにわたり幾度とない断絶を経ながらも、一定の範囲に営々と営みをもちつづけてきた事実の一端を明示することのできた意義は深い。

（百瀬忠幸）



第9図 堂の前遺跡層序断面図 (10H付近)

#### 4 発掘区の設定

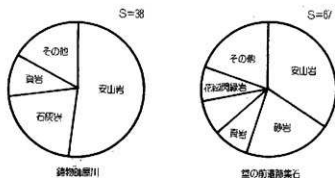
発掘調査に先立ち表土の堆積と遺構・遺物の保存状態を把握するために数ヶ所に試掘坑を入れた。その結果、調査区西側では70cm掘り下げたところで褐色のローム層にあたり、またその南側では深さ40cmで早くも、やや水の影響を受けた黄色のローム層にあたった。これに対し東側では70cm掘り下げたがローム層にはあたらず、底に近い黄色ローム粒混り暗褐色土層中から繊維土器、条痕土器、黒曜石片などが出土し、かなり深い層位に縄文時代早期～前期の生活面の存在が伺えた。

地表面の観察でも北側では暗褐色を呈していたのに対し、南側ではやや黄色を呈しローム層までの攪乱が推察されたため、北側に東西方向に延びる発掘区を設定し、南側を排土およびテント設置場所とした。

調査はまずブルドーザーによる表土除去を行なったのち、グリッドを設定した。付近は元々の傾斜地が以前の構造改善により整地されているため、北側縁辺部はすでにローム層まで削平が行なわれており遺構が消滅しているのに対し、南へ向かうほどローム層が傾斜し覆土が厚くなるため、保存は良好状態であった。

グリッドは5m間隔で南から北へ向かってA～G、東から西へ向かって1～12を設定し、発掘総面積は1200m<sup>2</sup>である。

(鳥羽嘉彦)



第10図 堂の前遺跡と現河床の礫種割合

## 5 土 層

遺跡の層位を把握するため、表土が最も保存されている調査区南側の第10号住居址付近の横式柱状図を第9図に示す。

この付近の土壌は腐植質起源の安定した堆積を呈しており、砂や礫の混入がほとんどみられないところから比高差のあまりない鑄物師屋川の影響は極僅かであったといえよう。第V層の黒色土や第VI層の暗黄褐色土からはほとんど遺物の出土をみず、耕作による攪乱が顕著であった。

遺物包含層は第II層（暗褐色土）、第III層（暗褐色土）、第IV層（暗茶褐色土）であるが、このうち住居址および小壘穴の覆土にはほとんど第II層の暗褐色土が主体となり堆積期間の長いことを物語っている。また第III層は局所的に介在する層で調査区全域に分布するものではない。

次に遺跡の集石に用いられている礫と遺跡に最も近い鑄物師屋川の河床礫を比較してみる（第10図）。

鑄物師屋川で最も個体数が多いのは安山岩で全体の半数以上を占める。以下、石灰岩、頁岩の順であるが、後背地の岩相に照らして全体的に礫種が少ない感がある。集石は礫種の選択がほとんどなく「当時その付近に転がっていた礫」として性格づけることが可能であるため、遺跡の形成に河川がどの程度関与していたか、換言すれば河床礫の使用頻度をつかむため敢て河床礫との対照材料としたのである。集石では1号～4号の集石礫をすべて網羅し、河床礫と同様、大きさは無視して個体数による割合を示した。それによると集石部門でもやはり安山岩礫が最も多く、全体の1/3を数える。以下、砂岩、頁岩、粘板岩といった砕屑岩類や花崗閃緑岩が続き、河床ではかなり見られた石灰岩はほとんど用いられていない。また閃緑岩類は河床ではあまり見かけられないが、かなりの数が認められるため河川と切り離して搬入経路を捉えていく必要があろう。

概観して河川と集石の礫には相対関係が認められず、現在よりも鑄物師屋川が遺跡に近く、河川の影響が強かったという可能性は、これらの事実をみる限りでは必ずしもあるとは言えそうもない。

(鳥羽嘉彦)

## 6 遺構

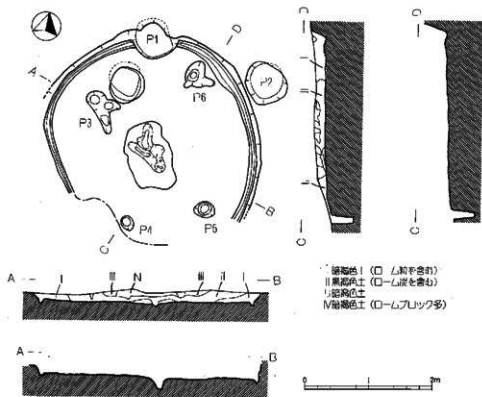
### 1) 縄文時代

#### (1) 住居址

##### 1) 1号住居址 (第11区)

1号住居址は、発掘区中央北寄りにある。斜面上部にあり、最も高い所に位置し、5号住居址に隣接している。

本址は、原地形の傾斜のため南側の約3分の1が失われている。プランは、北西南東方向に3.60m、北東南西に3.20m程の経をもった楕円形を呈し、ローム層を掘り込んでいる。壁高は10~20m程度である。床面は若干の凸凹がみられるもの、ほぼ平坦であるが北から南へ10cm位傾斜しており、堅微である。周溝は、削られる部分を除き、幅10~20cm、深さ4~5cmの規模で壁に沿って全周する。炉は中央よりやや南西に存在し、縦に1,10m幅0,70m深さ5,0cmで、焼けた床面が残っているにすぎず、こぶし大の焼石が2つ散乱していたにすぎない。ピットは、P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>が検出された。P<sub>3</sub>~P<sub>6</sub>が支柱穴で、4本柱の住居址であると推察される。柱掘方は、上場はそれぞれ積



第11区 第1号住居址



円形で下場はほぼ円形であり、寸法は、縦位24~35cm、横位10~25cm程度である。ピットは南西に2個あり、P<sub>1</sub>は壁を少し挟り込んで壁の奥の斜めに掘り込んでいる。規模は径56cm、深さ40cmである。P<sub>2</sub>はP<sub>1</sub>とほとんど同型をしており、径56cm、深さ49cmを計り、南西へ斜めに掘り込んでいる。ともに小壁穴に含まれる可能性が高いものの、遡断はできない。

出土土器はわずかで細片ばかりであったが、炉址上部の焼土中より、縄文時代中期中葉、藤原I式土器が出土していることから、該期に属する住居址であると考えられる。

(寺島俊郎)

## 2) 第3号住居址(第14図)

**調査経過** D6グリッドにあり、第7号住居址の床面下に存在する。東側に隣接して第5号住居址が存在する。第7号住居址の床面精査中、床面下5cmの所からさらに床面が現われ、第7号址の下部にもう一軒住居が存在することが判明した。床面の広がりを追求していくと、南西隅にわずかに残った壁が確認され、東側では小さなピットが半円弧状に並んで発見された。

**遺構** 第7号住居址の下部にあったこともあり、規模、プラン等に明確さを欠いている。壁の残る状態、ピットの配列状況から推定して、径2.5m前後の円形を呈していたものと推定される。壁は南西部分で4~5cmの立ち上がりとしてわずかに遺存している。床面は北から南に向かって10cm前後の傾斜を示す。全面的によく踏み固められ堅緻である。西端には攪乱によると思われる10cmほどの浅い指鉢状の凹みがある。ピットは東側を中心として円弧状に並んで検出された。径15cmほどのもの(P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>)と、他の10cm以内の小さなものがある。深さは大きなものも小さなものも10cm以内で浅い。第8号住居址と同じに、壁下に円弧状に配列していたものと考えられる。馬溝、炉址は発見されていない。

所属時期は、縄文時代早期後半に属する。

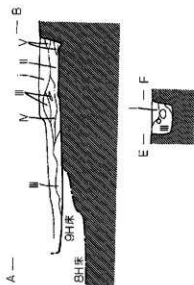
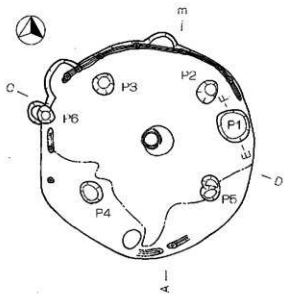
(小林康男)

## 3) 4号住居址(第12図)

**調査経過** 本址は、B-6、7グリッドに検出され、南向きの緩斜面の中腹に位置する。ローム面で遺構が確認され、正確なプラン確認のため南北にトレンチを設けたところ、床面に埋壁炉の口縁部を確認した。また、北側の床面、壁は明確に認められたが、南側の床面、壁は流れてしまったのか、把握できなかった。

本址は、ローム層への掘り込みに暗褐色土が堆積しており、南側に第8、9号住居を切って存在している。覆土を掘り下げた結果、壁は、北側半分が残存し、流失していた。同様に床面も南側ほど曖昧である。

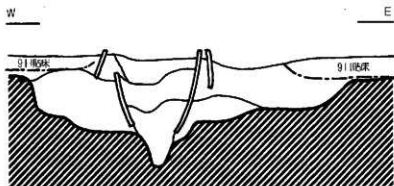
**遺構** 南側が流失しているため、正確なプランの把握はできないが、直径350cm前後の円形のプランと予想される。壁は、北壁のみが残存し、壁高は、北壁中央部で33cm、その東側で3cm、西側で22cmとなり、東に向かって低くなる。また、ほぼ垂直で、立ち上りはしっかりとしている。また、壁中央部と、西側に突出部が見られるが、底面は床面と同じ高さである。馬溝は、壁の確認された範囲と、西側と南側にその一部が確認され、幅4~10cm、深さ3~4cmである。馬溝には、所々、直径7~10cm、深さ7~14cmの円形の凹みが見られる。



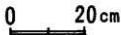
- I 磁褐色土
- II 磁褐色土 (口ノ部)
- III 粘 質 赤 土
- IV 赤 土
- V 赤 土
- VI コームブロック



埋藏物



第12図 第4号住居址



床面は、南に向って緩かに傾斜し、ほぼ平坦で堅緻だが、南側の床面の境界は軟弱で暖床である。本址は、第8、9号住を切っているが、南側床面は、この第8、9号住の覆土に貼束している。

ピットは全部で6個検出された。そのうち、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>は、支柱穴と思われ、深さ30-50cmを測る。P<sub>1</sub>は、深さ30cmで、規模から支柱的役割はないだろう。P<sub>6</sub>は、深さ14cmである。

炉は、埋甕炉であり、住居内のほぼ中央に位置する。埋甕炉は、別々の土器が二重になって構成されており、その口縁部は、床面より4-5cm突出し、炉の西側に床面が接している。埋甕炉は、ロームを掘り込み、土器を置き、その外側に土を埋め戻しており、炉の内部と外側の覆土は異なり、内側は、黒褐色土であり、炭化物を含み、外側は、暗褐色土である。炉の掘り方は、楕円状を呈するが、埋甕直下で急に落ち込み、床面からの深さは、26cmである。一般的によく見られる焼土は、意外に見あらず、東側の内側と外側の土器の間にわずかにブロック状に存在しただけであった。

本址は、埋甕炉から竈内I式期の住居址に比定される。

(三村 洋)

#### 4) 第5号住居址(第14図)

調査経過 C-6グリッドにあり、第7号住居址の下位に存在し、西側には第3号住居址が、東側には第6号住居址が存する。第7号住居址の床面精査中に、床面下に更に床面の存在が確認され、もう1軒住居址が遺存していることが判明した。注意深く調査を進めたが、東側は第6号住居址によって切られ、西側は第3号住居址と接し、しかも住居址全体が第7号住居址の下位にあっていたため、大部分は当時すでに破壊されてしまっており、その規模、性格をはっきり把握することが困難であった。

遺構 前述のような状態であったため、本址に伴うと思われるものは床面の一部とピットのみであった。しかも、ピットの配列も規則性が認められず、第3号、7号、8号住居址のように壁下に小ピットが配列するようなこともなく、壁も全く遺存していないためプランを明確に知ることができなかった。床面は第6号住居址の配列との切り合い部分から西側に2mほど存在し、この部分では良く踏み固められ、遺存状態の良い床面であった。第7号住居址の床面からは6-7cmほど下位に位置し、ローム上に構築されていた。ほぼ水平をなすが、南に向かって7cmほどの緩い傾斜となっている。床面上にはいくつかのピットがあるが、精密な調査にもかかわらずそれが柱穴になるかは明らかにすることができなかった。

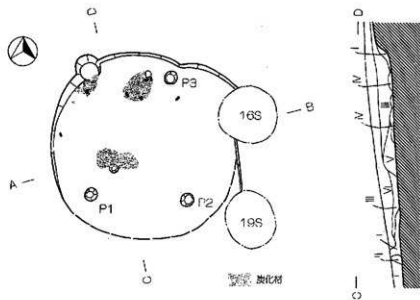
以上のように性格をはっきりしない住居であるが、所属時期は早期後半に該当すると考えられる。

(小林康男)

#### 5) 第6号住居址(第13図)

調査経過 本址はC-5-C-6グリッドにかけて検出調査された住居址で、今回調査された縄文早期の住居址群の中では最も遺存状態の良いものである。

第1号住居址の下方(南側)にあり、西側は第7号住居址を切って構築し、東側の壁は第16号



第13図 第6号住居址

小竪穴によって切られている。

C-5~C-6グリッドにかけて暗褐色土~ローム漸移層中に発見された遺物の硬化面の末端部は、黒色土の落ち込みに接するようにして消滅していた。そこでこの黒色土の落ち込みの性格を知るためサブトレンチを南北に設定し、掘り下げを開始した。このサブトレンチの調査中に第37図に示した丸底の土器が出土し、この土器の出土した下から堅い床面が確認され、住居址の存在が判明した。このサブトレンチで覆土の堆積状態を観察すると、上層からやや砂質を含んだ暗褐色土が10cmほどの厚みで全面に堆積し、この下に暗褐色土がほぼ床面上まで続き、壁際には暗褐色泥じりのローム土が三角堆土として認められた。また、床面上には炭化物を多く含んだ暗褐色土が部分的に散在していた。サブトレンチ完掘後、住居を全掘すべく東西に拡張して掘り下げる。南壁は、南側に向かった自然傾斜面のためすでに流失しており確認できず、また東側は、第16号、19号小竪穴のため攪乱されており明確にできなかった。また、北東の壁際の覆土上層で焼土、炭化物が多く検出され、床面上には炭化材が散在して発見された。そして、床面精査中、柱穴が検出され、北側のピット内からはサブトレンチを掘り下げる途中で出土した丸底形の土器と同一個体の土器片が出土し注意された。

**遺構** プランは径2.90mのはほぼ同形を呈する。壁は、北側で良好に現在し、最も遺存状態の良い北壁で、壁高20cmを測るが、斜面のため南進するに従い漸減する。西壁は第7号住居址と重複しているため、壁高10cmと低い。東壁、南壁は流失している。掘り込みは、ほぼ垂直で非常に鋭い。

床面は、ほぼ平滑で堅緻であり特に北壁寄りには遺存が良い。床面上には壁ぎわを中心としていた炭化材および焼土が散在し、一部中央やや西寄りにも認められる。炭化材は床面より5~10cmほど浮いて出土し、大きさは10cm前後の小片である。なお、西壁上から検出された焼土、炭化材は床面上のものより高い位置にあり、壁外から流れ込んだ、あるいは投棄されたような状態のものであり、床面のものとは性格が異なるものかもしれない。

床面上で発見された焼土、炭化材は、炉灶とするには床面より浮いていること、壁に接近しすぎていることなどからやや無理な面がある。炉灶の痕跡は確認できなかったため、屋内には設置されなかったものと思われる。

柱穴は、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>が考えられる。ともに壁より20~40cm内側にあり、規模はP<sub>1</sub>(20×20、—34)、P<sub>2</sub>(20×23、—17)、P<sub>3</sub>(20×23、—17)であるが、径15cm、深さ12cmで、小さなことから支柱的なものとも考えられる。なお、西壁にある径40cm、深さ23cmのピットはこの住居には付随するものか否か断じ難い。この他には、周溝、壁柱穴などの施設はみられなかった。本址は、出土土器より、縄文早期最終末に位置づけられ、今回調査された早期住居址中、最も新しいものである。

(小林康男)

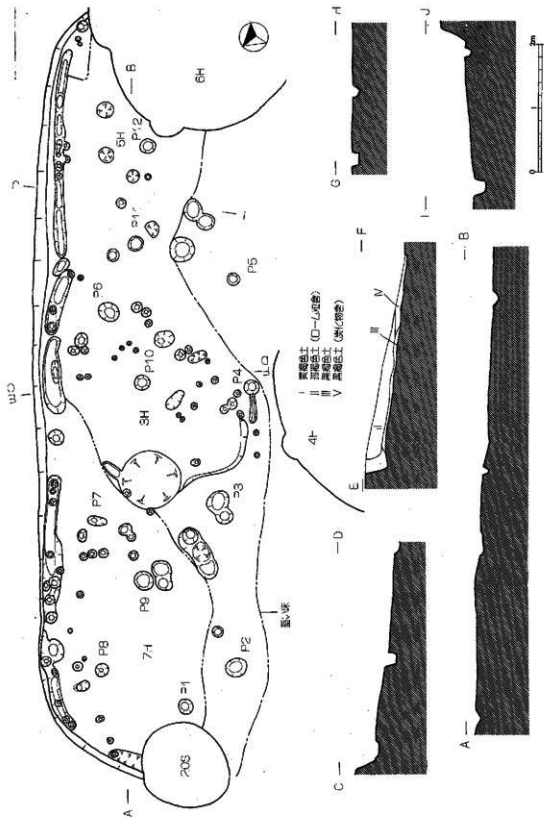
## 6) 第7号住居址(第14図)

**調査経過** 本址はD、E—6~8グリッドに位置する。東側は第6号住居址に、西側は第20号小竪穴に、そして南側は第4号住居址にそれぞれ切られている。また、本址床面の下位には第3号および5号住居址が構築されており、これに貼床し、本址は設置されていた。早期住居址群中最高所に位置する。

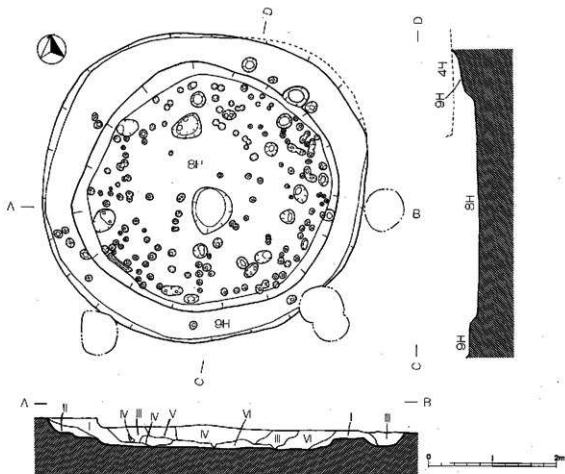
調査区北端から南に向かって検出作業を進めていくと、まず第1号住居址が確認され、この南西側に比較的まとまって土器が出土した。そこで西側にも検出作業で拡張すると、E8グリッドにおいて住居址の北西部分とも考えられる落ち込みが発見された。これよりやや南側では床面状の堅緻部が検出され、住居址と判明した。覆土は、暗褐色土→黄褐色土→ロームを含む黒褐色土であった。床の追求から壁の確認、床面精査により柱穴、周溝の存在が知られたが、炉および南壁はなかった。

**遺構** 本址は、南に向かう自然斜面のため南壁が流失し、また、東壁、西壁が第6号住居、第20号小竪穴にそれぞれ切られているためプランを明確に把握することが困難である。しかし、北壁の状態、残存している西壁の形状から推測すれば、長径13m、短径4mの長楕円形を呈するものと考えられる。床面積は、およそ48m<sup>2</sup>である。

壁は、北側は完存するが、他は西側の一部を除いて流失ないし破壊されている。北壁は9.50mの直線状をなし、掘り込みはほぼ垂直で鋭い。壁高は29~39cmである。西壁は、ゆるいカーブを描き、自然傾斜のため壁高は漸減している。床面は、3号住居址の西側は完存していたが、それ以外は東端の一部を除きははっきり確認できなかった。3号、5号住居の上面に厚さ5cmの貼り床の痕跡がみられるので、3、5号址に貼床し、床が造られたものと思われる。床面は堅緻で、南に向かいやや傾斜している。柱穴は、壁柱穴と床面上にある主柱穴がある。主柱穴は北壁に沿った



第14队 第3、5、7号住居址



- I 黄褐色土□ムブロックをわずかに含む、茶褐色土が混入  
 II □—ム  
 III 茶褐色土□—ム、炭化物をわずかに含む  
 IV 黄褐色土□—ム、炭化物をわずかに含む  
 V 暗褐色土□—ム、炭化物をわずかに含む  
 VI 茶褐色土□ / 炭、炭化物をわずかに含む  
 VII 茶褐色土□—ム、炭多し

第15図 第8号、9号住居址

P<sub>4</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>、南壁に沿ったと思われるP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>1</sub>、P<sub>5</sub>があり、さらに中央部にP<sub>1</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>12</sub>がある。北壁沿いのものと南壁沿いのものとは、それぞれおよそ対になっており、中央列の柱穴は、これら壁沿いの柱穴と柱穴の間に設置されている。主柱とされるものも、早期以降の住居のものとは異なり、小さく、浅い。P<sub>1</sub> (24×21、—13)、P<sub>2</sub> (33×29、—22)、P<sub>3</sub> (25×—17)、P<sub>4</sub> (23×21、—16)、P<sub>5</sub> (19×19、—11)、P<sub>6</sub> (25×18、—30)、P<sub>7</sub> (31×15、—7)、P<sub>8</sub> (21×21、—24)、P<sub>9</sub> (30×30、—9)、P<sub>10</sub> (24×24、—19)、P<sub>11</sub> (24×21、—11)、P<sub>12</sub> (24×25、—34)である。このほかに、壁下、周溝内を中心として径10~15cm、深さ10cm円外の小さなピットが多数穿たれている。3~4穴集中して存在し、こうしたピット群の集中箇所が100~150cmおきに配置されているように見受けられる。周溝は一部途切れるが、北壁下に、直線状に連続して存在する。幅15~20cm、深さ8~11cmほどである。炉は認められなかった。

重複している遺構との前期関係は、切り合いの関係から、3、5号→7号→6号、20号小竪穴

という推移が考えられる。

本址の、所属時期は早期末に属する。

(小林康男)

#### 7) 第8号住居址(第15圖)

**調査経過** 第8号住居址は、調査区のほぼ中央部、B、C-6、7グリットにかけて位置し、第9号住居址をほぼ同心円状に切り込んでいる。北端部は第4号住居址によって切られ、覆土中に貼床される。

第4号住居址のプラン検出時にその存在が確認され、第8号住居址とされた。緩斜面のやや下方に占地していることから、遺構検出面がローム面に達せず、全体の形状を把握することが困難であった。ためにまず、住居址の壁を明らかにするため、上層観察用のサブトレンチを十字方向に掘り込み、壁の確認を行った。その結果、同心円状に拡がりをもつ2つの壁の存在が確認され、新旧関係から内側の新しい住居址をそのまま第8号住居址とし、外側の古い住居址を第9号住居址とした。

**遺構** プランは径3.80m×3.90mをはかる不整形円形を呈する。床面はローム層を掘り込んで構築されており、ローム面をそのまま住居址の床としている。比較的平坦に整えられているものの、壁際を中心として壁に沿うように無数の小穴が存在する。小穴は径約10cm、深さ15~20cmをはかり、壁際のは住居址の求心方向に傾斜しているものが多く、概して深めである。支柱穴らしきものが見られないことから、これらの小穴が上層構造に関係するものと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北側で15cm、南側で25cmをはかる。

**炉址** 明確に炉址と断定しうるものはないが、本址のほぼ中央部に位置するピットがそれに相当する可能性も残されている。同ピットは60cm×70cmの不整形円形を呈し、深さは約10cmをはかる。焼土等の検出はない。

本址の所属時期については、縄文時代早期後半~末葉の所産としうる蓋然性が高いものの、本址に明確に伴う遺物が皆無であることからなお多くの不明な点を残している。

(百瀬忠幸)

#### 8) 第9号住居址(第15圖)

**調査経過** 本址は6・7-B、Cグリットにかけて存在し、第8号住居址に床面をほぼ同心円状に切られている。調査の経過は第8号住居址に述べたとおりである。覆土には茶褐色土の堆積が認められた。

**遺構** プランは第8号住居址同様、ほぼ不整形円形を呈し、規模は東西5m、南北4.85mをはかる。壁はほぼ垂直に掘り込まれているものの、壁高はわずかに10cm程をとどめるにすぎない。床面の大半は第8号住居址によって破壊されており、その全体像は不明であるが、第8号住居址と同様な小穴が若干検出されている。炉址等については一切不明である。

遺物覆土中より若干の土器片が出土しているものの、すべて微細小片に限られ、時期その他は明確にしえない。

以上のことから、本址の時間的位置づけを明らかにすることは困難であるが、第8号住居址と



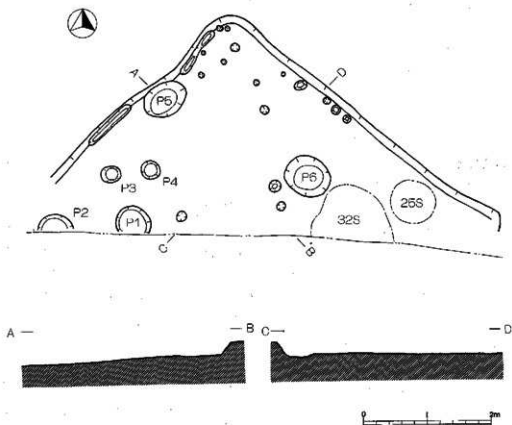
の関係から、縄文時代早期後半～末葉の所産としうる余地を残している。

(百瀬忠幸)

### 9) 第10号住居址 (第16図)

**調査経過** 第10号住居址は、A-1、A-2、B-2の3グリットにまたがり、今回の調査区域内では最東端に位置する住居址である。遺構の配置からみれば、調査区東側に広がる斜面上の縄文中期及び早期の小窪穴群内に存在し、調査区中央に集中する縄文早期、中期、及び平安時代の住居址群とは20m程距離をおいて、孤立して存在している。また、高度的にも、南に面した傾斜面の下方に位置し、他の早期住居址が斜面上方に占地するのは、やや様相を異にする。

本址付近は、斜面の下方に位置する為、黒褐色土の堆積が著しく、地表面から床面までの比高は約1mを計る。そのため、遺構検出にはやや難行した。黒褐色土を半分ほど掘り下げると、本址北東側の斜面、及び本址の東壁上からは、合計2基の集石が検出された。この段階では、未だ本址は捉えられていなかったが、周辺から縄文時代早期末の条痕文土器が出土しているため、これら集石遺構を早期末に位置づけ、さらに掘り下げを進めた。本址北側においては、地山のローム面がすでに検出されているため、北方よりローム面を追いながら黒褐色土の掘り下げを続けると、まず、本址の北側のコーナーが、黒褐色土の落ち込みとなって現れ、やがて、隅丸長方形を



第16図 第10号住居址

呈すると予想されるプランを捉えることができた。覆土内からは、早期末の条痕文土器、及び中期初頭の土器片の出土をみるが、床面直上の土器は全て早期末の土器であり、中期初頭の土器については、本址を切って存在する25S及び32Sなどに伴うものと考えられる。なお、南側半分は、調査地区外となるため、完掘することは出来なかった。

**遺構** 本址は、南側約2分の1が調査地区外となるため未調査であるが、確認された北壁及び東壁からみた限りでは、長径5.3mを越え、ほぼ北西方向に主軸を持つ隅丸長方形の竪穴住居址であると推察される。床面は全体に良好な遺存状態を示し、処々にタタキ状の堅緻な面を有している。北側では、ローム層を掘り込んであるためロームの床面を持つが、本址はかなりの傾斜面に構築されており、中央以南では、黒褐色土上に貼り床が施されている。また、北側コーナーの床面と住居址内中央部の床面とは、比高差30cmを計り、床面自体、かなりの傾斜を有している。壁は北壁及び東壁が検出され、確認できる範囲では北壁3.8m、東壁5.3mを計る。両者とも緩やかな傾きの掘り込みで、壁高は北側ほど高く、最高14cmを計る。なお、北壁下には、深さ約5cmの、短く途切れる2本の周溝が存在する。ピットは、計6個確認され、他にも、深さ5cm前後の凹みが、北側を中心に点在するが、配置に規則性は窺えない。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>は、長径50~70cmを計り、やや大型である割には深さは5~15cmと浅い。それに対し、P<sub>5</sub>は径は(27×32)と小さいが、深さは—45cmを計り、柱穴と想定することも出来よう。しかし、その他には、柱穴と目されるピットは存在しない。なお、本址の調査箇所からは、炉址と思われる遺構、及び焼土などは、全く確認し得なかった。

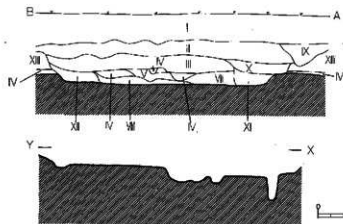
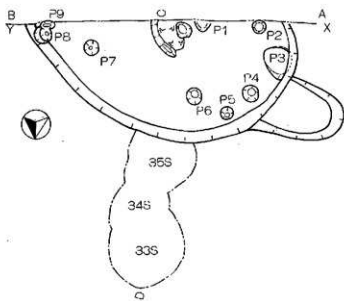
本址は、出土土器の様相から早期後半に属し、6号住から7号住にかけての間の時期に存在した住居址と推察される。

(前田清彦)

#### 10) 第11号住居址(第17回)

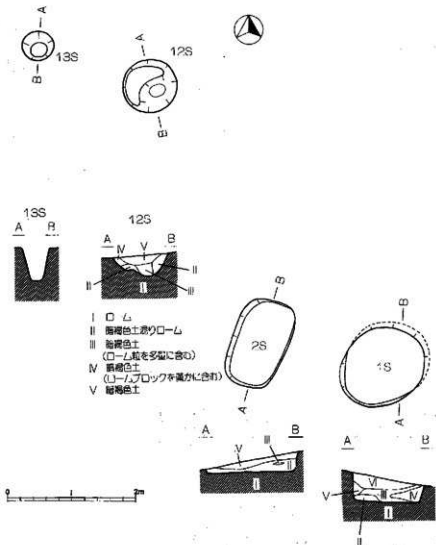
**調査経過** 本址は、A-4、A-5グリットにわたり検出され、南傾斜である本遺跡の最下部に位置する。暗褐色土の落ち込みを容易に確認でき、さらに本址北側に小竪穴が本址と切り合っていることも確認できた。覆土には、土器片が数多く見られ、覆土掘り下げ開始後、すぐにつぶれた状態で半個体分の土器が出土した。また、東側には、本址を切るかたちで、薬石が現われた。ひとまず、床面まで掘り下げ、壁も確認したが、炉が現われないため、本址南側を調査範囲ぎりぎりまで掘り進めた。中央部付近の覆土は、掘り下げるにつれ、焼土、炭化物を多く含み、また大形の土器片も多数出土し、さらに焼土の量が増えたため、炉の位置をこの層下に予想した。結果的には、炉を確認したが、炉と焼土の間には、暗褐色土が層入り込んでいた。炉は、炉石を抜き取ってあるのか、存在せず、炉内は、焼土で満たされていた。

**遺構** 南側半分は、調査範囲外のため、未掘であるが、炉を中心とすれば、断面図をとった線土約4mを径とする円形のプランを呈するだろう。壁は、ロームをやや緩やかに掘り込み、壁高は、20cm~23cmを測る。立ち上りは、しっかりしていない。床面は平坦で、良好な遺存状態ではなく、堅緻とは言えない。炉は、全容を明らかにしなかったが、10cm程の浅い掘り込みであり、縁辺に2ヶ所、10cm弱のくぼみを確認した。炉石を抜き取ったらしい。ピットは、P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>が



- I 耕作土
- II 茶殻の混りた麻褐色土
- III 炭化物□—△粒を多く混雑した
- IV 磁茶褐色混りの麻褐色土
- V □—△粒をわずかに含む麻褐色土
- VI 炭Iをかなり含む麻褐色土
- VII □—△粒をわずかに含む麻褐色土
- VIII □—△粒をかなり多く含む麻褐色土
- IX 黄土層
- X XIに似る
- XI カサリが多い磁茶褐色土
- XII XIに似る
- XIII □—△層
- XIV 灰砂層

第17図 第11号住居址



- |     |                        |     |                       |
|-----|------------------------|-----|-----------------------|
| I   | ローム                    | I   | ローム                   |
| II  | 紫褐色地塊土                 | II  | 紫褐色地塊土粘付大             |
| III | 暗褐色地塊土 (ロームブロックを強かに含む) | III | 紫褐色地塊土 (ローム粒を強かに含む)   |
| IV  | 暗褐色地塊土                 | IV  | 紫褐色地塊土 (ローム粒を多く含む)    |
| V   | 暗褐色地塊土                 | V   | 紫褐色地塊土 (ロームブロックを多く含む) |
| VI  | 暗褐色地塊土                 | VI  | 紫褐色地塊土                |

第18図 小竪穴群(1)

ほぼ同一の形状、深さである。P<sub>1</sub>は、形状、深さ未確認。P<sub>2</sub>は、深さ22cmの袋状ビットである。P<sub>3</sub>は、P<sub>2</sub>に付随すると思われる。柱穴は、P<sub>3</sub>以外と予想されるが、判然としな。

本社は、北側で35号小竪穴と、それより東側に5号集石と重複している。35号小竪穴の底面と本社の床面の比高差は、15cmあり、本社の方が、深く掘り込まれている。また、集石の掘り込み面との比高差は12cmあり、本社の方が深い。集石は、その一部が本社の覆土中に見られたので、集石は、本社より時期的に新しいと思われる。第35号小竪穴との新旧関係は、本社が小竪穴を切っているため、本社の方が新しい。

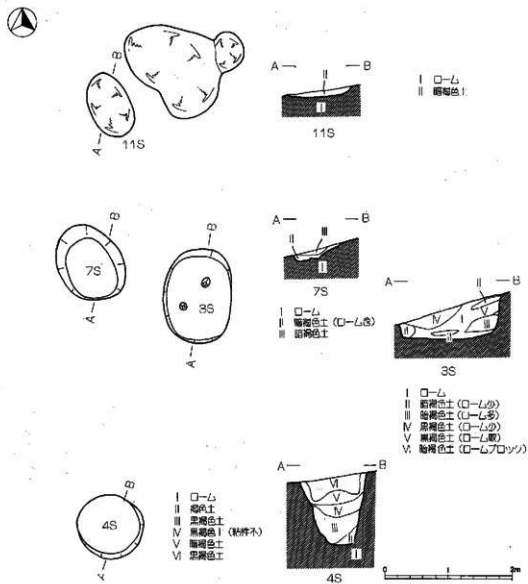
本社の遺物の出土状態は、床面から浮いて多量の土器片が出土する、いわゆる「吹上パターン」

を呈している。それらの土器片は、縄文中期層沢～新道期に集中しており、本址は、その時期に比定されるだろう。

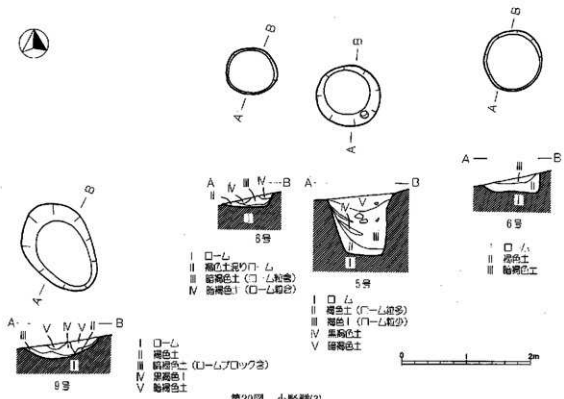
(三村 洋)

11) 第12号住居址 (第29, 31図)

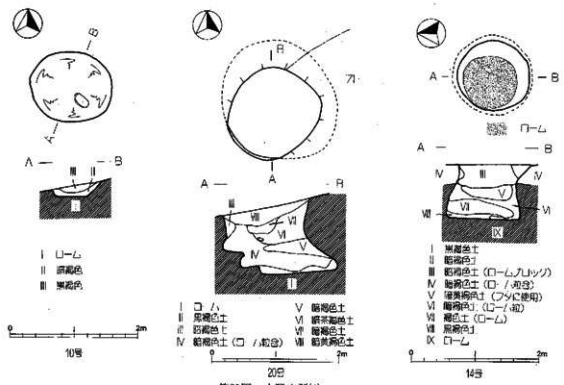
他の住居址のすべてが当発掘区の東側に分布するのに対し、本址だけが最西端に位置する。調査では、4分の1を検出し、他は、調査区域外にある。掘立柱建物-3の範囲内にある。



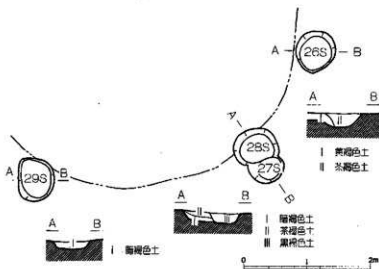
第19図 小墾穴群(2)



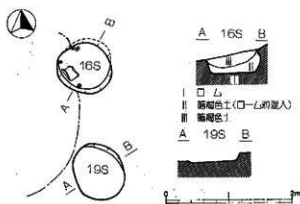
第20図 小整群(3)



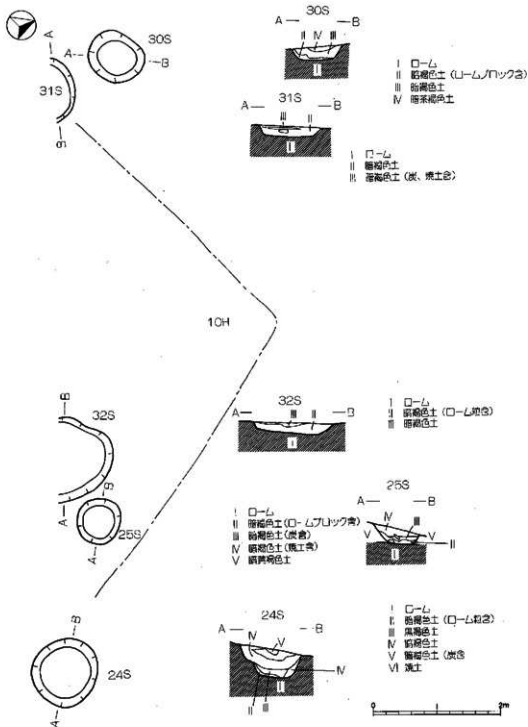
第21図 小整穴群(4)



第22図 小竪穴群(5)



第23図 小竪穴群(6)



第24図 小型穴群(7)



住居址内には、中世の掘立柱やピットがいくつも掘り込まれ、全体に土層にむらがあり検出に困難を来した。壁はローム層に掘り込まれている。

プランは、検出部分からみる限りやや隅丸方形の不整円形を呈するようである。直径4m前後の規模を有すると推定される。床は、はっきりしなかったが、一部に堅い部分も残っていた。壁面は垂直に近い状態に掘り込みとなっている。壁高は12~16cmと浅い。柱穴と考えられるものには、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>が考えられ、掘方は径約44cm深さ4cmで後者は、径46cm深さ11cmである。

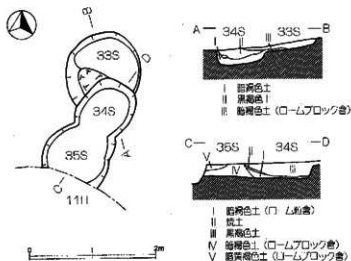
遺物は、本址からはわずかの出土であり、床よりやや浮いた状態で出土している。掘り込みの東端や南の肩部から6cm位かかり、表裏縄文のミニチュア尖底土器が出た。その他、北側部分より、黒曜石製の円形スクレイパー、石鏃が出土している。

(寺島俊郎)

## (2) 小竪穴

今回の調査で、全部で36基検出され、調査区域のほぼ全域に見られるが、南傾斜である本遺跡の上部(北側)には見られず、中部から下部に多い。特にA、Bグリットの1、2、3、即ち、10号住居周辺、C-5グリットあたりに集中している。

形態は、平面形が円形または楕円で、断面形がクライ状か椀鉢状の深さ8cm~50cmのもの、コップ状、フラスコ状を呈する3形態に大別できる。この3形態で特筆すべきものは、S3、S14、S16、S20である。S3は、円形のクライ状を呈し、底面に50cmほどの間隔で、直径10cmと15cmの穴があり、陥穴と思われる。S14は、円形でフラスコ状である。覆土5層がローム質の暗黄褐色土で他の層と異質であり、穴をふさぐ状態にあった。また、底部には、25cm大の平らな焼石があり、何らかの特殊遺構を思わせる。S16は、円形でフラスコ状を呈する。覆土には、中層から下層にかけて、17点の土器片が、中層と下層に打芥と石鏃が2点ずつ遺存していた。さらに底面には



第25図 小竪穴群(8)

は検して、底部を欠く深鉢(46図)がつぶれた状態で、24cm大の石がおおいかぶさってあった。この小堅穴は、他の小堅穴に比べ、覆土に多くの遺物を包含している。S20は、一番規模が大きく、深さ121cmで、円形、フラスコ状を呈する。7号住に重複し、他の小堅穴と疎遠な位置にある。

以上、概略を記したが、個々については、第2表を参照されたい。

(三村 洋)

第2表 堂の前遺跡小堅穴一覧表

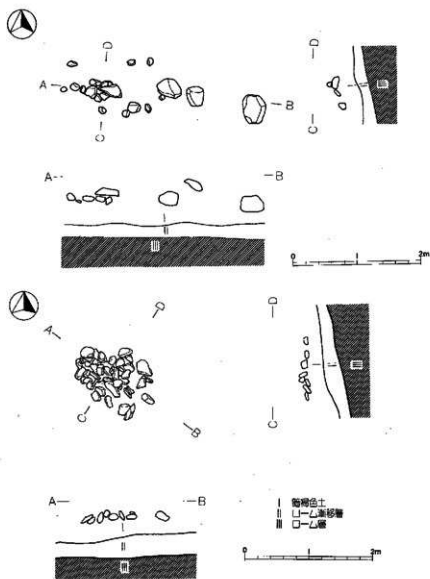
No.	建遺規模	平面形	主軸方向	断面形	実面規模	裏面	深	検出度の層位	時期	備 考
1	140×120	楕 円	N 70° E	タライ状	145×125	平皿(裾縁あり)	42	暗褐色土層	縄文中期	
2	143×130	*	N S	*	132×75	平 皿	38	暗褐色土層	*	
3	160×110	*	N S	*	130×100	平皿(小穴2)	50	ローム層上層	*	
4	163×140	*	N-20°-W	コップ状	100×90	平 皿	38	暗褐色土層	*	
5	110×108	円 形	—	—	72×70	*	38	ローム層上層	*	
6	90×90	*	—	タライ状	85×80	楕円(凹凸あり)	30	*	*	
7	130×100	楕 円	N-12°-W	鐘 鉢 状	96×75	丸底(凹凸あり)	24	暗褐色土層	*	
8	78×72	*	N-75° E	タライ状	72×55	平 皿	13	ローム層上層	*	遺物なし
9	146×110	*	N-85°-W	鐘 鉢 状	110×74	平皿(凹凸あり)	37	暗褐色土層	*	遺物なし
10	125×110	*	N-85°-E	*	*	丸底(凹凸あり)	44	*	縄文中期	
11	90×70	*	N-44°-W	二 段	70×30	平皿(二段)	26	ローム層上層	*	遺物なし
12	45×45	高 形	—	コップ状	36×32	やや丸底	53	*	縄文早期	
13	110×120	*	—	フラスコ状	84×80	平 皿	64	暗褐色土層	縄文中期	
14	92×84	楕 円	N-52°-W	タライ状	76×72	*	27	暗褐色土層	縄文中期	
15	84×86	円 形	—	フラスコ状	160×155	平皿(凹凸あり)	26	ローム層上層	*	
16	127×110	楕 円	N-20°-W	タライ状	90×88	平皿(小穴2)	30	*	*	
17	70×68	*	N-12°-E	鐘 鉢 状	48×30	鐘 鉢	30	*	*	遺物なし
18	90×80	*	N-44°-W	タライ状	(90×73)	平 皿	18	暗褐色土層	縄文中期	
19	130×130	*	N-48°-E	フラスコ状	80×174	*	28	*	縄文早期	
20	140×125	*	N-40°-E	タライ状	130×110	*	14	ローム層上層	*	遺物なし
21	80×73	*	N-60°-W	*	62×50	*	40	暗褐色土層	*	遺物なし
22	80×87	*	N-72°-W	*	54×60	丸底(凹凸あり)	30	ローム層上層	縄文中期	
23	100×90	*	N-65° E	*	80×78	平 皿	44	暗褐色土層	*	
24	64×62	円 形	—	*	50×40	*	23	*	*	
25	71×66	楕 円	N-80°-W	鐘 鉢 状	50×48	丸 底	19	*	縄文早期	
26	87×81	*	N-84°-E	タライ状	40×32	平 皿	18	*	*	
27	86 ?	円 形	—	*	52×40	*	18	*	縄文中期	
28	58×48	楕 円	N 60° E	*	62×47	*	19	*	*	
29	80×72	*	N-2°-E	*	60×50	*	26	*	*	
30	90×80以上	半 円	—	*	83×24以上	やや丸底	40	*	*	
31	180×84以上	*	—	*	112×65以上	平 皿	8	10号住層土内	*	
32	180×140	円 形	—	*	*	平皿(小穴9)	18	暗褐色土層	*	
33	83×7	楕 円	—	*	80×*	平 皿	25	ローム層上層	*	
34	118×7	楕 円	—	*	90×?	*	21	*	*	
35	160×130	楕 円	N-50°-W	タライ状	110×110	平皿(小穴10)	29	ローム層上層	*	

### (3) 集石

#### 1) 第1号集石(第26図)

第1号集石は、調査区の東側B-2グリット内に存在し、同じ縄文早期の遺構である第10号住居址、及び第2号集石の北側に、隣接するような形で検出された。南に面した傾斜面の中程に形成されるこの集石は、縄文早期の遺物包含層である暗褐色土層内に存在したが、当時の生活面及び集石下の掘り込みなどは検出されていない。集石といっても、環は同一平面上に散在するといった感じで、第2号集石ほどの集中はみせず、東西1.7m、南北0.5m程の範囲内に、拳大~人頭大の角礫約20個が、やや集中傾向をみせながら存在する。

ところで、この集石の東端にある長さ20cm程の角礫は、上部に平坦面を有しており、仮に原位置からの移動が無いと仮定すれば、掘え方などから見ても作業台に使用された可能性が高い。ま



第26図 第1号、2号集石地

た、集石に使用される礫は赤味を帯びたものが多く、西端の集中箇所については、集石炉とも考えられるが、焼土、炭化物などの出土は全く見られず、また、その赤色が加熱によるものだという確証も無いので、集石炉とは断言し難い。

なお、西端の最も礫の集中する場所からは、石鏃1点、及び鶉ヶ島台期の土器片が出土しており、周辺から早期末の条痕文土器が多量に出土することなどからみて、第1号集石は、早期末に属するものと推察される。

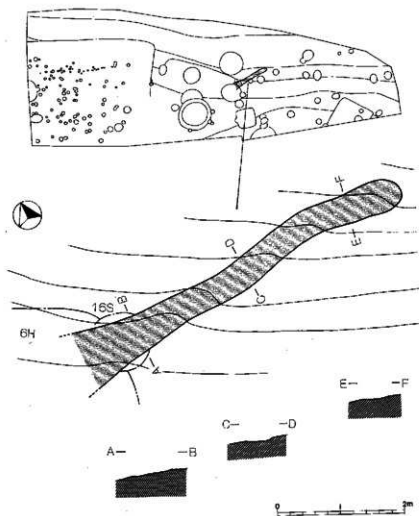
## 2) 第2号集石 (第26図)

第2号集石は、第1号集石の南側約1.5m程の位置に存在し、第10号住居柱束壁の直上に形成さ

れている。1号と同じく暗褐色土層中に形成される2号集石は、第10号住居址床面とのレベル差約30cmも計り、住居廃絶後、しばらく時間をおいて、暗褐色土の堆積がみられた後に形成されたものと推察されよう。平面形は、東西に長い70×50の楕円形を呈し、その範囲内に、径5～15cm程の角礫及び円礫約40個が上下に重なり合うこと無く、平面的に密に集められている。1号集石と同じく、赤味を帯びる礫が多いが、焼土、炭化物などの存在は確認されていない。なお、中心からやや西寄りの礫は、特殊磨石の破損品であり、集石の上面で、他の礫に混在して出土した。

2号集石も、1号集石と同様、付近からは多量の早期末条痕文土器の出上をみた。第10号住居址よりは新しく位置づけられようが、本集石も、早期末に属するものと推察される。

(前田清彦)



第27図 性格不明遺構

#### (4) 性格不明の遺構 (第27区)

堂の前遺跡では、その他の遺構として、道の跡かとも思われる性格不明の遺構が検出された。この遺構は、C-4、C-5の両グリッドにまたがって存在しており、やや凹んだ溝状の硬化面が道のように斜面を斜めに横切っているものである。幅0.4~1m、長さ5.5mにわたって存在しており、東側の斜面上方ではローム漸移層上に形成され東端は擾乱のためか途中で途切れている。また西側の斜面下方では、第16号小堅穴、及び6号住居覆土上層の暗褐色土層中にまで延びて貼り床状を呈するが、西端は、だんだん明確さを失い、途中で見失った。

浅い凹みを有する硬化面は、通常、住居址床面に見られるような堅緻な床面と全く同様な状態を呈しており、踏み固められた跡であると考えられるが、このような斜面において道が検出されるというような発掘例は度かず、性格不明の遺構として扱いたい。なお、遺構に伴う遺物は全く検出されなかったが、早期末の6号住及び中期の16号小堅穴上部にまで硬化面は延びていることが確認されており、時期的には、縄文中期以後の遺構であることがわかる。

(前田清彦)

## 2) 平安時代

### (1) 住居址

#### 1. 第2号住居址 (第28区)

**調査の経過** 本址はB-5グリッドで検出された、今回の調査では唯一のカマドを有する住居址である。南北方向2m80cm、東西方向2m85cmのほぼ正方形に近い規模を要する隅丸の形状を呈している。カマドを中心とした場合の主軸方向はN-80°-W。B-5グリッドは調査区の設定された緩斜面の最下方にあたり、斜面上方に6号住、斜面下方にあたる南側に隣接して11号住が存在する。

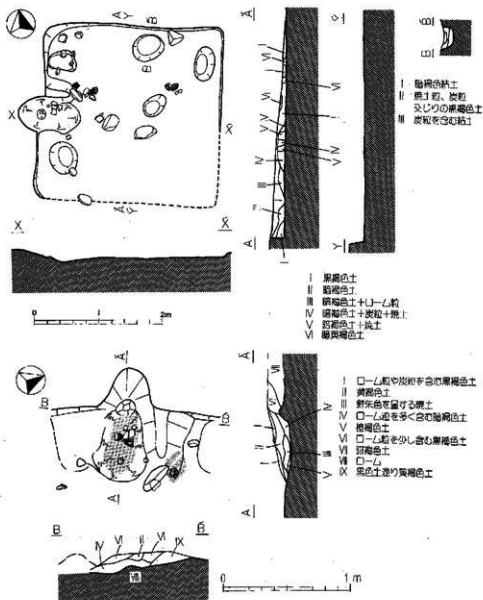
本址西側半分をローム漸移層にあたる暗褐色土層、東側半分をローム層上面まで掘り下げた時点でカマドと思われる粘土の塊を確認し、覆土として黒色土層が住居址の形態を認識させたため、これを第2号住居址として調査を進めた。しかし、各地山の土層が緩やかな傾斜を持っているという地形的制約があるためか、東側の南側半分と南壁ははっきりと検出することはできなかった。

**遺構覆土** 遺構確認面が比較的深かったため残存壁高が深いところで25cm、浅いところで5cm前後しかなく、全体にわたり耕作土に近い黒色土層が単層で確認されただけである。柔かい土であった。

**カマド** 西壁中央部につくられている。暗褐色土の中に粘土の塊がみられるという、あまり良好な状態とはいえないものであったが、これを中心にして床面上に焼土が広がっていることからカマドと断定した。北側ソデ附近から土器片が多数出土した。

**床面** 粘性がややあり硬く、直径2~3mmの火山灰および炭化物片を含む暗黒色土により貼り床された良好な床面を残していたが、壁が明確でない南側は床面が検出できず地山に達してしまっただ。また東北隅から東壁周辺にかけては地山に似る明黄褐色土によって固められていたが、これは床面と推定された。

東北隅近くの直上に砥石が一点置かれてあり、中央部には、はたして台石になるのだろうか



第28図 第2号住居址、カマダ付近

長さ40cm・幅20cm、厚さ30cmの石が床の下に深くくい込むようにしっかりと置かれていたことが注目される。なおこの石の上端は床面直上より5cm程レベルが高く、上面は平らであった。

**焼土：**床面全体に炭化物片が広がっていたが、焼土は床面上3ヶ所に集中してみられた。第1地点は前述のカマダ周辺である。第2地点はP5周辺である。薄く分布しているのがP5と重なる部分に直径20cm程の円形に厚さ2～3cm程の堆積集がみられた。第3地点は床面中央部である。40×20cm程の範囲に厚さ3～4cmの堆積がみられた。

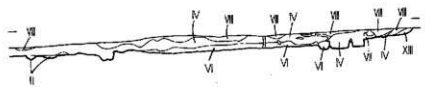
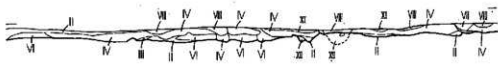
**ピット：**全部で5ヶ所検出された。各ピットの床面からの深さはP1は—15cm、P2は—8cm、P3は—15cm、P4は—27cm、P5は—23cmと比較的浅いものであった。P3の覆土内から



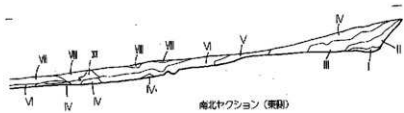
第29图 中丞遺構·第1、2、3号建地·第12号住居址·小聚群



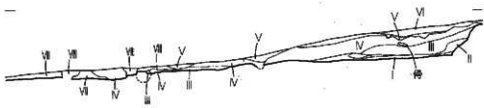




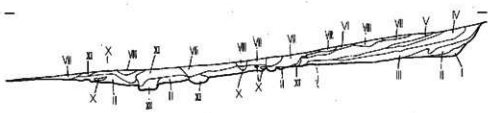
東西セクション



南北セクション (東側)

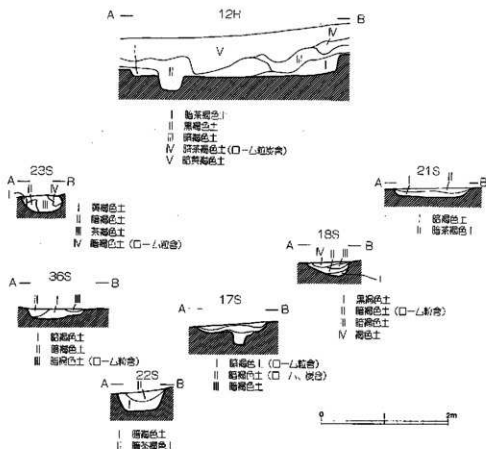


南北セクション (中央)



南北セクション (西側)

第30図 中世遺構覆土セクション



第31図 第12号住居址および中世遺構に伴う小竪穴セクション図

は土器が3個体分出土しており、P4とともにカマドに近いことから貯蔵穴の可能性が高い。

その他：覆土内から流れ込みと思われる縄文期の耳飾りが一点出土している。

今回の調査では当期の住居址はわずか一軒のみ検出されたただけであった。北側の山を背にして南に傾斜する斜面であるため、今回設定された調査区の南側の畑の中に住居址群が広がる可能性は大きいものと思われる。もし仮りに当初から本社一軒のみで存在していたとした場合には、現在ではいわゆる人里離れた場所であることから仮居の可能性も強いと思われる。いずれにしても堂の前という小字名、また今回の調査で検出された中世遺構等から、その関連性が注目される。

(山本紀之)

### 3) 中世

#### (1) 中世遺構 (第29・30図)

本遺構は、発掘区内測平分線に検出する。東西に延びた丘陵の南斜面に平行して立地している。この遺構区域は、南原斜面を約70cmほどローム層を掘り込み壁とし、平坦面を整地している。掘り込みは20mほどあり、まだ調査区域外に続くと充分予想される。この平坦面から、掘立棟建物址・墓址・集石等が検出された。

## (2) 掘立柱建物址 (第29団)

### 1. 第1号建物址

本址は、発掘区の西側に位置し、掘り込んだ壁から南へ6.5mにあり、平坦ローム面で検出された。掘り込んだ壁に平行し、建物址の一番東に立地している。形態は、桁行3間×梁行3間(6.8×7.0m)の建物である。柱間寸法は、桁行2.2×2.5mである。柱掘方は、ほぼ円形である。寸法は、径約40cm前後、深さ21~40cmである。中には柱穴口に20cm位の礫石と思われる上層の平坦な盛りのいい石が入っている。

### 2. 第2号建物址

本址は、発掘区西側に位置している。掘立柱建物址-1とはほぼ重複している。西側の梁行が発掘区域外に延びていると推測される。形態は、桁行2間(3間)×梁行3間(4.2(6.2)×6.2)の建物である。柱間寸法は、桁行2.0~2.2m、梁行1.9×2.2mである。柱掘方は、ほぼ円形である。柱穴中に、2.5cm位の上面の平坦な盛りのいい石が入っており、礎石と思われる。

### 3. 第3号建物址

本址は、発掘区の石濠に位置し、そのほとんどが発掘区外に延びているものと思われる。柱穴の一柱が、12号住居址内に掘り込まれている。掘立柱建物一つと重複している。形態は、桁行1間×梁行2間であり、調査区域外を推測すると、3間×3間か3間×2間ではないかと予想される。柱間寸法は、桁行2.1m、梁行1.9mである。柱掘方は、円形である。寸法は、径約34cm・深さ40~50cmである。

第1~3号建物址は、すべて重複しており、切り合いは不明であり、三棟の桁行×梁行は東西×南北と思われるが、発掘区外に遺構範囲が拡大することが予想されるだけ、一概には決定できない。

## (3) 柱列址

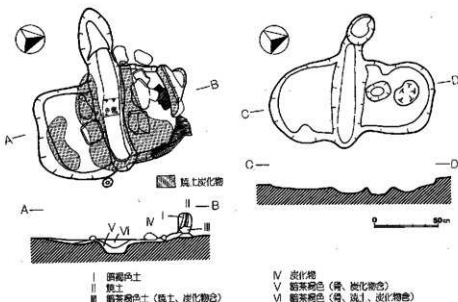
本址は、発掘区内側に位置し、掘り込んだ壁より4.4m南に、発掘西側壁より3m東より始まる。掘り込んだ壁に沿って10m位の長さのものである。これらの柱掘方は径25cm前後、深さ10~20cmである。柱間寸法は30~50cmである。柱列と掘り込んだ壁との間には基址があり、南には掘立柱建物址があるため、柱列址は、掘立柱建物と墓域との境いとなる柵址であろうと思われる。

## (4) 墓址

本址は、発掘西側の掘り込まれる壁の付近にそのほとんどが分布している。火葬墓(1・3~8号墓)と土葬墓(2号墓)とに分けられる。また、土葬墓は、その分布から、4~7号墓と1・3・8号墓とに分けられる。

### 1. 4~7号墓址(火葬墓)

これらの墓址は、掘り込まれた壁から1.4~1.8m位南に、平行して20cm位掘り込み土境状に掘り残されている。この土境の長さは9mほどで、発掘区域外まで続くことが予想される。当火葬



第32図 第1号火葬墓(左)、第3号火葬墓(右)

墓はこの土壇上に並んで配列された状態になっている。

4号墓は、掘り込まれた壁より南90cm、発掘区西壁より東へ3.3mに位置する。人骨は方形の軽石の直下に埋納されていた。また、周近から五輪塔の構成石が散乱していた。また、その他に形の復原はできないが、軽石で外面に削った痕や径2.5cm、深さ10cm位の穴をあけてあるものが出土している。(第73図一23、図示したが、違った組み合わせをした可能性もある。)

人骨は、4cm位の厚みがあり、地山より18cm上部で出土した。これは、低い塚状の盛土を成し埋葬されているものであろうと思われる。

5号墓は、4号墓の東に1.8mに位置し地山より10cm上部で出土した。

6号墓は、5号墓の東2.2mに位置し地山より21cm上部で出土した。その上方20cmに20~40cmの川原石が積み重ねられている。

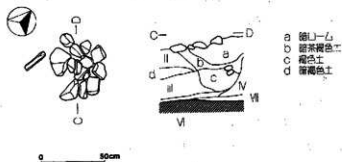
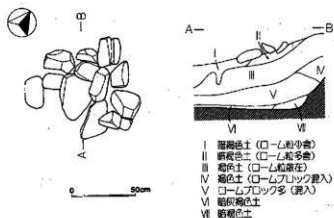
7号墓は、6号墓の北東80cmに位置し地山より31cm上部で出土した。

副葬品は、6・7号墓より古銭が出土したが、どちらから出土したか不明である。

古銭・元豊通宝(北東、1078年) 皇宋通宝(北東、1039年)

## 2. 第1・3・8号墓址(火葬墓)(第32図)

第1号墓は、掘り込んだ壁より南に2.6m、発掘区西壁より東に1.8mに位置する。縦2.25m、横1.5m、深さ6cmであり、隅丸長方形を呈する。中頃に、長さ2.6m、幅4.7cm、深さ10cmの東西溝がある。全体に焼けているが、溝内部には火が及んでいない。溝をはさみ上面の焼けた石が2個ずつ並んでおり、遺構外の溝北側に2個の石がみられる。北側壁肩部分には、高さ18cm、長さ43cmの壁が築かれており、内側が焼けている。この焼石は、20~25cm位の上面の平坦な壘りのいい石である。この壁は全周していたかは不明であるが、北東隅まで床が焼けており遺構外まで



第33図 第3号(上)、第4号(下)集石址

直径10cm位の薪が炭化したまま残っており、この部分が焚口ではなかったと思われる。このことは、北東壁北10cm位の土壌が48cmほど半円径に掘り込まれている。人骨は、焼石に囲まれた部分とその溝の中に集められている。溝の中央で骨の下より6枚の古銭が重なり出土した。

古銭—景德元宝(北宋・1005年)、天禧通宝(北宋、1018年)、嘉祐元宝(北宋、1057年)、益宋通宝(北宋、1039年)、元祐通宝(北宋、1093年)不明1枚。

3号墓は、第1号墓の南7mにあり、掘立様建物—3の範囲内より検出された。プランは1号墓と類似しており、同一方向に主軸をもつ。縦2.5mの横1.3mの深さ5mでやや細長く、南壁は丸く、北壁は隅丸である。溝は、長さ2.5m、幅50cm、深さ7.5cmである。人骨は、量が少なく細片で判別がつかない。焼石、副葬品はみられない。溝北側にビットが2つ検出したが、焼土、骨等は含まれておらず、後世のものと思われる。

第8号墓は、掘り込んだ壁より南に13m、掘立様建物址—1の南東隅のすぐ東に位置する。他の墓址と離れている。プランは、1.2mのほぼ円形で深さ20cmで、西側に20cm位のはり出し部分がある。床面はほぼ水平で、壁ぎわにほぼ等間隔で6つの径10cm位の柱突と思われるビットがまわ

っている。また、中央に1つ確認された。人骨は、北東の壁ぎわに焼土、墓と共に細片がわずかにみられた。副葬品等はなかった。

### 3. 第2号墓址(土墳墓)

当墓址は、第1号の西50cm位に位置し、土葬墓である。プランは、円形でほぼ垂直に掘り込まれている。掘方は径50cm、深さ50cmである。人骨はごくわずかで、骨の直下より腐食した板片の上に3枚の古銭が重なって出土した。板片には緑青が付着している。

古銭—聖宋元宝(北宋、1101年)、永楽通宝(明、1408年)2枚。

以上より、火葬墓は、副葬された古銭8枚は北宋のもので、その上限は、景德通宝(1005年)、下限は元祐通宝(1093年)で、特定された時期に限定できる。下限から伝世期間100年とすると12C末降と見做すことができる。また、中世遺構内より、出土している小皿、大平鉢は12世紀より13世紀前半に置くことができ、甕は13世紀中頃であることから、火葬墓は、鎌倉初期より中頃までと推定できるのではなからうか。又、掘立柱建物址に火葬墓が付随するものと考え、建物址はこのころ建てられ始めたものと思われる。

2号墓に関しても同様に考えられ、16世紀代に比定できるのではなからうか。

(古銭は平出遺跡考古博物館長 大沼田三好氏から教示を得た)

(寺島俊郎)

## (5) 集石

### 1. 第3号集石(第33図)

集石4の北東に検出した。平面、上層断面においても落ち込みは確認できなかった。

20~35cm程度の平坦な面をもった原石が14個90×80cmの範囲に集まっていた。石は直下に重なり合うことなくほぼ単に敷きつめられている。集石下からは骨、他の遺物など全く見られない。

以上、集石の状態は集石4とほとんど類似していることから配石墓と推測することが出来ないだろうか。また、安源寺遺跡では、盛土の上に人骨を配置し、その上に小石を敷き集めた例が報告されている。

### 2. 第4号集石(第33図)

土壇上の7号墓の延長上4.4m東に検出した。平面では集石に伴う土拉は検出できなかった。

12~22cm程度の川原石が15個65×60cmの範囲に集まっていた。石は上下に重なり合うことなくほぼ平に敷きつめられている。石の上面から土拉の底面までは約45cmである。集石の中には焼けた石が含まれている。土拉中からは骨、焼土、他の建物などは全く見られない。

集石が火葬墓の延長上に検出されており、焼石が含まれていることから、火葬後、埋葬され、火葬時に使用した石を重敷した配石墓と推測できないだろうか。

(寺島俊郎)

## 7. 遺物

### 1) 土器

#### (1) 第1号住居址 (第34図)

本址は、南壁が流失しており、掘りも浅く、他の縄文中期の住居址に比較すると土器の出土は少量であった。遺物は、中央の炉上部を除く覆土に散在していた。

1は、刻目のある隆帯と二条の波状沈線が施されている。2は、いわゆる平出三類Aと呼ばれる土器の頸部で、縄文を地文とし、横位沈線とC状の沈線、そして、それに垂直に縦位の沈線が施されている。3、5は、単節縄文を地文としており、5には隆帯が付されている。4は、刻目のある隆帯が降下し、さらに横位の波状沈線が配されている。8は、円形の隆帯の内側に、円形の刺突が5ヶ所施され、また、押引文がそれらの下に横位に施文されている。9は、細い斜条線、10は、縄文を地文に縦位に2本微隆起が見られる。

これらの土器は、1、4、7、8などが縄文中期前葉の沓沢期に相当する。

(三村 洋)

#### (2) 第3号住居址 (第36図)

1は幾何学的な文様が施される胴部破片。太い沈線文による幾何学的区画の内に同様の沈線文が充填され、交点に刺突文が加えられる。器面には条痕文をとどめる。2は曲線的な沈線文と二連の刺突文が並用される胴部破片であり、胎土に植物繊維が混入されている。3～5は条痕文のみの胴部破片、6は無文の胴部破片である。7は外面暗褐色、内面灰褐色を早する胴部破片であり、胎上に植物繊維の混入が顕著である。外面横位および斜位、内面縦位の結条体丘痕文がそれぞれ施される。比較的ていねいな器面調整が行われ、器厚は11mmと厚手である。

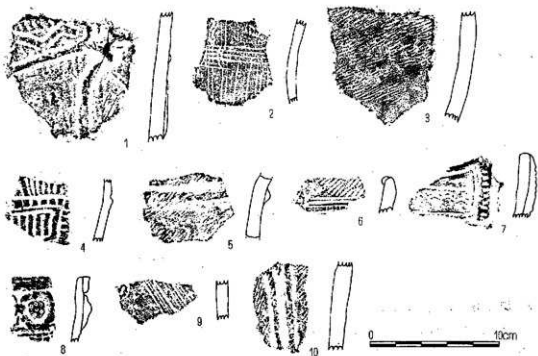
(百瀬忠幸)

#### (3) 第4号住居址 (第35図)

本址は、埋燬炉を伴う住居址である。埋燬炉は、2個体の土器が使用されていた。また、南半分は、流失した不完全な住居址であり、覆土内には土器片は少量であった。

1と2は、埋燬炉に2重に使用されていた土器である。1は内側の土器で、直線的に開く胴部である。キャタピラ文を有する刻み目のある隆帯が横2列に配され、7単位となっている。上方のキャタピラ文の回りには、波状の沈線が配されているが、下方のキャタピラ文にはない。また、全面には、斜縄文がある。外面には、一部吹きこぼれらしい痕や、中央部5cmほどの幅で横に帯状に一周して黒変している。内面は、横方向のミガキがされているが、全体的に二次焼成のためか、粗れている。焼成は良い。上部の口径24.5cm、下部の口径16.5cmである。この土器の文様に類似した土器は、松本牛の川遺跡の1号住出土のものがある。

2は、埋燬炉の外側の上器で、上部口径22cm、下部口径20cmを測り、深鉢の胴部である。文様構成は、3種類に大別されよう。上部の縄文、中央の長楕円の隆帯とその内部のキャタピラ状文と、Z字状の隆帯とその際の角押文。そして、下部の角押文を伴う菱形の隆帯と唐草文様状の隆帯とその回りのキャタピラ文、これら3種類である。焼成は、ややもろく、胎土に長石を多く含む、



第34図 第1号住居址出土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面状態 外側/内面	胎土	備考
1	1号住	胴体	肩部	隆帯、沈線、刺突	十字	長石	
2	×	×	胴部	沈線、縄文	×	黄雲、長石	
3	×	×	胴部	縄文	×	長石	
4	×	×	×	隆帯、刺突	×	×	
5	×	×	×	隆帯、縄文	×	×	
6	×	×	口縁	縄文、沈線	×	×	
7	×	×	×	隆帯、沈線、刺突	×	×	
8	×	×	×	隆帯、刺突、押引文	×	長石、雲母	
9	×	×	胴部	沈線	×	長石	
10	×	×	×	縄文、隆帯	×	×	

全体の色調は、茶褐色である。1と2は、共に濠内I式に比定される。

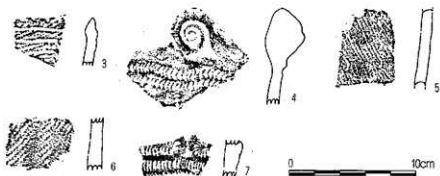
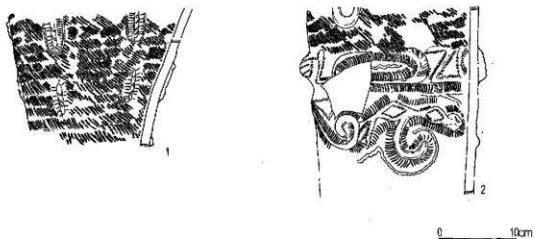
3は、波状口縁で、縄文を地文に沈線が施されている。4は口縁部で、うず巻き文と角押文が配されている。5、6は縄文を基調としている。7は、隆帯と、押引文の文様構成である。

(三村 洋)

#### (4) 第5号住居址 (第36図)

8は小さな波状を呈する口縁部破片。口縁上部に二連の刺突文がめぐり、胴部にも同一工具による二連の沈線文・刺突文が施される。胎土には植物繊維が若干量混入されるほか、金雲母・石英などが含まれる。9～15は条痕文のみをとどめるものであり、表裏にとどめるもの(9～11)、表のみのもの(12～14)、裏面のみのもの(15)、がみられる。15は平縁の口縁部破片であり、口唇部に貝殻腹縁による波状の刺突文が施される。胎土に砂粒、石英、さらに植物繊維を多く含む。焼成は良好とはいいがたい。16は大きな波状を呈する無文の口縁部破片。17は絡条体圧痕文が施





第35図 第4号住居址出土土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器別所属 外面/内面	胎土	備考
1	4II	深鉢	胴部	縦文、キョフヒツ文、掻き	ナア/ミカキ	裏石	
2	×	×	×	縦文、胎角付文、波線	ナア	×	
3	×	×	口縁	横文、波線	×	裏石、裏面	
4	×	×	×	角付文、波線文	×	裏石	
5	×	×	胴部	縦文	×	×	
6	×	×	×	×	×	×	内面ニス付等
7	×	×	×	押引文、胎部	×	裏面、裏石	×

される口縁破片。絡糸体圧痕文は条痕文と地文として綾杉状に施文されている。くすんだ灰褐色を呈し、胎土には植物繊維の混入が顕著である。焼成は不良。

(百瀬忠幸)

(5) 第6号住居址 (第37図)

18は、推定器高7.5cmをはかる、丸底の小形土器である。くすんだ褐色、一部黒褐色を呈し、胎土に砂粒、金雲母、さらに微量の植物繊維を含む。器厚は3~4mmとさきわめて薄手のつくりであり、内・外面ともに、ていねいな器面調整が加えられている。内面には赤色塗彩が認められてい

るほか、タール状の黒色物質の付着がみられる。19は紺隆起線文による幾何学的な区画内に太い沈線文が充填されるものであり、口唇部には棒状工具による刻み目が加えられる。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒・石英・金雲母、さらに微量の植物繊維を含む。焼成はふつう。20は格子目状の沈線文が施される平縁の口縁部破片。くすんだ茶褐色を呈す。焼成は概して不良であり、器面の荒れが著しい。21・22は米粒状ないし細長の連続刺突文が施されるものである。21はくびれ目に細長の連続刺突文がめぐり、口縁上部には同様の刺突文が重層する山形状に施される。22は米粒状の連続刺突文により同様の文様が描かれ、さらに口唇部にも刺突文が加えられる。22には「なぞり」手法も併用されている。23はRL単節縄文が施される胴部破片。24～26は条痕文のみ、27～29は無文ないし擦痕文のみの胴部破片である。30は絡条体圧痕文が施される胴部破片である。絡条体圧痕文は隆帯上には縦位、他は横位ないし縦位に施文される。胎土に植物繊維を多く含み、明褐色を呈する。裏面には粗雑な条痕文をとどめている。器厚は7mm。焼成はふつうである。

#### (6) 第7号住居址 (第37回)

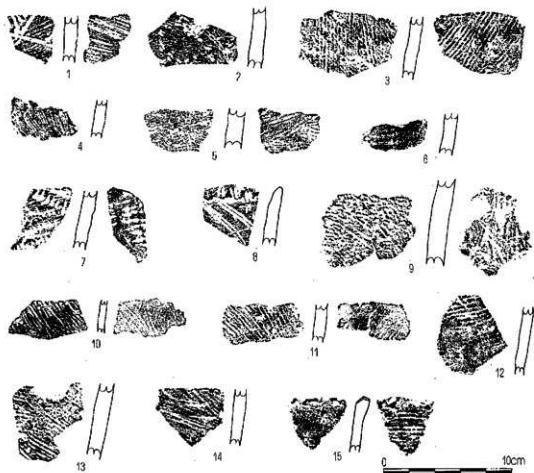
31は外面茶褐色、内面暗褐色を呈する無文の胴部破片である。器厚9mmをはかり、胎土には植物繊維の混入が認められる。

#### (7) 第8号住居址 (第37回)

覆上中より数片の縄文土器が出土している。すべて縄文時代早期後半～末葉に属するものであり、植物繊維の混入が認められる。32は器厚6mmと薄手の胴部破片であり、RL単節縄文が施される。33～35は条痕文の3の胴部破片であり、植物繊維の混入が顕著である。36は無文の胴部破片。器厚9mmと厚手のつくりであり、胎土は比較的硬くしめる。植物繊維の混入は少ない。

#### (8) 第10号住居址 (第38・39回)

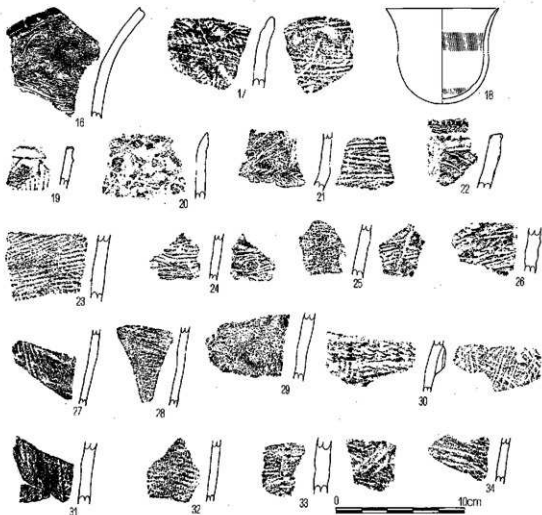
37は細沈線による文様が施される平縁の口縁部破片。口唇部は内削げ状を呈す。器厚10mmをはかり、胎土に砂粒・金雲母、植物繊維若干量含む。38・39は縦位の隆起線が施されるもので、幾何学的な文様が構成される。細沈線による区画内に太沈線が充填される38は平縁、39は波状口縁をなす。ともに器厚5mmと薄手のつくりであり、胎土に微量の植物繊維を含む。40は太沈線による区画内に列状の刺突文が充填される。41・42は沈線文が施される胴部破片。41は格子目状、42はやや粗雑な沈線文が施される。43は半数竹管による列点状刺突文が施されている。44はRL単節縄文を施文として、曲線的な「なぞり」、さらに強隆起状をなす「なぞり」質に米粒状の連続刺突文が施される。明褐色を呈し、胎土に微量の植物繊維を含む。器厚は6mmと薄手。45～47は縄文が施されるものであり、45はLR単節縄文、46・47はRL単節縄文がそれぞれ施文されている。47は平縁の口縁部破片であり、口唇部には棒状工具による刻目が加えられる。48～54は条痕文のみとどめるもの。52は表面の条痕文を磨消している。54は外面灰褐色、内面青灰色を呈し、胎土に植物繊維を多く含む。砂粒等の混和物を含まず、ナアを中心とするていねいな器面調整が行なわれ



第36图 第3号、5号住居址出土器

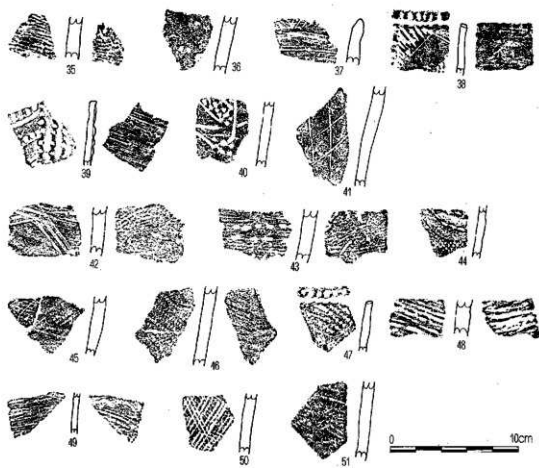
土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素		胎土	備考
				文様構成要素	器面観察 外底/内面		
1	3区	片断	胴	太直線・斜突	条状	砂・せんい	
2	3区	片断	口縁	太直線・斜突	十字	砂	
3	3区	片断	口縁	太直線・斜突	条状/	砂	
4	3区	片断	口縁	太直線・斜突	〃/	砂	
5	3区	片断	口縁	太直線・斜突	〃/	砂	
5	3区	片断	口縁	太直線・斜突	十字	砂	
7	3区	片断	口縁	太直線・斜突	条状/十字	砂	
8	5区	片断	口縁	太直線・斜突	十字	砂・石・金・せんい(小)	
9	5区	片断	口縁	太直線・斜突	条状	砂・せんい	
10	5区	片断	口縁	太直線・斜突	〃	砂	
11	5区	片断	口縁	太直線・斜突	〃	砂	
12	5区	片断	口縁	太直線・斜突	条状	砂	
13	5区	片断	口縁	太直線・斜突	〃/	砂	
14	5区	片断	口縁	太直線・斜突	〃/	砂	
15	5区	片断	口縁	太直線・斜突	/条状	砂・石・せんい(多)	



第37図 第6号、7号、8号住居址出土土器  
土器観察表

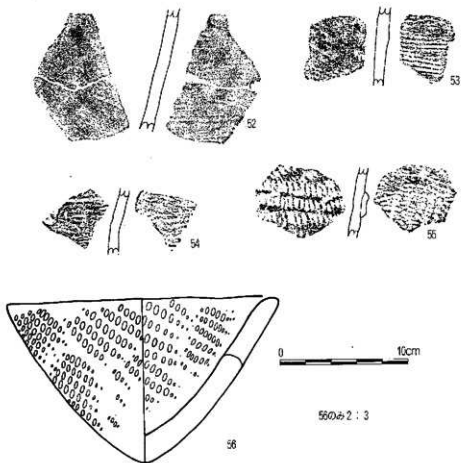
番号	発掘区	器形	部位	文様観察要項	断面図物 内面/外面	胎土	備考
16	5区	口縁	口縁		ナテ	砂・せんい	
17	5区	×	×	斜条状点文	赤灰	砂・せんい(多)	
18	6区	×	×		ナテ	砂・せんい(多)	
19	6区	×	口縁	縦向起線・点状底	×	砂・せんい(多)	
20	6区	×	×	点状	×	砂・せんい	
21	6区	×	胴	逆斜刺点文	/赤灰	×	
22	6区	×	口縁	ナゾリ・逆斜刺点文	×	×	
23	6区	×	胴	R.L. 早稲縄文	/ナテ	×	
24	6区	×	×		赤灰	×	
25	6区	×	×		×	×	
26	6区	×	×		赤灰/	×	
27	6区	×	×		赤灰/	×	
28	6区	×	×		×	×	
29	6区	×	×		ナテ	×	
30	6区	×	×	斜条状点文	赤灰	砂・せんい(多)	
31	7区	×	×		ナテ	砂・せんい	
32	8区	×	×	R.L. 早稲縄文	/ナテ	×	
33	8区	×	×		赤灰	砂・せんい(多)	
34	8区	×	×		赤灰/	×	



第38图 第10号住居址出土土器

土器観察表

番号	表裏面	器形	部位	文様構成要素	器型別名 / 裏/内面	粘土	備考
35	表H	深鉢	胴		赤灰	砂・せんい(多)	
36	表H	〃	〃		ナテ	砂・せんい(多)	
37	10H	〃	口縁	斜沈線	〃	砂・せんい(少)	
38	10H	〃	〃	斜沈線・横沈線・水沈線	〃赤灰	砂・せんい(微)	
39	10H	〃	〃	斜沈線・水沈線	〃赤灰	〃	
40	10H	〃	胴	水沈線・斜沈	ナテ	砂・せんい	
41	10H	〃	〃	斜沈線	〃	〃	
42	10H	〃	〃	沈線	〃赤灰	〃	
43	10H	〃	〃	同線	赤灰	砂・せんい(多)	
44	10H	〃	〃	3L半周縄文・ナノリ・斜沈	ナテ	砂・せんい(微)	
45	10H	〃	〃	1L半周縄文	〃	砂・せんい	
46	10H	〃	〃	3L半周縄文	〃	〃	
47	10H	〃	〃	〃	〃	〃	
48	10H	〃	〃	〃	赤灰	砂・せんい(多)	
49	10H	〃	〃	〃	〃	〃	
50	10H	〃	〃	〃	赤灰	〃	
51	10H	〃	〃	〃	〃	〃	



第39図 第12号住居址出土遺物

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器形観察 外面/内面	胎土	備考
52	10H	钵鉢	胴		高板・唐巾/高板	赤・せんい	
53	10H	#	#		高 板	#	
54	10II	#	#	跡委灰灰文	条板→ナデ	せんい(多)	
55	10II	#	#	L凡草唐文	/条板	砂・せんい(多)	
56	12H					砂・黄・赤	小形土器

ている。東海系の土器と考えられる。55は表裏に結条体圧痕文が施文される胴部破片であり、表面は横粒、裏面は縦位に施される。くすんだ褐色を呈し、胎土に植物繊維を多く含む。焼成は良好とはいいがたい。

(百瀬志幸)

### (9) 第11号住居址 (第40~45図)

第11号住居址は、覆土から多量の土器が出土しており、その出土状態は、いわゆる「吹上パターン」を呈している。

1、2は、平出3類A系の土器である。1は、推定口径38cmで底部を欠き、現存するのは全体の3分の1ほどである。色調は茶褐色を呈し、器厚は7~9mmを計り、焼成は良く、堅緻である。施文は、口縁部から胴中央部にかけて地文に縄文が施されている。口縁部は、波状沈線と数本の横位の沈線を持ち、くびれ上部に縦位の沈線が描かれ、頸部には横位の沈線が半弧状の沈線で縦位に区切られ、その横位沈線からさらに数条の沈線が垂下している。口縁には縦に粘土の貼り付けがある。2は、推定口径47cmで、色調は暗茶褐色を呈し、現存するのは全体の3分の1ほどである。口縁部には交互刺突が施され、口縁下部には2本の横位の沈線が所々、V字状に曲がりながら描かれている。くびれ上部は、縦位の沈線が施され、頸部は、横位沈線が胴下半にまで垂下する沈線によって区切られている。器厚は、5~7mmと薄く、胎土は石英をかなり多く含む、内面はかなりあれている。

3は、口縁部に4単位の棒状隆帯を有する土器で、口径26cmの底部を欠く深鉢である。隆帯には刻目があり、口頸部に縦位の角押文、口頸部以下は横位の沈線が配され、胴下半は無文である。表面は、使用時による荒れが見られる。

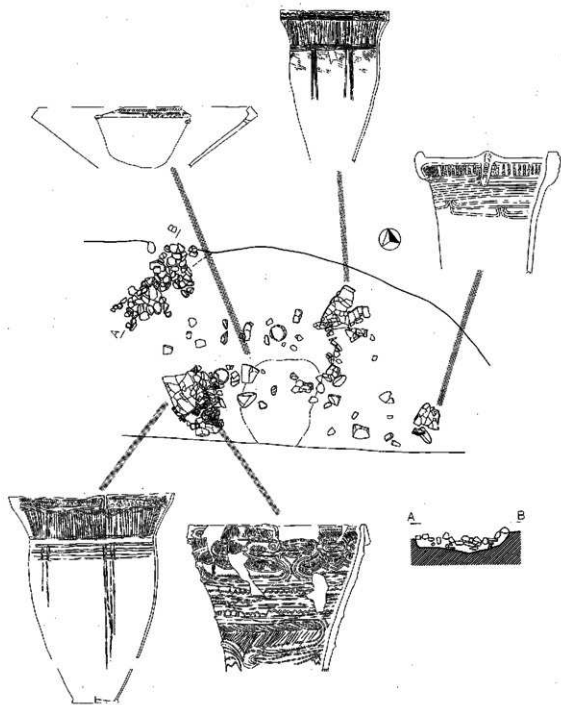
4は、口径31cm、現存器高25cmの底部を欠く深鉢である。隆帯による長楕円の区画文とその内部の細い斜行沈線が特徴的な土器である。全体的には、横位の隆帯が文様を区画している。口縁部は、突帯によって4単位の長楕円区画文があり、その下に同様な区画が8単位、さらに4単位と区画され、胴中央部は波状沈線を主体とする文様が施され、その下には再び、2単位の楕円区画文があり、下部は、突帯によって2単位の区切られている。

5は、推定口径47cmの一部波状の見られる平出3類A系土器の口縁部片である。横位沈線が走り、そこに半弧状に沈線が縦位に区切っている。波頂部より刻目のある隆帯が垂下し、口縁下部より沈線が縦位に施され、頸部の横位沈線に達している。色調は、茶褐色を呈し、内面中央部には、2cm程の幅で帯状に煤が付着している。

6、7は浅鉢の破片である。6は、推定口径44cmの浅鉢で、茶褐色を呈する。文様は、横位に角押文が施され、これに平行して押引文で区画され、その区画内に交互刺突文が施されている。また、一部に突起と穿孔がある。7は、推定口径41cmで茶褐色を呈する。2条の連続的な押引文が横位に施文されている。外面はやや荒れており、補修孔と思われる穿孔が2ヶ所見られる。

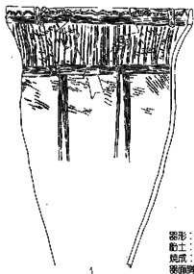
8は、縄文を地文として無作為な条線が施され、縄文前期踏碇C式に相当する。

9は、口縁部破片で縦位の細い沈線とその下に横位の微隆起がある。10は、胴部片で細い沈線が交叉している。9、10は、縄文中期初頭に相当し、第V群1類に含まれる。11~13は、縄文を

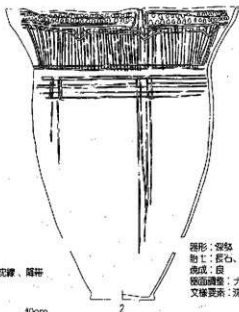


第40图 第11号住居址土器出土状况图、第5号集石



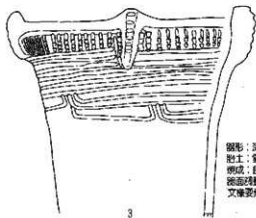


器形：深鉢  
胎土：香田  
焼成：良  
表面装飾：ナデ  
文様要素：溝文、沈線、降帯

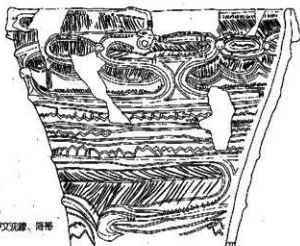


器形：深鉢  
胎土：長石、石英  
焼成：良  
表面装飾：ナデ  
文様要素：沈線、降帯、刺突

0 10cm



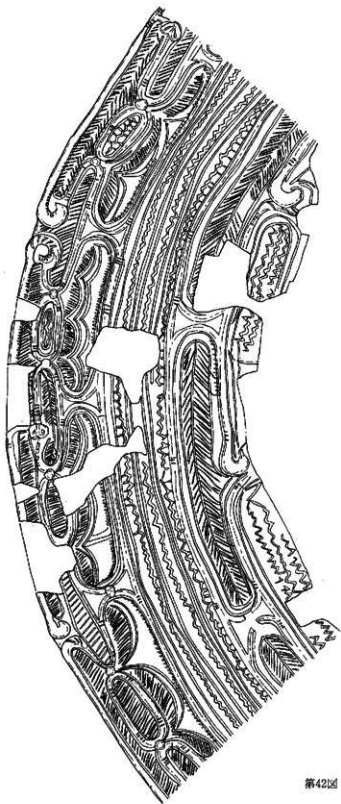
器形：深鉢  
胎土：香田  
焼成：良  
表面装飾：ナデ  
文様要素：角押文沈線、降帯



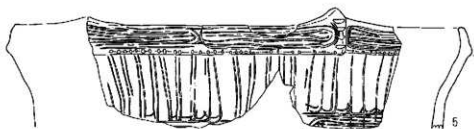
器形：深鉢 胎土：石英  
焼成：良  
表面装飾：ナデミガキ  
文様要素：沈線、降帯、刺突

0 10cm

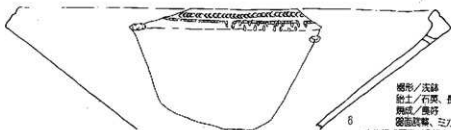
第41図 第11号住居址出土土器



第42圖 展開圖



器形/深鉢  
胎土/灰石、石英  
焼成/良好  
器面装飾/ナデ  
文様構成要素/泓線、種形、駒突



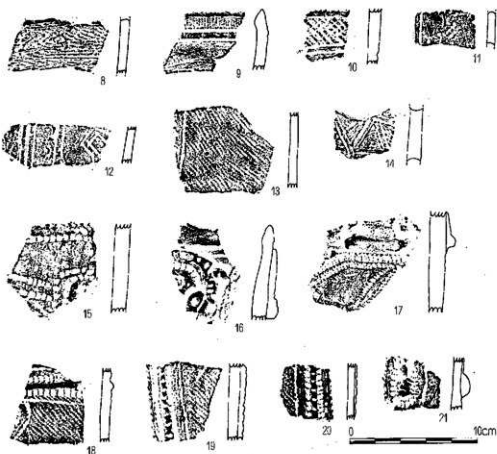
器形/浅鉢  
胎土/石灰、長石  
焼成/良好  
器面装飾/ミガキ/ナデ  
文様構成要素/角押文、駒突、押引文



器形/浅鉢  
胎土/灰石、雲母  
焼成/良好  
器面装飾/ミガキ  
文様構成要素/押引文

0 10cm

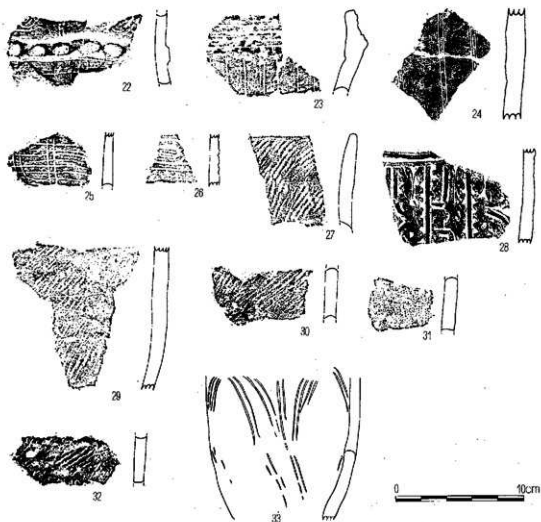
第43図 第11号住居址出土土器(2)



第44図 第11号住居址出土土器(3)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調査 外壁/内面	胎土	備考
8	11号住	楕鉢	胴部	横文、角張	ナゲ/ミガキ	砂粘、長石	踏破片式
9	×	×	口縁	波線、亀帯	ナゲ	砂粘	
10	×	×	胴部	波線	×	砂粘、石英	
11	×	×	×	波線、横文	×	砂粘	
12	×	×	×	波線、横文	×	×	
13	×	×	×	波線	×	砂粘、石英	内面スス付着
14	×	×	×	波線	×	砂粘	
15	×	×	×	押引文	×	砂粘、磁石、石英	
16	×	×	口縁	亀帯、押引文	ナゲ/ミガキ	砂粘、磁石、長石	
17	×	×	胴部	押引文	ナゲ	砂粘、長石、雲母	
18	×	×	×	亀帯、押引文、内押文、横文	ナゲ/ミガキ	砂粘、長石、石灰	内面スス付着
19	×	×	×	亀帯、押引文、横文	ナゲ	砂粘、長石	×
20	×	×	×	×	×	×	×
21	×	×	×	押引、キョウヒツ文、角押文	×	砂粘	×



第45图 第11号住居址出土土器(4)

土器觀察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整 外底/内面	地土	備考
22	11号住	钵状	胴部	縦帯、丸線	ナテ	砂粒	
23	"	"	口縁	"	ナテ/ミガキ	砂粒、石英	
24	"	"	胴部	沈線	ナテ	砂粒	
25	"	"	"	"	"	砂粒、石英、雲母	
26	"	"	"	"	"	砂粒、石英	
27	"	"	"	縦文	"	砂粒	
28	"	"	"	斜文、沈線、縦文	"	砂粒	
29	"	"	"	縦文	"	砂粒、石英	
30	"	"	"	"	"	"	
31	"	"	"	"	"	砂粒、石英	
32	"	"	"	"	"	砂粒、石英	
33	"	"	胴下部	沈線	ミガキ	砂粒、雲母	

地文にし、沈線が施され、結節縄文も見られる。14は、半截竹管による沈線が施文されている。

15～21は、押引文を特徴とする土器で、第VI群1類に分類される。15は、押引文のみが施され、16、21は刻目のある隆帯の両側に押引文が施された口縁部片である。粘土の貼付をもち押引文が曲線的に横位と斜位に施されている胴部片である。18～20は、縄文を地文とし、隆帯の両側に押引文がなされ、これらに沿って連続刺突文が直線的に施文されている。

22～26は、いわゆる平出二類A系の上器である。22は、指頭状圧痕のある隆帯が施され、23は口縁部片で、細い沈線が横位にあり、その下部は刻目のある微隆起が施され、そこから沈線が垂下している。5と同一個体と思われる。24は、23と同一個体で、縦位に間隔を置いて沈線が施文されている。25、26は、横位沈線に半弧状の沈線が施されている。

27、29～32は、無節の縄文が全面に施されている。27は、その傾きから、第VI群2類に分類される。28は、縄文を地文にした刺突文と沈線が特徴的である。33は、底部付近であり、2本の細い沈線を一束にして自由に施文されている。

(三村 洋)

#### (10) 第12号住居址 (第39図)

56は覆土上層より、図示した小形土器が1点出土している。器高3.2cm、口径5.4cmをはかる、小形の尖底土器である。LR単節縄文を器面のほぼ全面に回転施文している。茶褐色を呈し、胎土に砂粒、長石、金雲母を多く含む。一部に輪横痕をとどめ、偽似口縁を形成している。

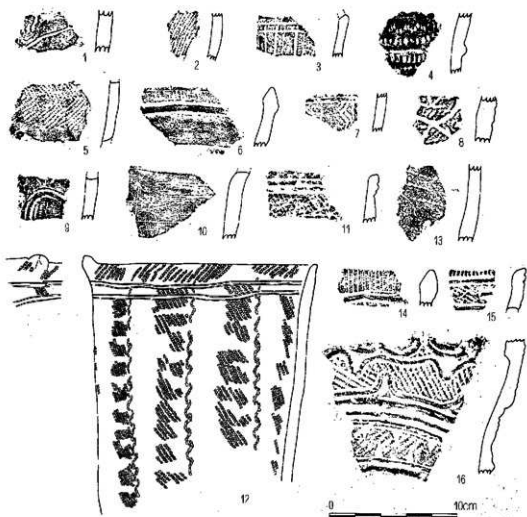
(台瀬忠幸)

#### (11) 小壜穴 (第46～48図)

第1号小壜穴では、縄文と沈線を配した1、第2号小壜穴では、新縄文の2が出土した。第3号小壜穴は、横位と縦位の沈線を配した口縁下部の土器片の3が出土し、これは、いわゆる平出3類A系土器である。4は隆帯際に押引文を配し、また波状に連続刺突文を施文している。第13号小壜穴では、羽状に施した縄文のある5が出土した。第16号小壜穴では口縁に縦位の細い沈線を施し、沈線で隆帯を表現した6、7～9は、縄文を地文に沈線を施文している。10は、細い沈線を格子目状に施し、11は口縁部片で沈線を斜格子目状に配している。12は、底面にはほぼ接して、つぶれた状態で出土した。口径17cm、器高19.7cmで円筒形に近く、わずかに開いている。口縁に一ヶ所突起が付き、頭部に2本半截竹管による沈線が施文されている。口縁には、全面的に施文が施され、胴部は縦位の結節縄文が9本施され、その間に斜縄文が配されている。

第17号小壜穴では、粗な縄文を施した13、口縁部に縦位の沈線、その下に横位の沈線のある14が出土した。14号小壜穴では、口縁に瓜形文、斜格子目の沈線のある15、斜格子目状の沈線、縄文を地文にして交互刺突文、それらの間に隆帯が施されている16が出土した。

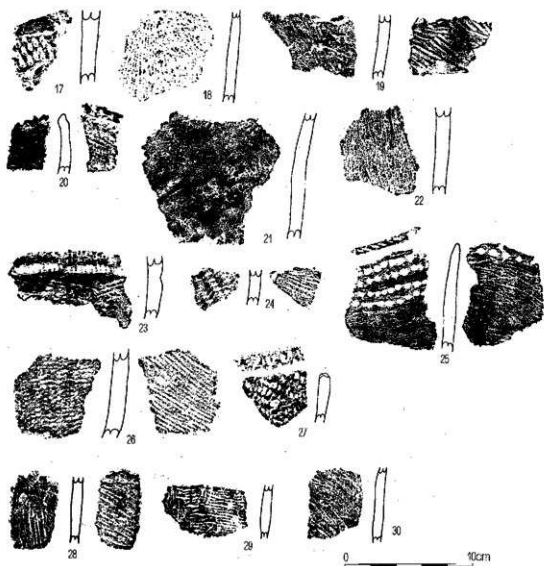
17～27は第20号小壜穴より出土している。17は太い沈線による幾何学的な区画文の内に、竹管状工具によって斜方向からの刺突文を充填している。18～22は条痕文ないし擦痕文のみをとどめるものである。23・24は絡条体圧痕文が施されるものであり、23は横位へ24は斜位に施文されている。25は編年の位置を明確にしえないが、波状をなす口縁上部に外面4条・内面1条の棒状工



第46図 小壺穴出上器(I)

土器観察表

番号	発掘区	部位	形状	文様構成要素	器蓋調整 外周/内周	胎土	備考
1	1S	胴部	胴部	沈線、刷文	ナテ	チャート、燧状岩	
2	2S	口	口	刷文	×	長石	
3	3S	口	口	山形7部	×	×	内面スズ付電
4	×	口	口	隆帯、斜引文、斜刷文	×	×	
5	13S	口	口	刷文	×	雲母、長石	
6	16S	口	口	白雫	×	長石	
7	×	口	口	沈線・刷文	×	×	
8	×	口	口	×	×	×	
9	×	口	口	×	×	雲母	
10	×	口	口	沈線	×	長石	
11	×	口	口	白雫	×	×	
12	×	口	口	刷文、沈線	×	×	
13	17S	口	口	刷文 (L状)	×	×	
14	×	口	口	沈線	×	×	
15	19S	口	口	沈線、斜引文	×	雲母	
16	×	口	口	沈線、隆帯、刷文、 二又と(9)、交互刷文	×	雲母	

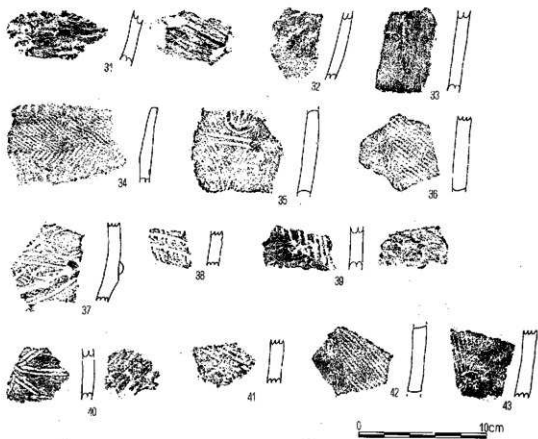


第47図 小竅穴出土土器(2)

土器観察表

番号	発掘区	器型	部位	文様構成要素		胎土	備考
				文様種類	外面/内面		
17	20S	底鉢	胴	太丸線・斜交	ナテ	砂・金・せんい(少)	
18	"	"	"	魚鱗	魚鱗	砂・白・せんい	
19	"	"	"	"	ナテ/魚鱗	砂・せんい(やや多)	
20	"	"	"	斜目	"	"	
21	"	"	"	"	ナテ	砂・白・せんい(多)	
22	"	"	"	"	魚鱗/ナテ	砂・金・せんい(僅)	
23	"	"	"	斜条作円紋	"	砂・白・せんい(多)	
24	"	"	"	"	網眼	"	
25	"	"	口縁	斜交	/魚鱗	砂・せんい(やや多)	
26	"	"	胴	横文	魚鱗	砂・白・せんい	
27	"	"	口縁	"	"	砂・白・せんい(少)	
28	24S	"	"	"	魚鱗/ナテ	砂・白・せんい	
29	"	"	"	"	網眼/ナテ	砂・白・せんい	
30	"	"	"	"	"	砂・石・せんい	





第48図 小竪穴出土土器(3)

土器観察表

番号	発掘区	形状	部位	文様構成要素	表面調整 外面/内面	土	備考
31	245	片持	胴		ナテ/角張	影・白・せんい	
32	"	"	"		ナテ	影・せんい	
33	"	"	"		"	影・白(多)・せんい	せんい
34	"	"	"	縦文・斜向	/ナテ	"	
35	"	"	胴 口	比呂、縦文	ナテ	黒色	
36	"	"	"	地脚縦文	"	"	
37	"	"	口縁部	横文、斜向、比呂	"	"	内面スス付着
38	"	"	胴 口	"	"	"	
39	275	"	"	"	"	"	
40	285	"	"	"	ナテ	黒石	
41	305	"	"	横文	"	"	内面スス付着
42	325	"	"	"	"	"	
43	"	"	"	"	"	"	

具による刺突文をめぐらしている。26は燃糸文、27は縄文がそれぞれ施されている。

28～38は第24号小竪穴出土土器である。28～31は条痕文をとどめる胴部破片、32・33は無文の胴部破片である。34はLR単節縄文により羽状縄文が施され、口縁上部および羽状縄文下端部にへら状工具による刺突文をめぐらしている。胎土に砂粒・長石・金雲母、さらに多量の植物繊維を含み、茶褐色を呈する。35～38は、縄文中期土器である。35は、縄文を地文に半軟竹管による、2条の沈線が施文され、36は結節縄文と斜縄文がなされている。37は縄文を地文に微隆起や沈線が施文され、38は、縄文を地文に沈線に沿って刺突文が施文されている。

細沈線による区画文の内に太沈線が充填される39は第27号小竪穴、2本1匝の沈線文によって曲線の文様が描かれる40は第29号小竪穴、さらに、条痕文のみをとどめる41は第30号小竪穴より、それぞれ出上している。

縄文時代早期の遺物は、17～38で、その他は縄文中期初頭～前葉(九兵衛尾根Ⅰ式期～新道期)に相当する。

(三村 洋)

## (12) 縄文時代遺構外出土土器 (第49～71図)

今回発掘調査された堂の前遺跡からは、縄文時代草創期～晩期にいたる縄文時代各期の土器片がまとまって出土した。その多くは、住居址群が集中して検出された発掘区東半部において、遺構外を中心として発見されたものである。上述したように、発見された土器群は縄文時代の中でも、ほぼその全時期に相当するという長い時間幅を有するものであったが、発掘区西半部を中心として検出された中世遺構群に象徴されるごとく、後世の攪乱により、各時期の土器群のあり方に分布的偏在性、層位的相異などを見出すことはほとんどできなかった。もちろん、遺跡地における発掘区域設定上の問題も指摘されるところであり、とりわけ、未調査区域として残された発掘区の南側にのびる緩斜面については、なお多くの課題を残したと言えよう。

以下、発見された土器群について、各々の土器がもつ様々な属性の中でも、特に文様構成ならびに胎土、調整に主眼をおいて分類を試みた。なお、今回同時報告されることとなった福沢遺跡、さらに、青木沢遺跡各々の出土土器についても、本遺跡出土土器の分類基準をできる限り踏襲するよう努力し、各遺跡の性格の比較および時空的關係性の分析を可能にするよう努めた。ここでは、分類された各土器群の概観・具体的な説明を行うものとし、以下、分類項目ごとに具体例を示しながら詳述する。

### 第Ⅰ群土器 (第49図1～3)

縄文時代草創期の土器とされるものである。出土総数は6片ときわめて少ない。発掘区域の西半、中世遺構群によって攪乱された地区を中心とする。第12号住居址およびA～C-10・11グリットにやや集中して検出された。

1～3はすべて胴部破片であり、表裏にRL単節縄文が施されている。2は表裏ともに密に施文されるものの、1・3は裏面にはまばらに施文されるのみである。色調は外面茶褐色、内面黒褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・金雲母を含む。器厚8～10mmをはかり、焼成は比較的硬くしまる。

## 第II群土器（第49図4～第50図29）

縄文時代早期前半の上器である。3類に分類される。

### 第1類土器（第49図4～8）

撚糸文系土器である。出土総数は13片を数えるものの、その多くは微小細片によって占められている。A・B 4・5グリットにややまとまった分布が認められた。

4は表裏に撚糸文が施される口縁部破片。外面斜位、内面は口縁上部のみに横位に施文されており、施文は口唇部にも及ぶ。撚糸文は原体R。5は原体Rの撚糸文、6は原体Lの撚糸文がそれぞれ横位に施文される。7・8は縄文が施される胴部破片である。ともに原体RL単節縄文がややまばらに施されている。胎土に砂粒・石英・長石・金雲母を含むものが多く、焼成は総じて良好とはいえない。器厚は6～8mmをはかり、やや厚手のものが多い。

### 第2類土器（第49図9～22）

押型文系土器である。出土総数は28片を数え、A～Eの5種に細分される。それぞれの内訳はA種（山形文）20片、B種（楕円文）2片、C種（格子目文）3片、D種（異形押型文）1片、E種（沈線文）2片であり、山形押型文がまとまって出土していることが注意される。

A種（9～15）山形押型文が施されるものである。

9は平縁の口縁部破片である。やや外反して開く口縁上部から山形押型文が施されるものであり、10・12～14は縦位密接施文、11・15は斜位帯状施文されている。9・15は胎土に砂粒・石英・金雲母などを含み全体にザラザラするものの、他は内面を中心にていねいな器面調整が行われ、焼成も比較的堅緻である。器厚は5～8mmをはかり、概して薄手のつくりである。

B種（16・17）楕円押型文が施されるものである。

図示した2片がすべてである。ともにC-6グリットから出土している。掘りの深い豆粒状の楕円押型文が横位に施文され、17は1cm程の間隔をあけて施文している。くすんだ褐色・灰茶褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・白色不透明粒子を含む。器面調整はともにていねいに行なわれ、とりわけ内面は平滑に仕上げられている。器厚は8mm。焼成は良好である。

C種（18・19）格子目押型文が施されるものである。

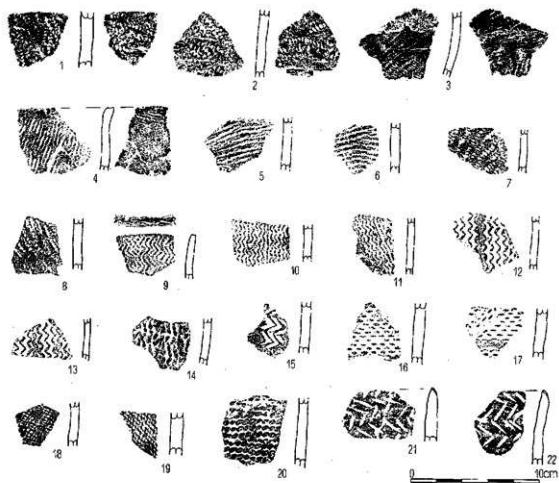
図示した2片はともにC-10グリットから出土している。18は縦位、19は斜位に施文されており、色調は暗褐色・暗茶褐色を呈する。胎土に砂粒・石英・金雲母を含むほか、18には黒曜石の混入が認められる。

D種（20）異形の押型文が施されるものである。

20は1片のみの出土であり、山形押型文と楕円押型文との折衷的な押型文が施文されている。A-2グリットからの出土であり、色調は明茶褐色を呈する。器厚は8mmとやや厚手であり、焼成は比較的良好である。

E種（21・22）沈線によって押型文と同等の文様が施されるものである。

21・22はともに平縁の口縁部破片であり、太い短沈線文により山形押型文に近似する文様が描かれている。色調は茶褐色。胎土に砂粒・金雲母・黒雲母のほか、微量の植物繊維を含んでいる。器厚は8～9mmとやや厚手のつくりであり、焼成はおおむねふつうである。



第49图 濠沟外出土土器(1)

土器观察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器質調査 外皿/内面	胎土	備考
1	C-6	深鉢	底	R.L.単線文	十字	砂・灰	
2	A-11	×	×	×	×	×	
3	C-30	×	×	×	×	砂・石・金	
4	C-30	×	口縁	R.L.単線文	×	砂・石	
5	H-4	×	底	×	×	砂・灰・金	
6	A-4	×	×	L.器底文	×	砂・灰・金・黒	
7	A-5	×	×	R.L.単線文	×	砂・石	
8	1H	×	×	×	×	砂・石・金	
9	A-3	×	口縁	山形押型文	×	×	
10	R-II	×	底	×	×	砂	
11	C-7	×	×	×	×	砂・石	
12	2H	×	×	×	×	砂	
13	11H	×	×	×	×	砂・石	
14	土師	×	×	×	×	砂	
15	A-4	×	×	×	×	砂・石・灰・長・黒	
16	C-6	×	×	松門押型文	×	砂・石・白	
17	C-6	×	×	×	×	砂・白	
18	C-30	×	×	格子目押型文	×	砂・石・金・黒	
19	C-30	×	×	×	×	砂・石・金	
20	A-2	×	×	異形押型文	×	砂・石・金・黒	
21	?	×	口縁	沈線文	×	砂・金・黒・せいでい	
22	?	×	×	×	×	×	

### 第3類土器 (第50図23~29)

沈線文系の土器である。出土総数は図示した7片がすべてである。発掘区域の東半に相当するA-1~4グリットから出土している。沈線文のみによって文様が構成されるもの(23・24)、沈線文と刺突文が併用されるもの(25~29)との二者に大別される。

23は細沈線によって格子目状の文様される底部付近の破片。底部はいわゆる「天狗底」状をなすものと考えられる。器厚7mm。外面明褐色、内面暗褐色を呈し、胎土に砂粒・石英などを含む。全体にいいいな器面調整が加えられており、とりわけ外面は研磨されて平滑である。25は横位に施された多条の沈線間に列点状の刺突文が施された胴部破片。26~29は歯状工具による多条の沈線文とヘラ状工具による刺突文が合わせて用いられるものであり、26は直線状、27~29は曲線的な文様が構成される。茶褐色ないし暗茶褐色を呈するものが多く、器厚は7~8mmをはかる。焼成はおおむねふつう。

### 第III群土器 (第50図30~第68図328)

縄文時代早期後半~末葉の土器である。主として文様により、14類に分類し、さらに必要に応じて細分を試みた。

#### 第1類土器

主として列点状の刺突文により文様が描かれるものである。

30・31はともに口縁上部がわずかに外反する口縁部破片。30は口縁上部に、半截竹管による刺突文を弧状に2条めぐらしている。胎土に砂粒・石英・黒雲母、さらに植物繊維を微量含むものの、全体に硬いつくりである。31は口縁上部に鋭い細沈線を斜位に施し、その下に半截竹管による刺突文をめぐらしている。器厚は8mmをはかり、30同様全体に硬くしまる。

#### 第2類土器 (第50図32・33)

細隆起線文によって文様が構成されるものである。図示した2片がすべてである。

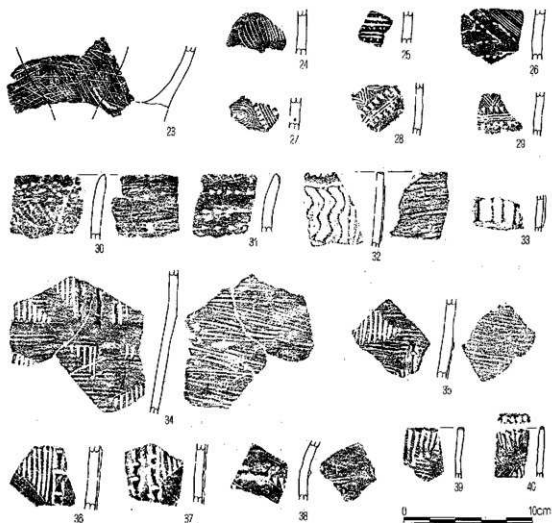
32は内湾ぎみに立つ口縁部破片であり、細隆起線文による横位・縦位区画の内に、同様の細隆起線文を蛇行して垂下させている。口唇部には棒状工具による押圧によって刻目を施し、裏面には横方向の条痕文をとどめている。胎土には砂粒のほか、植物繊維を微量含む。

#### 第3類土器 (第50図34~第53図85)

沈線文や細隆起線文などにより、幾何学的な文様が施されるものである。A・B-1~4グリットにかけてまとまった分布を示し、第III群土器の中でも中心的な位置を占めている。主として文様・文様構成により、A~D種に細分した。

A種(第50図34~第51図54) 細沈線による幾何学的な区画文の内に、太沈線や結節沈線が充填されるものである。

A-a種 区画文の内に太沈線が充填されるもの(34~52)。文様が直線的なもの(34~49)と曲線的なもの(50~52)との二者が存在する。34は「段」を有する大形の胴部破片であり、直立する「段」上部には細隆起線文による3条の縦位区画文がみられる。表裏両面には横方向を中心とする条痕文を明瞭にとどめており、器厚6mmと比較的薄手のつくりである。35~38は同様の細隆起線文による区画文が施される胴部破片。38はくびれ部に横位に施されている。39・40・42は口



第50図 遺構外出土土器(2)

土器観察表

番号	発見区	器形	部位	文様構成要素	断面図 外壁/内面	胎土	備考
23	B-4	深鉢	底	横波線	1ガキ/ナテ	砂・石・白・黒	
24	A-1	鉢	側	〃	2ガキ/ナテ	砂・石・黒・白・横	
25	A-2	〃	〃	沈線・斜交	1ガキ/ナテ	砂・白・横	
26	A-4	〃	〃	〃	ナテ	砂・石	
27	A-3	〃	〃	〃	〃	砂・石・金・黒斑	
28	B	〃	〃	〃	〃	砂・石	
29	甕 祝	〃	〃	〃	〃	〃	
30	D-1	〃	口縁	高突	ナテ/黒皮	砂・石・玉・せみい(散)	
31	A-1	〃	〃	細沈線・斜交	ナテ	砂・金・せみい(散)	
32	土 埴	〃	〃	細波線	ナテ/黒皮	砂・せみい(散)	
33	B-4	〃	底	〃	ナテ	砂・石・金・せみい(散)	
34	A-4	〃	〃	斜交沈線・横波線・土沈線・斜交	赤灰	砂・白・せみい(散)	
35	B-4	〃	〃	〃	〃	〃	
36	A-1	〃	〃	横波線・横沈線・土沈線	ナテ	砂・石・金・せみい(散)	
37	A-1	〃	〃	〃	〃	砂・石・せみい(散)	
38	A-3	〃	〃	斜交沈線・横沈線・土沈線	赤灰	砂・石・金・せみい(散)	
39	C-3	〃	口縁	横波線・土沈線・斜交	ナテ	〃	
40	B-4	〃	口縁	横波線・土沈線・斜交	ナテ	砂・金・せみい(散)	

唇部に棒状工具による押圧が認められる口縁部破片であり、39は充填された太沈線の下端部が結節状を呈している。41・43は34同様の「段」を有する胴部破片である。ともに裏面に横位～斜位の条痕文をとどめ、41の段部は隆起線状に張り出している。49は沈線による縦位および斜位の区画文の要所に円形刺突文が加えられている。50～52は細沈線による区画文が曲線的に施されるものであり、充填される太沈線も曲線状をなしている。

A—b種 区画文の内に結節沈線が充填されるもの(53・54)。53は平線と考えられる口縁部破片である。口縁上部に巾広の隆起線がめぐり、口縁端部との間に若干の無文帯を形成している。隆起線下は細沈線による幾何学的区画文と連続刺突文に近い結節沈線による充填文とによって文様が構成される。表裏に条痕文をとどめ、胎上に砂粒のほか微量の植物繊維を含んでいる。54は本種に伴う胴部破片。

B種(第51図55～第52図71)太沈線による幾何学的な区画文の内に、同様の太沈線や結節沈線が充填されるものである。a・bの2種に細分される。

B・a種 区画文の内に太沈線が充填されるもの(55～70)。幾何学的な区画文が規則的なもの(55～61)。区画文の規則性がくずれ、充填文の粗雑化するもの(65～70)・さらに両者の中間的なもの(62～64)の三者が存在する。55・56は平線の口縁部破片であり、55は横位、56は縦位の細隆起線がそれぞれ施される。ともに、口唇部には棒状工具による押圧が加えられている。器厚7～8mmをはかり、器面に条痕文をとどめているものはきわめて少ない。

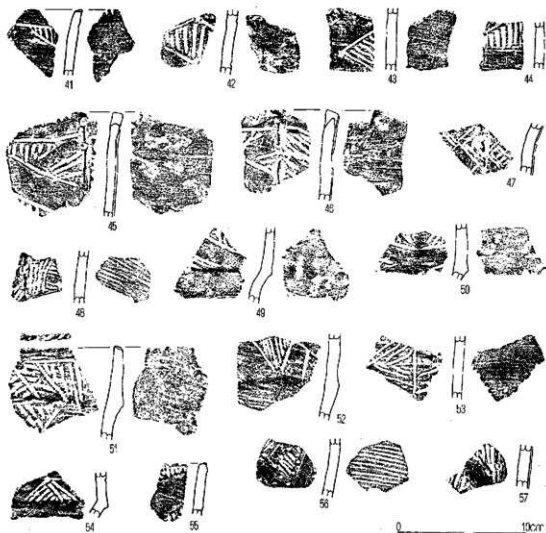
62～64は細隆起線による縦位区画文を中心として、幾何学的な文様が構成される。62・63は同一個体と考えられる口縁部破片であり、縦位区画文の上部は低い突起状をなしている。胎土に砂粒・石英・金雲母・植物繊維を含み、茶褐色ないし暗茶褐色を呈する。

65～70は幾何学的区画文の規則性がくずれ、それに伴い充填文も粗雑化するものである。65は細隆起線による縦位区画文のある胴部破片。66～69は「く」の字状をなす「段」部であり、68に端的にみられるように、胴部を起厚させることによって「段」を形成している。器面に条痕文をとどめるものが比較的多いものの、68の裏面にみられるごとく条痕文を磨消している例も若干認められる。器厚は8～9mmとやや厚手のものが多く、焼成はおおむねふつうである。

B—b種 区画文の内に結節沈線が充填されるもの(71)。図示した1列のほか、本種の存在は不明である。71は「段」をなす胴部破片であり、ほかに直立する上半部に三角形を基本とする幾何学的な文様が施される。区画文の交叉部には円形刺突文が加えられている。E—8グリットよりの出土であり、第3類土器のなかでは特異な分布を示している。

C種(第52図72～第53図76)細隆起線ないし微隆起線による幾何学的な区画文の内に太沈線や結節沈線が充填されるものである。

72は微隆起線による区画文が施される口縁部破片である。区画文の内には太沈線が充填され、口唇部外側には棒状工具による押圧が施される。色調は外面暗褐色、内面茶褐色を呈する。75は波状を呈する口縁部破片であり、細隆起線による縦位・斜位の区画文により文様が構成されている。器面は外面がナデ調整されているのに対し、内面には横方向の条痕文をとどめている。外面暗褐色、内面明褐色を呈し、胎土への植物繊維の混入はごくわずかである。73・76は区画文の要



第51図 遺構外出土土器(3)

土器観察表

番号	発掘区	形状	部位	文様構成要素	器型分類 外底/内面	胎土	備考
41	A 2	鉢形	胴	横波線・太波線・斜交	多角ノナア/尖短	砂・石・金・せんい(黄)	
42	A-4	*	口縁	横波線・太波線・斜交	ナア	砂・石・せんい(黄)	
43	表 鉢	*	胴	横波線・太波線・斜交	横波/尖短	砂・石・白・せんい(黄)	
44	A-2	*	*	横波線・太波線・斜交	横波	砂・金・せんい(黄)	
45	B 4	*	*	横波線・太波線	*	砂・石・金・せんい(黄)	
46	A-2	*	*	横波線・太波線	横波/ナア	砂・石・せんい(黄)	
47	A-2	*	*	横波線・太波線・斜交	ナア	砂・金・せんい(黄)	
48	B-2	*	*	*	*	砂・せんい(黄)	
49	A-2	*	*	横波線・太波線	横波/尖短	砂・金・白・せんい(黄)	
50	A-2	*	*	*	ナア/尖短	砂・金・せんい(黄)	
51	A-1	*	*	*	ナア/尖短	砂・石・せんい(黄)	
52	B-3	*	*	*	ナア	砂・石・せんい	
53	A-2	*	口縁	横波線・横波線・斜交波線	尖短	砂・せんい(黄)	
54	A-1	*	胴	*	ナア	砂・石・金・せんい(黄)	
55	D 6	*	口縁	横波線・太波線・斜交	多角ノナア	砂・金・せんい(黄)	
56	表 鉢	*	*	横波線・太波線	ナア	砂・黒・せんい	
57	II 鉢	*	胴	*	横波	砂・石・金・せんい(黄)	



所への円形刺突文を特徴とするものであり、区画文・充填文ともに他とはやや趣きを異にしている。76は裏面に条痕文をとどめ、「段」部よりやや内湾ぎみに立ち上がる。焼成はやや不良。

D種(第53図77~86)幾何学的な区画文の規則性がほとんどみられなくなり、区画文と充填文との区別が不明瞭となるもの。

77~82は口縁部破片である。すべて平縁のものと考えられる。77~80は口縁上部に一条の太い沈線文がめぐり、以下胴部には同様の太沈線によって縦位・斜位の文様が施される。沈線文は二条を単位として施されており、縦位および斜位の文様はそれぞれ第3類A~C種土器に見られた区画文に対応するものと考えられる。口唇部への施文はなく、やや「内割デ」状をなしている。暗褐色ないしくすんだ茶褐色を呈するものが多く、焼成は概して良好とはいいがたい。81・82は粗雑な沈線文が施される口縁部破片であり、82には口唇部に棒状工具による押圧が加えられている。83~86は本種に含まれる胴部破片。83・84はやや幾何学状の沈線文、86は縦位に垂下する多条の沈線文がそれぞれ施される。表面ないし裏面に条痕文をとどめるものが多く、器面調整はあまりていねいとはいえない。

#### 第4類土器(第53図87~第54図100)

多条の沈線文と刺突文によって、第3類土器の文様構成と類似した文様が描かれるものである。A-1~A-4グリットにかけてややまとまった分布を示し、第3類土器の分布との間にきわめて高い相関関係を有していたことが指摘される。

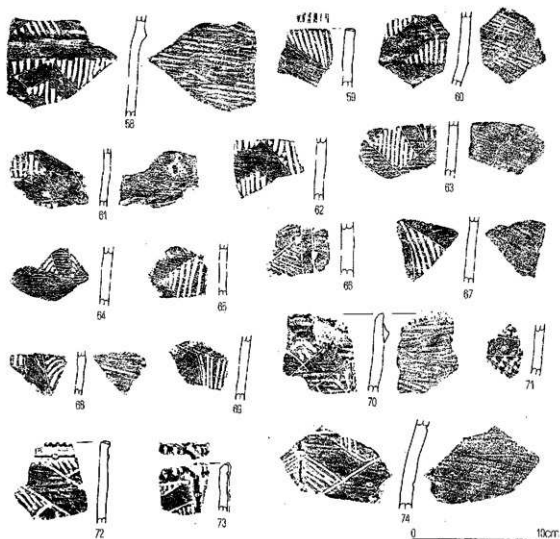
87・88波状を呈する口縁部破片であり、それぞれ波頂部より隆帯が垂下する。口唇部には棒状工具による押圧が施され、88は隆帯状にも同様の押圧が加えられる。明褐色および茶褐色を呈し、焼成はともにやや不良である。89~91は平縁の口縁部破片である。「束」ないし歯状の工具による多条の沈線によって斜行する文様が施され、沈線文に囲まれた無文部には短沈線文や刺突文が沈線に沿うように充填されている。胎土に砂粒・白色不透明粒のほかに植物繊維を微量含み、暗茶褐色、茶褐色を呈する。

92~96は同様の沈線文・刺突文によって、斜位ないし縦位構成の文様が描かれる胴部破片であり、92~94は直線的、95・96は曲線的な沈線文がそれぞれ施されている。97は縦位および斜位の沈線によって区画された無文部に、二連の刺突文を充填している。くすんだ褐色を呈し、器厚10mmと厚手のつくりである。99も二連の刺突文が施される口縁部破片であり、波状を呈する。沈線文が曲線的であることから、97とはやや趣きを異にしている。口唇部に棒状工具による押圧が加えられ、裏面には横方向の条痕文をとどめている。

#### 第5類土器(第54図101・102)

主として列点状の刺突文により、文様が描かれるものである。

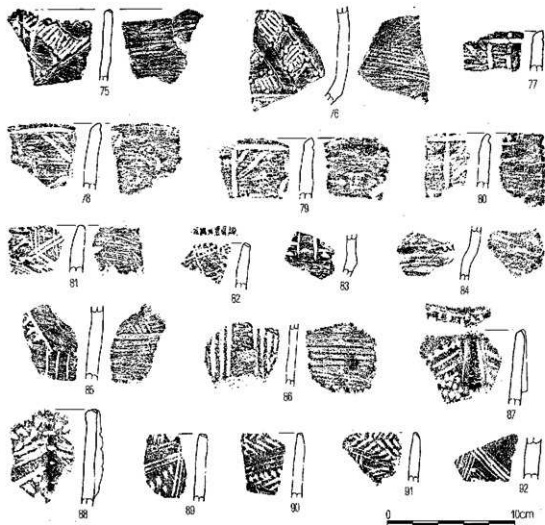
101は横位にやや波状をなして施された条痕文をはさむように、列点状の円形刺突文をめぐらすものである。外面はナデ調整が行われるものの、裏面には横方向の条痕文を明瞭にとどめている。色調は暗~茶褐色を呈し、焼成はあまり良好とはいいがたい。102は斜位に施された条痕文のうえに円形刺突文を連続させた口縁部破片。器厚15mmと厚手のつくりであり、内面にも斜方向の条痕文をとどめている。胎土に植物繊維を多く含み、全体に吸水性に富んで脆弱である。



第52図 蘆橋外出土土器(4)

土器観察表

番号	陶器区	群別	部位	文様構成要素	器型/器類	外径/内径	胎土	備考
58	R-4	群別	口縁	太沈線・衝突・黒目	壺		砂・金・せんい(微)	
59	B-4	*	底	太沈線・斜突	*		砂・石・金・せんい	
60	B-2	*	*	太沈線・斜突	*		砂・石・金・せんい(微)	
61	A-2	*	*	*	ナブ		砂・石・金・せんい	
62	11群	*	口縁	隆起線・太沈線	*		砂・石・金・せんい	
63	C-5	*	*	隆起線・太沈線	壺		砂・石・金・せんい(微)	
64	A-2	*	胴	隆起線・太沈線	ナブ		砂・石・白・せんい	
65	A-1	*	*	*	壺		砂・石・金・せんい(微)	
66	A-4	*	*	太沈線	*		砂・石・せんい	
67	B-2	*	*	太沈線	*		砂・金・白・せんい	
68	A-2	*	口縁	太沈線・隆起線	高底/高底一環脚		砂・石・せんい	
69	A-1	*	胴	太沈線・隆起線	高底/ナブ		砂・石・金・せんい	
70	A-4	*	*	太沈線	壺		砂・石・金・せんい(微)	
71	E-8	*	*	太沈線・隆起線	ナブ		*	
72	A-2	*	口縁	隆起線・太沈線	*		砂・白・せんい(微)	
73	C-3	*	*	黒目・太沈線	*		砂・石・金・せんい(微)	
74	A-B-1	*	胴	隆起線・太沈線	*		砂・金・せんい(微)	



第53図 遺構外出土器(5)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面状態	外面/内面	胎土	備考
75	A-1	钵体	口縁	縦線+横線+太沈線		十字/条状	砂・白・せんい(微)	
76	3H	?	胴	縦線+横線+太沈線		条状	砂・白・せんい	
77	A-1	?	口縁	太沈線		十字	砂・せんい(今中多)	
78	A-1	?	?	?		条状/横状	砂・白・せんい(今中多)	
79	A-1	?	?	?		?	砂・せんい(多)	
80	A-1	?	?	?		?	?	
81	A-2	?	?	?		条状	砂・石・せんい(少)	
82	B-4	?	?	沈線・割欠		十字	砂・せんい	
83	A-1	?	胴	水沈線・割欠(?)		十字	?	
84	A-2	?	?	沈線・割欠		条状	?	
85	2H	?	?	太沈線・斜欠		条状+十字/条状	砂・石・白・せんい	
86	横状	?	?	太沈線		横状/条状	砂・石・せんい	
87	B-4	?	口縁	横線・太沈線・割欠		十字	砂・白・せんい(微)	
88	条状	?	?	?		?	砂・石・白・せんい(微)	
89	A-2	?	?	多量沈線・斜欠		?	砂・石・白・せんい	
90	11H	?	?	?		?	砂・白・せんい(微)	
91	A-1	?	?	?		?	砂・白・内・せんい(微)	
92	A-2	?	胴	?		?	砂・石・せんい(微)	

#### 第6類土器 (第54図103・104)

いわゆる「なぞり」手法が特徴的に用いられるものである。出土総数は図示した2片がすべてであり、第III群土器に占める割合はきわめてわずかであるといえる。

103は波状を呈する口縁部破片であり、横位および斜位に「なぞり」を施したのちに条痕文を加えている。色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・金雲母・植物繊維の混入が認められる。器厚7mmをはかり、焼成はふつう。104はRL単節縄文を地文として、斜位ないし一部曲線的な「なぞり」が施されている。色調は青灰色。胎土に植物繊維と微量の砂粒を含み、全体として第13類土器に含めた292・293に類似した特徴を備えている。器厚6mmとやや薄手のつくりである。

#### 第7類土器 (第54図105～第56図130)

横位ないし山形状の連続刺突文を特徴とするものである。A 1～5グリットを中心とした分布が認められた。文様構成および連続刺突文の種類によって、A～Cに細分された。

A種 (第54図105～第55図108) 刻目状の縦位刺突文を横位に連続施文したものを。

105は本種の中ではやや異質なものであるが、半截竹管による押引文を縦位方向を中心として施している。106～108は連続刺突文を横方向に数条めぐらすもの。くすんだ褐色・明褐色などを呈し胎土に砂粒・植物繊維・白色不透明粒子を含む。106・108は胎土の付付けによって「段」部を形成しており、文様はその「段」部にも及んでいる。107・108は12～15mmと厚手のつくりであり、裏面に条痕文をとどめる。焼成はおおむねふつう。

B種 (第55図109～第56図126) 米粒状ないしそれに類する連続刺突文により、山形状を基本とする文様が構成されるものである。さらに2つに細分される。

B-a種 米粒状の小さな刺突文を連続させて、重層する山形状の文様を構成するもの(109～114)。109・110は口縁部破片。109は一部が凹状をなしている。ともに米粒状の連続刺突文によって山形状の文様が描かれるが、109は刺突放散施文後に刺突列に沿って「なぞり」が加えられ、110は刺突文施文前に「なぞり」が施されている。褐色および茶褐色を呈し、110は器厚10mmと厚手のつくりである。111～114は本種に伴う胴部破片であり、「段」をなすくびれ部には横位の連続刺突文が施される。器厚は平均約8mm。焼成はおおむねふつう。なお、第10号住居社より、縄文を地文とするものが1片のみ出土している(第38図・44)。

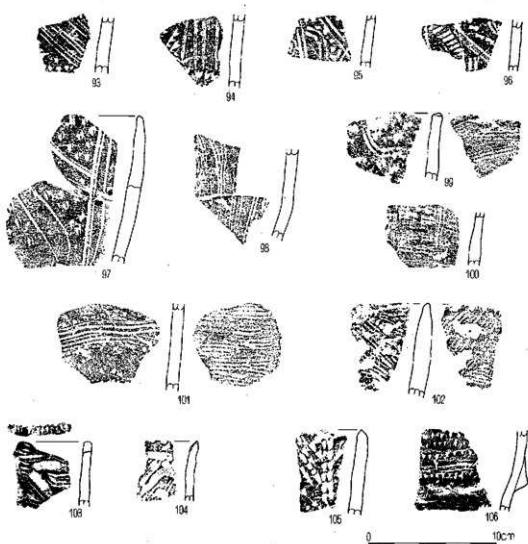
B-b種 やや大粒の連続刺突文が施されるもの(115～126)。すべて胴部破片によって占められている。文様はすべて横方向に施文され、a種のように山形状に施されるものは認められない。さらに、a種が「なぞり」を多く用いているのに対し、本種においては「なぞり」を伴うものはほとんど存在しない。くすんだ褐色ないし暗灰褐色を呈するものが多く、焼成はふつうである。

C種 (第56図127～130) 爪形に近い刺突文を縦位に連続施文するもの。

127～129は明褐色を呈す。胎土に砂粒・石英などのほか植物繊維をやや多く含んでいる。130は本種と同様な連続刺突文が施される把手の一部であり、本米は壺状をなすものと考えられる。明褐色を呈し、焼成はふつう。

#### 第8類土器 (第56図131～第59図171)

貝殻条痕文のみをとどめるものである。表裏両面に条痕文をとどめるもの(A種)、表にのみ条



第54図 遺構外出土土器(6)

土器観察表

番号	発掘区	発掘	部位	文様構成要素	器種・形状	外周/内面	胎土	備考
93	A-2	深鉢	胴	多色乱線・斜交	ナデ		赤・白・せんい	
94	C-6	〃	〃	〃	〃		赤・白・せんい(横)	
95	A-2	〃	〃	〃	〃		赤・白・せんい	
96	A-4	〃	〃	赤白乱線・斜交	〃		赤・白・せんい(横)	
97	A-2	〃	口縁	沈線・二溝角突	〃		赤・金・せんい	
98	〃	〃	口縁	沈線	〃		〃	
99	〃	〃	口縁	沈線・二道角突	ナデ/赤灰		〃	
100	A-4	〃	胴	沈線・斜交(伴射)	〃		赤・せんい	
101	〃	〃	〃	文様乱線・内斜角突	漆灰/赤灰		赤・金・せんい(やや多)	
102	C-7	〃	口縁	同心斜交	漆灰		赤・白・せんい(やや多)	
103	B-5	〃	〃	ナゾリ→漆灰	漆灰/ナデ		赤・白・せんい	
104	表段	〃	〃	短ノ・平筋陶文→ナゾリ	漆灰/赤灰→ナデ		赤(横)・せんい	
105	11H	〃	〃	市仏地陶文線	ナデ		赤・白・せんい	
106	C-S	〃	〃	沈線・斜交	ナデ		赤・白・せんい	

痕文をとどめるもの(B種)、裏面にのみ条痕文をとどめるもの(C種)の三者が存在する。本群に含まれる他の土器群と同様、A・B-1~4グリットにまとまった分布を示し、第III群土器の中では主体的な位置を占めている。

A種(第56図131~第58図157)表裏両面に条痕文をとどめているもの。

131~134は口縁部破片である。すべて平縁になるものと考えられ、134をのぞき口唇部に棒状工具による押圧が加えられている。131の外面には文様化された条痕文が残されているが、他は内外面ともに横方向を中心とした条痕文をとどめている。

135~157は本種に含まれる胴体破片。136は「段」を有す破片であり、くびれ部に刻目をめぐらしている。器面には条痕文をとどめるもの、外面はさらにナデ調整が加えられる。色調は明褐色。器厚10mmと厚手のつくりである。他は条痕文のみをとどめるものであるが、横方向に加えられもの、斜~縦方向に加えられもの、さらに一定の方向性をもたないものなどのバラエティが認められる。ただし、全体としては、外面横位、内面斜~縦位にそれぞれ加えられているものが多い傾向にある。色調は明茶褐色、くすんだ褐色などを呈し、焼成はおおむねふつう~やや不良である。器厚は平均8~9mmとやや厚手。胎土への植物繊維の混入が顕著である。

B種(第58図158~第59図166)表にのみ条痕文をとどめるもの。

158は口縁部破片、他は胴部破片である。158はやや「内削げ」状を呈する平縁の口縁部破片であり、外面の口縁上部を中心として横方向の条痕文が残されている。色調は茶褐色、胎土に砂粒・石英・長石・金雲母、さらに植物繊維を含む。残る胴部破片については、160が縦位、163が横位であるほかは、条痕文に一定の方向性は認めがたい。胎土に植物繊維を多く含む吸水性に富むものが主体をなすもの、163・164などのように植物繊維の混入が少なく、比較的硬くしまるものも若干量存在する。

C種(第59図167~171)裏面にのみ条痕文をとどめるものであり、表面は無文ないし擦痕文のみとなるもの。

167は口唇上部に一条の隆帯がめぐる平縁の口縁部破片であり、隆帯上および口唇部には棒状工具などによる押圧が加えられている。168~172は胴部破片。裏面に横方向を中心とする条痕文をとどめるほかは、無文となっている。くすんだ褐色・茶褐色を呈するものが多く、焼成は概して不良である。

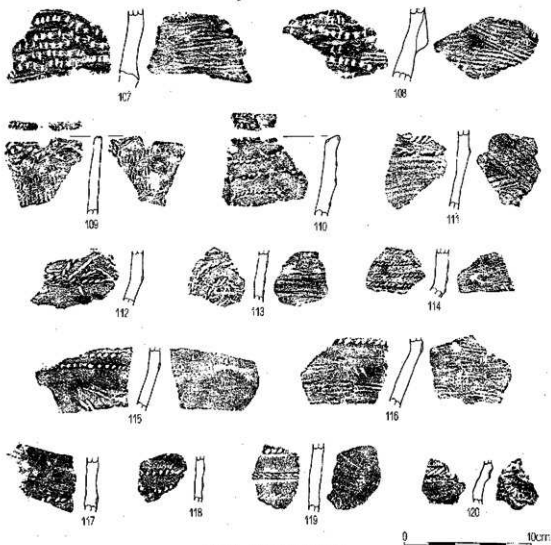
第9類土器(第59図172~第61図213)

無文ないし擦痕文のみをとどめるもの。胎土・焼成などにより、A~C種に細分を試みた。

A種(第59図172~第60図186)胎土に植物繊維をあまり含まず、焼成の比較的良好なものを一括した。

172・173は平縁の口縁部破片。173は裏面に器面調整時の擦痕文をとどめ、口唇部には棒状工具による押圧が加えられている。174~185は胴部、186は底部付近の破片である。くすんだ褐色・暗ないし灰褐色を呈するものが多く、174・177・179は全体に硬く焼きしまっている。器厚はおおむね9~10mmをはかる。

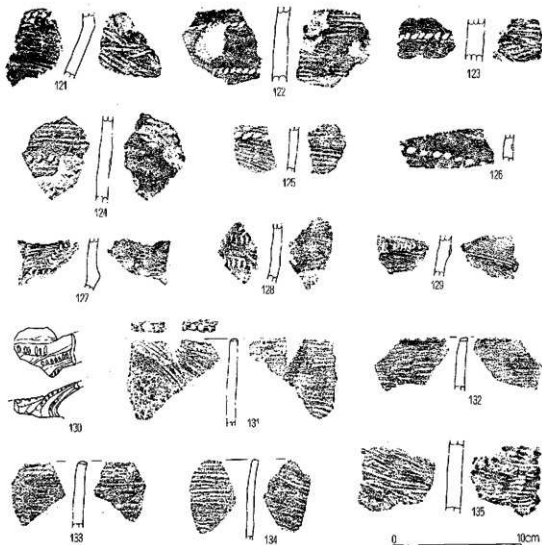
B種(第60図187~第61図205)胎土に植物繊維および金雲母を多く含む一群の土器を一括して本



第55図 濃橋外出土土器(7)

土器観察表

番号	発掘区	形状	部位	文様・顔装	器底状態	内面/外面	胎土	備考
107	A 2	深鉢	胴	網文	ナテ/赤灰		砂・せんい	
108	B-2	〃	〃	網文	〃		砂・白・せんい	
109	A-2	〃	11線	網文→ナゾリ	赤灰		砂・せんい(中々多)	
110	A-5	〃	〃	ナゾリ→刺突	ナテ		砂・せんい	
111	A-3	〃	胴	〃	赤灰		砂・白・せんい(中々多)	
112	A-2	〃	〃	ナテ→刺突	ナテ		砂・せんい	
113	A-2	〃	〃	ナゾリ→刺突	ナテ/赤灰		〃	
114	B-3	〃	〃	刺突	ナテ		砂・白・せんい	
115	A-1	〃	〃	〃	ナテ/赤灰		砂・せんい(微)	
116		〃	〃	〃	赤灰		砂・せんい	
117	11H	〃	〃	〃	ナテ		砂・白・せんい(中々多)	
118	11H	〃	〃	ナゾリ→刺突	〃		砂・白・せんい	
119	B-4-5	〃	〃	刺突	赤灰		砂・せんい(微)	
120	A 2	〃	〃	〃	赤灰/赤灰		砂・白・せんい	

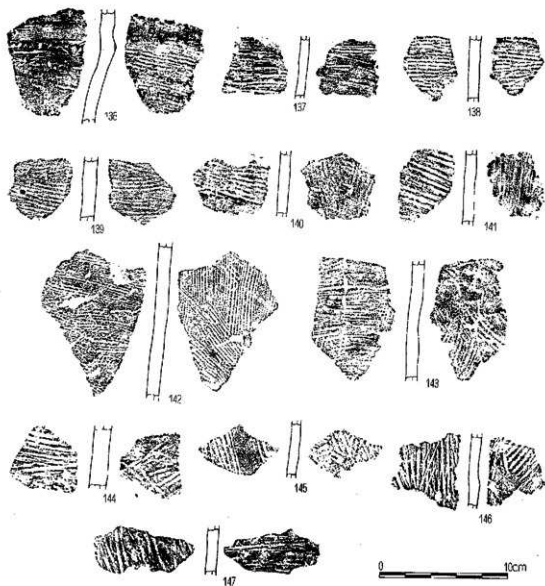


第56図 遺構外出土之跡(8)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整 外面/内面	胎土	備考
121	A-1	深鉢	胴	斜文	高低	砂・白・せんい	
122	B-5	?	?	?	ナデ/条痕	砂・白・せんい(やや多)	
123	A-1	?	?	?	ナデ/条痕	砂・白・せんい(やや多)	
124	A-5	?	?	?	条痕/横痕	砂・白・せんい(やや多)	
125	表 残	?	?	?	高低	砂・せんい	
126	B-3	?	?	?	ナデ	砂・白・せんい	
127	C-6	?	?	斜文(乱形?)	ナデ/横痕	砂・せんい(やや多)	
128	IIH	?	?	乱形斜文	?	砂・白・せんい(やや多)	
129	A-2	?	?	?	横痕	砂・せんい	
130	?	?	底平	縦線・斜文	?	?	
131	A-2	深鉢	口縁	文様条痕	ナデ/条痕	砂・白・せんい	
132	2H	?	?	斜目	条痕	砂・せんい(少)	
133	B-3	?	?	斜目	?	?	
134	A-1	?	?	?	?	砂・白・せんい(少)	
135	A-1	?	胴	?	?	砂・せんい	

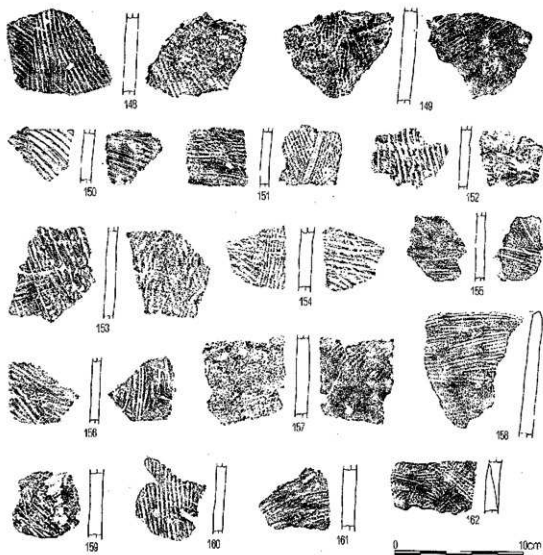




第57図 遺構外出土土器(9)

土器観察表

番号	発出区	形別	部位	文様構成要素	胎土観察 外面/内面	胎土	備考
136	A-2	厚鉢	胴	刻目	赤灰一ノ了/赤灰	砂・白・せんい	
137	B-2	〃	〃	〃	赤灰	砂・白・せんい	
138	A-2	〃	〃	〃	〃	砂・白・せんい	
139	B 4	〃	〃	〃	〃	砂・せんい(やや多)	
140	A-4	〃	〃	〃	〃	砂・白・せんい(やや多)	
141	A-3	〃	〃	〃	〃	砂・せんい	
142	SH	〃	〃	〃	〃	砂・白・せんい(やや多)	
143	C 7	〃	〃	〃	〃	〃	
144	A-1	〃	〃	〃	〃	砂・白・せんい	
145	B-5	〃	〃	〃	〃	砂・せんい(やや多)	
146	A-2	〃	〃	〃	〃	砂・せんい・白	
147	C 6	〃	〃	〃	〃	砂・せんい	



第58圖 遺構外出土土器00

土器觀察表

番号	種類記	形状	部位	文様構成要素	器底刻字	外面/内面	胎土	備考
148	A-2	楕円	胎			無刻	砂・白・せんい	
149	S H	×	×			無刻/ナテ	砂・白・せんい(中々多)	
150	A-1	×	×			無刻	砂・白・せんい(中々多)	
151	A-1	×	×			×	砂・白・せんい	
152	A-2	×	×			×	砂・白・せんい(多)	
153	H-3	×	×			×	砂・白・せんい	
154	A-2	×	×			×	砂・白・せんい(中々多)	
155	H-4	×	×			×	砂・白・せんい	
156	A-2	×	×			×	砂・白・せんい(中々多)	
157	C-7	×	×			×	砂・白・せんい(中々多)	
158	A-2	×	口縁			/ナテ	砂・白・赤・黄・せんい	
159	B-2	×	胴			無刻/	砂・白・せんい(中々多)	
160	F-9	×	×			無刻/	砂・せんい(少)	
161	A-2	×	×			無刻/ナテ	砂・白・せんい	
162	A-2	×	×			×	砂・白・せんい(中々多)	

種に含めた。

187～189は口縁部破片である。尖頭状もしくは円頭状を呈し、口縁上部がやや外反する。190～204は胴部、205は底部付近の破片である。器面はナデ調整が行われており、擦痕文をとどめるものはきわめて少ない。暗茶褐色ないし茶褐色を呈するものがほとんどであり、胎土に砂粒・石英などのほか、金雲母・植物繊維を多く含んでいる。190が18mmと著しく厚手のほかは、8～9mmと本類の中では平均的な器厚を示している。全体的に焼成は良好とはいいがたい。

C種（第61図206～213）胎土に植物繊維を多量に含み、焼成のあまり良好でないものを一括した。

206～210は口縁部破片、他は胴部破片である。206は口縁上部が大きく外傾して開く口縁部破片であり、ゆるやかな波状を呈する。207には口唇部に棒状工具による押圧が加えられている。210は尖頭状をなす口縁部破片であり、ゆるやかな波状を呈している。胎土に植物繊維の混入が顕著であり、全体として吸水性に富んでいる。焼成は不良。

#### 第10類上器（第62図214～第63図236）

絡条体圧痕文が施されるものである。A-1～A-4グリッドにかけての分布が確認されており、第III群土器の中でも比較的まとまったあり方を示していた。

214～219は口縁部破片。214は口縁上部に円孔がめぐらされたものであり、図示した1片がすべてである。円孔下には絡条体圧痕文が山形状に施されるほか、口唇部にも施文されている。くすんだ褐色を呈し、胎土への植物繊維の混入が顕著である。215・216も口唇部への施文が認められる口縁部破片であり、215は横方向、216は山形状にそれぞれ絡条体圧痕文が施されている。215は外面、216は表裏両面に条痕文をとどめている。218は隆帯が施されるものであり、隆帯によって区画された口縁上部には縦位、隆帯上には横位の絡条体圧痕文が施される。

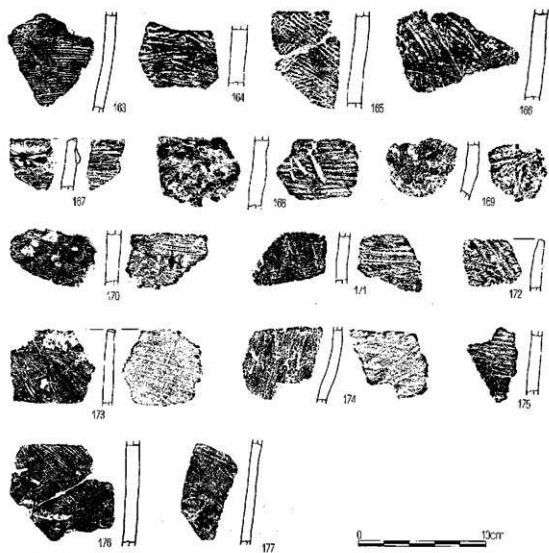
220～236は胴部破片である。220・221は隆帯をめぐらすものであり、裏面にも絡条体圧痕文がまばらに施されている。222・235は裏面にのみ絡条体圧痕文が施された胴部破片。230は上半部に絡条体圧痕文、下半部にRL単節縄文がそれぞれ施されている。絡条体圧痕文は下端部を横位に区画し、その上部へは山形状に施文されている。234は上半に絡条体圧痕文を、下半に斜方向の条痕文を配している。236は唯一底部付近の破片であり、ほぼ垂直に立ち上がる胴部から丸底状に底部へ移行している。器面の内・外には、同一の原体によると考えられる絡条体圧痕文と捺糸文が、乱雑に施されている。本類の多くは、くすんだ褐色を呈し、胎土に植物繊維を多く混入するものが主体をなしている。器厚は8～10mm前後をはかる。焼成は概して良好とはいいがたい。

#### 第11類土器（第63図237～第66図279）

器面に縄文が施されるものを一括した。文様および胎土などによりA～D種に細分したが、それぞれはさらに細分的に細分される余地を残している。A・B-1～4グリッドを中心とした分布を示していた。

A種（第63図237～第64図249）裏面に条痕文をとどめるものである。

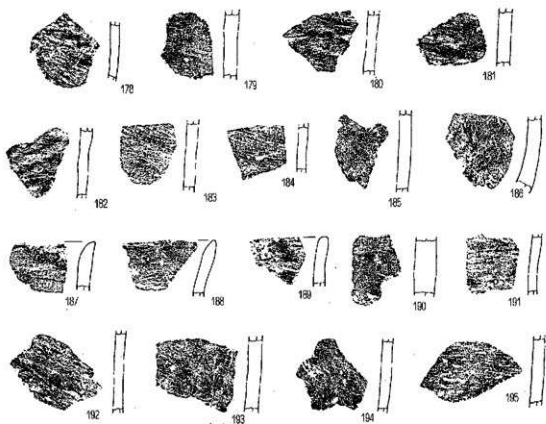
縄文のみ施されるものがほとんどであるが、沈線が加えられるもの（247）や結節縄文が施されるもの（248・249）もわずかながら存在する。縄文はまばらに施されるものが多く、また、裏面



第59图 遼陽外出土土器(1)

土器観察表

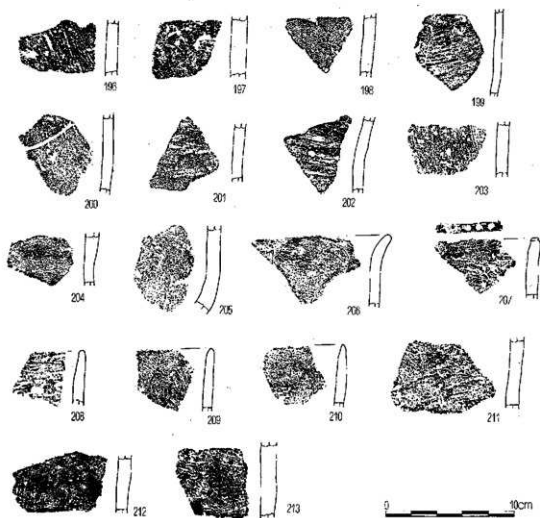
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整 外側/内面	胎土	備考
163	B	深鉢	胴		条状/十字	砂・金・せんい(少)	
164	A-2	〃	〃		〃	砂・石・黒・せんい(少)	
165	A-2	〃	〃		〃	小石・砂・せんい(中々多)	
166	A-2	〃	〃		〃	白・せんい	
167	浅鉢	〃	口縁	斜帯・斜目	十字/条状	砂・せんい(少)	
168	5口	〃	胴		〃	砂・せんい	
169	A-4	〃	〃		〃	〃	
170	表板	〃	〃		〃	砂・せんい(多)	
171	A-1	〃	〃		条状—十字/条状	砂・せんい(中々多)	
172	表板	〃	口縁		十字/斜帯	砂・白・せんい(少)	
173	浅鉢	〃	口縁	斜目	/斜帯	砂・せんい(少)	
174	B-4	〃	胴		横状	砂・白・せんい(微)	
175	B-1	〃	〃		条状/	砂・白・せんい	
176	C-6	〃	〃		〃	砂・せんい(中々多)	
177	A-2	〃	〃		十字	砂・石・せんい	



第60圖 遺構外出土土器02

土器觀察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	断面調整	外装/内面	胎土	通身
170	A-1	碗鉢	胴			ナブ	砂・せんい(少)	
179	B-5	×	×			×	×	
180	B-5	×	×			×	砂・せんい	
181	C 4	×	×			×	砂・内・せんい	
182	C-4	×	×			×	×	
183	C-2	×	×			×	砂・白・せんい(少)	
184	24S	×	×			撫板	砂・石・せんい	
185	C-6	×	×			ナブ	砂・せんい	
186	B 4	×	敷付足			×	砂・石・内・せんい	
187	D-6	×	口縁			×	砂・金(多)・せんい	
188	A-3	×	×			×	砂・石・金(多)・せんい	
189	土塚	×	×			×	砂・金(多)・せんい(やや多)	
190	B-2	×	胴			×	砂・石(多)・金(多)・せんい(やや多)	
191	B 4	×	×			撫板	砂・石・金(多)・せんい	
192	A-4	×	×			ナブ	砂・金(多)・せんい(多)	
193	B-4	×	×			×	×	
194	B-2	×	×			×	砂・石(多)・せんい	
195	A 1	×	×			×	砂・石・金(多)・せんい(多)	



第61図 遺構外出土器03

土器観察表

番号	発掘層	器形	部位	文様構成要素	器底状態 外観/内面	胎土	備考
196	B-2	埴輪	胴		横線/ナデ	砂・金(多)・せみ(少)	
197	A-3	×	×		ナデ	砂・金(多)・せみ(少)	
198	A-4	×	×		×	砂・金(多)・せみ(多)	
199	A-2	×	×		横線/ナデ	砂・金(多)・せみ(少)	
200	A-1	×	×		ナデ	砂・金(多)・せみ(少)	
201	C-2	×	×		×	砂・金(多)・せみ(中)	
202	B-4	×	×		横線/ナデ	砂・金(多)・せみ(少)	
203	R-3	×	×		×	砂・金(多)・せみ(中)	
204	A-3	×	×		ナデ	砂・金(多)・せみ(少)	
205	A-2	×	表付込		×	砂・金(多)・せみ(多)	
206	表探	×	口縁		×	砂・せみ	
207	C-3	×	×	横目	×	砂・金・せみ(多)	
208	B-1	×	×		×	砂・金・せみ(多)	
209	B-3	×	×		×	×	
210	4S	×	×	波線口縁	×	中砂・中金・せみ(中)	
211	C-3	×	胴		×	砂・金・黒・せみ(多)	
212	A-2	×	×		×	砂・金・せみ(多)	
213	B-6	×	×		×	×	

の条痕文も一定の方向性をもって施されているものはきわめて少ない。くすんだ褐色・茶褐色などを呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子・植物繊維を含む。植物繊維の混入は比較的顕著であるが、一定したあり方とはいえない。器厚は平均7~8mmをはかる。焼成はおおむねふつう。

B種(第64図250~第65図272)裏面に条痕文をとどめないものである。

250は結節縄文が施される口縁部破片であり、口唇部には準状工具による押圧が加えられている。254も同様な押圧が加えられる口縁部破片。縄文は原体RLの単節縄文の施されるものが大部分を占めているものの、無節縄文が施されるもの(251・253・264・266)も認められる。

263・264は撚りの粗い斜縄文が施される口縁部破片、272は唯一の底部破片である。272は丸底状を呈し、器面全体に原体RL単節縄文が施文されている。

C種(第65図273・274)付加条の縄文や羽状縄文が施されるもの。

273は付加条の縄文が施される胴部破片である。くすんだ褐色を呈し、表面には擦痕文をとどめている。胎土には砂粒・石英・植物繊維を含み、器厚10mmをはかる。焼成はふつう。

274は羽状縄文が施されるもの。LR単節縄文とRL単節縄文を横方向に回転施文している。暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒と微量の植物繊維を含んでいる。器厚11mmと厚手。

D種(第65図275~第66図280)胎土に植物繊維・金雲母を多く含むものであり、第9類B種土器との関連が考えられる一群の土器である。

図示したものはすべてRL単節縄文が施された胴部破片。茶褐色ないし暗茶褐色を呈し、胎土に多量の金雲母・植物繊維を含んでいる。276・277は比較的硬くしまるものの、他は脆弱である。器厚は平均8mmをはかり、やや厚手のつくりである。

第12類土器(第66図281~292)

器面に撚糸文が施されるものを一括した。第11類土器と同様横年的に細分される可能性を残すものの、ここでは、主として文様によって、A~C種に分類した。

A種(第66図281)表裏両面に撚糸文が施されるものである。

図示した1片がすべてである。281は粗雑な撚糸文が内・外面に施された原部破片。器厚7mm。くすんだ褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子・植物繊維を含む。外面には条痕文をとどめ、内面はナデ調整が加えられている。

B種(第66図281~286)裏面に条痕文をとどめるものである。

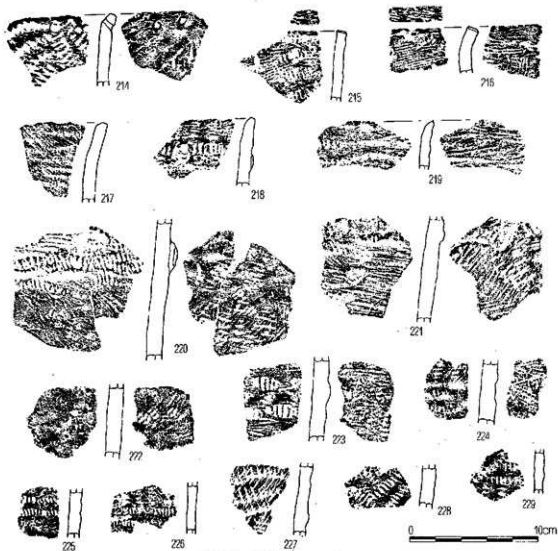
図示したものはすべて胴部破片である。外面に多方向からの撚糸文が施され、内面には横方向を中心とした条痕文をとどめている。器厚は平均8mmほどをはかる。胎土への植物繊維の混入は比較的少ない。

C種(第66図286~292)裏面が無文ないし擦痕文となるもの。

287・288は口縁部破片である。原体Rの撚糸文を斜方向に施文し、さらに口唇部へも施している。291は「くびれ」のある胴部破片。原体Rの撚糸文を縦位に施している。器厚7mm前後のものが多く、胎土は比較的硬くしまる。植物繊維の混入は微量にとどまる。

第13類土器(第67図293~299)

東海系と考えられる土器を一括した。

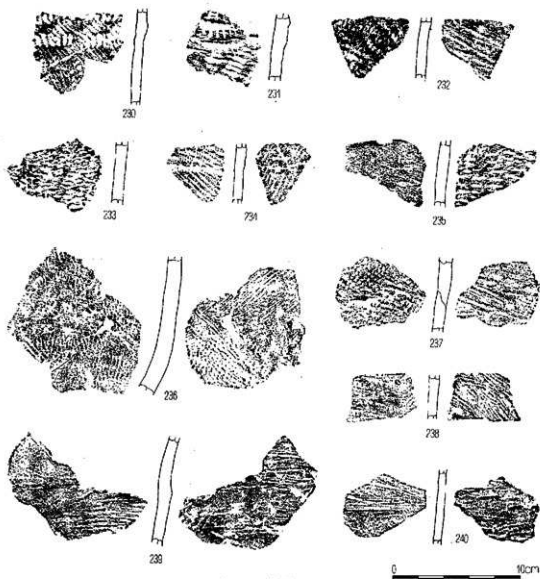


第62圖 遺構外出土器06

土器觀察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	様式調整 外底/内面	胎土	備考
214	A-1	深鉢	口縁	踏車状凹凸・円孔	ナテ	砂・白・せんい(多)	
215	B-4	〃	〃	踏車状凹凸	赤灰/	砂・白・せんい	
216	A-2	〃	〃	〃	赤灰	砂・白・せんい	
217	A-2	〃	〃	〃	ナテ	砂・白・せんい(多)	
218	A-2	〃	〃	〃	〃	〃	
219	A-3	〃	〃	〃	ナテ/赤灰	〃	
220	A-2	〃	〃	〃	赤灰/ナテ	〃	
221	A-2	〃	〃	〃	赤灰	〃	
222	A-4	〃	〃	踏車状凹凸	ナテ	砂・白・せんい	
223	2H	〃	〃	踏車状凹凸	赤灰	砂・白・せんい(多)	
224	B-4	〃	〃	踏車状凹凸	/赤灰	砂・白・せんい(多)	
225	A-1	〃	〃	〃	ナテ	〃	
226	11H	〃	〃	〃	〃	砂・白・せんい	
227	A-2	〃	〃	踏車状凹凸	赤灰/ナテ	砂・白・せんい(多)	
228	11H	〃	〃	踏車状凹凸	ナテ	砂・白・せんい	
229	C-6	〃	〃	〃	〃	砂・白・せんい(多)	

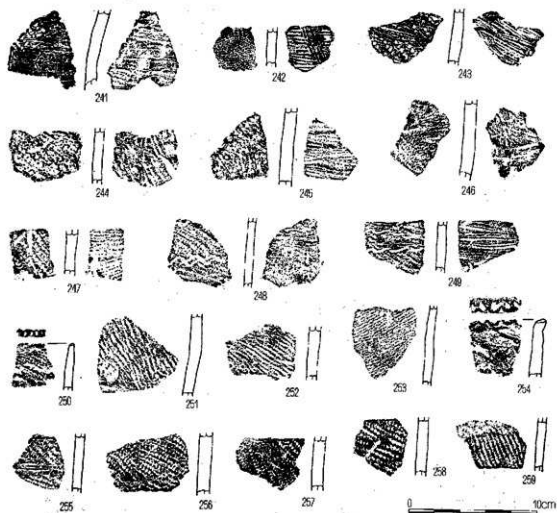




第63図 遺構外出土土器片

土器観察表

番号	発掘区	形状	部位	文様構成要素	器面調子 / 外面/内面	胎土	備考
230	A-3	片断	胴	斜条体压痕、上L半筋縄文	茶灰/十字	砂・白・せんい(多)	
231	A-2	片断	口	斜条体压痕、具段押引土灰	茶灰	砂・白・せんい(多)	
232	表段	片断	口	斜条体压痕	茶灰 / 灰泥	砂・白・せんい(多)	
233	A-2	片断	口	斜条体压痕	十字	砂・白・せんい	
234	A-1	片断	口	茶灰→斜条体压痕	茶灰 / 茶灰	砂・白・せんい	
235	A-1	片断	口	斜条体压痕(表裏)	十字	砂・白・せんい(多)	
236	B-4	片断	底付底	茶灰、斜条体压痕	茶灰	砂・白・せんい	
237	4S	片断	胴	L上半筋縄文	茶灰 / 灰泥	砂・せんい(やや多)	
238	D-4	片断	口	京(?)無筋縄文	粉灰/茶灰	小石・砂・せんい	
239	A-1	片断	口	京L半筋縄文	茶灰	砂・せんい(多)	
240	A-2	片断	口	茶灰	茶灰/粉灰	砂・白・せんい	



第64圖 遺構外出土土器06

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	図案図解 外底/内面	胎土	備考
241	H-1	鉢鉢	底	R.L.平線縄文	横線/点状	砂・せんい(多)	
242	A-2	〃	〃	〃	〃/点状	〃	
243	IIH	〃	〃	〃	横線/点状	砂・白・せんい	
244	A-2	〃	〃	R.L.(?)単距縄文	〃/点状	砂・白・せんい(多)	
245	A-2	〃	〃	縄文	〃/〃	砂・白・せんい(少)	
246	H-4	〃	〃	R.L.平線縄文+ナブ	〃/〃	砂・せんい	
247	A-3	〃	〃	R.L.平線縄文	〃	砂・白・せんい	
248	A-2	〃	〃	〃	比直	砂・白・せんい(藍)	
249	A-4	〃	〃	〃 (縮筋)	〃/〃	砂・白・せんい	
250	A-4	〃	口縁	〃	〃/ナブ	砂・白・せんい(やや多)	
251	A-1	〃	胴	R.L.平線縄文	〃/〃	砂・黄・せんい	
252	A-4	〃	〃	R.L.平線縄文	〃/〃	〃	
253	A-1	〃	〃	L.平線縄文	〃/〃	〃	
254	A-1	〃	口縁	R.L.平線縄文	〃/〃	〃	
255	表丘	〃	胴	縄文・条状	条状/ナブ	砂・せんい(藍)	
256	B-4	〃	〃	R.L.平線縄文	〃/ナブ	砂・石・黄・せんい(多)	
257	A-2	〃	〃	〃	〃/〃	砂・白・せんい(少)	
258	A-1	〃	〃	〃	〃/〃	砂・せんい(藍)	
259	A-3	〃	〃	〃	〃/〃	砂・白・せんい(少)	

293・294は表裏に条痕文をとどめるものであり、293は胴部、294は平底の底部破片である。白みをおびた灰褐色を呈し、治土への混和物は植物繊維以外ほとんどみられない。295は口縁上部に一条の隆帯がめぐらされるものであり、隆帯上および口唇部には押圧が加えられている。暗茶褐色を呈し、器厚6mmとやや薄手のつくりである。296は細い隆線の両側を「千鳥足」状に押圧した胴部破片であり、内・外面には擦痕文をとどめている。器厚5mmと薄手。焼成は良好である。297は指頭によると考えられる押圧が施された隆帯を口縁上部にめぐらすものであり、同様の隆帯を縦位にも垂下させている。植物繊維の混入は認められない。298・299は逆「B」字状をなす二連の押しきり状刺突を数条横位にめぐらすもの。明褐色およびくすんだ褐色を呈し、胎土に微量の植物繊維を含んでいる。焼成はおおむね良好である。

#### 第14類土器（第67図300～第68図329）

編年の位置づけに不明瞭な点を残すものを一括した。

A種（第67図300～305）沈線文によって、格子目状の文様が施されるものである。

細沈線によるもの（300～302）と、多条の沈線によるもの（303～305）とが認められる。

B種（第67・68図306～320）種々の沈線文によって、不規則な文様が描かれるものである。

細沈線により直線的・曲線的な文様が施されるもの（306～309）、細沈線と刺突文とが併用されるもの（310～312）、さらに、太沈線により横位ないし縦位の平行線文が施されるもの（313～316）や押し状ないし凹線状の沈線状が施されるもの（317・318）が存在する。

C種（第68図319・320）刺突文のみのものである。

D種（第68図321～329）縄文を地文として、沈線文や刺突文が施されるものである。

321は格子目状の沈線文、322は同心円状の沈線文がそれぞれ施される口縁部破片。324はLR単節縄文を地文として、巾広の浅い沈線文や貝殻腹縁による刺突文が施されている。325～329はRL単節縄文を地文として、種々の刺突文が施された胴部破片である。

#### 第IV群土器

縄文時代前期の土器である。第11号住居址より、前期後半、諸磯b式土器が1片出土している。

（百瀬忠幸）

#### 第V群 縄文中期初頭（第69図1～17）

第1類 九兵衛尾根I式に相当し、比較的古い要素をもつもの

A種 沈線、刺突文が施されているもの

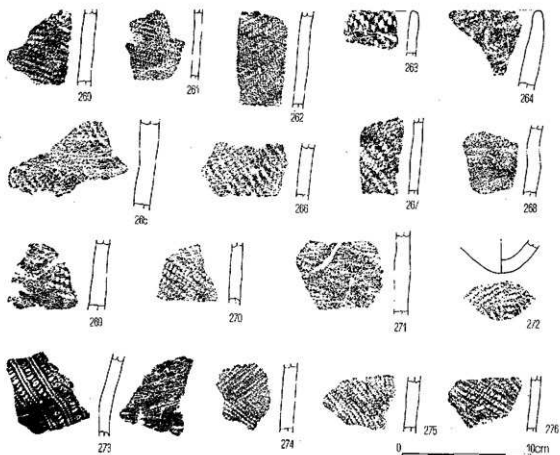
1だけが相当し、口縁部片である。口縁部に縦位の沈線、その下に半截竹管による連続刺突文が配されている。

B種 縄文を地文に沈線が施されているもの

2が相当し、縄文を地文に沈線による連続の菱形の区画文とその内部に横位の沈線が施されている。

C種 口縁部に縄文が横位に配され、その下部に幅広の無文帯があるもの

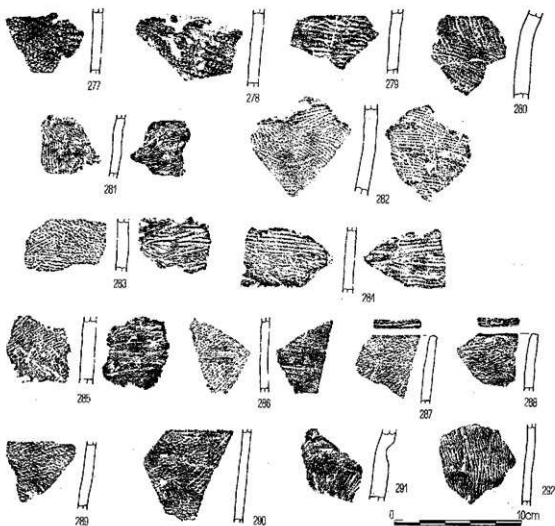
3～6が相当する。3は、口唇部に突起をもち、縄文直下に横位に沈線が走っている。4～6



第65図 滋構外出土土器の碎

土器観察表

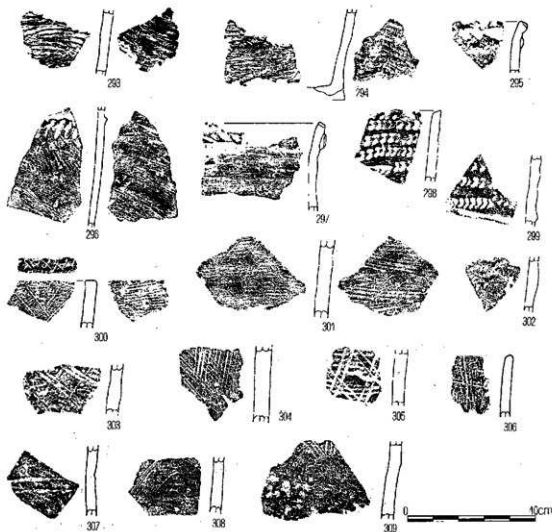
番号	輪郭区	器形	部位	文様構成等質	断面観察 外面/内面	胎土	備考
260	B-4	深鉢	口	R L 単厚縄文	ノナテ	砂・せんい	
261	A-3	〃	〃	〃	ノナテ	砂・石・せんい(多)	
262	D-4	〃	〃	〃	ノナテ	砂・白・せんい	
263	J S	〃	口縁	〃	ノナテ	砂・白・せんい(やや多)	
264	A-1	〃	〃	文様無縄文	ノナテ	砂・赤・せんい	
265	A-4	〃	口	R L 単厚縄文	ノナテ	砂・白・せんい(やや多)	
266	A-1	〃	〃	無縄文	ノナテ	砂・せんい(多)	
267	D-4	〃	〃	R L 単厚縄文	ノナテ	砂・せんい	
268	A 2	〃	〃	〃	ノナテ	砂・赤・内・せんい(やや多)	
269	B-5	〃	〃	〃	ノナテ	〃	
270	K H	〃	〃	〃	ノナテ	砂・白・せんい(少)	
271	A-1	〃	〃	〃	ノナテ	砂・せんい(多)	
272	浅鉢	〃	底縁	〃	ノナテ	砂・白・せんい(やや多)	
273	A-1	〃	口	付加赤縄文	ナテ/赤	砂・白・せんい	
274	A-5	〃	〃	L R・R L 単厚縄文	ノナテ	砂・せんい(多)	
275	C-4	〃	〃	R L 単厚縄文	ノナテ	砂・石・赤(多)・せんい(やや多)	
276	B 3	〃	〃	〃	ノナテ	砂・石・赤(多)・せんい	



第66区 遺構外出土器08

土器観察表

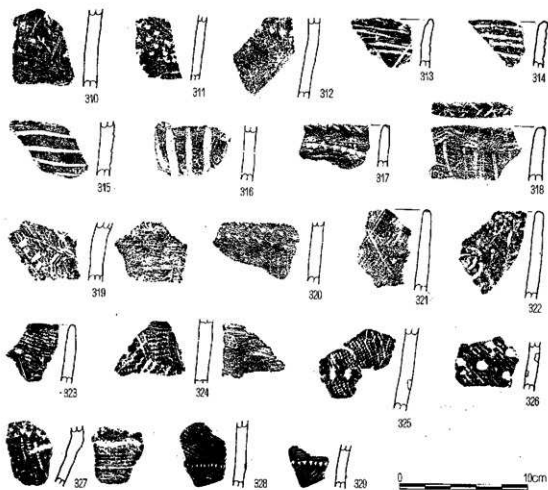
番号	検出区	器形	部位	文様構成要素	器面調整 外面/内面	胎土	備考
277	B-4	浅鉢	底	R.L.単周縄文	ノナテ	砂・白・金・せんい(中々多)	
278	55様	?	?	?	/	砂・金・せんい(多)	
279	A-1	?	?	?	/	砂・金・せんい	
280	4日	?	?	?	/	砂・白・せんい(少)	
281	11H	?	?	器面文(表裏)	高取/	砂・白・せんい(少)	
282	A-2	?	?	条線→散点文	条取	砂・せんい	
283	C-4	?	?	原状L器面文	/高取	砂・白・金・せんい(少)	
284	11H	?	?	高取→器面L器面文	条取	砂・せんい(少)	
285	A-1	?	?	器面文	/高取→ナテ	砂・せんい(多)	
286	14S	?	?	?	/高取	砂・せんい(少)	
287	A-4	?	口縁	原状散点文	/ナテ	砂・白・金・せんい(僅)	
288	B-4	?	?	?	/	?	
289	D-4	?	割	?	/	?	
290	A-4	?	?	原状L器面文	/	砂・白・金・せんい(少)	
291	A	?	?	原状散点文	/	砂・白・せんい(少)	
292	C-6	?	?	?	/	?	



第67図 遺構外出土土器09

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	外面/内面	胎土	備考
293	A-3	厚鉢	底			素紙	せんい	
294	I B	〃	底				石(器)・せんい	
295	A-3	〃	口縁	深帯・押圧		ナデ	砂・白・せんい(横)	
296	C 6	〃	底	傾斜線・刺突		細紙	砂・せんい(横)	
297	M-5	〃	口縁	隆帯		ナデ	砂・口	
298	B-0	〃	〃	二道の押引(道「口」字状)		〃	砂・せんい(横)	
299	H-1	〃	底	〃		〃	〃	
300	A-2	〃	口縁	傾沈線		ナデ/素紙	砂・石・せんい(器)	
301	B 1	〃	底	〃		素紙→ナデ/素紙	砂・白・せんい	
302	11H	〃	〃	格子目状沈線		ナデ	〃	
303	11H	〃	〃	〃		〃	〃	
304	A-2	〃	〃	多量の傾沈線		〃	砂・白・せんい(器)	
305	素鉢	〃	〃	太沈線		〃	砂・石・せんい(やや多)	
306	B 4	〃	〃	浅い沈線		〃	砂・白・白・せんい(横)	
307	A-0	〃	〃	傾沈線・太沈線		〃	砂・石・黒・せんい(横)	
308	H-0	〃	〃	浅い沈線		〃	砂・石・黄・せんい(横)	
309	A-1	〃	〃	〃		〃	砂・石・黄・白・せんい(少)	



第68図 濃樺外出土土器00

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器型調整	外底/内面	胎土	備考
310	B-2	胴体	腹	縦沈線	ナテ		砂・金・せんい	
311	胴体	口	刺突	縦沈線	ナテ		砂・金・せんい (腹)	
312	A-3	口縁	刺突	縦沈線・刺突	ナテ		砂・白・せんい	
313	4区	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい	
314	A-2	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい	
315	A-2	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・白・せんい	
316	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい	
317	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい (腹)	
318	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・白・せんい (ヤヤ多)	
319	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい (腹)	
320	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい (腹)	
321	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・白・せんい (ヤヤ多)	
322	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい (腹)	
323	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・白・せんい (ヤヤ多)	
324	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい (腹)	
325	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・白・せんい (ヤヤ多)	
326	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・金・せんい (腹)	
327	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・白・せんい (ヤヤ多)	
328	胴体	口縁	刺突	縦沈線	ナテ		砂・石・白・せんい (腹)	

は、口唇部に刻目をもち、4、6は縄文直下に刺突文、6は、沈線が配される。6は、波状口縁で、波頂部よりに三角形に沈線が施され、無文帯下に縄文がある。

第2類 九兵衛尾根II式に相当し、比較的新しい要素をもつもの(7~17)

A種 半截竹管による沈線を主体とするもの(7~9)

7・8は、縄文を地文にし、半截竹管による沈線が施されている。7は胴部、8は口縁部片である。9は、沈線だけが施されている。

B種 口唇部に横位に縄文が施され、縄文の区画に押引文が施されているもの(10~11)

10、11は、同一個体と見なされ、11は、10の下部に相当する。10の無文帯は、6のそれに比べ幅狭である。

C種 口唇部に刻目をもち、口縁部が無文帯でその下に縄文が施されているもの

12が相当する。無文帯と縄文帯を囲するの横位の沈線と刺突文が配されている。

その他は、いずれも九兵衛尾根I式に相当するが文様構成から分類できないものである。13は胴部片で中央に指頭状丘をもつ隆帯があり、その上下際に各々、半截竹管による刺突文、縄文が施されている。14は、縦位の沈線と連続の刺突文が施された胴部片である。15は、刻目のある隆帯と沈線で文様構成されている。16は、横位の沈線から垂下した沈線が施され、17は、縦位の沈線がやや密に配されている。

第VI群 縄文中期前半(第69図18、19、第70図)

第1類 新道原に相当するもの(18~22)

A種 半截竹管による爪形文、横位の波状沈線の特徴とするもの(18、19、22)

18は波状口縁の波頂部の破片で、頂頂部からU字状に沈線が垂下し、連続の爪形文の際に連続角押文が見られる。19は、長楕円と思われる隆帯と沈線による区画文と横位の波状沈線が施された胴部片である。22は、長楕円とキャピラ文の区画文内に横位の波状沈線が施された口縁部片である。

その他、20は、全面に縄文が施された胴部片、21は、隆帯で方形に区画し、その内部系に三角刺突文が施されている。

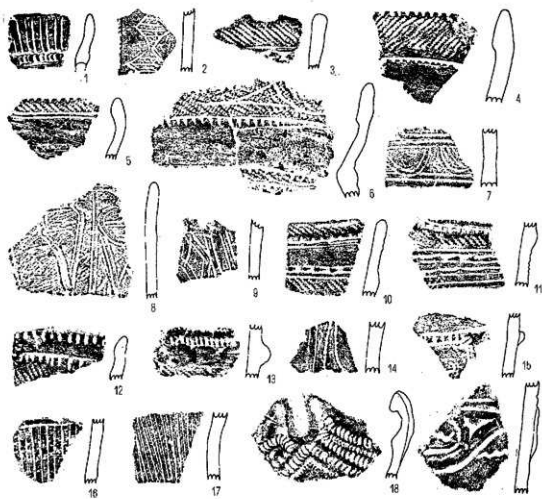
第2類 猪沢原に相当するもの(第70図23~27)

A種 刻目のある隆帯を特徴とするもの(23、25~27)

23は、口縁部片で、縦位の隆帯の同際から口縁に平行して半截竹管による押引文が施されている。25は、横位の隆帯に半截竹管による爪形状の刻目があり、縦位の隆帯には、縄文が施されている。26は、文様構成等から北陸系の要素をもつ口縁部片である。横位に数条の隆帯が施され、1列置きに半截竹管による爪形文が施されている。27は、口縁部片で、刻目をもち隆帯と半截竹管の沈線が縦位に施されている。

その他24は、指頭状丘をもつ口縁部片であり、口縁に平行して連続の刺突文が施されている。





第69圖 遺構外出土土器等

0 10cm

土器觀察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器底取型	外装/内装	胎土	備考
1	A-3	漆鉢	口縁	沈線・刺突		十字	灰石	
2	B-2	調漆	口縁	沈線・刺突		*	*	
3	A-2	*	口縁	*		*	灰石	
4	A-3	*	*	沈線・刺突・刺突		十字/十字	灰石	
5	A-2	*	*	沈線・刺突		*	灰石・雲母	
6	B-2	*	*	沈線・刺突・刺突		十字	灰石	
7	*	*	胴部	刺突・沈線		*	灰石	
8	B-4	*	口縁	竹管文・刺突		*	*	
9	A-2	*	胴部	沈線		*	雲母・灰石	
10	*	*	口縁	刺突・沈線・刺突		*	灰石	
11	*	*	口縁下部	*		*	灰石	
12	B-3	*	口縁	刺突・刺突		*	雲母・灰石	
13	A-1	*	胴部	刺突・沈線		*	灰石	
14	B-2	*	*	刺突・沈線		*	*	
15	A-2	*	*	沈線・刺突		*	灰石	
16	A-3	*	*	沈線		*	灰石・雲母	
17	A-2	*	*	*		*	*	
18	*	*	口縁	刺突・刺突		*	*	
18	*	*	胴部	刺突・沈線		*	*	内装全体雲母

第VII類 縄文中期後半に相当するもの(第70図28-32)

第1類 曾利V期に相当するもの

A種 縄文を地文とし、太い沈線を施した簡素な文様構成の土器(29-31)

29は、縄文を地文とし、口縁部の横位沈線と曲線的な縦位沈線が施されている。30は、口縁下部に横位の沈線があり、それに間隔をもって曲線的な沈線が施されている。31は、口縁に沿って微隆起があり、その下方に新縄文が施されている。

その他に28は、間隔を置いて縦位の太い沈線が施され、32は、V字状に数条の条線がある。

(三村 洋)

第VIII群土器(第71図1-4)

縄文時代後期の土器を一括した。出土総数は図示した4片がすべてである。A-1グリットおよびB-4グリットから出土している。

1は深鉢形土器の口縁部破片である。直立する口縁上部に一条の沈線がめぐり、胴部にも多条の沈線が垂下する。内面横位、外面縦位のていねいな器面調整が加えられている。器厚4mmと薄手のつくりであり、焼成は硬くしめる。2・3は壺形土器の胴部破片。2は多条の沈線によって曲線的な文様が施される。3には弧状の沈線文とともに、渦巻状や竹管状工具による円形刺突文が加えられている。胎土に砂粒などを含むものの、全体に硬くしめる。器面は内外面ともに横方向を中心とした器面調整が行われ、比較的平滑である。4は内湾する口縁部破片であり、口縁上部に刻日のある紐線文がめぐり、器厚5mmと薄手のつくりであり、外面は横方向の研磨が加えられ光沢がある。色調は明茶褐色を呈し、胎土にやや粗い砂粒を含む。

1-3は後期前半、堀ノ内式に、4は後期中葉、加曾利B式に、それぞれ相当しよう。

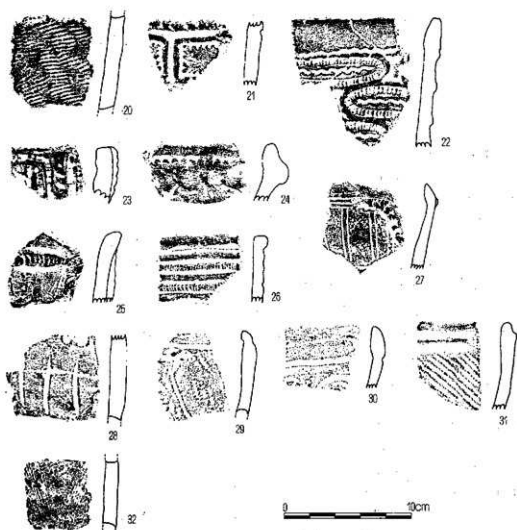
(百瀬忠幸)

第IX群土器(第71図5-18)

晩期に属する土器である。

5は、口径37.8cmを計る大型深鉢である。胴部から口縁に向かって直線的に開く器形で、口端には、12単位と思われる押圧が施される。内外面とも、ケズリの後、部分的に、ナデ、ミガキを加えることによって整形され、ケズリは右上がりの方向に施される。色調は灰褐色、胎土には、長石、石英を含む他、砂粒が目立つ。6、7は、深鉢の底部であり、裏面には網代痕が観察される。

8、9は、口縁下に、圧痕付き隆帯を有する土器で、かつては東海系の土器といわれてきたが、最近の研究では、中南信に主体的に存在する土器であることが明らかとなっている(百瀬1984)、隣接する福沢遺跡の土器集中区からもこの種の土器が出土しており、両遺跡の関係が問題となろう。10は、地文に縄文を施し、その上に沈線による三叉文及び刺突文が施される。茶褐色を呈し、器厚の薄い精製土器である。11-13は、口縁下に陽刻による隆帯をもつもので、13には浮線網状文もみられる。18の細密条痕風の深鉢破片とともに、福沢遺跡との関係が問題となろう。なお、14-17は、無文の深鉢口縁部破片であり、14には口唇にキザミがみられる。また、15は波状口縁と思われる。



第70図 遺構外出土器22

第70区

土器観察表

番号	発見序	器形	部位	文様組成要素	器表/内面	胎土	備考
20	A-2	碗鉢	縁部	縦文	ナデ	長石	
21	C-7	"	"	波線・斜交	ナデ/ミナナ	"	
22	"	"	口縁	波線・キョウヒラ文	ナデ	"	
23	"	"	"	亀雲・斜引文	"	"	
24	"	"	"	亀雲・斜交	"	"	
25	A-3	"	"	縦文・斜交	"	雲母	
26	B-5	"	"	波線・斜交	"	長石	
27	A-2	"	"	波線・亀雲・斜交	"	雲母・長石	
28	B-6	"	胴部	波線	"	長石	
29	A-1	"	"	波線・縦文	"	"	
30	B-4	"	"	波線・縦文	"	"	
31	B-6	"	"	波線・縦文	"	"	
32	C-7	"	胴部	波線	"	"	

これらの土器の出土をみたのは、A-5グリットを中心とした、堂の前遺跡でも地形的に低い位置にあたる。隣接する福沢遺跡の土器集中区に土器を投棄した人々の居住空間が、堂の前遺跡側に存在したとの予測も成り立ち、両遺跡の中間地点を調査できなかったことが惜しまれる。

(前田清彦)

#### (13) 土製品 (97図)

第2号住居址覆土より、完形の小型土製耳飾1点が出土している。平安時代の住居址覆土内からの出土であるが、第2号住居址周辺は、少量ながらも、縄文時代後・晩期の土器片が集中して出土した場所であり、土製耳飾についても、後、晩期の所産と推察される。

形態は、表面に円錐形の突起部を有した白彩を呈し、長さ1.75cm、表面径1.6cm、耳朵装着部の最小径1.2cmを計る。通常、耳朵装着部は凹部を有するが、もしくは平坦であるものだが、本例では、裏面から表面に向かって、やや内湾しながらも、中央で凹むことなく外方に開いており、機能的に特異な形態であると言えよう。裏面には深い抉りが入られ、表面には、突起部及びその外帯に放射状のキザミが施される。また、表面の一部には赤彩の痕跡が残え、当初は、表面全体にわたって赤彩が施されていたことが予想される。全体に作りは雑で、耳朵装着部もナデによって仕上げられるが、精選された粘土を使用しており、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

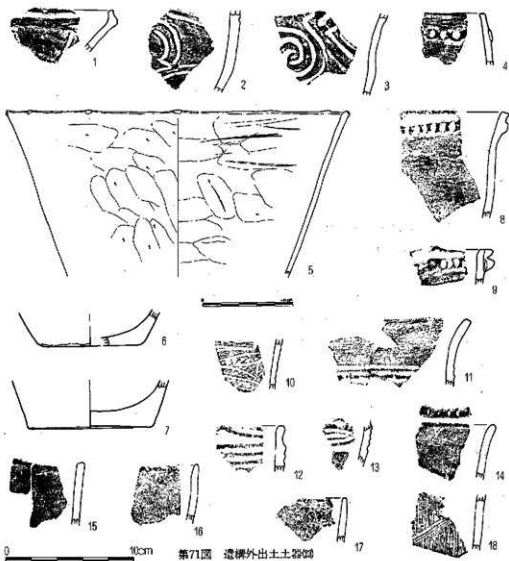
(前田清彦)

#### (14) 第2号住居址 (第72図)

当住居址出土遺物は、土器のみであり、土師器・須恵器が出土した。出土量はわずかで、器種は、坏と甕のみである。

土師器は2個体のみで、双方とも黒色土器である。1は、高台坏(柄)であり、たち上がりは、わずかに内湾し、直線的に開きながら口縁に至り、口縁は、ほとんど外反しない。内面を横・縦のへらミガキがされ、黒色処理されており、その剝離がはげしい。底部は、やや闊く三角形の付け高台をもち、外底部には回転糸切痕を明瞭に残す。胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。もう1片は無高台坏である。

甕は、ほぼ3個体で、全体を想像されるものは得られない。3は、焼成良好で、茶褐色を呈する。胎土は2mm以下の砂粒を含む。成形は、マキアゲ成形後、頸部下に上下ナデされ、後に、ロクロナデ調整がなされている。口縁部はロクロナデ調整され、口縁・頸部下部にロクロによる柵目(ハケメ)が施されている外胴部には、縦位の柵目が施されている。形態は、全体に器薄であり、胴部がわずかに内湾し、直線的に内傾しながら頸部に至り、口縁部は、直線的に開き、端部に行くにしたがって器厚になる。4は、胴部のみであり、内湾しながら立ち上がり、頸部に至る。焼成良好で、赤褐色を呈し、胎土は7mm以下の石粒を含む成形方法は3と同じである。5は、底部のみであり、焼成良好で、内面は、黄赤褐色・外面は暗褐色を呈し、胎土は、3mm以下の砂粒を含む。形態は、器薄で、直線的に立ち上がり、胴部に至ると思われる。成形方法は、マキアゲ後、ロクロ水挽き成形されており、立ち上がり3.5cm以下がへら削調整が施されている。



第71図 遺構外出土土器断

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	外壁/内面	胎土	備考
1	A-1	甕鉢	口縁	沈線		ナデ	砂	
2	B-4	甕	胴	〃		〃	〃	
3	B-4	〃	口縁	沈線・斜突		〃	〃	
4	B-4	甕鉢	口縁	縦線文		研磨/ナデ	〃	
5	2H	甕鉢	口縁-胴			ツズリーナデ・ミガキ	長・石・砂	外面炭化物
6	B-5	〃	胴部			ナデ	〃	純代成
7	〃	〃	〃			〃	〃	〃
8	B-5	〃	口縁部	鳥雲上にキザ?		〃	長・砂	
9	A-3	〃	〃	〃		〃	長・石・砂	
10	C-6	甕鉢?	胴部	地文斜文・三又文・斜突文		ナデ	長・石(少)	
11	2H	〃	口縁	沈線		ミガキ	長・石	
12	E-10	〃	〃	扇形による亀線		〃	長・石(少)	
13	2H	〃	胴部	4本の縦線が集合		〃	長・石・砂	
14	C-6	甕鉢	口縁	口縁にヘラキザ?		ナデ	長・石・砂・楕	
15	2H	〃	〃	〃		〃	小石(2-5mm)	
16	A-5	〃	〃	〃		〃	長・石・雲・砂	
17	B-5	〃	〃	〃		〃	長・石・砂	
18	〃	〃	胴部	?		研磨表面?/ナデ	〃	

須恵器、いわゆる、土師質須恵器である。2は、生き焼けて、白灰色を呈し、1mm以下の砂粒を含む。ゆるやかに内湾しながらたち上がり、口縁に至る。口縁はほとんど外反しない。やや浅い感じである。その他、口縁、胴部の細片が2個体分みられる。

以上のわずかな土器ではあるが、推察するところ、11世紀の中頃から、後半に比定できるのではなからうか。

(寺島俊郎)

## (15) 中世陶磁 (第73図)

### 1 青磁

1点の出土があったが、表採である。細片で図示しえない。碗の口縁部で、淡青白色を呈している。13~14世紀の元青磁と思われる。

### 大平鉢 (片口) (図73-1.2)

2点出土しているのが、いずれも底部からたち上がりにかけてのものである。底部はタテラ作りで、マキアゲ水挽き、付け高台である。腰部はへら削り調整が行なわれている。

1は、黄色を呈し、やや軟質で内面は磨耗している。12世紀末頃の中津川製品と思われる。

2は、暗灰色を呈し、胎土に小礫を含み、三角形の高台をもつ。13世紀前半の瀬戸製品とみられる。

### 瓶子

1点の出土があったが、頸部の手前からたち上がり直前までで図示しえない。粘土巻上成形で三条の櫛目が施されている。灰胎は非常におちついている。いわゆる梅瓶型の瓶子と思われる。14世紀中頃以降の瀬戸製である

### 甕

数点出土しているが、いずれも細片で胴部のみである。産出は常滑と中津川のもので13世紀中頃と思われる。

### 小皿

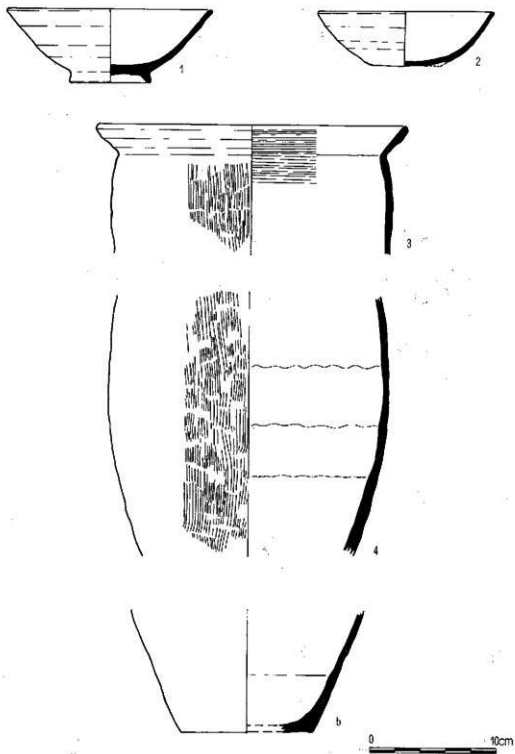
2点出土している。糸切底で、薄手で体部がゆるやかに内湾している。口縁は外反しない。4は、なま焼けて、たち上がりには比べ底部が大きく浅い。3は、非常に堅緻である。共に中津川産であり、4は12世紀末~13世紀、3は12世紀末期と推定される。

### 2 かわらけ (図73-15~18)

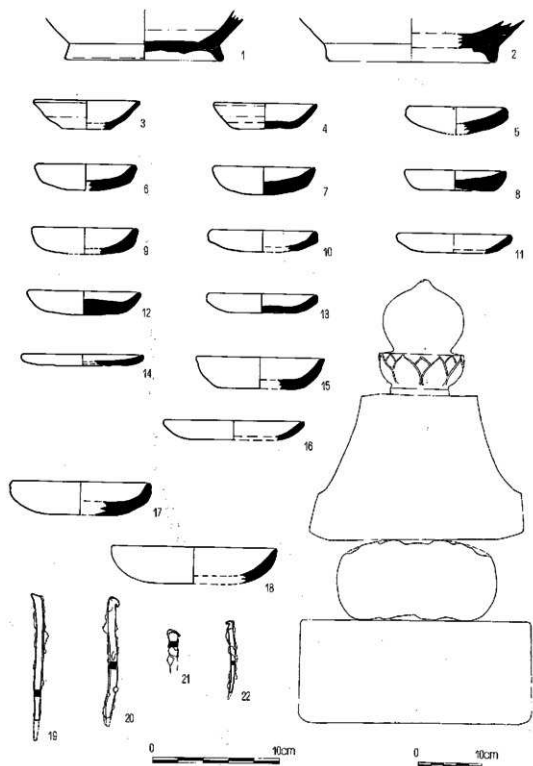
出土数は多く、70個体以上になると思われるが、細片で図示できるものは少ない。ほとんどが手づくね成形であるが、中には、ロクロ成形のものもわずかにあるが、細片で図示できない。

胎土は、数ミリの小石が入っているものも多いが、全体に、よく精選されている。赤褐色、黄赤褐色を呈しており、ほとんどが生やけである。

手づくね成形品には、丸底と平底のものがある。丸底のものは、ほとんどが小さなもの(10~13)で、大きなもの(14~18)にはみられない。平底のものには、大小の関係はみられず、底は、ゆがみのはげしいものが多い。



第72図 第2住居址出土土器



第73圖 中世遺構出土遺物



ロク成形成品は、全体をうかがえるものはないが、ひずみがはげしく、大きなものに多いように思われる。

(寺島俊郎)

## 2) 石器

### (1) 第1号住居址 (第74図)

石鏃2、尖頭状石器1、スクレイパー2、石匙1、横刃型石器1、磨石1、凹石1、特殊磨石1、磨製石斧1の計11点が出土している。

石鏃は、ともに基部に深い抉り込みを入れたもので、1は正三角形状、2は二等辺三角形を呈する。2は先端を欠損し、作りは粗雑である。尖頭状石器3は、原石面を残す部厚い剥片を使用し、尖頭部を作出している。スクレイパーは、4・5とも縦長の剥片を使用し、4は左辺の縁辺を刃部とし、5は底辺から右辺を機能面としている。石匙6は、長さ7cmの楕形で、つまみは2cmと大きなものである。全面にわたり丁寧な調整を施している。横刃型石器7は、大きな原石から1面を剥取し、これに何ら加工を施さず、鋭い縁辺をそのまま刃部としている。中期という横刃型石器とはやや異なる形態である。磨石8は、大部分を欠失した小片。凹石9は、表裏面に凹孔を有す。特殊磨石10は、楕円形礫の一端に磨面を有する。磨面幅が狭く、磨面の両縁辺には打痕がみられる。1号住居址は、中期の住居地であるが、打製石斧の出土はなく、凹石も少ない。10の特殊磨石も混入と考えられる。中期の住居としては貧弱な石器の在り方といえよう。

### (2) 第4号住居址 (第75図)

石鏃2、打製石斧1、凹石1の計4点である。

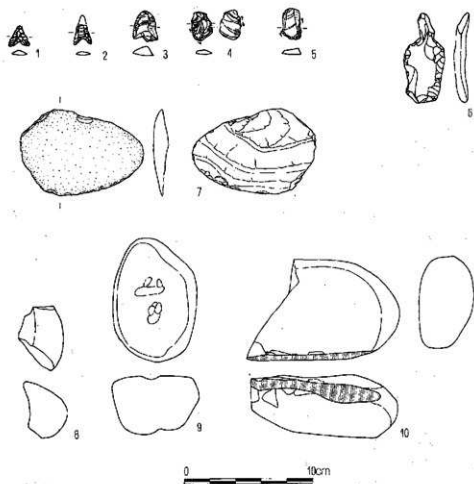
石鏃1・2は、ともに脚部を欠し。2点とも二等辺三角形を呈し、1は長さ24cmをはかり、2も長身である。打製石斧3は、小形の短冊形で、胴上半の両縁に磨耗痕をもつ。作りは粗雑。凹石4は、円形で扁平な礫を使用し、その表裏面の中央に磨耗による凹孔をし孔有する。4号住居は中期の住居地であり、南側半分を8・9号住居と重複している。そのため遺物の在り方にやや混乱がみられるが、それにしても中期としては、1号住居同様余りにも出土石器の内容が貧弱である。

### (3) 第5号住居址 (第75図)

特殊磨石が1点出土したのみである。それも大半は失った欠損品である。大形の7号住居址を重複しているために出土量が極端に少ないのであろう。

### (4) 第6号住居址 (第75図)

石鏃6、石鏃1、スクレイパー3のみ計10点出土。ともに小形の剥片石器である。石鏃は、基部への抉り込みの浅い6~8、12、平基の9、11があり、正三角形状を呈するものが多い。作りは丁寧だが、部厚い剥片を使用したものも目につく。石鏃10は、錐部を欠き、大きな柄部をもったもの。2スクレイパー13~15は、小さな剥片を何ら加工せず、使用したもので、刃部はやや内湾気味である。



第74図 第1号住居址出土土器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	長さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	1号	石 鏃	チャート	1.7	1.6	0.4	0.3	
2	"	"	黒曜石	(2.3)	1.5	0.3	0.3	
3	"	スクレイパー	"	2.4	2.0	0.8	3.0	
4	"	"	"	2.2	1.6	0.3	2.3	
5	"	"	"	2.4	1.6	0.5	2.0	
6	"	石 鏃	輝岩燧石	7.0	3.1	1.0	17	
7	"	鐮刀型石鏃	頁 岩	7.7	9.5	1.1	70	
8	"	鏃 石	黒成砂岩	5.1	3.6	4.1	71	
9	"	鏃 石	安山岩	9.7	6.5	4.5	360	
10	"	特殊鏃石	黒成砂岩	8.2	11.5	4.2	344	

(5) 第8号住居址 (第75・76図)

石鏃2、2クレイパー6、特殊磨石1、磨石2の計11点出土。

石鏃16、17は、ともに基部に浅い挟りをもつもので、2は肩に突起部をもつ特徴的な形態を呈する。スクレイパーは、小形の剥片を使用し、形態的な統一制はない。表裏面ともに刃部のあるものは20～22で、他は一面のみに加工痕がある。18、19は直刃、20～23は外湾刃をもつ。特殊磨石1は断面形が丸珠をおびた三角形状を呈し、幅1.0～2.5cmの磨面を作り出している。磨石2.3は、ともに楕円形で扁平な礫を用い、表裏両面に磨面を有する。8号址の遺物は、8号址の上面から出土したものを本地に伴うものとして取扱ったが、遺構の項でも述べられている如く、4、9号住居と重複しているため、全くの石器を本地のみに共伴か否かは断じ難い。

(6) 第10号住居址 (第76図)

石鏃1と石鏃1の2点が出土したのみである。本址は未完掘であり、また覆土も浅かったため、周囲のグリッドからは多くの石器が出土しているが、確実に本址に帰属せしめることのできるものはこの2点のみであった。石鏃4は、正三角形を呈し、基部に浅い挟りをもち、縁辺は直線状をなしている。石鏃は、錐部39mmで、両端に機能面を有する。

(7) 第11号住居址 (第76・77図)

石鏃7、スクレイパー5、打製石斧5、特殊磨石5、磨石1、凹石1、横刃形石器20計26点出土。調査された遺構中最多の出土である。中期に属する住居であったことと共に、覆土が厚かったことにもよう。

石鏃は、6、7は基部にほとんど挟りをもたず、8・9は浅い挟り込みがあり、11・12はやや深い挟り込みがなされている。正面形は、6・8・9が正三角形のほか二等辺三角形で、6は肩に段を有する。ともに作りは粗雑で、部厚いものが多い。スクレイパーは、縦長の剥片を使用し、片面の縁辺に加工を施し、刃部としているものが多い。13・14は外湾刃、15～17は内湾刃である。打製石斧は全て欠損品である。いずれも短冊形を呈し、18は頭部を、19は頭部を刃部を、20は下半部を欠失している。磨石1は、扁平で楕円形の礫を用い、表面に磨面を有する。凹石3は、やはり扁平楕円形の礫の中央に4×3.5cmの大きな浅い凹みをもつもので、一般的な凹石とやや趣を異にしている。横刃型石器10は、三角形状で直刃、11は横長で内湾刃をもつ。ともに作りは粗雑である。特殊磨石2.4～7は、本址には直接帰属するものではないであろう。凹石との兼用品4・6などが特徴的である。

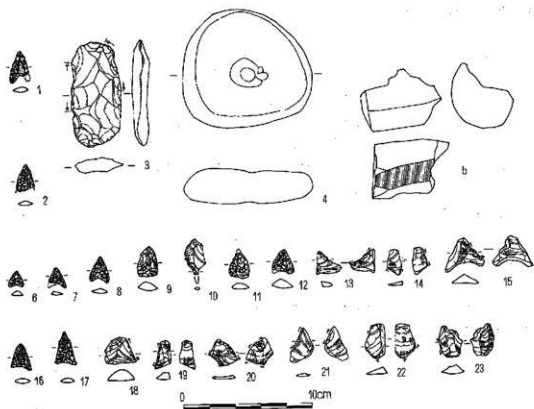
(8) 第12号住居址 (第76図)

3分の1ほど調査しただけのため、出土した石器も数少ない。石鏃1、スクレイパー2の3点である。石鏃1は、小形で正三角形を呈する。石脚を欠失する。スクレイパーには、円形刃部を有し、形態的に整ったもの。刃部の作出も丁寧である。3は縦長刺刃を用い、外湾刃をもつ。

(9) 小竪穴 (第78図)

3基発見された小竪穴中、石器の出土したものは11基である。

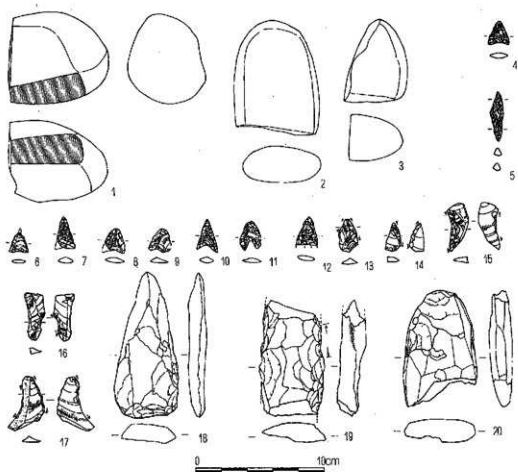
1号は石鏃と打製石斧が出土している。石鏃4は、基部にゆるい挟りをもち、先端は鈍く、部厚い。打製石斧15は、短冊形で、頭部を欠失する。刃部および両側縁に磨耗痕がみられる。4号



第75図 第4、6、8号住居社出土石器

石器観察

番号	発掘区	種別	材質	長さ(mm)	口(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
1	4H	石 槍	黒輝石	24	15	4	1.2	
2	"	"	"	21	15	4	0.9	
3	"	打製石斧	頁 岩	83	40	12	52	
4	"	磨 石	砂 岩	94	102	28	370	
5	"	特殊磨石	砂 岩	5.6	4.5	4.9	109	
6	6H	石 錐	黒輝石	12	12	4	0.2	
7	"	"	"	17	14	3	0.7	
8	"	"	"	21	15	4	0.9	
9	"	"	"	24	16	7	2.0	
10	"	石 錐	"	28	16	2	2.3	
11	"	石 錐	"	21	17	5	1.2	
12	"	"	"	19	17	8	1.3	
13	6H	スクレイパー	黒輝石	18	19	4	1.5	
14	"	"	"	20	12	3	1.0	
15	"	"	"	21	31	7	3.8	
16	8H	石 錐	"	22	15	4	0.8	
17	"	"	"	20	17	4	1.5	
18	"	スクレイパー	"	22	25	9	4.8	
19	"	"	"	23	13	6	2	
20	"	"	"	21	21	3	1.4	
21	"	"	"	27	19	3	2.5	
22	"	"	"	27	16	6	1.3	
23	"	"	"	25	18	7	5.2	



第76図 第8、10、11号住居域出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	8H	磨石	安山岩	7.1	7.0	6.1	439	
2	*	*	細粒砂岩	7.1	6.4	2.9	260	
3	*	*	*	66	49	37	145	
4	10F	石 錐	黒燐石	19	16	5	1.0	
5	*	石 錐	*	39	10	7.6	2.5	
6	11H	石 錐	チャート	16	15	3	0.7	
7	*	*	黒燐石	25	14	5	2.2	
8	*	*	*	25	16	4	2.3	
9	*	*	*	19	18	4	1.1	
10	*	*	*	2.6	17	5	1.1	
11	*	*	黒燐石	23	17	4	1.2	
12	*	*	*	23	17	4	1.3	
13	*	スクレイパー	*	26	15	5	2.0	
14	*	*	*	23	12	4	1.0	
15	*	*	*	38	16	5	2.5	
16	*	*	*	38	16	5	1.4	
17	*	*	*	43	26	5	4.0	
18	*	打製石片	細粒砂岩	115	51	24	96	
19	*	*	頁岩	91	51	25	110	
20	*	*	安山岩	92	58	28	138	

は、5の石鏃が1点出土し、凸基で、作りは雑。6号では、石鏃とスクレイパーが各1点出土している。6の石鏃は、平基で正三角形を呈する。スクレイパー7は、直刃を呈する。8号では長さ2.5cmの長身の石鏃8が出土、基部への挟りは浅く、石脚先端を欠く。11号からは平基で、先端を欠く石鏃10が、16号からは基部に浅い挟のある小形の石鏃11がそれぞれ得られている。24号では、9の石鏃が、25号では長さ3.2cm、幅2.25cmの大きな石鏃12が出土している。32号からは、長さ2.4cmの柄部のない完形の石鏃が、30号では小形の石鏃14が出土している。打製石斧は、1・5・23号から出土している。15～18ともに短冊形を呈する。

#### (10) 遺構外 (第79～96図)

遺構外からは、石鏃7、尖頭状石器13、石鏃8、石匙6、スクレイパー95、打製石斧25、横刃型石器3、特殊磨石40、磨石14、凹石4、石皿3の計296点出土している。

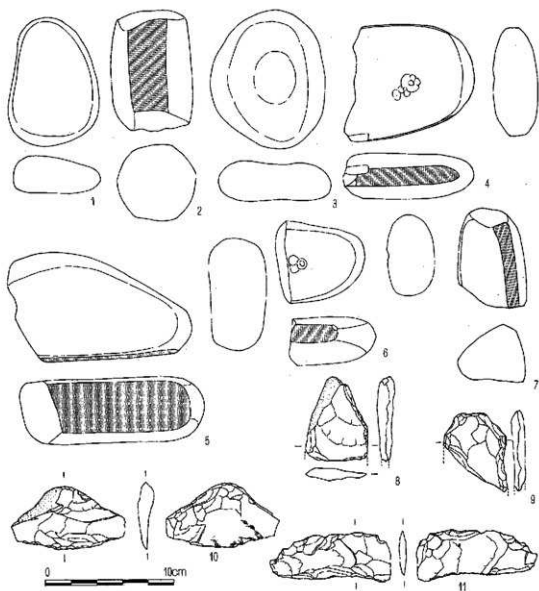
石鏃基部の形態により、平基のもの、浅い挟りをもつもの、深い挟りをもつもの、凸基のもの4種類に分けられる。平基は1～6で、平面形は1・2が正三角形、3が二等辺三角形、4～6は偏辺に段を有する。2は右脚を、3・6は先端部を欠失している。基部に浅い挟りをもつものは7～58で、最的にはこの形態が最も多い。平面形は大部分が二等辺三角形を呈し、正三角形をなすものは7～9、13～16、53、57、58があげられる程度で、数少ない。側縁は直線状をなすものが多いが、やや外湾するもの14、37、肩に段をもつもの20、22、29、39、46内湾するもの10、17などがある。また脚の長さが左右均一でない43、50、53があり注意される。基部に深い挟りをもつものは、59～76があげられる。しかし、一般にいわれているU字状の挟りをもつものはほとんど見当らず、他遺跡での挟りの深い石鏃と比較すると全般的に浅いことが特徴として指摘できる。全て二等辺三角形で、側縁は直線状を呈する。脚部を欠損するものが多い。凸基のもの77、78は、縁辺にのみ加工を施した粗雑なものである。以上の形態のものほかに、特に大形の87がある。長さ4.1、幅3.1cm、重さ5.9gで、基部に深い挟りを入れた二等辺三角形で、作りは粗雑である。おそらく最大級の石鏃の1つであろう。

尖頭状石器、石鏃より大形で、部厚く、尖頭部を作出しているものである。90、95、96、98のような整った形のもの、91、93、94、97のように尖頭部の作出をより意図的に行っているものがある。石鏃との区分がはっきりしない89、98～100もあるが、上記の観察からこの類に入れておきたい。

石鏃、柄部のあるもの101～103と、ないもの14～108がある。鏃部は、柄のあるものは1.0cm内外と短く、ないものは全身が鏃部となりうるため2.0～3.0cmと長目となっている。

石匙、109～112は横形、113、114は縦形である。109、112は直線状の刃部をもち、110、111は外変刃をもつ。柄は、109、111が左肩、110が右肩、112が中央に作出されている。製作はJ率で、刃部は鋭利である。109は石鏃の再利用品かもしれない。113、114は、ともに刃部を欠くが、横型よりも作りは雑である。

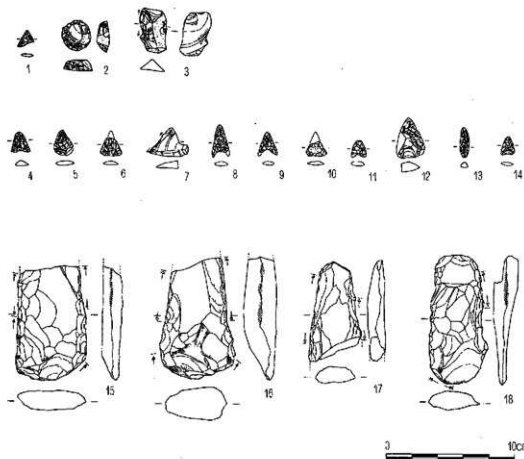
スクレイパー、一定の形態をなしていないが、刃部によって、円形、直線、外湾、円湾等に分けられる。円形のものには116があり、部厚い刃部が円形に作出されている。直線状の刃部を有するものは119～162で、縦長の割片を使用しているものが多い。断面三角形の割片の側縁の片刃、



第77图 第11号住居址出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
1	11H	磨石	細粒砂岩	10.1	7.1	2.9	278	
2	"	"	安山岩	9.5	6.4	6.2	592	
3	"	刃石	細粒砂岩	10.8	9.0	3.2	370	
4	"	特殊磨石	砂岩	5.4	9.1	3.4	7	凹孔あり
5	"	"	細粒砂岩	8.6	12.7	4.5	930	
6	"	"	中粒砂岩	6.5	7.0	3.7	216	凹孔あり
7	"	"	"	7.6	5.4	5.3	285	
8	"	打製石片	硬砂岩	6.5	4.9	1.2	35	
9	"	"	頁岩	5.5	4.9	1.0	35	
10	"	横刃型打石	"	5.0	9.0	1.2	45	
11	"	"	粗粒砂岩	3.5	9.6	0.6	22	



第78図 第12号住居址小墾穴出土石器

石器観察表

番号	発掘区	種類	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	12H	石	黒輝石	13	13	2	0.3	
2	"	エンドスクレイパー	"	24	23	8	4.1	
3	"	スクレイパー	"	34	33	9	6.0	
4	1S	石	"	16	15	4	0.6	
5	4S	"	"	20	15	4	1.1	
6	6S	"	"	15	17	3	0.9	
7	6S	スクレイパー	"	23	31	7	3.8	
8	5B	石	"	25	14	3	1.2	
9	24S	"	"	19	15	3	0.7	
10	11S	"	"	12	16	3	0.4	
11	16S	"	"	13	12	4	0.3	
12	25S	石	"	32	22	7	3.9	
13	32S	石	"	24	8	5	1.1	
14	39S	石	"	15	11	3	0.4	
15	S1	打製石片	天 岩	91	56	16	105	
16	S5	"	網紋砂岩	96	60	26	172	
17	23S	"	天 岩	79	42	13	62	
18	"	"	"	102	46	16	75	



ないし両辺を刃部として使用している。片刃使用が多く、両辺は126、127、136、138、157、160、161が該当する。刃部の長さは使用された剥片の長さによっても規定されるが、122の35mmが最も長く、他は20mm前後である。これらの石器は、母岩から剥取された剥片と形態を整えることもなく、そのまま使用しているため直線刃のみでなく外湾、内湾をともに有するものも少なくない。外湾刃は185～192、内湾刃は163、170～182が相当する。直線刃よりも小形の剥片を使用しているものが目立つ。203は、大きな剥片を使用したものである。

打製石斧 207～215は短冊形を呈し、216、217は頭部が尖頭状を呈し、刃部が丸味をもつ、短冊形はともに刃部が順広で、頭部が狭くなっている。作りは粗雑である。208、210、213、215は原石面を大きく浅している。208、210、211は刃部に、208～210、211、214は側面に磨耗痕を有する。216、217は極めて粗雑なものである。218～231は破損品である。218は胴上半を、219～222は頭部と刃部を、222～227、229～231は刃部をそれぞれ欠いている。いずれも短冊形の破損品と思われる。220は頭部に磨耗が、219、222～224は縁辺に細かな調整を行っている。223、226、229は原石面を残している。

横刃型石器 横長の剥片を使用し、周辺の一辺に刃部を有するもので、片刃状を一般とする。232は直線刃、223は外湾、234は円湾する頭部をもつ。刃部以外の調整は殆んどなされていない。

石匙 235は横型の石匙で非常に粗雑なものである。

特殊磨石 236～275までの多量出土があった。断面形により、三角形(241、248、249～251、257、262、264)、長い三角形(236、253、269)、丸味のおびた三角形(243、244)、楕円形(237～240、242、247、254～258、268、271)、不整形なものなどがある。このうち三角形と楕円形が大半を占める。磨面は石材の側面形に大きく規定され、長短広狭がある。また磨面の縁辺に打痕を有するものもあり、特に236～245は大きく打撃痕が残されている。他のものは打痕の明らかなものはないが、磨面のザラツキが認められる。石鏃、スクレイパーについて多量に出土した。堂の前遺跡の石器組成を考えるうえで重要な位置を占めている。

磨石 断面が円形を呈し、全面研磨するものと、扁平で表裏面を主に研磨するものがある。前者に277～284、289、後者に285～288がある。円形を呈するものは、磨面が曲面となっており、ローリング運動を、扁平のものは水平運動を主として機能したものである。ただし、282、283は平坦な磨面が周囲を覆っており、水平運動の機能の集まった磨石といえる。円形のものが多くはこの遺跡の特徴といえる。

凹石 290～293の4点が出土し、290は凹形の礫を用い、中央に2孔を、291～292は方形の礫の中央に1～2孔をもつ、293は断面三角形の礫の3面に凹孔をもっている。中期にしばしば存在する円形ないしは楕円形の典型的なものとは異なっている。

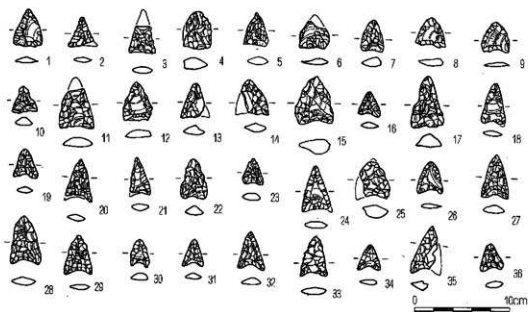
石皿 3点出土し、294が縁があるのみで、295～296とも平皿状の石皿である。

(小林康男)

### 3) 鉄器

釘類 (第73図)

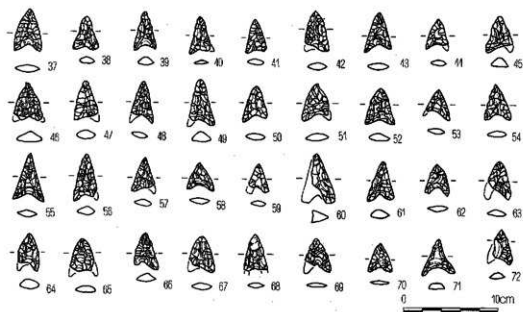
19は、幅0.55cm・残存長10.0cmを計る。断面は正方形のものである。



第79図 遺構外出土石器(1)

石器観察

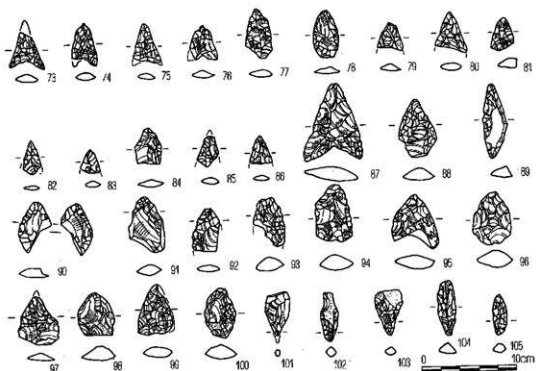
番号	発掘区	種類	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	B4	石 鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.3	0.7	
2	C10	"	"	1.5	(1.6)	0.2	0.4	
3	C6	"	"	(2.3)	(1.4)	0.4	0.7	
4	B2	"	"	2.0	1.5	0.6	1.4	
5	C6	"	"	(1.8)	(1.4)	0.5	0.9	
6	A4	"	"	(1.8)	(1.6)	0.3	0.6	
7	B5	"	"	1.7	1.2	0.5	0.9	
8	C4	"	"	1.6	1.5	0.2	0.5	
9	A1	"	"	1.6	1.5	0.3	0.6	
10	B6	"	"	1.4	1.4	0.5	0.4	
11	A2	"	"	(3.1)	1.8	0.5	0.9	
12	A2	"	"	2.1	1.6	0.4	1.3	
13	B2	"	"	(1.9)	(1.6)	0.6	0.8	
14	A2	"	"	(1.9)	(1.8)	0.5	1.1	
15	B3	"	"	2.6	2.0	0.8	3.3	
16	A1	"	"	1.3	1.2	0.3	0.2	
17	A1	"	"	2.7	1.8	0.7	1.9	
18	B4	"	"	(2.3)	1.3	0.2	0.8	
19	B4	"	"	1.5	1.3	0.3	0.5	
20	A3	"	"	(2.3)	(1.5)	0.3	0.8	
21	A2	"	"	2.1	(1.2)	0.4	0.5	
22	C5	"	"	2.1	1.4	0.5	1.2	
23	C5	"	"	(1.5)	(1.2)	0.4	0.5	
24	C6	"	"	(2.4)	(1.7)	0.4	1.0	
25	B6	"	"	(2.2)	(1.9)	0.7	1.3	
26	B1	"	"	1.7	1.4	0.2	0.6	
27	"	"	"	2.3	1.5	0.4	1.0	
28	C6	"	"	2.6	1.7	0.5	1.5	
29	C5	"	"	2.1	1.5	0.3	0.8	
30	A1	"	"	1.5	1.0	0.4	0.5	
32	C5	"	"	2.1	1.4	0.3	0.6	
33	"	"	"	2.1	1.4	0.4	0.7	
34	A4	"	"	1.4	1.3	0.2	0.3	
35	A4	"	"	(2.6)	(1.6)	0.5	1.0	
36	A3	"	"	1.5	1.2	0.4	0.5	



第80圖 遺構外出土石器(2)

石器觀察表

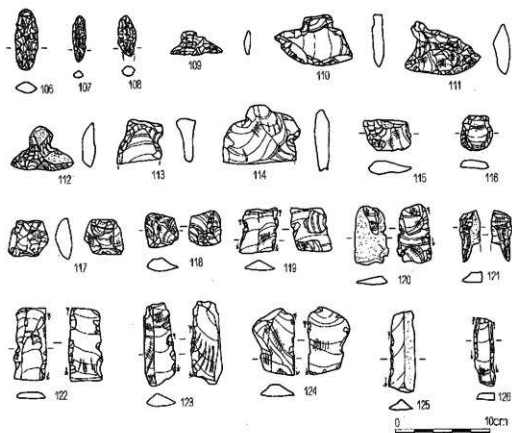
番号	附屬品	種類	材質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
37	A1	石	黒曜石	2.2	1.4	0.4	0.9	
38	A3	"	"	1.7	1.3	0.4	0.8	
39	B6	"	"	2.0	1.2	0.4	0.8	
40	A1	"	"	2.0	(1.3)	0.2	0.3	
41	B1	"	"	1.5	1.2	0.3	0.6	
42	A3	"	"	2.2	1.3	0.4	0.8	
43	B4	"	"	2.1	1.4	0.4	0.7	
44	C4	"	"	1.8	1.2	0.3	0.6	
45	B4	"	"	1.9	1.4	0.5	1.1	
46	A3	"	"	(2.1)	(1.7)	0.5	1.2	
47	C10	"	"	2.1	(2.3)	0.5	1.0	
48	B2	"	"	2.2	1.3	0.3	0.6	
49	B3	"	"	2.4	(1.4)	0.5	1.1	
50	B4	"	"	1.9	1.3	0.4	0.5	
51	A2	"	"	2.0	(1.5)	0.4	0.8	
52	A1	"	"	1.9	1.6	0.4	0.8	
53	A1	"	"	1.6	(1.4)	0.3	0.3	
54	A2	"	"	1.9	1.4	0.3	0.4	
55	A1	"	"	2.5	1.6	0.4	0.8	
56	B5	"	"	1.4	(1.3)	0.5	1.0	
57	A2	"	"	(1.3)	(1.3)	0.3	0.4	
58	A2	"	"	1.5	1.4	0.3	0.3	
59	C6	"	"	1.6	(1.3)	0.3	0.3	
60	A4	"	"	1.6	(1.8)	0.7	1.1	
61	A4	"	"	2.1	1.4	0.4	0.9	
62	A1	"	"	1.6	1.3	0.3	0.4	
63	C4	"	"	2.0	(1.5)	0.4	0.7	
64	C5	"	"	2.1	(1.2)	0.5	0.8	
65	A3	"	"	(2.0)	(1.6)	0.4	0.9	
66	C4	"	"	2.0	1.2	0.4	0.8	
67	"	"	"	1.9	(2.4)	0.4	0.4	
68	"	"	"	(1.9)	(1.4)	0.3	0.5	
69	"	"	"	1.4	(1.4)	0.2	0.4	
70	D6	"	"	1.5	1.3	0.2	0.4	
71	"	"	"	1.9	1.7	0.3	0.6	
72	A1	"	"	1.9	(1.3)	0.4	0.4	



第81区 濠溝外出土石器(3)

石器觀察表

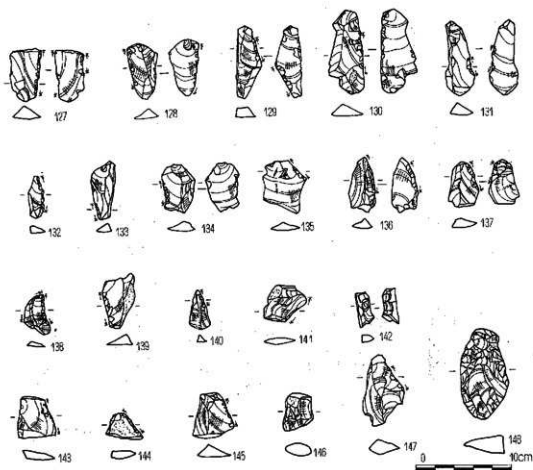
番号	向塚区	種別	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
73	A 3	石 鏃	黒曜石	(2.0)	1.9	0.4	0.9	
74		"	"	(2.4)	1.3	0.4	1.0	
75	B 8	"	"	(2.0)	(1.6)	0.3	0.8	
76	B 5	"	"	(1.8)	(1.6)	0.4	1.0	
77	B 1	"	"	2.7	1.4	0.4	1.6	
78	A 1	"	"	2.5	1.4	0.4	1.3	
79	B 6	"	"	1.5	1.4	0.3	0.9	
80	B 8	"	"	2.1	1.7	0.4	1.0	
81	B 4	"	"	1.7	1.3	0.5	0.7	
82	B 3	"	"	1.9	(1.5)	0.2	0.3	
83	B 4	"	"	1.5	1.3	0.3	0.4	
84	A 2	"	"	2.0	1.4	0.4	1.0	
85	A 3	"	"	2.0	1.4	0.3	0.6	
86	A 1	"	"	1.7	1.3	0.3	0.3	
87	A 1	"	"	4.1	3.1	0.8	5.9	
88	C 3	尖頭状石器	"	3.1	2.0	0.7	4.9	
89	A 3	"	"	3.9	1.3	0.6	1.8	
90	C 8	"	"	2.7	1.7	0.5	2.2	
91	A 2	"	"	3.0	1.9	0.6	3.1	
92	A 2	"	"	(2.7)	(1.9)	0.3	1.9	
93	A 2	"	"	(3.2)	(1.7)	0.7	2.0	
94	A 2	"	"	3.0	1.9	0.8	5.0	
95	A 1	"	"	2.9	2.5	0.7	3.1	
96	B 3	"	"	2.8	2.0	0.9	4.0	
97	A 1	"	"	(2.9)	2.1	0.4	3.0	
98	"	"	"	2.2	1.9	0.8	3.0	
99	"	"	"	2.7	(1.8)	0.6	2.8	
100	"	"	"	2.7	1.7	0.8	3.3	
101	A 1	"	"	2.7	1.3	0.4	1.9	
102	C 3	石 鏃	"	2.6	1.0	0.5	1.3	
103	A 1	"	"	(2.4)	(1.5)	0.4	2.0	
104	A 3	"	"	2.9	0.9	0.7	1.0	
105	A 2	"	"	2.1	0.7	0.5	0.7	



第82図 遺構外出土石器(4)

石器観察表

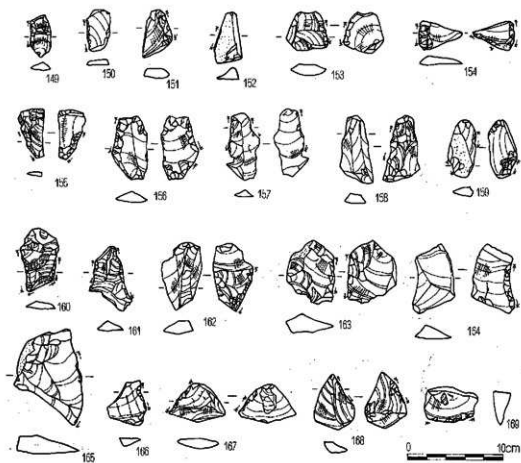
番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
106	A 1	石 錐	黒曜石	3.3	1.2	0.6	2.4	
107	B 6	"	"	3.4	0.7	0.3	1.2	
108	"	"	"	(2.2)	0.9	0.5	1.3	
109	C 4	石 錐	"	2.8	1.5	0.3	0.9	
110	A 2	"	チャート	3.7	2.7	0.6	6.3	
111	B 3	"	黒曜石	3.6	2.6	0.8	"	
112	A 2	"	"	3.4	2.3	0.7	3.0	
113	"	"	"	2.3	"	1.0	4.1	
114	A 3	"	"	3.9	3.1	0.8	8.1	
115	B 4	スタレインパー	"	2.1	1.3	0.9	2.5	
116	"	"	"	1.8	1.7	0.4	"	
117	A 5	"	"	1.9	2.0	0.8	3.0	
118	A 3	"	"	1.8	1.7	0.7	2.4	
119	"	"	"	2.3	1.8	2.5	3.0	
120	C 5	"	"	2.8	1.6	0.4	2.5	
121	C 5	"	"	2.7	1.1	0.5	2.0	
122	B 3	"	"	3.8	1.6	0.3	5.0	
123	"	"	"	4.4	1.6	0.7	6.0	
124	B 5	"	"	3.6	2.2	0.6	4.9	
125	A 3	"	"	4.2	1.3	0.5	3.0	
126	A 2	"	"	3.6	0.9	0.4	1.8	



第83図 遺構外出土石器(5)

石器観察表

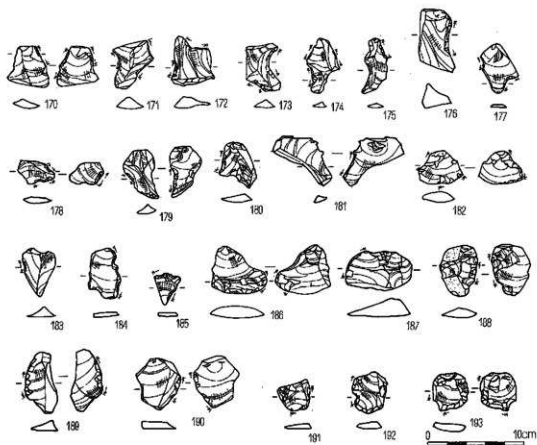
番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
127	B5	スクレイパー	黒曜石	2.7	1.4	0.6	2.0	
128	A2	"	"	3.0	1.6	0.5	2.0	
129	B4	"	"	3.7	1.3	0.5	2.1	
130	C1	"	"	4.4	1.9	0.7	4.0	
131	A2	"	"	4.0	1.6	0.7	3.2	
132	C6	"	"	2.2	0.8	0.4	1.0	
133	"	"	"	3.1	2.2	0.5	2.0	
134	C3	"	"	2.5	1.7	0.6	2.5	
135	C6	"	"	2.8	2.4	0.4	2.8	
136	C2	"	"	3.0	1.4	0.5	1.8	
137	C3	"	"	2.4	1.5	0.5	2.0	
138	A3	"	"	2.2	1.3	0.3	1.0	
139	C18	"	"	2.9	1.7	0.6	1.9	
140	"	"	"	2.1	1.1	0.4	0.8	
141	"	"	"	1.9	2.1	0.3	1.4	
142	C7	"	"	1.9	0.9	0.4	0.6	
143	A3	"	"	2.2	2.1	0.5	3.1	
144	A2	"	"	1.3	2.0	0.4	0.8	
145	"	"	"	2.4	2.3	0.7	3.1	
146	C5	"	"	2.0	1.6	0.7	2.0	
147	A2	"	"	3.8	2.0	0.8	5.0	
148	A4	"	"	4.8	2.5	0.9	11.0	



第84図 遺構外出L石器(G)

石器観察表

番号	発掘区	種類	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
149	C 6	ステライター	黒曜石	2.3	1.1	0.4	1.1	
150	E 8	"	"	2.2	1.2	0.3	1.0	
151	F 9	"	"	2.6	1.6	0.6	2.5	
152	A 4	"	"	2.7	1.4	0.6	2.8	
153	A 5	"	"	2.2	2.2	0.6	2.5	
154	M 2	"	"	1.5	2.2	0.4	0.8	
155	"	"	"	2.6	1.4	0.2	1.3	
156	A 2	"	"	3.4	1.9	0.6	3.2	
152	A 2	"	"	3.5	1.5	0.4	1.3	
158	A 1	"	"	3.5	2.0	0.8	4.8	
159	B 4	"	"	2.1	1.4	0.5	3.3	
160	"	"	"	3.3	2.0	0.4	3.8	
161	A 4	"	"	3.5	2.2	0.5	3.1	
172	B 4	"	"	3.6	2.1	0.7	4.3	
183	B 3	"	"	3.3	2.6	0.9	6.0	
184	D 6	"	"	3.3	2.0	0.7	5.1	
185	B 4	"	"	5.0	3.5	1.0	14.0	
166	A 2	"	"	2.4	2.1	0.5	2.5	
167	B 5	"	"	2.1	3.1	0.6	3.0	
158	B 2	"	"	3.0	2.2	0.6	3.5	
169	F 9	"	"	1.8	2.8	0.9	4.0	

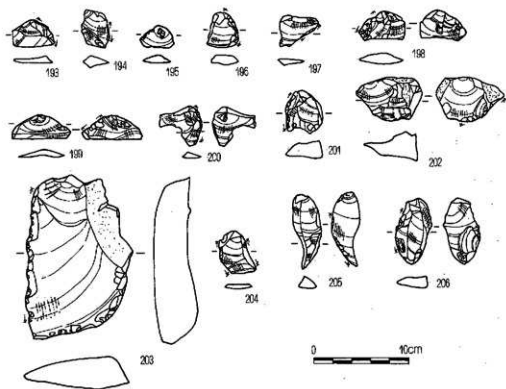


第85区 遺構外出土石器(7)

石器観察表

番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
170	B 2	スタレイメル	黒曜石	2.0	2.2	0.5	2.1	
171	D 6	※	※	2.6	2.2	0.6	2.4	
172	B 5	※	※	2.7	2.6	0.6	2.1	
173	B 5	※	※	2.5	1.7	0.4	2.0	
174	A 2	※	※	2.9	1.7	0.3	1.0	
175	C 4	※	※	2.7	1.2	0.2	1.1	
176	B 2	※	※	3.1	1.7	1.3	6.2	
177	※	※	※	2.6	1.9	0.2	1.5	
178	A 4	※	※	1.2	1.9	0.4	1.3	
179	A 2	※	※	2.5	1.6	0.5	1.5	
180	A 2	※	※	2.0	2.0	0.4	1.8	
181	A 1	※	※	2.0	2.7	0.4	2.9	
182	B 4	※	※	1.7	2.5	0.6	1.5	
183	B 5	※	※	2.6	1.7	0.6	1.8	
184	E 9	※	※	2.7	1.7	0.2	1.3	
185	A 4	※	※	1.7	1.4	0.2	1.0	
186	C 6	※	※	2.5	2.8	0.7	4.3	
187	A 1	※	※	2.1	3.5	1.0	6.2	
188	A 1	※	※	2.7	1.9	0.5	3.0	
189	B 3	※	※	3.2	1.7	0.6	2.3	
190	B 5	※	※	2.7	2.4	0.3	3.0	
191	F 1 1	※	※	1.6	1.7	0.3	1.0	
192	C 6	※	※	2.2	1.8	0.4	2.1	
193	A 4	※	※	1.9	1.8	0.4	2.5	

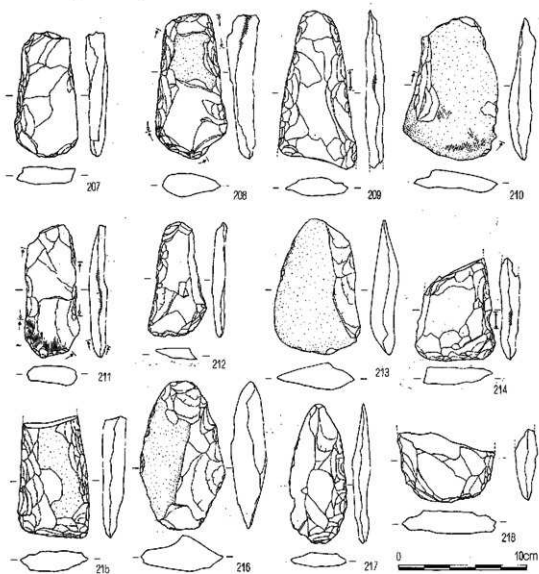




第86図 遺構外出土石器(8)

石器観察表

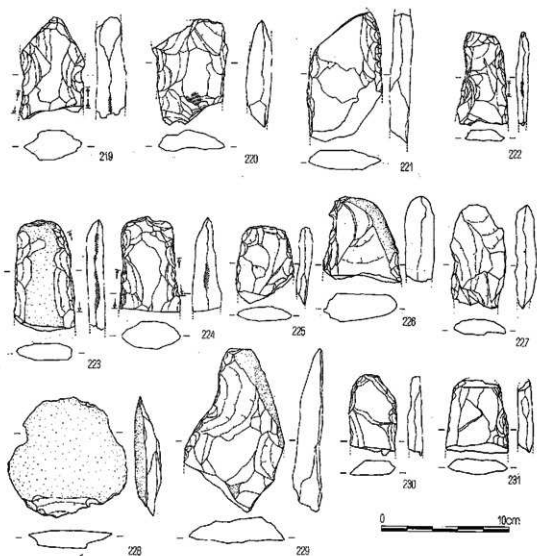
番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
193	A1	スタンイェー	黒曜石	2.2	1.4	0.4	1.1	
194	B4	*	*	1.9	1.4	0.7	1.7	
195	A4	*	*	1.7	1.2	0.4	1.0	
196	A2	*	*	1.5	1.7	0.5	1.2	
197	*	*	*	2.1	1.7	0.3	0.6	
198	A3	*	*	2.4	1.4	0.5	2.0	
199	A4	*	*	3.2	1.3	0.3	2.9	
200	C6	*	*	2.2	2.0	0.3	1.5	
201	A2	*	*	2.3	1.9	1.0	3.6	
202	C5	*	*	3.5	2.3	1.5	5.1	
203	B3	*	*	5.7	5.5	2.3	80	
204	A2	*	*	2.3	1.3	0.2	1.7	
205	*	*	*	3.8	1.4	0.7	3.0	
206	C10	*	*	3.5	1.8	0.5	4.0	



第87図 遺構外出土石器(9)

石器観察

番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
207	B 6	打製石器	頁岩	9.8	5.5	1.3	86	
208	A 2	"	"	10.4	5.5	1.9	156	
209	"	"	"	(12.5)	(6.2)	1.4	(121)	
210	C 5	"	"	11.2	7.3	1.4	150	
211	16S	"	細粒砂岩	10.2	4.3	1.4	79	
212	A 4	"	頁岩	9.0	4.3	0.8	42	
213	A 2	"	粗粒砂岩	10.7	6.6	2.1	162	
214	F 8	"	頁岩	7.9	6.3	1.3	90	
215	A 2	"	"	(9.6)	5.3	1.6	(134)	
216	B 4	"	"	11.6	6.7	2.8	202	
217	B 2	"	細粒砂岩	10.9	4.5	1.1	64	
218	B 5	"	頁岩	(8.5)	7.4	1.7	(74)	



第88圖 遺構外出十石器(10)

石器類表

番号	発掘区	出土	材質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備註
219		打製石片	頁岩	(8.1)	(4.8)	2.3	(120)	
220	D 8	"	"	(8.2)	(6.0)	1.4	(100)	
221	"	"	輝綠砂岩	(10.0)	(6.0)	1.5	(132)	
222	"	"	頁岩	(7.2)	(4.2)	0.6	(36)	
223	A 5	"	"	(8.7)	(4.8)	1.3	(92)	
224	A 5	"	輝綠砂岩	(7.4)	(4.8)	2.1	(102)	
225	"	"	"	(6.2)	(4.5)	1.1	(88)	
226	B 4	"	頁岩	(6.3)	(6.1)	2.1	(126)	
227	A 1	"	"	(8.1)	4.3	1.2	(64)	
228	F10	"	"	9.2	9.3	1.4	168	
229	A 1	"	輝綠砂岩	(12.9)	(7.3)	1.8	(204)	
230	"	"	"	(5.9)	3.5	.2	(42)	
231	A 4	"	頁岩	(5.6)	4.9	1.1	(49)	

20は、幅0.6cm・存在長8.5cmを計る。断面は正方形のもので、19と同種である。

21は、幅0.35cm、0.5cm・残存長3.5cmを計る。断面は長方形のものである。

22は、頭をやや師手にした小型品で、幅0.3cm・残存長5.65cmを計る。断面は正方形のものである。

(寺島俊郎)

#### 4) 人骨

今回の発掘により、8か所の墓址から骨が出土した。判別のできるものは、1号墓・2号墓の2か所のみで、他のものは、すべてが細片となり、判別は困難であった。

##### 1号墓址

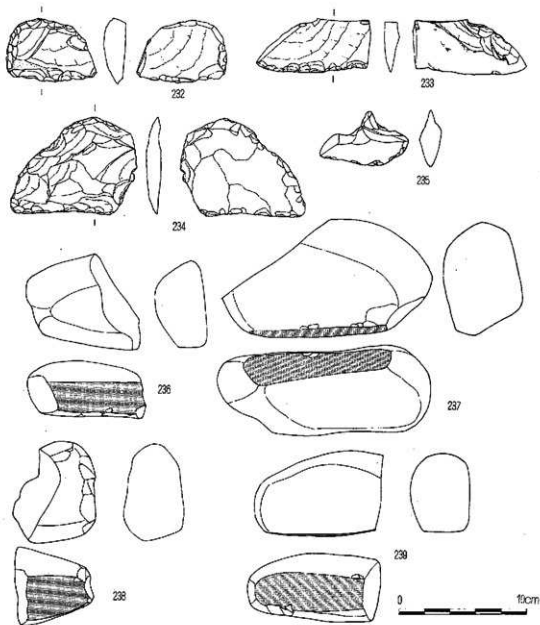
白色の骨は火熱による歪曲・変形が著しい。

大腿骨は骨頭部分、上腕骨は骨頭部分・骨付部、肋骨、頭骨などが識別できる。特に大腿骨の骨頭部からは成長線の痕跡があり、成長途次の若年の骨のようである。

##### 2号墓址

わずかの顎の細片に臼歯の残存のみである。

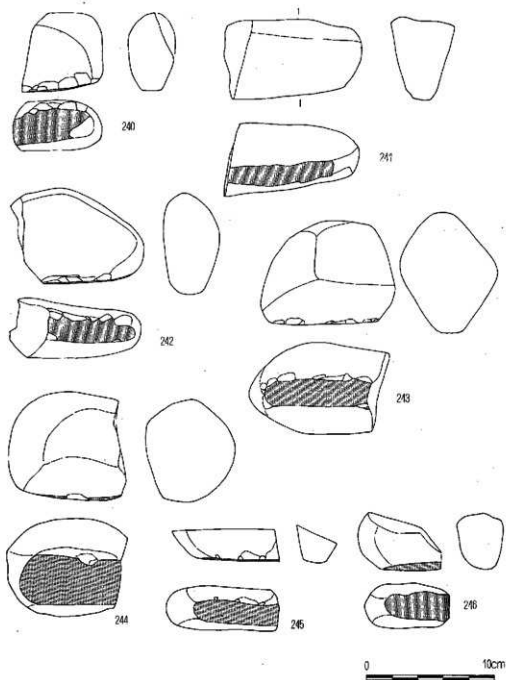
(寺島俊郎)



第89圖 這構外出土石器01

石器觀察表

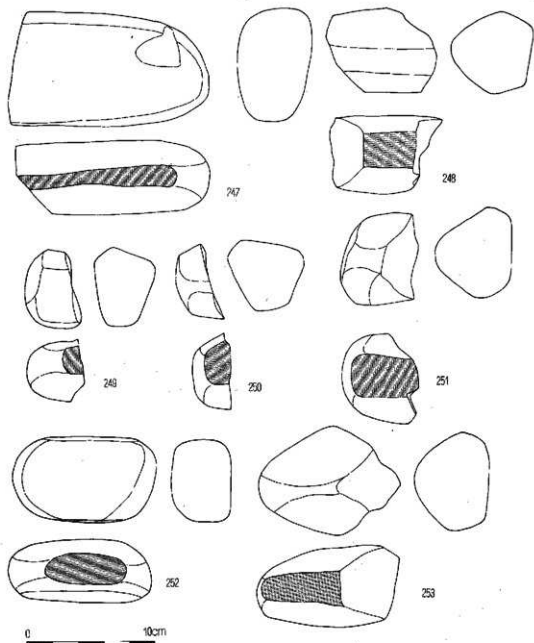
器号	器型序	種類	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
232	A 2	柄刀型石器	細粒結核岩	4.9	6.8	1.6	84	
233	B 2	"	"	4.2	8.7	1.3	62	
234	C 5	"	頁岩	7.4	8.7	1.1	84	
235	C 1	打片	"	4.2	6.8	1.6	30	
236	B 4	特殊型石器	火山噴出岩	8.8	6.7	3.9	332	
237	A 2	"	中粒砂岩	16.9	8.2	5.8	1190	
238	"	"	細粒砂岩	6.6	7.4	4.6	275	
239	A 3	"	"	10.4	6.4	4.8	435	



第90圖 遺構外出土石器02

石器觀察表

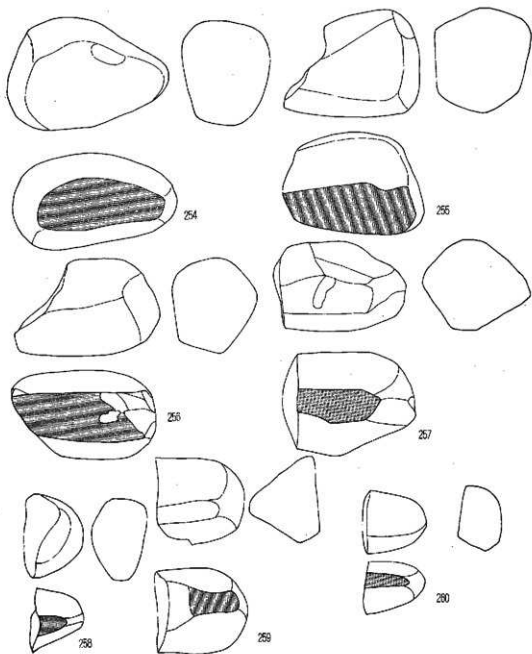
番号	層位	類別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
240	B-3	特殊磨石	粗粒砂岩	(6.1)	6.1	3.8	206	
241	A 5	"	安山岩	(10.3)	5.1	5.0	450	
242	A 3	"	粗粒砂岩	(20.6)	7.4	4.3	432	
243	C 5	"	中粒砂岩	(20.1)	9.4	7.6	830	
244	B 3	"	安山岩	(8.5)	8.5	7.0	768	
245	A 1	"	粗粒砂岩	(8.4)	3.5	2.8	92	
246	"	"	硬岩	(8.8)	3.6	3.6	115	



第91圖 遺構外出土石器⑬

石器觀察表

番号	層位区	種別	石器	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
247	B 3	砂粒磨石	細粒砂岩	15.2	8.9	4.8	240	
248	B 2	"	中粒砂岩	8.3	6.4	6.2	406	
249	A 3	"	安山岩	6.2	4.2	4.8	262	
250		"	中粒砂岩	3.0	5.5	5.7	112	
251		"	細粒砂岩	5.5	7.0	6.0	328	
252	C 6	"	中粒砂岩	11.6	6.4	4.7	630	
253	B 8	"	安山岩	11.2	8.5	5.8	430	



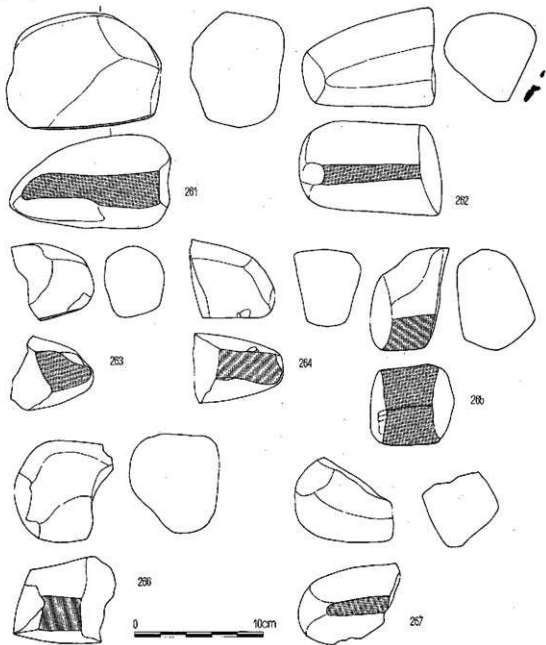
0 10cm

第92圖遺構外出土石器06

石器觀察表

番号	発掘区	種別	材質	長さ(mm)	山(mm)	幅(mm)	重量(g)	特徴
254	D 8	特殊燧石	燧石	12.8	8.5	7.0	200	
255	A 2	*	安山岩	10.7	7.8	7.4	798	
256	B 6	*	半粒砂岩	10.9	7.6	6.6	608	
257	C 7	*		9.8	7.0	8.0	720	
258	D 4	*	安山岩	4.7	6.4	4.2	122	
259	A 1	*	細粒砂岩	12.0	6.7	5.4	320	
260	B 4	*	*	4.6	5.4	3.5	82	

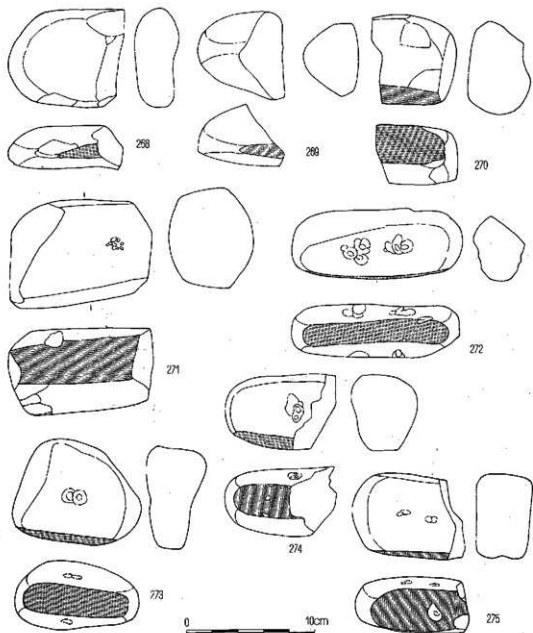




第93圖 遺構外出土石器09

石器觀察表

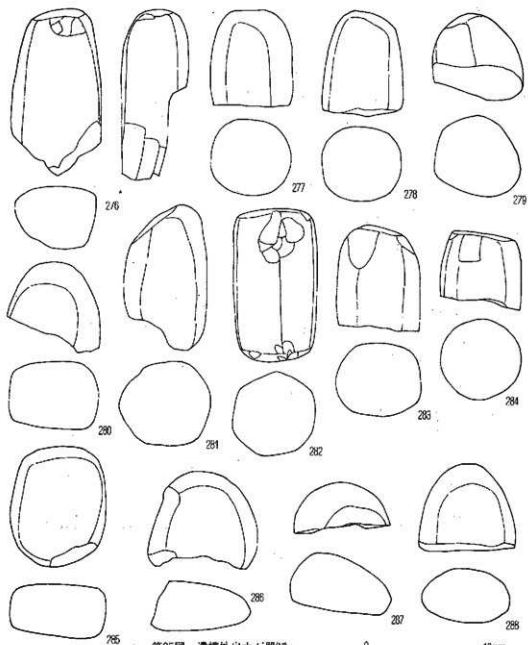
番号	列層区	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
261	D 4	特殊扁平	?	(12.1)	9.0	7.4	?	
262	E 8	*	内稜形器	(10.4)	7.6	7.0	795	
263	A 2	*	細稜形片	(6.5)	6.0	4.9	190	
264	B 3	*	*	(6.6)	6.1	5.3	262	
265	A 1	*	安山岩	(6.5)	8.0	6.0	360	
266	4	*	凝灰岩	(7.6)	8.0	7.0	422	
267	A 1	*	*	(7.7)	6.7	5.9	282	



第94图 遺構外出土石器05

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
268	B 5	片状磨石	凝結砂岩	( 8.5)	( 7.6)	( 8.4)		
269	A 4	"	"	( 6.8)	( 6.7)	( 4.3)	208	
270	A 2	"	"	( 6.4)	( 6.9)	( 4.9)	320	
271	A 3	"	"	( 8.2)	(10.7)	( 6.6)	970	穿孔あり
272	A 1	"	火山噴出物	12.2	5.5	4.3	370	"
273	?	"	"	9.9	7.9	4.6	510	"
274	B 8	"	凝結砂岩	( 8.5)	( 5.9)	( 5.1)	338	"
275	?	"	中硬砂岩	( 8.5)	( 6.8)	( 4.4)	384	"

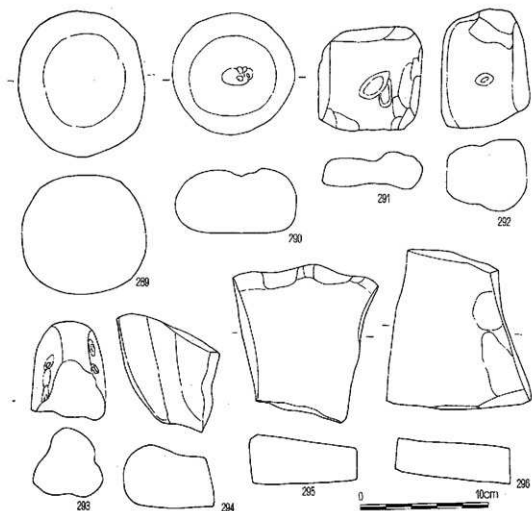


第95回 遺構外出土石器01

0 10cm

石器観察表

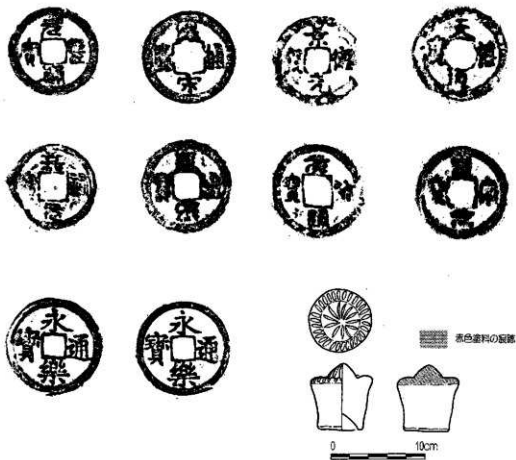
番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	口 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
276	B-5	磨石	中粒砂岩	3.1	7.1	5.0	380	
277	A-1	磨石	安山岩	7.5	6.5	5.9	380	
278	A-3	磨石	粗粒砂岩	8.1	7.0	5.9	402	
279	B-6	磨石	安山岩	6.4	5.9	6.3	345	
280	?	磨石	凝灰岩	6.3	7.5	5.5	288	
281	A-1	磨石	?	11.3	6.5	6.6	518	
282	?	磨石	?	12.0	6.6	6.5	705	
283	B-3	磨石	?	7.9	6.6	5.7	370	
284	?	磨石	安山岩	5.2	6.3	6.3	318	
285	A-3	磨石	?	20.1	7.5	4.2	409	
286	A-2	磨石	粗粒砂岩	7.5	6.5	3.9	268	
287	?	磨石	安山岩	3.5	7.5	3.4	150	
288	B-1	磨石	中粒砂岩	6.7	7.6	4.2	296	



第96圖 遺構外出土石器08

石器觀察表

番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
289	B-5	磨石	花崗岩	11.6	9.9	9.4	1,320	
290	"	磨石	"	9.5	9.5	5.1	560	
291	C-5	"	凝灰砂岩	8.3	7.6	2.7	260	
292	S-6	"	石灰質砂岩	8.6	6.9	5.6	500	
293	B-1	"	燧石	7.7	6.8	5.5	290	
294	B-5	石皿	火山噴出砂岩	9.0	7.7	4.7	365	
295	"	"	中粒砂岩	12.4	11.3	3.8	758	
296	R-4	"	安山岩	12.5	11.3	2.8	761	



第97図 古銭、土製品

## 8. 調査の成果と課題

### 1) 縄文時代の土器について

堂の前遺跡に対して行われた今回の発掘調査により、遺構外を中心としてまとまった量の土器片が検出され、かつまた、それらが縄文時代草創期から晩期にいたるまでのバラエティーに富む様々な土器群であったことは先に示したとおりである。ここでは、そうした個別・具体的な説明は先の記述に譲り、そこで明らかにしえなかった各土器群がそれぞれに内包する問題点についての補足的な検討を試み、合わせて本遺跡出土土器に対する現在のなまとめを行いたい。

#### ○第I群土器について

第I群土器は、器面の表裏に縄文が施文されることを大きな特徴とし、従来より、縄文時代草創期に位置づけられてきたものに相当する。いわゆる表裏縄文土器がこれに当り、岐阜県・梶の子遺跡出土土器を標式とする土器である。今日、これら表裏縄文土器については、その編年の位置づけ、とりわけ、縄文時代早期前半に位置づけられている燃糸文系土器や押型文系土器との関係を含めた時間的下限の問題が大きくクローズアップされてきているといえる（可見ほか1982）。今回本遺跡より出土した表裏縄文土器は、尖底をなす小型土器を含めて6片のみと少なく、第II群土器第I類、燃糸文系土器とよく似た分布をみせていた事実を除き、表裏縄文土器をめぐるこうした問題を解く糸口を提供することはできなかった。

#### ○第II群土器について

第I類土器は燃糸文系土器に比定される。上述したように、第I群土器の分布と類似した分布を示していたことが注意される。

第2類土器は押型文系土器に比定される。山形押型文、格子目押型文などがみられ、そのうち、山形押型文が施される第49図9・10は、押型文系土器の中でも古い様相をもつ土器を多数出土し今回同時報告されている福沢遺跡出土土器の第I群第A類2種土器に相当する特徴を備えている。この2点を除く他の土器は、帯状施文される11・15に問題を残るものの、押型文系土器の中でも比較的新しい時期の所産と考えられる。とりわけ、胎土に植物繊維を含み、山形状の文様を短沈線文で描く21・22はより後出的なあり方を呈している。

第3類土器は沈線文系土器に相当する。第50図23・24は田戸下層式に、25は田戸下層式～田戸上層式にそれぞれ比定される。26～29については若干の疑問の余地を残すものの、ここでは田戸上層式に含まれるものとして考えた。先端が歯状をなす工具によって施された多条の沈線文とヘラ状工具による刺突文とによって文様が施文される26～29は、その文様構成において、後続する貝殻条痕文系土器のそれとの間に一定の類似性をもち、田戸上層式の中でも後出的な様相をもつものとして扱えられる可能性を残しているといえよう。田戸上層式土器と貝殻条痕文系土器をつなぐものという考え方は、すでに神奈川県町田市・堂場遺跡において扱えられており（鈴木1972）、それに対しては批判的な見解も提出されている（関野1980）が、本遺跡より出土した26～29は、貝殻条痕文をとまなわぬこと、胎土に植物繊維の混入がみられないこと、さらに、施文具の相異などの諸特徴から、先の堂場遺跡例とは分離することが可能であり、またこれらの諸特徴は、本遺跡例が沈線文系土器の範疇で扱えうる妥当性を示しているとも考えられるのであ

る。

○第Ⅲ群土器について

第1類土器は、従来子母口式土器として、縄文時代早期後半、貝殻条痕文系土器の初頭に位置づけられてきた土器群の一部に類似するものである。子母口式土器については、今日、その型式内容とともに編年的位置づけに対する疑問が数多く提起され（鈴木 1987・瀬川 1982・安孫子 1982・毒島 1983）、総合的な再考が迫られていることは周知のとおりであり、当然、本例の型式学的妥当性、および、貝殻条痕文系土器の初頭、換言すれば、沈線文系土器と貝殻条痕文系土器との中間に位置づけることの蓋然性もまた問われるべきであるが、ここではそうした問題に深く立ち入ることは避け、資料の提示のみにとどめたい。

第2類土器は野島式に比定される。細隆起線文のみによる文様を特徴とするものであり、野島式の中でも古い段階にとどまるものと思われる。

第3類土器は、鶴が島台式、および、それに後続すると考えられる土器である。本類A種土器は、細沈線による幾何学的な区画文を特徴とするものであり、三本単位の細隆起線による縦位区画文・「段」をなすくびれ部が認められる。ただし、鶴が島台式土器のメルクマールの一つとされている幾何学的区画文の要所への刺突文は加えられておらず、充填される沈線文の一部が短沈線化し刺突状を呈しているのみである。

B種土器は、太沈線による幾何学的区画文を有するものであるが、区画文の文様・モチーフをA種土器とは若干異にし、また、細隆起線による縦位区画文も一本を単位としている点で趣きを変えている。

C種土器は、微隆起線や細隆起線による区画文と区画文の要所への刺突文とが施されており、鶴が島台式土器の最盛時に典型的にみられるものである。

D種土器は、本来ならば、鶴が島台式土器の型式的範疇を逸脱するものであるが、本様・モチーフにおける系統的関連性から、本類にまとめて考えた。区画文の規則性がほとんどみられなくなり、区画文と充填文との区別が不明瞭となる一群がこれに相当し、B種土器の一部に認められた、区画文の崩れと充填文の粗雑化という方向性の中で、系統的な変遷を考えることが可能である。

また、本遺跡における、これら土器群のあり方の特徴の一つとして、押し引きによる結節沈線が施されるものがきわめて少なく、今回同時報告されている塩尻市・青木沢遺跡例とは組成上の際立った差異をみせていることが挙げられ、両遺跡のあいだに時間的前後関係が存在する可能性を強く示唆している。

第4類土器は、多条の沈線と刺突により、先の第3類土器の文様構成と類似した文様が描かれるものであり、神奈川県町田市・堂場遺跡（鈴木 1972）、同伊勢原市・大入遺跡（戸田 1984）、さらに、東京都・東京・石川天野遺跡（倉田 1981）、などに類例を求めることができる。

堂場遺跡例については、田戸上層式と野島式とをつなぐものと位置づけられているものの、それに対しては批判的な見解が示されている（関野 1980）ことは、先にも述べたとおりである。

大入遺跡例については、報告者である戸田哲也氏によって、鶴が島台式の中でも新しい段階に

属するものであろうという見通しが示され、さらに、これらの土器群が「南関東地域では現在のところ良好な類例を見ず、……三浦半島の諸遺跡中に本遺跡例と類似するものが認められないことを重視すれば、丹沢山塊を含めた山岳地域……に分布する地域的様相をもった土器群としての可能性も考えられる。……」といった見解も述べられている。

東京・石川天野遺跡からは、本遺跡出土土器第53図87・88に類似した土器が「貝殻条痕文土器(古)の段階に属する土器」とともに検出されており、鶴ヶ島台式土器あるいは北陸系の土器ではないかとされている。

本遺跡例について詳細に見るならば、第53図87～第54図93がこれら遺跡例によく近似している。こうした土器群の時間的位置づけに対しては、本遺跡においても苦慮するが、やや趣を異にするものの鶴ヶ島台式土器の新しい段階に特徴的な「二重刺突」などをもつ一群(第54図94～100)との類似性に着目するならば、先の大入遺跡の報文において戸田哲也氏が示した編年観を妥当なものとする可能性もあろう。しかし、氏自身も関野哲夫氏からの教授として「野島式の最も新しい段階として考えられる可能性がある」と指摘しているように、これら土器群の時間的位置にはなかなか決して難しく、今後のより良好な資料の発見に機をゆずりたい。ただ、ここで注意されるのはその時間的位置づけは別にして、第53図87～第54図93に代表されるこれら土器群にみられる分布上の問題であり、本遺跡が戸田哲也氏により指摘された「山岳地域」の延長上に位置することに注目するならば、第4類土器を含めた本遺跡出土の第III群土器が従来、貝殻条痕文系土器の分布域として一括されてきた地域の実相を新たに問い直す契機をその内実に移しているとも理解しうるのである。

第5類土器は、ほぼ鶴ヶ島台式土器の時期の所産と考えられる。

第6類土器は、「なぞり」手法が用いられるものであり、貝殻条痕文系土器の中でもその後半に位置づけられている。茅山下層式～茅山上層式に比定される。

第7類土器は、連続刺突文を特徴としている。押し引き状・刻目状の刺突文が施されるA種土器は茅山下層式の古い段階に、米粒状ないしそれに類する連続刺突文により「山形状」の文様が構成されるB種土器は茅山下層式の新しい段階に、それぞれ併行するものであろう。後者に示したB種土器は、静岡県沼津市・元野遺跡(関野ほか 1975)に好例が求められ、同遺跡出土土器B類1種bおよびB類2種に相当する内容を呈している。同報文では、茅山下層式類似土器として、岡本勇らによる神奈川県横須賀市・古井城山第一貝塚の成果などをふまえたうえで、「茅山下層式土器～茅山上層式土器の中間」に位置づけられ、その後、同報文の報告者の1人でもあった関野哲夫氏によって、茅山下層式土器の後半に位置づけられている(関野 1980)。こうした時間的位置づけに対し、本遺跡例が茅山上層式に併行するとされる船型土器を全く併わなかったことから、本遺跡出土土器第III群第7類B種が茅山上層式以前に比定される蓋然性は高いものと思われる。また、本土器群の成立については、先行する鶴ヶ島台式土器からの直接的変化が想定されているようである(関野 1980)が、関野氏自らが元野遺跡の報文で述べているように、東海地方に主体的な分布をもつ船型土器の祖型として、八ツ崎I類から元野遺跡B類1種・同2種への独自の系統的な変遷をふまえるならば、むしろ、東海地方における主体性・独自性をこそ、早期



末葉という時代性とともて評価すべきであろうと考えられる。これと同様に、船畑式土器の成立についても、「東海地方の早期後半～前期初頭にわたって特徴的な入海系土器群の開始期にあたる船畑式が、南関東の茅山上層式の強力な影響下に出現した」（渡辺1982）ことのみならず、その母体となった東海地方の歴史的土壌をも積極的に評価すべきであろう。そして、こうした観点に立つならば、従来より指摘されている、早期末葉における長野県中・南部への東海系文化の浸透という現象の中で、本遺跡より出土した先の土器群を把握することも可能になると思われる。

C種土器は、爪形に近い刺突文が施されるものであるが、船畑式土器とは様相を異にし、ほぼ茅山下層式の新しい段階、B種土器に併行する時間的位置づけが可能であろう。

第8類・第9類土器は、縄文時代早期後半、貝殻条痕文系土器に伴う胴部破片ないし粗製の土器と考えられる。第9類土器のうち、植物繊維をあまり含まず焼成の比較的良好なA種土器は第3類土器に、胎土に余基母を多く含む一群であるB種土器は第4類土器に、それぞれ伴う可能性が強い。

第10類土器は、絡条体圧痕文が特徴的に施されるものである。従来、絡条体圧痕文が施文されるものはすべて子母口式土器とされ、早期後半、貝殻条痕文系土器の初頭に位置づけられてきたことは周知のとおりである。しかし、先述したように、今日、この子母口式土器については、その時間的位置のみならず、子母口式という土器型式そのものの「再考」が議論の対象になってきているといえる（鈴木 1978・瀬川 1982・安孫子 1982・壽島 1983）。こうした混沌とした状況の中で、絡条体圧痕文が施される一群の土器については、ある一種の時間幅と土器のパラエティを認めつつも、従来通り田戸上層式土器と野島式土器との中間に位置づける説、あるいは、野島式土器に併行させる説、茅山上層式土器の直後に比定する説などが提出されている。これら諸説について個々に検討しているゆとりはないが、絡条体圧痕文が施された土器群が内在させている多様性は、それを一土器型式といった一定の時間幅の中に限定してしまうことを否定しており、自から、時間と系譜を異にした土器群として位置づけることの有意性を首肯しているものと考えられる。こうした立場に立ち返って、本遺跡出土の絡条体圧痕文施文の土器を検討するならば、器面に貝殻条痕文をとどめるものが存在することや、胎土への植物繊維の混入度合などから、貝殻条痕文系土器の中でも新しい段階ないしそれに後続する時期がまず考えられ、さらに、本遺跡において、貝殻条痕文系土器の終末に位置づけられている茅山上層式土器に併行するとされる船畑式土器の出土が皆無であることを考え合わせるならば、本遺跡出土のこれら土器群が、必然的に茅山上層式土器以降に位置づけられる蓋然性は決して低くないものと思われる。ただし、本遺跡における今回の発掘調査では、東海地方において早期末葉に位置づけられている上の山式土器・入海式土器がそれぞれわずかながら出土していることを除き、その下限について明らかにしうる資料を得ることはできなかった。

第11類土器は縄文が施文されるものを一括してある。本類A種およびB種土器は、茅山下層式の後半期に位置づけられる第7類土器B種、あるいは第10類土器を中心とした茅山上層式土器以降の土器群に伴うものと考えられる。C種土器は前期初頭を含めて早期終末に、D種土器は第9類土器B種との関係がそれぞれ考えられる。

第12類土器は燃米文が施されるものである。本類の時間的位置については不明な部分を多く残しているが施文原体の類似性から、第10類土器と関連するものも含まれていることが考えられる。

第13類土器は東海系の土器であり、第67図295は上の山式土器、296は入海式土器、297～299は早期終末ないし前期初頭土器にそれぞれ相当しよう。

第14類土器は編年の位置づけに不明瞭な点を残すものであり、時間的に大きな幅をもっていることが考えられる。大方の御教示をいただければ幸いである。

(白瀬忠幸)

○第VI群土器について(第11号住居址出土土器を中心として)

今回の調査で第11号住居址の伴出土器は、注目すべきものであった。土器の出土状態は、いわゆる吹上パターンを呈し、半完形品、大型土器片が多数出土し、中でも従来共伴関係に乏しかった平出三類A系の土器(第 図 1、2、5)、角押文を主体とする土器(第 3、5、6)、長楕円区画文内の斜行沈線の特徴とする土器の三種類が共伴関係にあったことは注目に値する。ここでは、編年の位置付けの明確な角押文土器を主体とする土器を中心に、その他の土器との共伴関係について触れてみたい。

平出三類A系土器は、薄手作りで堅緻であり、煮沸用深鉢形土器と考えられている。分布地域は、八ヶ岳西南麓、諏訪湖周辺、天竜川流域であり、木曾谷、松本盆地の南信濃であり、この地域にのみ固有な土器であり、時間的には、中期初頭末から中期中葉に及ぶ、九兵衛Ⅱ式後半から藤内Ⅱ式期に位置付けられる。

今回出土の角押文土器についてみると、深鉢形では口縁部に特徴的な棒状隆線(貼付)をもつ。浅鉢は破片のみが数点出土しており、角押文土器系の浅鉢に特徴的な極端に肥厚した口唇部を持ち、その先端を文様帯としている。この土器を出土する遺跡は、諏訪、八ヶ岳山麓、中部地方、関東地方各地に分布するが、特に多摩、武蔵野、相模地域から諏訪湖周辺地域にかけて主体的な分布圏をなすようである。いわゆる猪沢式に比定されるものである。

斜行沈線の特徴とする土器は、松本盆地で主体となる土器と考えられ、新道式期から藤内式期初まで見られる。この土器の出土例としては、松本中の川第6、9号住居址が挙げられる。

角押文土器と平出三類A系土器の伴出例は、大石遺跡第16、18号住居址など諏訪湖周辺で多く見られる。伊那谷、木曾谷方面では、角押文土器は客体的な分布圏と言えるらしく、資料に乏しく、八ヶ岳南麓から山梨県下に至ると伴出例は激減する。塩尻峠以北では、祖塚遺跡Ⅳ号住居址、松本西堀B1号住居址が伴出例として挙げられ、両住居址とも角押文土器の出土量が多く、この土器が主体的な位置を占めていると言えよう。

斜行沈線の特徴とする土器との伴出例は、従来非常に乏しく、あえて挙げれば、妻野判ノ山山西遺跡第11号住居址、松本井の川遺跡があるが、いずれも良好な資料とは言えず、角押文土器との併行関係を示すまでには至っていない。

位置的に八ヶ岳山麓、伊那谷方面からの経路の接点にあると言える本遺跡第11号住居址が、従来資料が乏しかった角押文土器と松本盆地に主体的に存する斜行沈線の特徴とする土器の併行関係を示したものは重要なことであろう。また、平出三類A系土器もこれらの土器と伴出しており、

本遺跡の位置を考慮すると、八ヶ岳山麓、伊那谷、松本盆地の文化的な接点にある本遺跡のもつ意味を第11号住居址が如実に物語っていると見えよう。

以上のように、今回本遺跡より系統的に異なると考えられる3者の土器が明確な併行関係をもって検出されたことの意義は重要であり、なおいっそうの類例の増加が待たれるものの、土器の型式学的研究のみならず、先に述べたように、その文化的、社会的課題を解くための一資料を提供しえたと考えられる。

(三村 洋)

## 2) 縄文時代早期後半の石器群

堂の前遺跡で得られた石器は、総数380点で、その内訳は石鏃116、尖頭状石器13、スクレイパー112、石錐11、石匙8、打製石器32、横刃型石器8、磨石23、凹石7、特殊磨石47、石皿3であった。

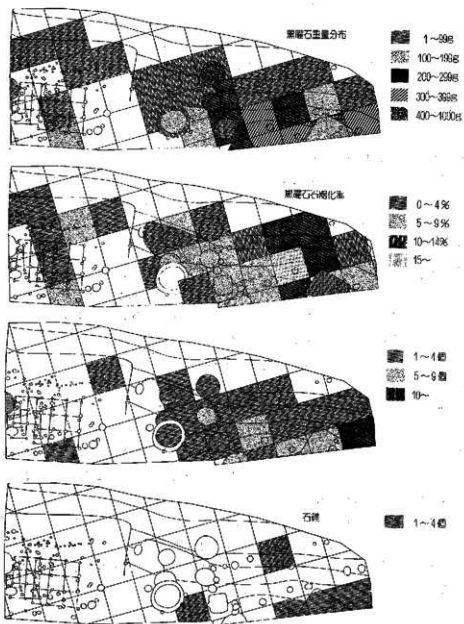
### 石器の分布 (第98~100)

すでに遺構の項で述べられているように本遺跡は縄文時代早期~中世まで断続的に遺構、遺物の分布がみられる。特に調査区西側には中世遺構が存在し、この範囲内に存在したであろう縄文時代の遺構は破壊され、遺物も滅失してしまっている。このため縄文時代に属する石器の分布も、中世遺構の存在する8~11区では発見がほとんどなく、プライマリーな分布状態を考えるさいの障害となっている。こうした遺跡の性格を考慮に入れたうえで第98~100図によって石器の分布状況を見てみたい。

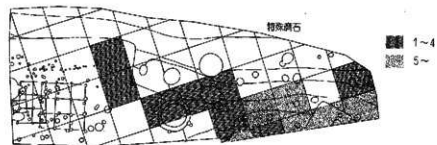
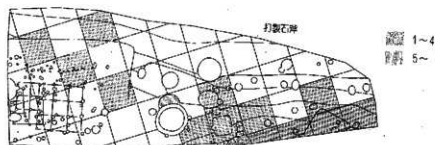
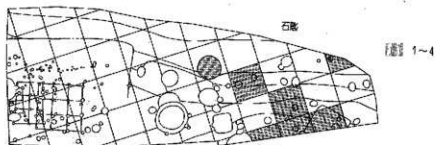
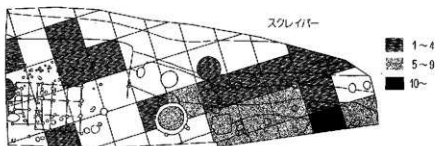
まず、全般的傾向としては、調査区域内で最も低位にあたるA1~3グリッドにかけて出土量が最も顕著で、これに隣接するB3~5においても前グリッドに次いで出土が多い。これに反し、早期、中期の住居址の密集するA~Dの5~7グリッドには比較的希薄である。遺構との関連性からみれば、むしろ小竪穴の分布する地区により濃厚に出土しているように見受けられる。

以下、器種別に分布の特長を検討する。

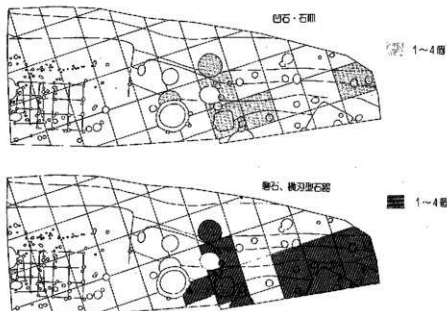
最初に石鏃、石錐、スクレイパーなど黒曜石製の石器についてみたい。剥片、製品の総重量は6110gで、このうち石器として利用されたものは472.1gとなっている。つまり、遺跡に運び込まれた石材の約8%が石器として使用されたことになる。遺跡内に持ち込まれた原石の石器化率の高低は、他遺跡での分析が全くできていないので比較対象できないが、かなり高いのではないかと推測される。遺跡内に運び込まれた黒曜石の各地区別の重量分をみると、A1が490gと最も高く、A3、4、B4がこれに次ぎ400gを越えている。200~300gの出土があったのはB3、A~C5で比較的高い数値を示している。これに対し、B1、C、D列では出土は希薄である。地形的に低地域と6号、10号住居址周辺に集中化が著しいことがうかがえる。こうした黒曜石(原石、剥片)の分布に対し、では製品としての石器の割合はどのような関連性が認められるであろうか。まず、B3では出土黒曜石の3割が石器化されており最も製品化率が高い。これに次いでA~Cの2~3地区が1割前後と比較的高い率を示している。つまり、小竪穴の集中地区に高い割合があるといえる。これに反し、住居の密集地区であるA~Dの5~7地区では石器化されたものは少なく、1割以内である。4~6、11号住居址内でも5~10%と周辺のグリッドと同率で住居址だ



第98圖 石隴出土分布圖(1)



第99図 石器出土分布図(2)



第100図 石器出土分布図(3)

からといって高い割合を示すこともない。

さて、では次に個々の石器の在り方をみよう。

石錐は、6、10、11号住居址とA1グリッドに多く出土している。他の剥片石器(スクレイパー)れる。その石錐はA1~3、B6の低地帯で多く得られているが、これといった特徴は見い出せない。スクレイパーはA1、3~4、B3~5、C6、7に集中があり、比較的広範囲に分布している。特に黒曜石片が多く出土した地区と同一地区に分布する傾向がみられ、他の石器が原石の分布と微妙なくい違いを示しているのに対し、このスクレイパーは類似した分布状況を呈している。黒曜石片を加工することもなくそのまま使用したものが多点多から同一の分布を示しているであろう。

打製石斧は、中期の住居(4、11号)を中心として、A、B列のグリッドに散在する。出土の様子をみると、これらの石斧が中期に属する可能性の高いことが理解できる。磨石、横刃型石器はA、Bグリッド全体に散布しており、集中化は著しくないが、強い主たる分布域を示すすればA~Dの5グリッド、すなわち1号、6号、2号、11号住居を中心とした地域と、A~B1~3があげられる。前者は中期の住居に、後者は小竪穴群に関連する在り方とも受けとられるが、明確さを欠いている。こうした中期的石器群の分布が中期の遺構の周辺に比較的分布するように見受けられるのに反し、特殊磨石は、A、B1~5、C5~7と中央部から下位までに分布し、特に10住居周囲の低地帯からの出土が著しい。

以上のように、石器の分布状況を概観してみると、遺構内からの出土が少ないこと、全体的に

低地位からの出土が多いこと、各器種間での分布差がそれ程顕著には認められないことが指摘される。しかし、徹視的に観察すれば、上述のような偏在性も看取できる。

### 特殊磨石 (第101図)

衆の前遺跡から出土した特殊磨石は、49点にたつする。この種の石器は、原石である河原石を定形化した形態に整えることなくそのまま使用し、その一端ないし2～3端に磨面を形成するものである。したがって、この石器の形状は原石の形態に大きく規定される性質をもっている。しかし、原石の選石の過程で許容範囲内での一定の統一した形状の礫を選択使用しているものと考えられる。ここでは、平面形による分類は欠損しているものが多く不明確であるため、断面形態を分類の基準とする。そして、機能面である磨面の形状による分類を付がし、以下のように分類した。

断面形—A三角形状を呈するもの

B長い三角形状を呈するもの

C丸味をおびた三角形状を呈するもの

D横円形状を呈するもの

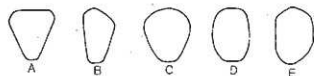
Eその他 (不整形のもの)

磨面 I 研磨面のみなもの

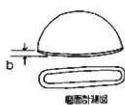
II 研磨面の側面に打痕を有するもの

III 研磨面の面側面に打痕を有するもの

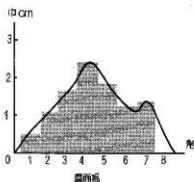
A～Cは三角形を基準とし、その頂部に磨面をもつ典型的な特殊磨石である。1～3面の磨面



特殊磨石分類図



磨面分類図



第101図 特殊磨石属性図

を有する。Dは2側面あるいは片面のみに磨面を有する。

出土した特殊磨石を分類すれば、AⅠ10、AⅡ4、AⅢ2、BⅠ1、BⅡ1、BⅢ0、CⅠ5、CⅡ1、CⅢ1、DⅠ10、DⅡ2、DⅢ3、EⅠ6、EⅡ0、EⅢ1である。三角形状を呈するA～Cが25点となり過半数を示している。三角形状のものがこの種の代表とされていることも理解できる。

大きさは、欠損しているものが多く、2割を占めるため、明確に知ることはできないが、わずかな定形品を参考にすれば、長さ9～17cm、厚さ4～8cm、重さ550～1150gが中心となるようである。手に持つに、扁平で持ち易く、上下・前後に移動させるには適切な大きさ、重量といえる。

磨面 磨面は、棒状の原石の長軸に研磨面が作出されているため狭長な平担磨面となっている。磨面幅は、原石の断面形態に左右されることが大きく個体差が著しいが、第101図によって全体的な傾向をみることを2～2.5cmを頂点として、曲線を描いている。中期に盛行する磨石と比較した場合、この磨石幅の狭さが特徴的である。一般にいう磨石の磨面とは根本的に異なっており、磨石との類似点を強いて探すとすれば、石ケン形の磨石の側面の形状に類似点を認めることができなくもない。磨面は、全く平滑というものは稀で、断面でみるとややカマボコ形を呈している。第101図aは2～3mmをはかり、bは両端とも4～5mmを示すものである。このことから、この石器は研磨する際、前後、左右にわずかな揺れをなして用いられたことが分かる。また磨面の表面は石材の性質にもよるが、ザラツキが目立ち、中には明らかに敲打痕を残すものである。敲打痕は、磨面側縁に残されるものがある。一側縁のものと同側縁にあるものがあり、一側縁のものは8点、同側縁のものは6例で、ほぼ同数値を示す。本遺跡の例では敲打痕のあるものは、全体の2.5割であることから、全てに共通する特徴とはいえないようである。多摩ニュータウンNo52遺跡の特殊磨石の観察では、「a面(磨面)の縁辺に沿って細かな剝離痕が並ぶ例がある。これは、使用時に生ずる損傷なのであるか、a面を作出する際の調整痕なのであるかの判定はなし難い」と述べられている(小林 1966)。また、八木光則氏は、この剝離痕および機能磨面と直角方向に折損しているものが多いことを積極的に評価し、「敲き磨く作業に供された」とその用途論の重要な根拠としている(八木 1975)。

石材 使用されている石材は、細粒砂岩42%、安山岩23%、中粒砂岩19%、凝灰岩12%、礫岩4%で、5種類の岩石が使用されている。このうち砂岩である細粒砂岩と中粒砂岩を合わせると61%となり、最も多用されたものが砂岩であったといえる。これに安山岩を加えると84%となりこの2種類の石材が、特殊磨石の用途に最も適合していたことがうかがえる。磨面のザラツキはこれらの石材の性質の結果によるもので、この種の石器の使用には、こうしたザラツキが必要であったのかもしれない。

使用時期・その他 特殊磨石は最初押型文土器に特徴的に伴出する石器として注目された。その後、燃糸文期にも相伴することが知られるようになり、最近になり条痕文系土器群にも付随することが明確になりつつある。本遺跡では、押型文土器の出土が極めて少なく、この僅少な押型文土器に特殊磨石が伴ったとは考え難く、しかも出土した地区および伴出土器が条痕文系土器であったことから、これらの土器群に付随するものと考えられる。



特殊磨石の使用には、磨面が三角形の頂部あるいは楕円形の縁辺にあるため不安定さがつきまとう。あえて、この部分に幅の狭い磨面を作出し、使用したことにこの石器の用途を解く鍵がありそうである。また、打製石斧、凹石、石皿、磨石など植物採集加工具が少ないこの時期に、研磨を主たる機能とするこの石器が多数出土する点は、その用途を明らかにするうえで見逃せない点である。また、今回のような多量出土の実態をみると、この時期の生産活動を解き明かすうえで極めて重要な位置を占める石器であるといえる。

#### 石器組成

本遺跡出土の石器は、狩猟具の石鏃30.5%、尖頭状石器3.4%、植物採集加工具の打製石器8.4%、磨石6.0%、凹石1.8%、石皿0.7%、工具の石錐2.8%、石匙2.1%、スクレイパー29.4%、そして用途不明の特殊磨石12.3%である。こうした石器組成の状態を他地域と比較し、その特徴を数えてみたい。早期後半期の石器組成は各地域ごとにその地域に即した石器組成が発達した時期である。堂の前での石器組成の在り方を中部高地を代表するものとするれば、これに比較的類似した在り方を示す地域は多摩丘陵から伊豆半島周辺である。そこでは、多量の打製石斧、石皿、磨石、特殊磨石を中心に、石鏃、礫器といった組成を示し、特に田中谷戸、清水柳では200点近い磨石(一部特殊磨石)をもっている。中部高地では石鏃、尖頭状石器、特殊磨石が他を圧して優位にあり、これに、打製石斧、凹石、磨石、石皿が少量伴出し、石器群の構成は両地域とも類似性をもっている。しかし、量的に石器群を検討してみると、多摩地域では植物採集加工具がより充実し、中部高地では狩猟具の卓越が指摘できる。特に中部高地におけるこうした組成の状態は前時期の押型文期からの発展状況を示しており、石鏃、特殊磨石の出土は押型文期における生産活動方法をより発達させた姿と考えられる。

この時期は「ゆるやかな発展」の時期であるといわれているが、石器組成の面からみると前時期の組成内容の充実によってもたらされたものであり、石器群の質的変換によってなされたものではなかった。ここに、この時期の発展の限界性がひそんでいるが、しかし、こうした石器の充実に象徴される生産活動の向上は、先きにみたように集落規模の拡大、充実化をもたらしたものと見える。

(小林康男)

### 3) 縄文早期末の住居と集落

早期に属する遺構としては、第3、5、6、7、10号の5軒の住居址と第20、26、27、29号の小竈穴、第1、2号集石がある。

#### 遺構の分布

堂の前遺跡は、前項でも述べたように、丘陵から低地におけるその斜面に立地する。このような遺跡立地の在り方は、同じ長畝地区に所在し本年度中央道関連で調査された栗木沢でも遺構は発見されなかったが良好な遺物が得られたようであるし、市内東山の青木沢でも遺物の濃厚な分布が認められ、この時期の遺跡の在り方として共通性がみられる。このような遺跡の立地状況を従来までの遺跡立地の観点からみると、集落が営まれるには不安定な地点といえる。今まで遺跡分布の在り方としてはあまり顧みられることの薄かった場所といえよう。しかし、今回の調査に

よってこうした一見不安定な地形に遺跡が発見され、しかも集落を営んでいたことがはっきりするに及んで、立地問題を改めて考えなおさなければならないとの観を強くした。こうした不安定な地区への立地はすでに元宮神社東遺跡の報告において桐原健氏は「不安定な扇状地、それもあまりにも小さい長坂川扇状地の扇端に縄文早期末の遺跡があったことは驚異であった。…山の押出しの危険のある小扇状地の扇端に営んだことはどう理解したら良いのであろう」と述べている。早期末の遺跡の在り方として今後注意されるべきであろう。

#### 住居の形態と変遷 (第102・103図)

調査範囲が狭いため、遺跡の広がり全体的に把握することはできなかったが、凡その配列状況は推測できる。住居配列の様相をみると、3、5、6、7号の西に位置する一群と東にある10号の住居地は20mの空白部をはさんで対峙し、2群に区分される。

では、まず遺構の変遷を検討したい。出土土器から遺構の時期を決定するには土器の出土状況が悪く、しかも出土した土器は今だ編年が確定したものとなっていないため、時期差の微妙なものについては所属時期を決定し難く、出土土器の項でも述べられている如く時期差を識別することはほとんど困難な状況にある。そこで、遺構の重複関係の検討を通して時期別変遷をみると、次のように考えられる。まず、第3、5、6、7号は重複関係から3、5→7→6という前後関係が把握でき、また10号出土の土器の様相は6号出土土器より古く、7号より新しいしは同時位に位置づけられる。また、住居以外の遺構では第20号小竪穴が7号住居を切っているため、7号よりは新、第1、2号集石は第10号住居の上部に検出されたため10号よりは新となる。

このような大雑把な把握しかできないが、これに基づいて集落の移り変りを検討してみたい。まず、3号ないしは5号の住居址が出現する。3号と5号との間隔は2m位しかないことから考えて同時存在は考え難いため、いずれか一方がまず出現したものと思われる。5号のプラン、規模は不明瞭であるが、おそらく3号と大差ないものと考えられ、両住居とも径2.5m前後の円形を呈し、住居としては小形のものであり、また屋内に炉の設置がなされないものであった。本遺跡の最初の居住者は、こうした小形、貧弱な家屋をその住まいとした。こうした小形円形で、炉址をもたず、壁下に柱穴を多数もつものは県内でも元宮神社東、棚畑などでも類似があり、この時期の住居址の一般的な在り方といえる。こうした状況はひとり中部地方のみの現象ではなく、関東地方でも同様の様相を示しているようである。

3、5号住居の次に出現するのは7号住居址である。この住居は今回の調査で最も話題になった大形住居である。中部地方においてこの時期の大形住居の発見は本址が最初の例と思われる。長径13m、短径4mと推定されるこの住居は、円を基本とする点で先行する3、5号住居の采譜に連なるものといえるが、その規模の突然変異的拡大化は、まさに突如として出現するという観がもたれる。床面積では3、5号址のおよそ10倍となっている。また、しっかりした周溝が付設され、それまでとは異って長大な墨根を支えるために複数の支柱穴が設けられ、住居としては一段と完備したものとなっている。しかし、今だ墨内に炉は持ち込まれず、支柱穴も15cm内外と浅く構造的にははなはだ不安定なものである。早期末には建築技術の進展によって大型住居の建設が可能となったことは、すでに指摘されているが(宮本 1983)、7号址はこの良い例となろう。

7号址は、前述したように円形住居の系譜の中から生まれてきたものであり、いわば3、5号址の延長上に位置するものである。このように西側に占居する住居は円を基本として発展しているのに対し、7号址と同時期ないし若千時期的に降る東側に存在する10号址は方形を呈し、西地区のものとは明らかに形態を異にしている。こうした円形、方形プランの混交はすでに長崎元広氏によって指摘されており、「早期においては、円形系統が卓越するなかで、その後半には方形系統も加わり混在した姿がみられるのである。」と述べている（長崎 1979）。

さて、10号址が出現した頃、第20号小竪穴が併用されている。20号小竪穴はいわゆる袋状を呈するもので、集落の一角に小竪穴の設置がなされていることは注目される。かつて堀越正行氏は小竪穴を論じた長大な論文の中で、木の実貯蔵用の小竪穴の初現を下諏訪町浪人塚下遺跡（三戸式期）に求め、「早期後半の所謂沈線文、貝殻条痕文系土器群を共有する時空において木の実貯蔵が試行されたということが出来る。」とし、その出現意義を「季節変化が大きい温帯での食用植物は、その収穫期が限定され、いつでも自由に食べられるということはない。秋に限られた収穫時期でしか得ることができない木の実を何とか保存したいという試行が、早期後半の段階に認められたとしても不思議ではない。秋の一時期に木の実類を採集、貯蔵し、それを安定食料として狩猟に出たり、黒曜石の原石をとってきて石器を製作したという生活が復原されるのである。」と述べている（堀越 1976）。本遺跡の住居址群と小竪立群の共存は、かなり安定した集落が営まれていた証拠といえ、この地域での該期の核的集落の存在を裏づけるものといえる。

さて、堂の前遺跡の早期住居址群中最終末に比定される第6号住居址は、再び小形の円形となっている。しかし、3、5号住居のようなきしゃな造りではなく、しっかりした床面と壁面、そして3本の支柱穴が穿れている。すでに壁柱穴は存在しない。しかし、この段階になってもまだ炉址は設置されていない。早期末にはすでに地床炉、石囲炉の存在が知られ、関東では地床炉をもつ例が多くみられるようになるが率からいえば炉をもたないものが圧倒的に多いのに対し、中部地方では炉設置の住居の率はやや高いとされている（長崎 1979）。堂の前遺跡の住人はやや後進的であったのだろうか。6号址の住人の使用したとも考えられる集石が10号住居の上位にあり、炉とする積極的な根拠は見い出せなかったが、これらが屋外炉の役割りを果たしたものかもしれない。

以上のように、3、5号（小形円形）→7号（大形楕円形）→10号（方形）→6号（小形円形）という変遷が跡づけられる。このように集落規模としては小規模なものであるが、住居、小竪穴、集石が有機的関連性をもちながら検出されたことは該期の集落形成を考えるうえでなおいに注目されてよい。

なお、本遺跡に隣接する福沢遺跡（約200m西方）でも早期終末の遺物が若干出土している。これらの土器は、本遺跡出土土器群のちょうど空白部を埋めるものであり、両遺跡が近距離にあり、同一遺跡の可能性が高い。短時間に微妙に立地、占地的変化がみられるといえるだろう。今度、両遺跡間の未調査地区（今回は調査対象地区外）の掘削を調査することによって、より詳細に遺跡の動きが知られよう。

さて、県内における早期後半の集落の様相をみてみたい。浄水坊、中島平、元宮神社東、北高

第3表 県内早期後半住居址一覧表

遺跡名	所在地	時期	プラン	規模	炉	柱穴
新水2号	望月町	川戸系	400450			
3号	"	"	400×400	楕円形		石?
浄水坊1号	"	芳山	500×415	"		7
2号	"	"	500×	"		4
中島平1号	"	"	300×270	"	石置炉	4
元宮神社東A号		条痕文系	390×280	小判形		39
B号		"	730—570	長方形		
C号		"	450×300	隅丸方形		7
堂の前3号	塩尻市長敷	"	250×250	円形		壁柱穴多数
5号	"	"		"		
7号	"	"	130×400	長楕円形		
10号	"	"		方形		
6号	"	"	230×290	円形		3
北高板A8号		木島I	595×520	方形		5
			780×600	楕円形		なし
カゴ田114号	塩田町		340×300	円形	地床炉	
228号	"		410×410	"	"	
316号	"		395×295	"	"	

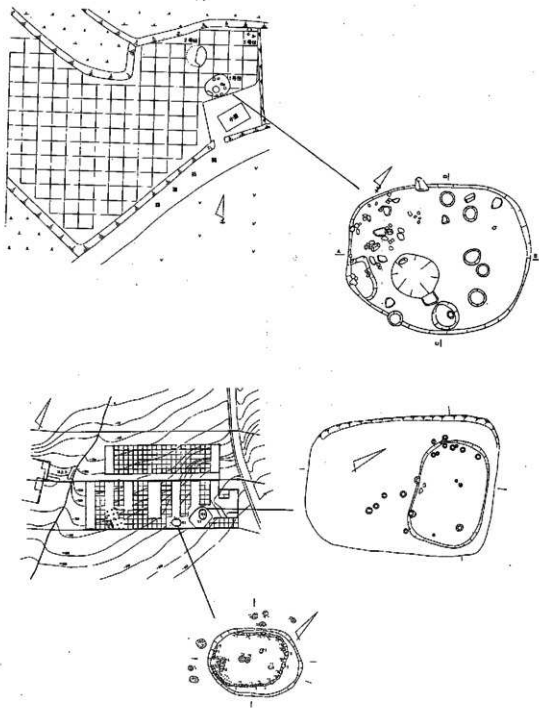
根A、カゴ田などが該期の集落址としてあげられる（第5表、第102図）。

浄水坊では茅山期に属する2軒の住居が発見されている。1号は5×4.15mの楕円形で柱穴があり、2号は5m前後の楕円形である。他に集石、小竪穴等の施設はみられない。中島平は、茅山式を出す住居で、3.0×2.7mの不整な楕円形を呈し、しっかりした4本の柱穴と石置炉がみられる。小竪穴が1基付随する。元宮神社東遺跡では、3軒の住居と小竪穴が発見されている。A号住居は3.9×2.8mの小判形で、39ヶの小ピットをもち、B号は7.9×5.7mの長方形で、C号は4.5×3mの隅丸方形で、床面に17ヶ小ピットがみられた。これらの住居と20mほど離れて4基の小竪穴が存在する。北高板Aでは、第9号址が台形、10号址が楕円形を呈し、カゴ田例は、114号址が3.0×3.4mの楕円形で地床炉を有し、228号址は4.1×4.1mの円形で、周溝地床炉を有し、316号址は2.95×3.95mの楕円形で北床炉をそれぞれもっている。カゴ田では多数の小竪穴が検出されている。

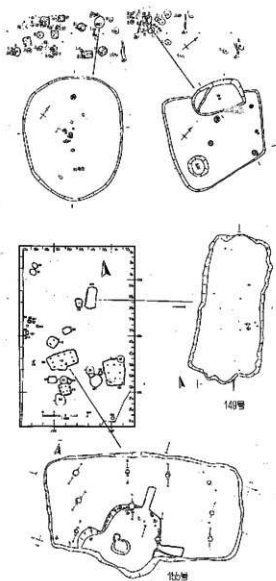
以上、県内での該期集落の調査例ははなはだ少ない。これらの例を通覧していえることは、1～2軒程度の住居址とそれに伴う小竪穴、集石（厩外炉）をもったものが一般的な在り方であったといえる。このような集落形態は、時間的に逆上る押型文期にすでに出現しており、条痕文系土器の時期には、大形住居、屋内炉に示されるようにより発展した形での集落が展開したといえそうである。特に、今回の堂の前で発見された多くの住居址、大形住居、小竪穴の存在、多量の出土遺物は、すでにこの時期にはかなり安定した定住生活が営まれていたことがうかがえる。

#### 大形住居（第103図）

今回の調査で発見された第7号住居址は、おそらく中部地方では初めてと思われる早期に逆上る大形住居である。大形住居は、中期に属する富山県不動堂遺跡での発見を初めとして、以後、日本海沿岸を中心とする東北日本で発見が相次ぎ、昭和57年刊行の「縄文の集落の大型住居」（高野 1982）によれば22遺跡にたっている。中村良幸氏は、大形住居を形態と炉の状態から9種



第102图 早期住居址(1)上浄水坊、下元宮神社東



第103図 早期住居址(2)上北高根 A、下中曾根 II

に形式分類し、このうち早期に属するものとして（隈丸）長方形、長楕円形（小判形）で主たる炉址がないことを特徴としてあげている。

現在、早期に属するものとしては岩手県二戸市中曾根 II 遺跡 149号、155号、同市長瀬 B 遺跡 B 103号と今回の堂の前 7号址の計 4軒である（第103図）。

中曾根 II 遺跡の 149号は、長軸 9.8、短軸 3.6mで、プランは長方形を呈し、床面積は 34.9m<sup>2</sup>をはかる。内部施設の柱穴、炉、周溝などは発見されていない。155号は、長軸 12.8、短軸 6.1mの長方形で、床面積は 84.2m<sup>2</sup>と 149号のおよそ 2倍の面積となっている。床面は非常に堅固で、主柱穴

は北、南側に約3mの間隔で4本、中央に3本整然と並んでいる。周溝および地床炉はない。これらの住居の帰属年代は、149号は床面より小形尖底土器が、155号では尖底鉢がそれぞれ出土し、これらとともにII群（円筒下層式直前か平行）が出土し、早期最終末か前期最初頭に位置づけられる。

長瀬B遺跡は、報告書が未刊行のため詳細は不明である。富樫氏の集成によれば、長軸9.6、短軸7.3mの隈丸長方形を呈するようである。炉はないようである。時期は早期中葉とされている。

以上、少ない資料であるが早期の大形住居の総括をしてみよう。

大きさでは、中曾根155号、長瀬B遺跡103号は長軸に比して短軸が幅広となっており、中曾根149号と堂の前7号は狭長である。早期の大形住居としては狭長なものと同幅の2種類があるようである。平面形態では、長方形ないし隈丸方形の方形系列と長楕円形とがあり、楕円形が中部地方に存在するので、こうした形態差は地方差として扱えられるかもしれない。ともに住居址に炉址は設置されない。炉址が設置されるのは中村氏によれば前期中半の円筒下層Ⅱあるいは大木2式頃からとされている。柱穴は深さがあり、しっかりした主柱穴のほかに、堂の前では壁柱穴がある。こうした壁柱穴の存在は、早期の大形住居だけでなく、前葉に入っても認められる。周溝は、中曾根IIでは2軒ともなく、長瀬では不明、堂の前のみが存在する。壁柱穴と周溝とは密接な共存関係を示しているようである。

さて、このような大形住居の集落内における在り方はどうであろうか。長瀬Bでは103号住居のほかに4軒の住居（一辺6m前後の方形が3棟、径3～2mの円形が1棟）がある。しかし、未報告のためこれら5軒の関連性ははっきりしない。中曾根IIでは、報告者の関氏は「149号址、155号址、193号址とした大型住居址を核として、これに小形の住居址である150号址、161号址、162号址等といった小形住居址や、177号址、219号址といった中形の住居址が、その周囲に並ぶ様々、大形住居址1戸に対して、中、小形の住居址1～3戸程度が付帯するといったような小規模な集落構成、或いは集落の構成単位が考えられる」と、集落内の中核的存在としている。堂の前では、他に4軒の住居址があるが、共存の可能性のあるのは10号住居址のみで、中曾根II遺跡での分析はそのままではめられないようである。後に出現する大形住居が「一種の規制された」場所に建設されたと同様の特異性は見い出せない。

大形住居の建設目的は何であったか。前期以降のものに対して、中村氏は「集会所」であるとされている。そして、同論文では、早期の例を「規模の大小という規準でしか考えられない」として積極的な評価を与えていない。たしかに屋内での作業を目的とするには炉址がないこと、出土遺物が少ないことなど前期以降の一般に大形住居といわれるものとは異った性格をもっている。出現当初はその主目的が作業小屋として建設されたのではなく、集会所的な用途、あるいは一時期集落構成員全員が居住するような目的の建物であったものが、炉址が室内に取り込まれるようになった時、室内作業がその目的の中に付加され、性格が多様化していったものではないだろうか。したがって、早、前期と時期が近接して生じた大形住居は、系譜的には一系のものであり、用途が変質したものと考えたい。前、中期の大形住居も作業小屋とのみにその用途を限定するのではなく、多目的な用途を考えても何ら不都合なことではない。かつて、長崎元広氏は、「渡辺氏の

雪国の縄文家屋説、共同作業小屋説は魅力的」としながらも、「集会用、祭祀用、共同作業用、あるいは大きな家族用、首長や司祭者といった特定者用、といった用途案のいずれかを択一的に採るのではなく、複数の用途の複合した場合も、考慮していかねばならない。なお、年齢階梯制社会では、この種の特別な公共的な家屋が集落内に設置されている事例が非常に多いという点にも留意する必要がある」と、大形住居研究の用途をまとめている(長崎 1980)。傾聴すべき見解である。

堂の前遺跡で検出された第7号住居址は、中部、関東地方ではおそらく最古の大形住居であり、この時期の住居、集落研究に重要な資料を提供した。これからは空想的に遠距離にある岩手県との空白部の検討、前中期との時間的差がり、その性格など多方面からの考察が必要となってこよう。いずれにしても、早期後半期の集落は今まで考えられていたよりも、より多様性を帯びたものであったといえる。

(小林康男)

#### 4) 堂の前・福沢遺跡の周辺について

「塩尻地史」「塩尻町誌」によれば今の永福寺の朝日観音堂は現在にいたるまでには幾度か変転をたどっているがその草創の頃の場所は長飲の字前山であり、その前麓の畑を字堂の前とよぶとっている。ここにまつられた観音は駒形の二字をつけた駒形馬頭観音とよんでいる。馬頭観音はいうまでもなく牛馬の守本尊としてまつられたものであり、前山の南の沢にある堂の前、福沢を中心とする東山一帯に放畜をしていた人々の崇拝の対象としてまつられたものと思われる。しかしこの位置より登ってゆけば東山の中腹にあたるところに長者平(古牧場付近の牧長の居館のあったところ、また長者は牧長のことをいったといわれる)という地名ものこっており、もっと古い時代には牧場も長者平のあたりにあり、観音堂もこのあたりにあったものと思われる。

また木曾義仲はこの観音を厚く信仰していたという伝説があるが「地史」は義仲奉兵前佐久の根井氏、諏訪の金刺代との往来の途次参拝した軍儒の上からも義仲の牧場への着眼はあり得べきことであること、また義仲の後、永正の頃義仲十二代の孫、木曾源太郎豊方(木曾福島城主)の孫に当り豊方の子家方の三男である木曾左馬頭義方(剃髪して文明と号す)が当地に来り今の塩尻古町の西端字観音堂へ移し伽藍を建立し、祖父豊方を開基とし義方自ら開山となり、豊方の法号「長福寺殿春豊英公大禅定門」をとって長福寺(後に永福寺と改名)と命名したことをあげてこの伝説の真実ではないかということを強調している。また福沢については「塩尻地史」年表に明治34年5月長飲福沢より神代文字の石出ず、阿礼社奉遷とあり、この石は現在阿礼社境内に保存されている。

またこの遺跡の近くに塩沢飯泉、おぬけ屋敷、牛沓、高山城などの地名があり、又伝説も残っている。

#### 9 まとめ

(中島章二)

堂の前遺跡の調査によって得られた成果は多岐にわたる。

まず、遺跡立地の在り方に新知見を加えたことがあげられる。今回の調査地域は丘陵と低地とを結ぶかなり強い斜面であり、従来まで遺跡立地としては顧みられなかった地域といえる。こう



した不安定ともいえる地勢の中に集落が営まれていたことは今後のこうした地形への遺跡立地を  
考える際の貴重な一資料となり、また、今まで見過ごしていたこのような地形も改めて遺跡の所在  
地として見直す必要がありそうである。

次に、縄文時代早期の遺構、遺物の成果がある。早期終末期に属する5軒の住居址、小竪穴、  
集石は県内ではほとんど未発見のものであり、しかも集落規模でこれらの遺構群が把握されたこ  
とは大きな成果である。とりわけ、大形住居の第7号住居址の発見は、中部地方で最古のもので  
あり、全国的には貴重な資料となるものである。また、出土した土器群は、草創期に属する表裏  
縄文土器、県内はもちろん近県では今まで良好な資料に乏しかった多量の貝殻条痕文土器の出土  
は、混乱した該期細年作業のための基礎的資料となるものである。縄文時代中期では、11号住居  
址出土の一括土器が重要である。この一括土器は、碓氷式、平出ⅢA、および松本平に特徴的と  
思われる沈線施文土器の3つの異系統土器が出土し、これらの土器の共存関係が確認されること  
は重要な事実であろう。また、多くの小竪穴が検出され、これらは上部に石を置き、内部に土器  
を包容した第16号に代表される墓塚的色彩の強いものであった。

中世に関するものでは、建物址、墓塚がある。建物址は、付近からの出土遺物から、寺院的性  
格の強いものと推定され、古文書にみられる長福寺との関連性が注目される。また、3基発見さ  
れた火葬墓は、類例の少ないもので、中世の墓地を考えるうえで大切である。

以上、簡素書式的に成果をみたが、ここで得られたものは、従来まで比較的資料が乏しいもの  
ばかりであった。ともに今後の基礎的資料となると考える。

(小林康男)

## 第2節 福沢遺跡

### 1 位置

福沢遺跡は前節の堂の前遺跡と同じ鑄物師屋川の形成する谷あいの入口部にあり、後者からは約200m西方に位置する。

ここは三方を山に囲まれ、唯一谷間が開かれた西方には大門市街地の広がる桔梗ヶ原台地を遙かに眺望することができる。付近は南西向きに張り出した日当たりのよい緩斜面上にあり、加えて河川も近く水利に恵まれた好条件の立地環境にあるといえよう。

遺跡の南側は僅かに傾斜が認められる平坦域が続き、現在は約90m隔てて鑄物師屋川の小河川が流れている。しかし等高線の方が河川と平行になっていないこと、また後項で触れるように発掘区の表土に地形の起伏が認められることから当時の河川の位置が遺跡に多分に関与していたことが推測される。

北側は約2mの段崖をもって畑地が続いており、遺跡とは時代を異にする面、即ち堂の前遺跡の立地する面の延長として捉えられる。しかし上位面は圃場の地区外であったため調査は行なわれなかった。付近は畑地が展開しており、標高は730mである。

尚、福沢遺跡と堂の前遺跡の範囲はほとんど接したのとして捉えられるが、両者の間には局所的に僅かな段差がみられること、そして事前の表面踏査では福沢遺跡は平安時代に、堂の前遺跡は縄文時代中期にそれぞれ中心が設定されていたため、敢て両者を区分し別調査にしたものである。

(鳥羽嘉彦)

### 2 過去の調査経過

福沢遺跡は以前より縄文時代と平安時代の複合遺跡としてよく知られた遺跡であり、かなり長期にわたってこの地に生活が営まれていたことを示している。

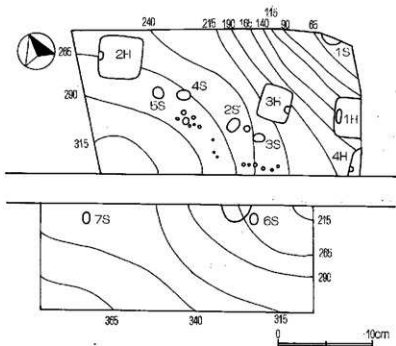
過去の出土遺物の中で特筆するものに古鏡がある(第104図)。「灌尻町誌」1937にその記載があるので少し長くなるが全文を引用する。

「次に上岡は長畝福沢地籍に於て塚澤鑛泉主上田信吾氏の掘出した青銅の古鏡であるが、本邦和鏡創製期の初頭に於て造られたものと思はる。一つは直径11釐厚さ2釐重量116瓦、他の一つは直径10.5釐、厚さ1釐、重量68瓦ある。概して薄手の華奢な作りで、紐穴も小さく縁も高くないが、裏面の模様は一つは萩に飛禽を配し、他は梅萱等の草木に双鶴を配した極めて優美の図柄で其の鮮麗さは正に平安朝文化爛熟期の特徴を遺憾なく現はして居る。」

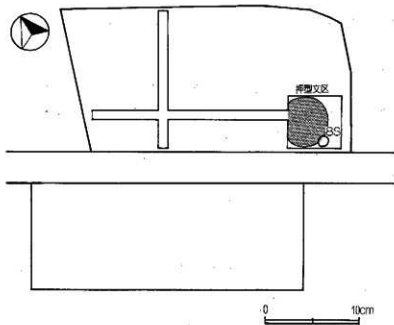
長畝福沢の地は歴史籍に於ても屢々論じられるやうに平安期末期に於ては相当大きな衆落があり、貴族的の生活を営む者も居たものと推定される。随って本品はそれ等貴族の使用品であると共に、其



第104図 福沢出土の古鏡



第105図 福沢遺跡遺構全体図 等高線は第IV層上面



第106図 縄文遺構確認のトレンチと押型文土器出土区

の経塚に埋没したものと思はれる。

古鏡の出土地については現在その詳細は不明であるが、道を挟んで北側の塚であったという話しも聞く。付近は今回の調査地と比高差5mを測る高台にあり、経塚の築造地としては正に打つつけの場所といえよう。

(鳥羽嘉彦)

### 3 調査概要 (第105、106図)

今回調査の行われた福沢遺跡は、堂の前遺跡から西方へ100m程距離を隔てた場所に存在する。小河川の形成した開析谷の入り口に位置する本遺跡は、堂の前遺跡と同様、河川右岸の南向き緩斜面上に立地するが、今回の調査では、堂の前遺跡から続く台地縁辺より一段下がった微傾斜地が調査の対象となった。

調査は農道を挟んだ2枚の畑地について行われ、発掘総面積は800㎡に及ぶ。その結果、松本平では未だ発掘例の少ない縄文早期押型文の時代の遺構、遺物や、多量の晩期終末～弥生中期初頭にかけての上器、石器類を包含した土器集中区及び、平安時代の住居址4軒などが検出され狭い面積ながら縄時代にもわたる生活面を捉えることが出来、貴重な資料が得られた。以下、各時代の遺構、遺物の内容を概観してみたい。

まず、縄文早期であるが、調査区東側において、押型文の時期の生活面が捉えられ、遺構としては、集石1、小堅穴1が検出されている。土器は立野式押型文土器を主体とし、種沢式、細久保式及び、燃系文、無文土器もみられ、それらの先後関係は層的に捉えることが可能であり、該期研究上、またない好資料を提供することが出来た。器形復元可能な土器も数個体出土しており、松本平では初めての多量の押型文土器を出土した遺跡だと言えよう。なお、さらにその上層からは、堂の前遺跡出土土器と対比し得る早期末条痕文土器もまとめて出土した。

次に、縄文晩期～弥生時代にかけてであるが、調査区中央には、土器捨て場と推察される土器集中区が存在し、そこから、晩期終末～弥生中期初頭にかけての多量の上器、石器及び上製品が出土した。そして、ほぼその時期に前後する小堅穴6基及びピット群も検出されている。土器には、晩期終末期に比定される土器を始め、水神平系の条痕文土器、遠賀川系の壺形土器、東日本系の土器及び、在地の変容を受けた土器、庄ノ畑式に比定される土器などがあり、弥生文化波及期における東西交流を考える上での貴重な資料が得られた。また、石器もまとまった量が出土しており、当時の生産活動のあり方の一端が偲ばれる。なお、この土器集中区からは、微量ではあるが、縄文前期末、中期末、後期、晩期中葉の土器も出土しており、縄文早期以後、福沢遺跡では断続的に人々の生活が営まれていたことが推察される。

そして、古墳時代を経て平安時代になると、福沢遺跡では人々の営みが再び始まり、集落の営まれたことが、4軒の住居址及び小堅穴の存在などによってわかる。住居址は、いずれも隅丸方形のプランで、調査区内でもやや高い位置に居住区が存在するのが特徴といえよう。遺物としては、土師器・須恵器の他に鉄製刀子や砥石などの出土もみられた。

以上、各時期の遺構、遺物を概観したが、今回の調査では、今まで発掘調査において省みられ

ることの少なかった台地の微高地より、このような貴重な遺物を得ることができ、遺跡立地を  
考える上でも貴重な調査となったといえる。

(前田清彦)

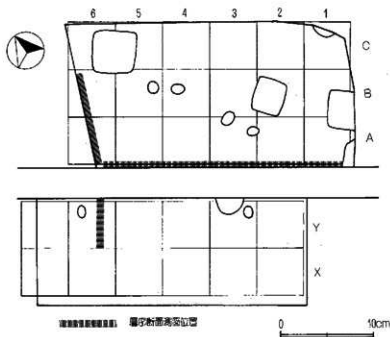
#### 4 発掘区の設定

発掘調査区は福沢遺跡のほぼ中央にあたり、堂の前遺跡へ連絡する農道を挟んで北側の桑畑(A  
地区)と南側の畑地(B地区)に設定された。

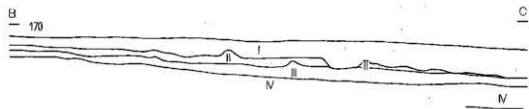
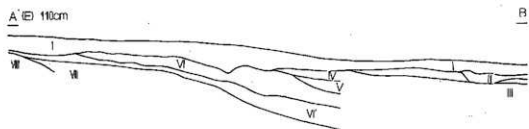
調査に先行して行なわれた現地踏査では期待に反して遺物皆無であったため、土層の保存状態  
を把握するために数ヶ所に試掘坑を入れた。その結果、北東隅でローム面が最も高く表土は僅か  
20~30cmの薄層で被覆しているが、南西の方向へ向かってローム面は急傾斜をなしている異常  
が認められ、中央部ではすでに深さ120cmでまだローム面に達しない表土の層厚をみた。一方、  
B地区においては深さ数10cmで淡黄色の川原砂にあたり往時の文化層がすでに消滅している事  
実を把握した。

調査はまずバックホーにて桑の抜根を行なったのちブルドーザーによる表土除去を行いグリ  
ッドを設定した。グリッドは5m間隔で北側の畑には南から北へ向かってA~C、南側の畑には南  
から北へ向かってX・Y、両者を通して東から西へ向かって1~7を設定した。発掘区総面積は  
約800㎡である。

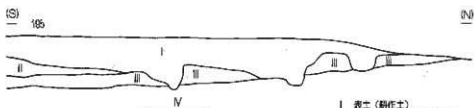
(鳥羽嘉彦)



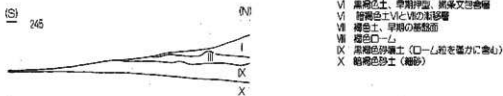
第107図 福沢遺跡グリッド設定図



A地区南側/ハノット塚における東西セクション



A地区(A~B)南北セクション



B地区(Y-6)南北セクション

- I 表土(耕作土)
- II 粘褐色土、やや遺物を含む
- III 褐色土、中期~深層色層
- IV 褐色土
- V 褐色土、早期赤瓦文、押型文付赤瓦
- VI 褐色土、早期神型、新瓦文付赤瓦
- VI 褐色土、早期の黒鉄面
- VII 褐色土、早期の黒鉄面
- VIII 褐色土
- IX 黒褐色砂質土(口~土粒を基に含心)
- X 粘褐色砂土(粘砂)



第108図 福沢遺跡層序断面図

## 5 土層

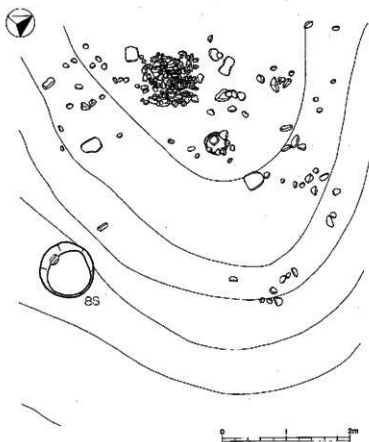
調査地区内はローム面かなりの起伏がみられ、またそれを被覆する表土にも複雑な様相がみられる。これらの成因と生活面との関わり合いについては後述することとし、ここでは基本層序についてだけ触れたいと思う。

第108図はA地区南壁セクションである。9層に区分される層序を概観するとロームまたはローム起源の暗褐色土を主体とし、2枚の黒色バンドを挟んでいる。このうち上層の第Ⅲ層黒色土は遺物包含層として遺跡の中では最も重要な層として位置づけられ縄文時代晩期～弥生時代の遺物密集層として、さらに検出された平安時代の住居址および小竪穴の覆土にあっている。これらの遺構は第Ⅲ層中に掘り込みがみられ第Ⅳ層の暗褐色土にまで達し床面を構築している。

押型文土器を中心とする早期の文化面は第Ⅶ層を基盤とし、第Ⅵ層を遺物包含層としている。介在する第Ⅶ層の暗茶褐色土は両層の漸移層として捉えるのが無難であろう。

B地区では第Ⅲ層の下位に直接、褐色ロームまたは細砂土を確認し、局所的な河流の流れ（方向）を示唆するものとなった。

(鳥羽嘉彦)



第109図 押型文土器出土区及び第8号小竪穴

## 6 遺構

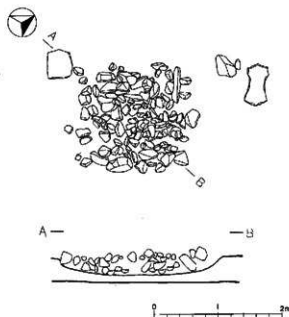
### 1) 縄文時代 (第109図)

#### (1) 集石 (第110図)

**調査経過** A-2グリッドにあり、調査区中最下位にあたる。晩期～弥生の遺物の出土した第IV層下の状態を知るため東西および南北にトレンチを入れ掘り下げた所、東西トレンチの東端地区の第VII層最上部から押型文土器とともに平板状の礫が検出された。このため礫を中心とする南北地区を拡張することとなり、上層から掘り下げた。掘り下げの過程で押型文土器が多数出土し、押型文土器を包含している最下層のVII層上面に集石が発見された。付近には土器が散在し、自然地形が楕円状に落ち込んだその最下部に集石は存在していた。

**遺構** VII層最上層の黒褐色土中に10cm程度の浅い掘り込みをつくり、ここに自然礫を集石していた。集石は90×100cmのほぼ円形で、長径15～25cmほどのやや大きな礫を外周に、そして内側には10cm前後のやや小形の礫を使用している。集石の上面は平坦であるが、下面は掘り込みが楕円状のため中央部が厚回になっている。この集石に接するようにして20×20cmの方形を呈する扁平礫が置かれ、やや離れて大きさ30×10cm、厚さ3～4cmやはり扁平な礫が据えられている。前者の集石に接して置かれた礫は集石に関連するものと考えられるが、後者の礫は出土層がV層中で層位的に上層であるので関連性はうすいと思われる。集石中には焼土、炭化物などは全く発見されず、炉址とする積極的な証拠は見い出せなかった。集石の下位の掘り込みは105×105cmわ深さ16cmの円形を呈する。土器の出土状態、層位的観察から押型文期に属する遺構と考えられる。

(小林康男)



第110図 押型文期集石



## (2) 小竪穴 (第109図)

**調査経過** 押型文土器の包含層の広がり、その性格を究明するためAトレンチの両側を拡張し掘り下げると、A1グリッドで層中に落ち込みの存在が知られた。このため押型文期に属する遺構かと慎重に調査を進めたところ、内部より市松文、山形文、燃糸文土器の小片が出せし、この時期に属するものであることが判明した。

**遺構** 平安時代の第4号住居地から2mほど西側にあり、平担面から後述する集石の発見された地点まで急傾斜をなして落ち込む、ちょうどこの接する場所に位置している。したがって押型文土器の出土した分布範囲からみれば東南隅にあたり、しかも最も高い位置にあたる。プランは東西82cm、南北85cmのほぼ円形で、底面は径65cmの円となっている。壁は斜面のため西側は21cmと低く、東側は42cmと高い。東壁は垂直に掘り込まれているが、南～西壁はゆるい傾斜を示している。底面は平滑である。

### 2) 縄文晩期～弥生初頭

#### (1) 小竪穴 (第112～113図、第6表)

今回の調査では、晩期～弥生中期初頭に位置づけられる小竪穴が、全部で6基検出された。いずれも、該時期の土器包含層及び、土器集中区の基盤層であるIV層最上面で検出され、内部にも、晩期～弥生中期初頭にかけての土器片を少量含むことから、包含層形成開始直前、もしくは、包含層形成途中のある時期に掘り込まれたものと推察される。

小竪穴の配置をみると、おもしろいことに、いずれも土器集中区の最外縁に位置し、中でも2S～5Sの4基の小竪穴に注目すれば、外縁というだけでなく、地形的にみて、土器集中区内でも、標高の高い位置に小竪穴が掘り込まれるという傾向を示す。また、これらの小竪穴群の内側には、多数のピットが存在し、あたかも小竪穴群の内帯を形成しているかのように見えることは興味深い。

次に、小竪穴の規模であるが、長径は最大163cm (2S)、最小105cm (6S)を計り、長円形のものが多い。深さは、南側に存在する6S、7Sが-17を計るのに対して、北側に存在する2S～5Sは-33～-46と一様に深い。特に2Sは(163×105-46)の最大規模を有し、堅緻な底面のみならず、底部を三分の2程巡る深さ5cm程の周溝を有している。そして、上面には人頭大の礫が1個存在している。なお、3Sも、2Sと同様堅緻な底面を有し、上面に人頭大の礫が1個存在していることから、両者は、基底的性格を想定することも可能であろう。

また、7Sについては、2段の掘り込みを並するうえに、南北2ヶ所に、深さ10cm程のピットを有しており、覆土内には炭化物及び炭粒が集中して出土する箇所もみられ、特異な小竪穴であるといえる。なお、これら小竪穴から出土した土器は細片が多く、下層から出土した土器も少ないため、明確な時期決定をできるものは少ないが、晩期に属するものが多いと予想される。

各小竪穴の詳細については、第6表を参照されたい。

第4表 福沢遺跡小竪穴一覧表

No.	発掘規模	平面形状	主軸方向	断面形状	平面規模	底 面	深 度	検出物の層位	時 期	備 考
1	240	円形	—	—	—	—	10	ローム上段前	平安時代	
2	163×105	横 円	N-70°-E	テライ状	152×93	平底(高直あり)	46	黒色土層下層	縄文 - 弥生	底面は平直・上層に人跡大雑:類
3	107×83	円形	—	#	108×80	平 底	39	赤粘土層下層	#	#
4	148×125	楕 形	—	#	142×110	#	45	#	#	#
5	127×108	横 円	N-70°-E	#	120×94	#	33	黒色土層下層	#	#
6	105×77	#	N-70°-E	#	93×66	平底(浮袋あり)	17	黒色土層下層	#	#
7	157×150	#	—	密 集 状	166×72	丸底(浮袋)	17	黒色土層下層	#	黒砂かなり混入・南壁は浮袋の小ピット
8	86×83	円形	—	テライ状	75×68	平底(傾斜)	38	#	弥生(平安)	

## (2) ビット群 (第111、112図)

径60cm以内で円形を呈し、小竪穴とは規模の上から明らかに区別される一群をビットとして扱った。全部で20ヶ所確認したが、径10cm、深さ5cm程度のもので含めれば、数は更に増える。規模は径20cm~60cmと幅があり、深さに統一性がなく、掘り込みがV層の黒土層まで達し、底面を捉えることのできなかつたものも多い。

分布は、小竪穴群の内帯ともいえる場所に広がっており、ビット内部に細密条痕を有する土器片などを出土することから、時期の所産と考えて差つかないであろう。東から、P9~11、14~16の一群、P6~8の一群、P1~5、13、17の一群、P18~20の一群、及び2Sと3Sの間に存在するP12という、大まかな5群に捉えることができるが、直線状に並ぶもの、また密集するものなど様々であり、柱穴的な配置などは捉えることはできなかった。

(前田清彦)

## 3) 平安時代

### (1) 住居址

#### 1 第1号住居址 (第113図)

##### 調査経過

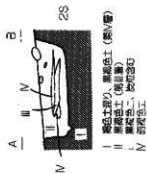
本址はA地区東壁沿いのほぼ中央に位置し、一部東側が調査地区外にかかっているため全容を現わすことはできなかった。遺構検出面での黒色土の落ち込みが明瞭であったため、住居址の存在は当初から容易に把握されていたが、西壁の存在が黒色土層中であったために明瞭な区別がつかなかったこと、南壁が傾斜により流れてしまっていたことから不明瞭な床面を丁寧に精査し追っていく以外に方法はなく、そのためにプランの確認が遅れた。

遺構 南壁が消滅しており、また東側も土手の下に湛り木調査に終わったためにプランは明確ではない。しかし残存壁の在り方より推して平面形態は一辺3mと小型の不整隅丸方形を呈するものと推察される。

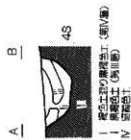
床面は緩く南へ傾斜しており、中央付近によく踏み固められた堅緻な面が残っている。

ビットは北西隅に一基確認されたが、その性格は不明であり、後世に掘り込まれたものである可能性も強い。主柱穴と思われるものは検出されなかった。

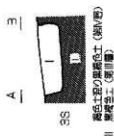
壁は北壁で36cmを測るが、西壁では南側へ漸次低下している。地形の傾斜に伴い南側の壁および床が流れたことを考慮すると、構築時はほぼ北壁の高さで全周していたものと考えられる。



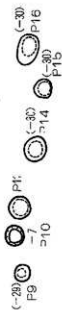
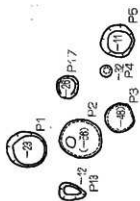
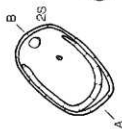
I 褐色土層、黒褐色土 (第IV層)  
 II 黒褐色土 (第III層)  
 III 黒褐色土、砂質砂  
 IV 砂質粘土



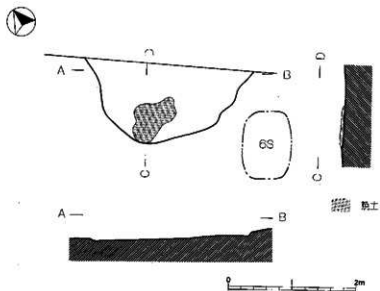
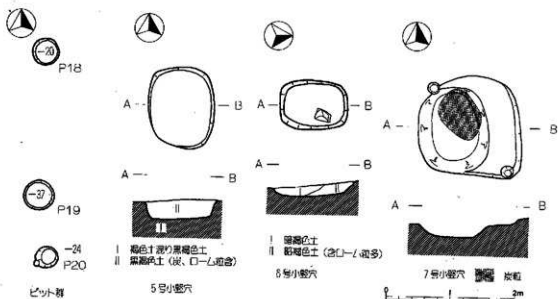
I 褐色土層の黒褐色土 (第IV層)  
 II 黒褐色土 (第III層)  
 III 黒褐色土  
 IV 砂質粘土



I 褐色土層の黒褐色土 (第IV層)  
 II 黒褐色土 (第III層)



第111図 第2、3、4号小竪穴及びピット群



第112図 第5～7号小竪穴、ピット群、竪穴状遺構

床面上に焼土は2ヶ所、検出された。すなわち東側の土手際と西壁沿いの南寄りである。しかし東側のものは薄く、また床面より若干浮いた状態であったため、カマドはやはり西壁に構築されていたものと思われる。焼土はかなり厚く灰褐色の灰も混じていたが、カマド窯は確認されなかった。

(鳥羽嘉彦)

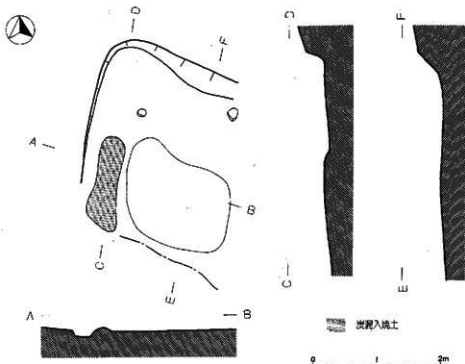
## 2 第2号住居址 (第114~116図)

**調査経過** 2号住居址は、発掘区中央西寄北端、原急斜面の付け根にあり、最も低所に位置し、他の住居址から当住居址のみ離れている。

本址は、表上削平時に黒褐色の地山に暗褐色の落ち込みが認められず、北壁にカマドの焼跡が長く明瞭に認められるが、後世の遺構と考え、半分以上破壊してしまった。本址は黒褐色土層を掘り込んで構築されていたが、覆土が暗褐色土のため、壁を検出するのに困難を来たした。北壁のカマドは、破壊され、西壁にカマドを発見した。再築したようである。このカマドは比較的保存状態が良かった。本址は、今回調査された住居址中で、最も遺存状態の良い住居址であった。

**遺構** プランは、原地形の傾斜のためか、南側壁と東壁南半分と床が失われているため、東西4.40m、南北4.30m(推測)のほぼ同位の隅丸方形を呈する。

壁の掘り込みは各壁とも垂直に近い。壁高は西壁0~32cm、北壁14~30m、東壁0~14cmである。



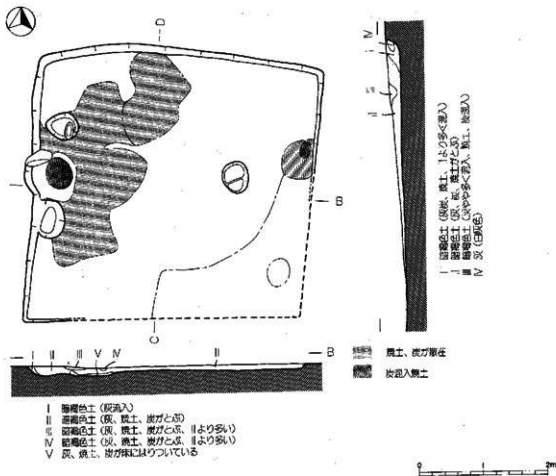
第113図 第1号住居址

床面は、全体的に水平で平坦である。床の状態は堅く、西壁のカマドの両側は一段低くなっており、床らしい床は認められない。北壁のカマドは無く、床の焼けた部分のみである。煙道は、急斜面に沿って、1.40m、斜度26°と長いものである。北壁より、1.10mのところまで平坦な両面をもった石が煙道の一部を閉じており、丸く焼けているため、ダンパーとして使用されたものと思われる。西壁カマドは石組み粘土カマドで中央に壁をわずかに挟り込んで設けられている。保存状態は比較的良かった。規模は間口約60cm、奥行約80cmで、石組の石は手前に散乱しており、左側に42cmの大きな石が1つ残っている。カマド内部は良く焼けていた。

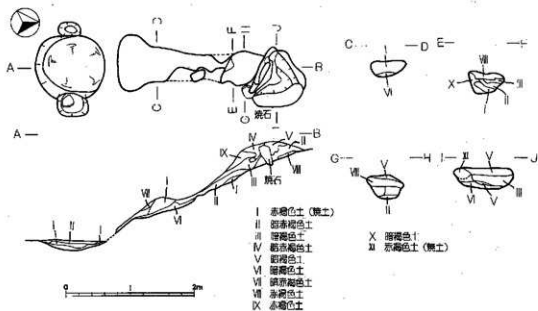
貯蔵穴はカマドの高脇に1つづつあり、南側は、52×60cm、深さ12cmで、北側は52×44cm、深さ10cmである。

出土品は土器のみで西側カマドの手前から北側カマドとに囲まれた北西の部分に集中しており、西側のカマドの南側貯蔵穴及びこの付近から出土した。種別は、土師器、須恵器、灰釉陶器である。

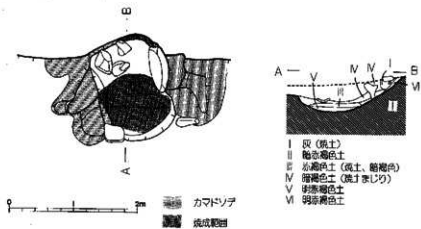
(寺島俊郎)



第114図 第2号住居址



第115図 第2号住居址運道



第116図 第2号住居址カマド

### 3 第3号住居址 (第117図)

**調査経過** 本址は調査区の東壁、第1号住居址から北西4mに位置する。検出の段階において、黒色土の落ち込みが認められ、中央寄りの部分では床面の一部も露呈した。次いで、東側に向かい覆土を掘り進めると、土器片、鉄製品などが出土し、壁も確認された。また、東壁際の中央付近に焼土が集中的に存在し、カマドとの推察がなされた。

**遺構** プランは、耕作土による攪乱のためか、南側、西側において判然としないが、残存壁、床面の範囲から推測すると、3.2m×3.2mの隅丸方形を呈すると考えられる。

壁は、北壁と東壁のみが残存し、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は前者で35cm～40cmとほぼ一定であるが、後者は北東コーナー付近で40cmを計り、徐々に高さを減じ、南東コーナー近くでは20cmとなる。

床面の残存状態は、それほど良好ではない。住居北側から中央部にかけて検出されたのみで、全体の $\frac{1}{2}$ 程度である。確認面は、暗褐色土を掘り込んでおり、水平であるが、堅くしまってはならず、どちらかといえば軟弱である。ピット等は確認されなかった。

カマドは東壁際中央付近に設置され、規模は80cm×70cmである。支脚とみられる石が中央に立って存在したが、袖部、煙道などは確認できず、原形をとどめてはいない。ただし、焼土の西側に黄褐色の粘土部分が貼りつくように存在したが、構架材である可能性も指摘できる。

遺物は、カマドを中心として土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、刀子とみられる鉄器がカマド近くから出土している。

(出河裕典)

### 4 第4号住居址 (第118、119図)

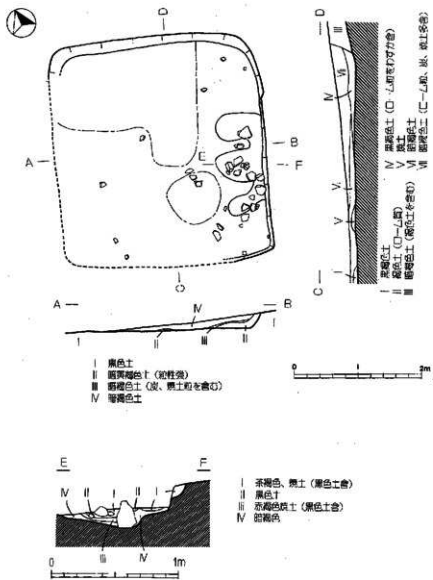
**調査経過** 本址は、調査区を南北に分断するように東西にはしる農道の北側東端部、A-1グリッドに検出された。本住居址の北側には、第1号住居址が主軸方位をほぼ同じくして、軒を接するかのよう存在している。表土除去過程より焼土や土器片などが検出されたことから、落ち込みの存在が予測されていた。遺構検出面が暗褐色土中であったことから、プランの確認には困難をきわめた。覆土の検討により、西側にカマドの張り出しを有する住居址の北西端部と確認、第4号住居址として調査を続行した。覆土は上層に暗茶褐色土、下層に暗褐色土の推積が認められ、西側張り出し部前面にはカマドの流出による灰色粘土・焼土の拉かりが明瞭であった。

なお、本住居址の東側および南側については、調査区域外・道路下ということもあり、現状のまま残された。

**遺構** プランは東西1.20m、南北2.60mと住居址のごく一部しか調査されなかったことから、全体の規模・形状については不明な点を多く残したが、やや隅丸をなす方形を呈するものと思われる。壁の遺存状態は良好であり、やや外傾するもののほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最深35cmをはかる。床面は全体的に平坦であり、貼り床状を呈する硬化面の拉かりが顕著にみられた。

カマドは西壁をわずかに挟り込んで設けられている。ほぼ西壁中央部に位置するものと考えられるが、判然としない。住居址掘り下げ中より、灰色粘土の出土が注意されたが、東西1m、南北1.30mの範囲にわたって床面への流出が確認された。保存状態は比較的良好であり、灰色粘土



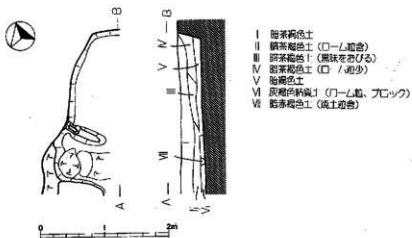


第117図 第3号住居址

塊によるソデ部が残存する。規模は、開口60cm、奥行110cmをはかり、焚口前面および燃焼部は浅く掘りくぼめられている。燃焼部を中心に焼土の堆積が認められ、とりわけ、燃焼部の底面は火熱により硬く焼きしまり赤褐色に変質・焼土化していた。

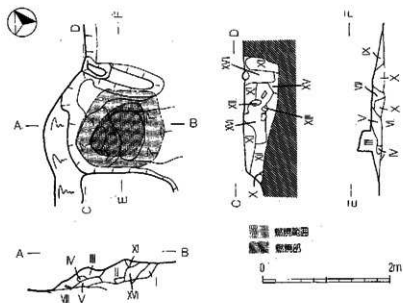
遺物はカマド内部およびカマド周辺から集中して検出された。

(石瀬忠幸)



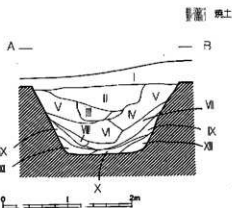
- I 陶器褐色土
- II 陶器褐色土 (ローム遺物)
- III 陶器褐色土 (黒味をおびる)
- IV 陶器褐色土 (口ノ遺少)
- V 陶器褐色土
- VI 灰褐色粘質土 (ローム遺物、ブロック)
- VII 粘赤褐色土 (灰土遺物)

第118図 第4号住居正



- |                          |                 |
|--------------------------|-----------------|
| I 赤褐色土 (含鉄色粘土、粘土粒)       | X 灰褐色土          |
| II 粘赤褐色土 (含鉄土粒、陶器土、灰色粘土) | XI IIIに準ずる      |
| III 粘赤褐色土 (含鉄土粒、ローム遺)    | XII XIに準ずるガヤや黒色 |
| IV 赤褐色粘土ブロック (含灰色粘土粒)    | XIII 粘赤褐色ブロック   |
| V 灰褐色土 (含灰色粘土、泥土粒)       | XIV VIに準ずる      |
| VI 粘赤褐色土 (IIに近るが暗色)      | XV IIに準ずる       |
| VII 赤褐色粘土、灰色粘土           | XVI 粘赤褐色土       |
| VIII 灰色粘土                | XVII 粘赤褐色土      |
| IX 粘赤褐色土                 |                 |

第119図 第4号住居址カマド



- I 委土
- II 鈣褐色土
- III 鈣褐色土 (ローム粒含)
- IV 黒みをあびた鈣褐色土
- V 鈣褐色土 (ローム、焼土初含)
- VI 赤褐色土 (ローム粒、炭化物)
- VII ロームブロック含の鈣褐色土
- VIII 赤褐色土
- IX VIとIV
- X 焼土、炭化物
- XI 鈣褐色土
- XII 2次堆積ローム

第120図 第1号小竪穴

## (2) 小竪穴

### 1 第1号小竪穴 (第120図)

平安時代に属する小竪穴としては、第1号小竪穴が挙げられる。調査区北東端に位置し、最も標高の高い台地上に竪穴が掘り込まれる。北側半分については、調査区域外となるため未調査であるが、ほぼ全形が窺い知れる。

プランは長円形を呈すると予想され、確認できる限りでは長径2.3mの掘り込み面を有する。断面形態はタライ状を呈しており、底面には焼土・炭化物の堆積が認められる。またこの焼土内からは、底部に糸切り痕を有する土師器の底部が出土しており、時期決定の根拠となった。

(前田清彦)

### (3) 竪穴状遺構 (第112図)

福沢遺跡では、Y-3グリッドにより、性格不明の竪穴状遺構が1基検出されている。晩期後葉〜弥生中期初頭にかけての土器集中区の南東側外縁に位置するこの竪穴状遺構は、南東向きに、該時期に属すると推察される第6号小竪穴が近接して存在し、また、北側半分については農道にかかるため未調査となっている。遺構検出時に、床面らしき硬化面が存在したため、精査を行ったが、この辺りは地形的にもやや高く、地表面から余り深くないために、竪穴状遺構といっても、掘り込みは最高でも東側で6cm確認されたのみであった。南側及び西側では、掘り込みはほとんど捉えられず、実線で示したのは褐色土上に硬化面の存在する範囲である。南面には、85×50、

厚さ3cm程の焼土の堆積が見られるが、ピットは存在せず、住居址と捉えるには少し無理がある。遺物は、押型文の細片、弥生中期初頭の土器片、灰釉陶器などの出土をみるが、明確な時期決定をなし得る遺物は存在しなかった。

(前田清彦)

## 7 遺物

### 1) 土器

#### (1) 縄文時代

##### 第I群 縄文時代早期前半の土器

今回の調査で出土した早期前半、特に押型文期に属する土器は総数287片にのぼる。これらはほぼA-1、A-2地区の第V下～VII最上層から集中して出土した。これらの地区では第V層より上位に早期後半の第II群土器がわずかに出土している。第I群には、押型文土器のほかに縄文、捺糸文、無文土器が含まれる。出土土器の大半は、押型文土器である。

ここではこれらの土器群を施文方法別に大別し、さらに文様の要素別に区分して記述した。

#### A類 押型文土器

##### 1種 带状施文のもの

###### a) 山形文

###### (1) 横位带状施文のもの (第121、124、125図)

第121図 は胴部上半部の破片で、ほぼ胴上半の器形、文様構成が捉えられるものである。第VI層上部から出土した。推定復元口径19.6cm、現在高11.5cm。ゆるく外反する器形を呈し、文様は横位施文の山形文が無文帯をはさんで3段施文されている。胴下半部が欠失しているためさらに横位の山形文が施文されるのか、縦位帯状、密接がくるのか不明である。器厚6mmで薄手で、しっかり焼きしまっている。

1～12、33は口縁部破片である。口唇部は1、3、4、7、12、33のように角ばるものと、28～11のように丸味をおびるものがある。文様は、比較的小きな山形を施文している。2は、2条を一単位としているようである。3、4、12、33は口唇部にも施文されている。9～12は内外面に施文され、山形の陽刻幅が細く、陰刻部も浅い。山形の形状は、波形が丸味をもつもの(5、6)と細くて小形のもの(1～3)、大形のもの(4、7、8)がある。ともに器厚は5～8mmで比較的薄手で、焼成は良い。

13～32は胴部破片で、ともに5～6mm前後と薄手で、焼成は良い。13～19の小形の山形を施文するものと、21～25の大形のものがあり、他に少量ではあるが山形が崩れた感じのもの29、30がある。

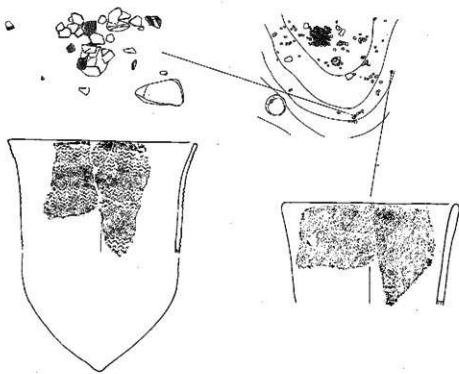
###### (2) 縦位帯状施文のもの (第126図)

横位帯状施文に比べると量的には少なく、しかも小破片が多い。37は口縁部の破片で、外面は縦位に、内面は横位に施文されている。38～41は無文帯部が5～9mmで狭く、しかも無文帯の間隔は不齊等である。後述する縦位密接施文の中に施文方法の不均一から無文帯が残されるものが

あるが、それらと類似している。ここでは無文帯部分が明確に認められるため、この類の中に入れておきたい。

(3)異方向帯状施文のもの (第126図42、43)

42、43の2片出土したのみである。いずれも胴部の破片である。42は横位帯状の文様に接してやや斜位に施文され、無文部は1.3cmである。43は、横位の帯状文様下にわずかの無文部をおき、下部を縦位に施文している。ちょうど文様の接合部分が欠損しているためはっきりしないが、余り無文部をおかずに施文されている様子が観察できる。あるいは縦位施文されている山形文は帯状構成をとらず、密接施文構成をとるのかもしれない。薄手で、ともに焼成は良好。黄褐色を呈する。



第121図 押型文、無文土器 (1 : 4)

## 2種 密接施文のもの

### (a) 山形文

#### (1) 縦位密接施文のもの (第122・126~129図)

第122図は底部を欠く以外、ほぼ全形を知り得る好資料である。A-1、2区の北側を中心としてVI上層~VII最上層から出土した69片の接合により復元されたものである。破片が出土した層位はVI下~VII最上層に集中している。器形は、口頸部でくびれ、口縁部が大きく外反し、胴部が張って底部にいたる。器高(推定)は33.5cm、口径23.3cmで、この種の土器とすれば大形である。文様は口縁部から底部まで縦位に密接施文し、無文部は全くない。大きな山形(原体軸長2.8mm、7条、径 mm、2単位)が施され、口唇部にも山形文が施文されている。器厚は8mmで、暗褐色を呈し、焼成は良い。

44~53は口縁部破片である。44~49は、幅広く大柄な山形文を密接施文している。45~47、49は口唇部が角ばり、44は丸味をおびやや外反する。50はそぎ取られたように鋭角となっている。ともに口唇部に刻みが加えられている。いずれも器厚は10mm前後と厚く、胎土に長石を混入し、焼成は悪く、器面はザラついている。48は、1山8mmもある大きな山形文を施文し、口唇部は丸味をおび、外反が著しい。51、52は同一個体と思われる口縁部破片で、51は小さな波状を呈する。薄手で焼きは極めて良い。小形の山形を施文し、外面は縦位に密接し、内面には横位に1条施文している。この種の土器は、この2片のみで、特異なものである。53も薄手の口縁部で、口唇部がやや肥厚する。

54~99は胴部の破片である。54~58は、山形の波形が大形で、陰刻された山形線が極めて細く、波状は大きい。器厚は厚く、長石、石英を含み、焼成は悪い。59~90は細くて小形の整った山形のもので、薄手、焼成は良い。62~68は、5mm前後の無文部がみられる。山形文と山形文との無文部の間隔は一定せず、意識的に無文部を描出したとは思えず、密接施文の範疇に含めてよいと考える。これらは同一地点からまともに出し、しかも、胎土、焼成、色調が類似していることから同一個体と思われる。前述した縦位帯状施文の39~41も同一地点からの出土であり、これらと類似した要素が多い。あるいは密接施文の中に含めるべきかもしれない。91~95は、陰刻部の間隔が広く、陰刻部の山形は幅広く丸味をおびた一群である。96~97は山形が細く、98は山形が交互に陰刻された例である。

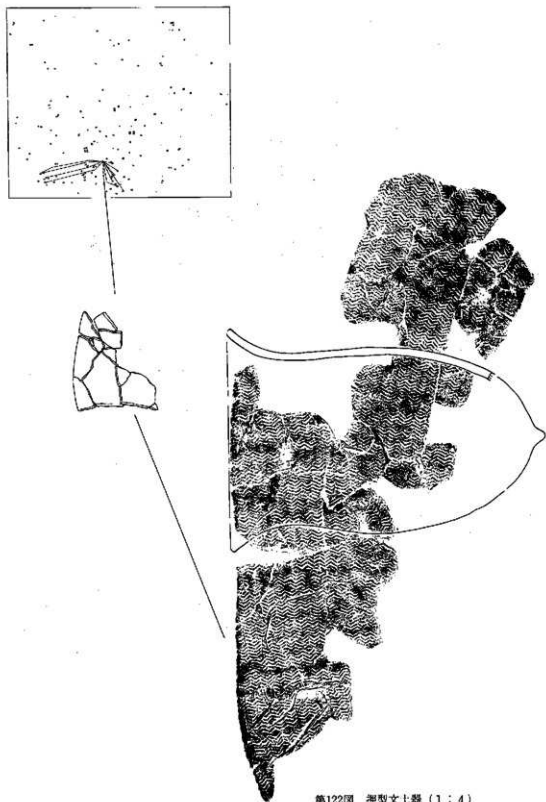
99~103は底部ないし、底部付近の破片である。ともに磨耗が著しい。大柄な山形文を底部まで施文し、100では文様が交錯した部分も認められる。

#### (2) 横位密接施文のもの (第130図)

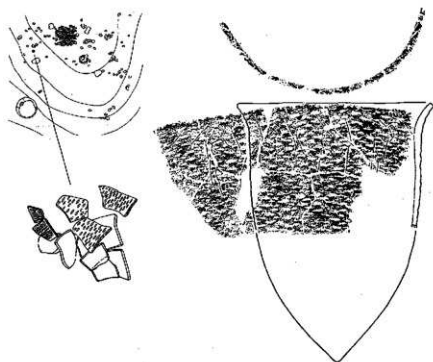
良好な資料がない。104~109がこれに含まれるかとも考えられるが、小破片のため明確さを欠く。105、106は小型の整った山形を、107は頂部に丸味をもつもの、108は大柄な山形である。

#### (3) 異方向密接施文のもの (第130図)

110~113の4片出土したのみである。110、111は口縁部破片である。口縁部に一条の横位帯状施文をし、下位にはわずかな無文部を置いて縦位に密接して施文している。2片とも口唇部にも施文している。112、113も口縁付近の破片で、110、111同様の施文構成をとっている。こうした



第122圖 押型文土器 (1 : 4)



第123図 押型文土器（1：4）

横位と縦位との間に無文帯を設けている例は余りなく、特異な例といえる。薄手で、色調は明褐色をおび、焼成は極めて良く、固く焼き締められている。

b) 楕円文（第130、131図）

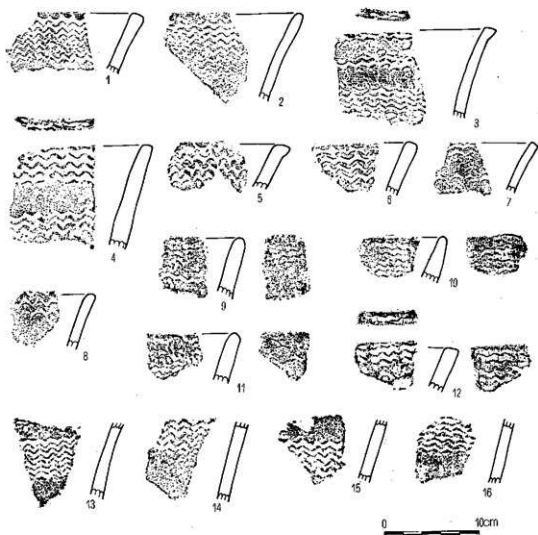
楕円文は山形文、市松文に次ぐ出土量であるが、量的には僅少である。図示したものがほとんど全てである。器壁が都厚く、10mmを越えるものもある。焼成は悪く、全体的にもろい。楕円の形状により3分類できる。114～126は大粒の円形を呈し、原体は長さ23～28mm、径4.8mm、3条、2単位と大きい。胎土に石英、長石、雲母を混入し、色調は黄褐色である。114～117は横位施文を明瞭に観察でき、原体端末の加工による矩形の圧痕が認められる。この種の土器は、治土、焼成からみて、44～50に類似し、相対的に粗雑なものが多い。127は、いわゆる殻粒状のもので、1片出土したのみである。128は、小形の不整形の楕円が珠数状に連なったもので、特異なものである。この1片出土したのみである。他の楕円文の施文された土器に比較し、薄手で、焼成もよい。

以上、楕円文の施文された土器は、横位密接施文のものが大半を占めている。

c) 格子目文（第131図）

いずれも小破片で、図示した4片のみである。押型文土器中最も出土量が出ない。ともに胴部破片で、菱形格子目文である。厚さ7～9mm焼成は悪い。

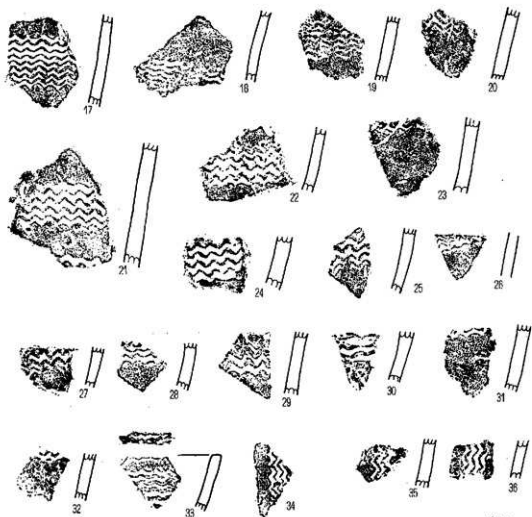




第124図 押型文土器(1)

土器観察表

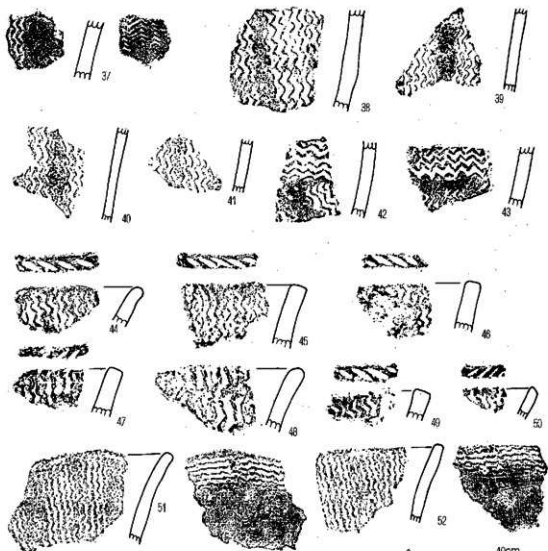
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	層位	土質	備考
1	A-1	鉢形	口縁	山形雷紋	ナテ	Ⅴ上	写・黄・泥	
2					ナテ	Ⅴ	黄・石	
3	A-2				ナテ	Ⅴ下	石	
4	A-1				ナテ	Ⅴ上	紅・石・砂	
5	A-1				ナテ	Ⅴ上	黄・泥	
6	A-1				ナテ	Ⅴ上	黄	
7	A-2				ナテ	Ⅴ上	石	
8	A-2				硝	Ⅴ下	硝	
9	A-2				硝		石・泥	
10	A-2				硝		石・泥	
11	A-2				硝		石	
12	A-1				ナテ	Ⅴ	黄・石	
13	A-1		胴部		硝	Ⅴ下	石・泥	
14	A-1				ナテ	Ⅴ上	石・黄・泥・黄	
15	A-2				ナテ・硝	Ⅴ下	石・黄	
16	A-2				ナテ・硝圧	Ⅴ下	石・黄	



第125风押型文土器(2)

土器観察表

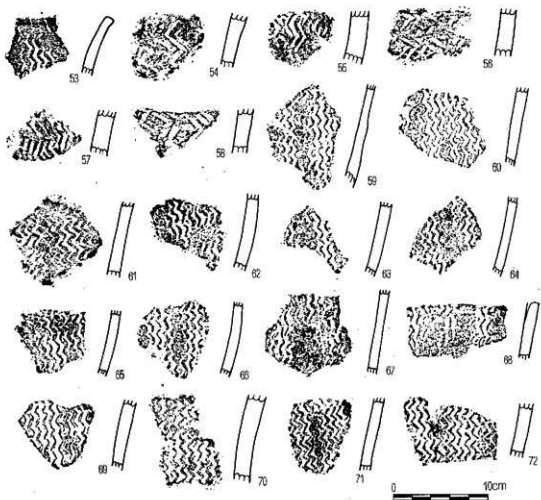
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器底図案	層位	胎土	備考
17	A-1	深鉢	胴部	山形帯状	ナテ	Ⅴ上	黒・石	
18	A-2	〃	〃	〃	〃	Ⅴ下	石・土	
19	A-1	〃	〃	〃	ナテ・粗	Ⅴ上		
20	A-2	〃	〃	〃	ナテ	Ⅴ下	石・炭	
21	A 3	〃	〃	〃	粗	Ⅴ	黒・小・雲	
22	A-1	〃	〃	〃	〃	Ⅴ上	黒・海	
23	A-1	〃	〃	〃	ナテ	Ⅴ	石・土	
24	A-1	〃	〃	〃	粗	Ⅴ	灰・岩	
25	A-2	〃	〃	〃	〃	Ⅴ	石	
26	A 1	〃	〃	〃	ナテ	Ⅴ	黒	
27	A-2	〃	〃	〃	粗	Ⅴ	石・炭	
28	A-2	〃	〃	〃	〃	Ⅴ	石・土	
29	A-1	〃	〃	〃	ナテ	Ⅴ	石	
30	A-2	〃	〃	〃	〃	Ⅴ下	黒・石	
31	A-1	〃	〃	〃	ナテ・粗	Ⅴ	石・炭	
32	A-1	〃	〃	〃	ナテ・粗	Ⅴ上	土	
33	A-1	〃	〃	〃	ナテ	Ⅴ	黒・石	
34	A-1	〃	〃	〃	〃	Ⅴ上	石	
35	A-1	〃	〃	〃	ナテ・粗	Ⅴ	石・炭	
36	A-1	〃	〃	〃	ナテ	Ⅴ上	石	



第126圖 押型文土器(3)

土器觀察表

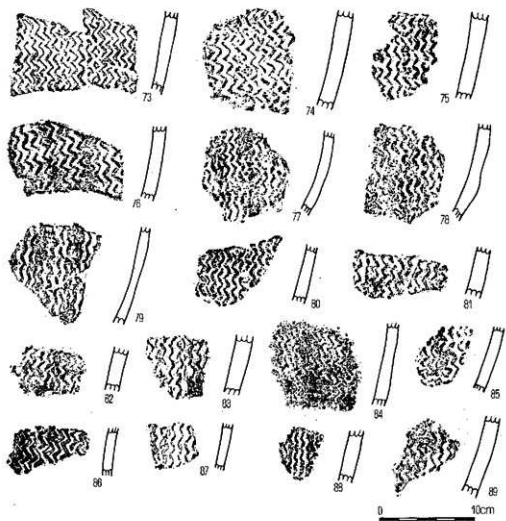
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	群別分類	層位	胎土	備考
37	A-1	楕球	胴部	山形波浪	ナ字		赤・岩	
38	A-1	”	”	”	柱	Ⅴ下	石・長	
39	A-2	”	”	”	ナ字	Ⅴ最上	石・長	
40	A-2	”	”	”	”	”	”	51と同一體
41	A-2	”	”	”	”	”	”	
42	A-2	”	”	山形異方向波浪	”	”	石・長・短	
43	A-2	”	”	”	”	”	石・長	
44	A-2	”	口縁	山形波浪	瓶	Ⅴ最上	石・長	
45	A-2	”	”	”	”	”	石	
46	A-2	”	”	”	”	Ⅴ	石・赤	
47	A-1	”	”	”	”	Ⅴ最上	石・長	
48	A-1	”	”	”	”	Ⅴ下	石・赤	
49	A-2	”	”	”	瓶	Ⅴ上	”	
50	A-1	”	”	”	ナ字	Ⅴ下	石	
51	A-1	”	”	”	”	Ⅴ上	石・岩	
52	A-2	”	”	”	”	”	”	51と同一體



第127図 押型文土器(4)

土器観察表

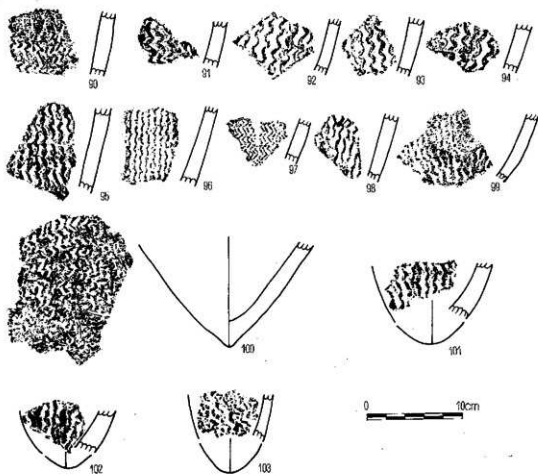
番号	発掘区	種類	部位	文様構成要素	形模特徴	層位	土質	備考
53	A2	浮輪	口縁	山形波状	ナデ	V	石	
54	A1	"	胴部	"	粗	VI下	石灰	
55	"	"	"	"	"	"	石	
56	A1	"	"	"	"	"	石・灰	
57	A1	"	"	"	"	IV最上	石	
58	A1	"	"	"	"	VI*	石	
59	A2	"	"	"	ナデ	IV最上	石	
60	A2	"	"	"	"	"	石	
61	A1	"	"	"	"	VI	石・灰	
62	A2	"	"	"	ナデ・粗	IV最上	石	
63	A2	"	"	"	"	"	石	段上同 個体
64	A2	"	"	"	"	"	石	"
65	A2	"	"	"	粗	"	石	"
66	A2	"	"	"	"	"	石	"
67	A2	"	"	"	ナデ	IV最上	石	"
68	A2	"	"	"	"	"	石	
69	A2	"	"	"	"	"	石	
70	A2	"	"	"	"	"	石	
71	A1	"	"	"	"	VI上	石・灰	
72	A1	"	"	"	"	VI上	石	



第128図 押型文土器(5)

土器観察表

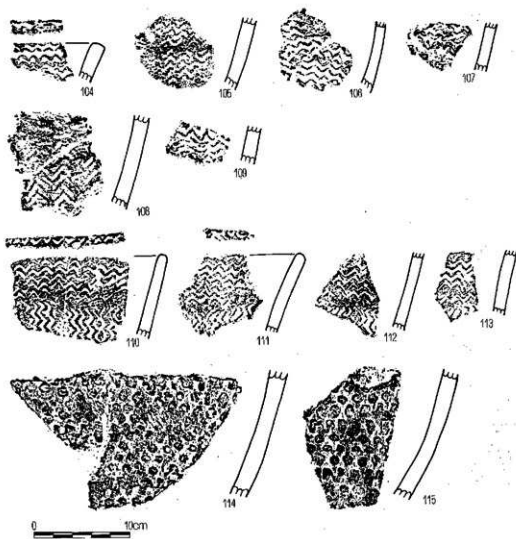
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	顔面調整	層位	胎土	備考
73	A 1	尖鉢	胴部	山形並列	ナ字	VI F	石・岩	
74	A 2	”	”	”	”	VI L	石・灰	
75	A 1	”	”	”	”	VI 腰上	石	
76	A 1	”	”	”	ナ字・縦	VI 上	石・灰	
77	A 2	”	”	”	ナ字	VI 腰上	石・泥	
78	A 1	”	”	”	”	VI 上	石	
79	A 1	”	”	”	”	”	石・灰	
80	”	”	”	”	”	”	石・灰	
81	A 1	”	”	”	縦	VI 腰上	石	
82	A 1	”	”	”	”	”	石	
83	A 1	”	”	”	”	”	石・灰	
84	A 1	”	”	”	ナ字・縦	”	石・灰	
85	A 2	”	”	”	縦	VI	灰・石	
86	A 1	”	”	”	ナ字	”	石	
87	A 2	”	”	”	”	VI 腰上	石	
88	A 1	”	”	”	”	V	石	
89	A 1	”	”	”	縦	VI 上	石	



第129図 押屋文土器(6)

土器観察表

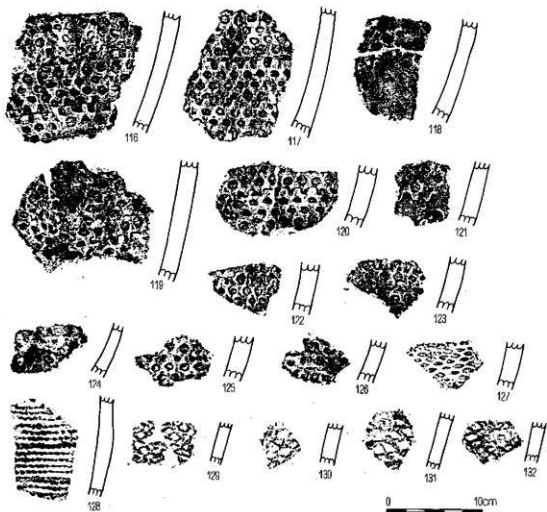
番号	発掘区	形状	部位	文様構成要素	製造技法	層位	出土	備考
90	A	碗鉢	胴部	乱形斑物	埴	VI上	石・灰	
91	A1	〃	〃	〃	〃	VI	石	
92	A1	〃	〃	〃	ナブ	VI	灰・石	
93	A1	〃	〃	〃	ナブ	VI	灰・石	
94	A1	〃	〃	〃	〃	V	灰・石	
95	A1	〃	〃	〃	埴	VI層上	石	
96	A2	〃	〃	〃	〃	〃	石	
97	A1	〃	〃	〃	ナブ	VI	灰・石	
98	A1	〃	〃	〃	〃	〃	灰・石	
99	A1	〃	〃	〃	埴	VI上	石・灰	
100	A1	〃	蓋部	〃	ナブ	〃	石	
101	A1	〃	〃	〃	〃	VI上	石・灰	
102	A1	〃	〃	〃	埴	VI層上	石	
103	〃	〃	〃	〃	ナブ	〃	石	



第130圖 押型文土器(7)

土器觀察表

番号	装飾文	胎形	部位	文様構成要素		層位	土質	備考
				文様	構成要素			
104	A 1	筒鉢	口縁	土影密押	ナア	V	石・灰	
105	A 1	"	"	"	ナア	Ⅷ段上	石	
106	A 1	"	胴部	"	"	Ⅷ段上	石	
107	A 1	"	"	"	"	"	灰	
108	A 2	"	"	"	瓶	Ⅷ段上	石	
109	A 1	"	"	"	ナア	"	灰・石	
110	A 1	"	口縁	"	"	Ⅵ上	石・灰・土	
111	A 1	"	"	"	"	"	石・灰	
112	A 1	"	"	"	"	Ⅵ下	石・灰・土	
113	A 1	"	"	"	"	Ⅵ上	石・灰	
114	A 1	"	胴部	梅門密押	瓶	Ⅷ段上	石・土	
115	A 2	"	"	"	"	Ⅵ上	石	

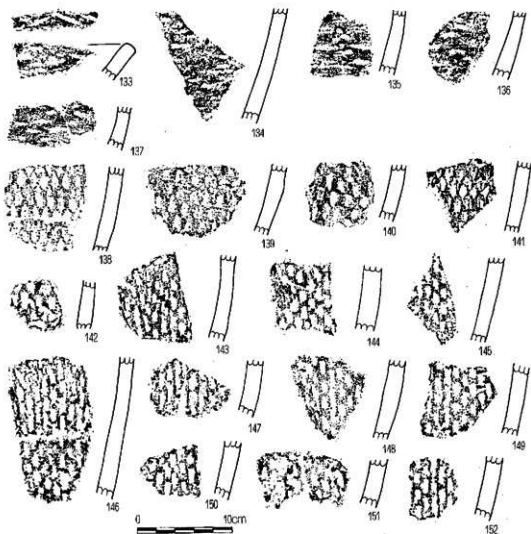


第131图 押型文土器(8)

土器観察表

番号	発掘区	種類	部位	文様・形状要領	断面観察	層位	出土	備考
116	A 2	深鉢	腹部	横円筒状	十字	Ⅲ最上	石・長・雲	
117	A 1	〃	〃	〃	横	〃	〃	
118	A 2	〃	〃	〃	〃	V	石・長	
119	A 2	〃	〃	〃	横	〃	石・長・雲	
120	A 1	〃	〃	〃	〃	Ⅲ最上	石	
121	A 2	〃	〃	〃	〃	〃	石・長	
122	A 1	〃	〃	〃	〃	〃	石	
123	A 2	〃	〃	〃	〃	〃	石	
124	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
125	A 2	〃	〃	〃	十字	〃	石・長	
126	A 2	〃	〃	〃	〃	Ⅵ下	石・長	
127	A 2	〃	〃	〃	横	V	瓦	
128	A 1	〃	〃	〃	十字	Ⅵ上	石	
129	A 1	〃	〃	輪子片	横	Ⅵ下	瓦・石	
130	〃	〃	〃	〃	〃	〃	瓦・雲	
131	A 1	〃	〃	〃	〃	V	石・雲	
132	A 1	〃	〃	〃	〃	Ⅲ最上	石・雲	

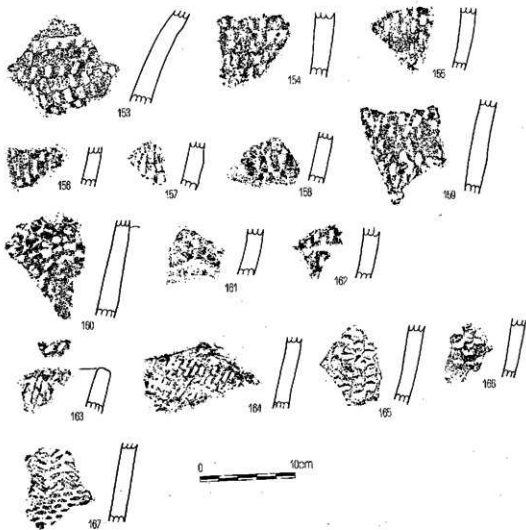




第132图 押型文土器(9)

土器觀察表

番号	所属区	器形	特徴	文様模範番号	器底形状	層位	粘土	備考
133	A 2	片鉢	口縁 割部	帯状文	ナデ	Vb上	石・灰	
134	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI上	石・灰	
135	A 2	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI上	石	
136	A 2	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	Vb上	石	
137	A 2	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	V	石・灰	
138	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	Vb上	石・灰	
139	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VIF	石・灰	
140	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	Vb上	石	
141	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	V	石・灰	
142	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI	石・灰	
143	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI上	石	
144	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI上	石	
145	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	Vb上	石	
146	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI上	石・灰	
147	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VIF	石・灰	
148	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	V	石・灰	
149	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI上	石・灰	
150	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	Vb上	石・灰	
151	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VI	石	
152	A 1	片鉢	口縁	帯状文	ナデ	VIF	石	



第133図 押型文土器00

土器観察表

番号	発掘区	形状	部位	文様構成要素	断面図	層位	土質	備考
153	A.1	深鉢	胴部	市松文	粗	VI下	石・雲	
154	A.1	〃	〃	〃	ナテ	V下	石	
155	A.1	〃	〃	〃	横	V下	石	
156	〃	〃	〃	〃	〃	〃	石	
157	A.1	〃	〃	〃	〃	VI下	石・長	
158	A.1	〃	〃	〃	〃	IV最上	石	
159	A.1	〃	〃	〃	ナテ	VI下	長	
160	A.2	〃	〃	〃	ナテ	VI上	長	
161	A.1	〃	〃	〃	〃	VI上	石・長	
162	A.1	〃	〃	〃	粗	VI	石・長	
163	A.1	〃	口縁	〃	ナテ	VI下	石・雲	
164	A.1	〃	胴部	〃	〃	VI上	石・雲	
165	A.1	〃	〃	〃	〃	IV最上	長	
166	A.1	〃	〃	〃	〃	〃	石・長	
167	A.1	〃	〃	横門・山形文	〃	V	長・雲・石	

d) 市松文 (第123、132~133図)

山形文に次いで多く出土し、およそ1.5割を占める。施文法が横位か縦位か不明のため文様により以下のように分類する。長楕円形を呈するもの(123、133~137)、楕円形(138~142)長方形(143~160)、方形(163、164)、異形(165、166)の5種類である。

第123図は、胴部上半の破片が第123図の状態で 第VII最上層より出土し、ほぼ器形が判明するものである。口径20.4cm、現存高13.0cmで、口縁部は大きく外反し、口径が最大径となる。胴部は張りをもたず、底部へと急にすばまるようである。口唇部は角張る。器厚0.9mm、色調は暗褐色で、焼成は余りよくない。施文は全面にわたり、原体の陽凸面が長楕円形をなしているもので、11×4mmのものとしてこれよりやや小形のもの同士が交互に入り組み、これが長軸を横になるように施文されている。縦位の施文と思われるが、器表面が荒れているためさだかではない。口唇部には斜位の刻み目が顕著状に施されている。

133~137は、123と同一個体と思われる。133は、口縁部の破片で、大きく外反し、口唇に刻み目を有する。134~137は胴部の破片である。

楕円形状を呈する138~142は、胴部破片に密接施文されている。陽凸面を楕円形としたもので、1つの楕円は9×4mmと大きい。器厚7~8mm色調は暗、黄褐色を呈し、胎土された石英、長石、雲母を含み、焼成は悪く、もろい。長方形の143~160は、陽凸面を長方形にしたもので、1つの長方形は6×2mmで、規則正しく整った形状を呈している。159、160は施文方向が乱れ、交錯している。胎土、焼成、色調とも楕円形のものに類似している。方形文は、163、164の2片のみで、他の市松文に比較し、文様の押捺が明瞭である。163は、口縁部破片で、口唇部に斜行する刻みが施されている。焼成は良い。

165、166は、異形の市松文である。形状は楕円形と呈するが、楕円の1端に粘土の盛り上がりが見られる。粘土が柔らかいうちに強く原体を押しつけたためであろうか。薄手で、焼成は良く、焼きしまっている。

E) 異種文様併列施文のもの (第133図)

山形文と楕円文が組み合わされて施文されたもので、167の1片が出土したのみである。山形文は頂部が切れ、楕円文を波状に配列したようにもみられるが、山形文を意図したものであろう。楕円文は小粒のものである。色調は暗褐色を呈し、焼成は良い。

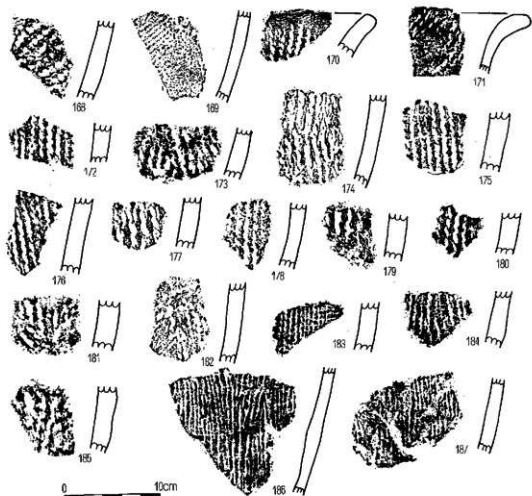
B類 縄文 (第134図)

1種 密接施文されるもの

16gが1片出土している。LR単節縄文で、斜回転により密接施文されたもの。器壁は8mmで厚く、暗褐色を呈す。焼成は良い。

2種 帯状施文されるもの

169の1片が出土したのみである。撚りの細いRL単節縄文が縦位施文されている。器壁6mmと薄く、焼成は極めて良い。



第134圖 縄文、撚糸文土器(1)

土器観察表

番号	発見区	群形	部位	文様構成要素	百周調整	層位	胎土	備考
168	A 2	深鉢	胴部	縄文	指平底	VI上	石・炭	
169	A 2	"	"	"	ナテ	VI段上	石	
170	A 1	"	口縁	撚糸文	ナテ	VI上	石・炭	
171	A 2	"	"	"	"	VI上	石	
172	A 2	"	"	"	"	VI上	石・炭	
173	A 2	"	"	"	"	VI下	石	
174	A 2	"	"	"	押圧底	"	石	
175	A 2	"	"	"	縄	VI段上	石・竹	
176	A 2	"	"	"	"	"	"	
177	A 1	"	"	"	"	V	石・炭	
178	A 2	"	"	"	ナテ	VI段上	石・炭	
179	A 1	"	"	"	"	IV	石	
180	A 2	"	"	"	ナテ	VI段上	石・炭	
181	A 1	"	"	"	縄	V	石・炭	
182	A 1	"	"	"	ナテ	"	"	
183	A 2	"	"	"	押圧底	VI段上	石	
184	A 1	"	"	"	ナテ	"	石・炭	
185	A 1	"	"	"	"	"	石	
186	A 1	"	"	"	ナテ	VI	石	
187	A 1	"	"	"	ナテ	VI下	石	

## C類、摺糸文

### 1種 密接施文されるもの

摺糸文は全て密接施文されている。

#### (a) 縦方向の摺糸文を基本とするもの

##### (1) 条間隔が広く、摺りの太いもの (第134図)

170～185がこれに相当し、他に11点の小片がある。170～183は原体Rの摺糸、184、185は原体Lの摺糸文である。170、171は口縁部破片で、170は口縁に若干の無文部を残す。171は口唇を肥厚させ、外に大きく外反している。ともに口唇、裏面への施文はない。171～185は胴部破片で、条間隔が広く、摺りの太いものが主体となる。胎土には石英、長石、雲母が含まれ、他の文様の土器に比べ雲母の混入が目立つ。焼成は比較的良好で、器壁はしっかりしたものが多い。

##### (2) 条間隔が狭く、摺りの細いもの (第134、135図)

186～190がこれに含まれる。ともに胴部破片である。条間隔が一定せず、摺りが細かく、原体ははっきりしないが、0段の縄文を用いているようである。器厚は6～7mmと薄手で、石英を含み、焼成は良い。丁寧な器面調整が施されている。

#### (b) 斜方向の摺糸文が施文されるもの

この種のは条間隔がやや狭く、摺りの細く、粗いものが多い。

##### (1) 表裏に施文されるもの (第135図)

191、192の2片で、口唇部にも施文されている。口縁部の破片に限られている。2片とも強く外反し、口唇は丸味をおびる。原体Rの摺糸を施文し、外面へは、191は左傾に、192は右傾し、内面は両者とも横位施文を示す。胎土には、石英、長石、雲母が混入され、191は石英、雲母が多い。暗褐色を呈し、器壁はやや荒れている。

##### (2) 表面のみに施文されるもの (第135、136図)

(1)の胴部破片を含むようである。193～209がこれに属し、193～204は原体R、205～207はL、208～209はLRの縄による摺糸文を施文している。194～199、202～208は右傾し、200、201、209は左傾している。右傾のものが主体を占めている。胎土は石英・雲母を含み、少量岩片を混入するものもある。雲母の混入が目立つ。7～10mmと概して厚く、焼成は良いものが多い。

#### (c) 多方向からの摺糸文が重複して施文されるもの (第136図)

多方向からの摺糸文が施文されたため、網目状あるいは格子目状の文様を描出したもので、210～215が該当する。この種のは図示したものが出土した資料の全てである。全てRの縄による摺糸文で、摺りの細いものが中心となるが、210は太めのものである。条間隔は、212～214たのように広いものが主体をなすが、211のような狭いものも少量存するようである。7～11mmと器壁は厚く、石英、雲母を含む。

## D類 無文土器 (第136図)

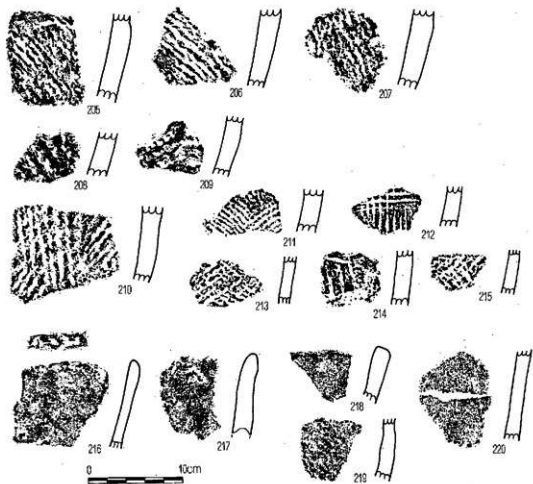
第121図は、第IV層から出土し、胴上半部の比較的大形の破片で、ほぼ器形が分かる。口径18.2cm、現在高10.5cmで、直に立ち上がり、屈曲のない器形を呈する。内外面とも丁寧に研磨されて



第135図 撫糸文土器(2)

土器観察表

番号	発掘区	層別	部位	文様構成要素	器底状態	層位	地土	備考
188	A 1	深鉢	胴部	撫糸文	ナア	VI上	石	
189	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	〃	石	
190	A 2	深鉢	口縁	撫糸文	撫圧痕	〃	石・灰	
191	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	V	石・灰	
192	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	〃	石・灰	
193	A 1	深鉢	胴部	撫糸文	ナア	VI段上	石	
194	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	〃	石・灰	
195	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	〃	〃	
196	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	〃	〃	
197	A 2	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	VI下	〃	
198	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	指す痕	〃	石	
199	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	網	〃	石	
200	A 2	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	VI上	石	
201	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	V	石	
202	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	〃	石・灰	
203	A 1	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	〃	石・灰	
204	A 2	深鉢	口縁	撫糸文	ナア	VI段上	〃	



第136图 捺糸文・無文土器(3)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器底調整	層位	出土	備考
205	A 1	碎片	胴部	捺糸文	粗	VI下	石・灰・骨	
206	A 1	×	×	×		×	石・灰	
207	A 1	×	×	×	粗粒麻		石	
208	A 2	×	×	×	粗	V下	石	
209	A 1	×	×	×	×	VI	石・骨	
210	A 1	×	×	×	ナア	V	×	
211	A 2	×	×	×	V下	石・灰・骨		
212	A 1	×	×	×	ナア	Ⅷ段上	石	
213	A 2	×	×	×	×	VI下	石・骨	
214	A 1	×	×	×	粗	Ⅷ段上	×	
215	A 1	×	×	×	ナア		石	
216	A 2	×	口縁	捺文	粗粒麻		灰・石・骨	
217	A 1	碎片	口縁	×	ナア	Ⅷ段上	骨・石	
218	A 1	×	×	×	×	×	灰・石	
219	A 1	×	×	×	×	×	石	
220	A 1	×	×	×	×	×	石・骨・骨・灰	

いる。器壁は9mmとやや厚手である。暗褐色を呈し、焼成は良い。

216-218は、口縁部破片で、219、220は胴部破片である。216、217の口縁端は鋭角をなし、218は角張る。216は口唇部に刻みを施す特異なもの。整形は指頭圧痕が残り、起伏がみられる。胎土には、長石、石英を含み、器壁は6-9mmで、焼成は良い。色調は黄褐色を呈し、217は内面にススの付着が認められる。

(小林康男)

## 第II群土器(第137図1-第139図)

縄文時代早期後半～末葉の土器を一括した。A-1グリッドおよびC-4グリッドに偏在した分布を示し、とりわけ、A-1グリッドにおいては、第1群：押型文系土器とのあいだに層位的差異をもって、その上層に分布していたことが新たに確認された。

主として文様により、第1類～第5類土器に分布し、必要によりさらに細分を試みた。詳細は以下に示すとおりである。

### 第1類土器(第137図1-7)

いわゆる「連続爪形文」やそれに類似する刺突文により、波状ないし横位の文様が構成されるものである。文様および文様要素により、A種・B種に細分される。

A種(第137図1-6) いわゆる「連続爪形文」により、文様が構成されるものである。

1-3はそれぞれ波状をなす口縁部破片であり、表裏両面に施文されている。文様は外面1-2条、内面1条の「連続爪形文」が、それぞれ縁に沿うように波状に施されている。2・3は口唇部にも同様の文様が加えられるものであり、そのうち後者は、口唇部が皿状を呈している。4-6は本種に伴う胴部破片。くすんだ褐色を呈するものが多く、胎土に砂粒・石英・植物繊維などを含む。器厚はおおむね7-8mmとやや厚手であり、焼成は良好とはいいがたい。

B種(第137図7) 爪形文に近い縦位の刺突文を横方向に連続施文したものである。

図示した1片がすべてである。7は小さな波状を呈する口縁部破片であり、ヘラ状工具により縦位刺突文をやや波状に連続施文している。口唇面には同一工具により刻み目が加えられる。外面暗茶褐色、内面茶褐色を呈し、外面には横方向の条痕文をとどめている。器厚10mmと厚手であり、胎土に植物繊維をやや多く含んでいる。

### 第2類土器(第137図8・9)

絡条体圧痕文が施されるものである。出土総数は図示した2片がすべてである。

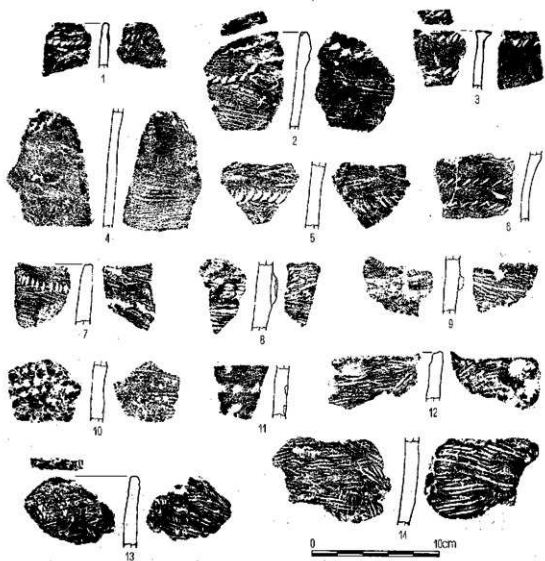
8・9はともに隆帯が施された胴部破片であり、比較的小型の原体による絡条体圧痕文が浮圧施文されている。8はくすんだ褐色、9は茶褐色を呈し、前者は表裏両面に、後者は裏面に条痕文をとどめている。器厚は11mm。焼成はおおむねふつうである。胎土に砂粒・白色不透明粒子・植物繊維の混入がみられる。

### 第3類土器(第137図10・11)

刺突文のみが施されたものであり、図示した2片が確認されたにすぎない。

10は裏面に条痕文をとどめる胴部破片であり、表面には棒状工具による刺突文を横方向に数段

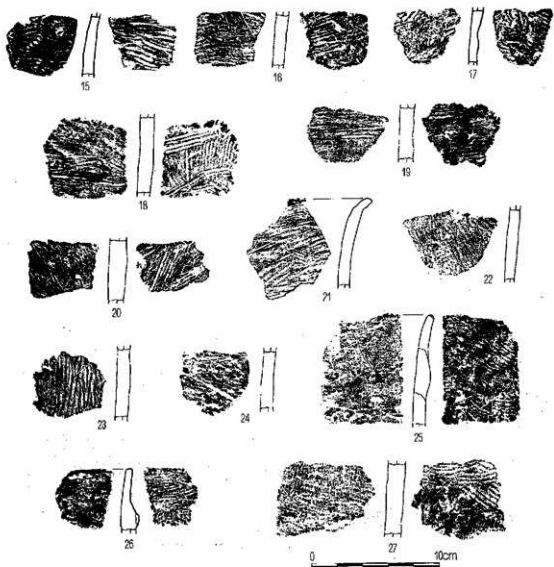




第137图 縄文早期条状文土器(1)

土器観察表

番号	発見所	器形	部定	文様構成要素	胎土/外装/内装	胎土	備考
1	妻浜	片断	口縁	連続斜条文	ナア	砂・石・せんい(少)	
2	A-1	片断	口縁	斜条	条状	砂・石・土・せんい	
3	3H	片断	口縁	連続斜条文(具群像)	ナア	砂・石・せんい	
4	M-Y	片断	胴	斜条	ナア/条状	砂・石・せんい(中多)	
5	C-4	片断	口縁	斜条	ナア	砂・石・土・せんい	
6	妻浜	片断	口縁	斜条	ナア	砂・石・土・せんい	
7	C-4	片断	口縁	斜条	条状/押込	砂・石・せんい(中多)	
8	C-4	片断	口縁	斜条	条状	砂・石・せんい	
9	C-4	片断	口縁	連続斜条文	ナア/条状	砂・石・せんい(多)	
10	3H	片断	口縁	斜条	ナア	砂・石・せんい(中多)	
11	A-1	片断	口縁	斜条	ナア	砂・石・せんい	
12	妻浜	片断	口縁	斜条	条状	砂・石・土・せんい(多)	
13	妻浜	片断	口縁	口縁、具群、押込	ナア	砂・石・せんい(中多)	
14	C-4	片断	胴	斜条	ナア	砂・石・土・せんい(中多)	



第138図 縄文早期条痕文土器(2)

土器観察表

番号	発掘区	器形	器底	文様構成要素	器面調整 外面/内面	胎土	備考
15	A-2	胴鉢	削		条痕→ナデ/条痕	砂・白・せんい(多)	
16	1 II	＊	＊		＊	砂・白・せんい	
17	C-4	＊	＊		＊	砂・白・せんい(多)	
18	表段	＊	＊		高度	＊	
19	A-5	＊	＊		＊	砂・白・せんい	
20	A-1	＊	＊		＊	砂・白・せんい	
21	B	＊	口縁		条痕/ナデ	砂・白・せんい(多)	
22	C-4	＊	削		＊	砂・白・せんい(多)	
23	A-1	＊	＊		＊	砂・白・せんい(多)	
24	A-1	＊	＊		＊	＊	
25	表段	＊	口縁		＊	＊	
26	A-1	＊	＊	輪帯	ナデ/条痕	＊	
27	A-1	＊	削		＊	砂・白・せんい	

めぐらしている。くすんだ茶褐色を呈し、胎土に破粒・石英・白色不透明粒子のほか、比較的多くの植物繊維の混入が認められる。全体として第1類土器に近い様相を呈している。器厚10mmと厚手のつくりであり、焼成は良好とはいいがたい。11は竹管状工具を斜方向から刺突している。色調は明褐色、胎土に白色不透明粒子を多く含み、第4類土器に近似している。

#### 第4類土器 (第138区12~36)

貝殻条痕文のみをとどめるものである。条痕文のあり方によって、A~C種に細分された。

A種 (第138図12~20) 内・外面ともに条痕文をとどめるもの。

12・13は口縁部破片。ともに小さな波状を呈し、13は口唇部に貝殻腹縁を押し込んでいる。14以下は胴部破片である。条痕文は外面横位、内面斜位に施されるものが多いものの、全体としては一定の方向性を欠いている。くすんだ褐色ないし茶褐色を呈するものが多く、胎土への植物繊維の混入が顕著である。焼成は良好とはいいがたく、器壁は脆弱である。器厚は平均8mm程とやや厚手である。

B種 (第138図21~24) 外面にのみ条痕文をとどめるもの。

21は口縁上部が強く外反する口縁部破片である。暗茶褐色を呈し、外面に横方向を中心とするやや粗雑な条痕文をとどめている。22~24は胴部破片。22・24は斜位、23は縦位の条痕文をとどめている。おおむね茶褐色を呈し、A種同様胎土への植物繊維混入が著しい。焼成は不良のものも多く、器壁は脆い。器厚は前後と厚手。

C種 (第139図25~30) 内面にのみ条痕文をとどめ、外面はナデ調整されるものである。

25・26は口縁部破片である。25は口縁下に粒土のもり上がりにより「段」を有し、口縁上部は外反ぎみに開く。26は押圧の加えられた隆帯を横位にめぐらしている。27~29は胴部、30は底部付近の破片であり、内面に横方向を中心とした条痕文をとどめている。色調はくすんだ褐色ないし茶褐色。器厚は10mmほどをさかり、全体に脆弱なものが多い。

#### 第5類土器 (第139図31~36)

無文ないし漆痕文のみをとどめるもの。

暗褐色ないしくすんだ褐色を呈する胴部破片がすべてである。内・外面ともにナデによる器面調整が行われている。器厚は7~11mmをはかるが、8・9mmのものが主体を占めている。胎土に多量の植物繊維を含み、焼成は不良である。

#### 第III群土器 (第140図1・2)

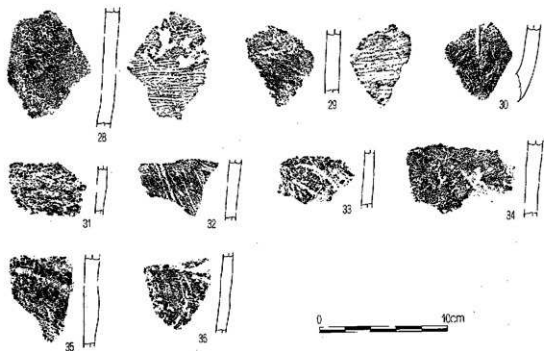
縄文時代前期の土器を一括した。

1はRL単節縄文を地文として、結節状浮線文が貼り付けられるものである。浮線文は横方向に数条でぐらされている。色調はくすんだ褐色。焼成はふつうである。2は半截竹管による集合沈線文が施された胴部破片であり、一部に三角形印刻文が加えられている。胎土に砂粒・長石を含み、器厚3~5mmと薄手のつくり方である。

#### 第IV群土器 (第140図3~13)

縄文時代中期の土器を一括した。

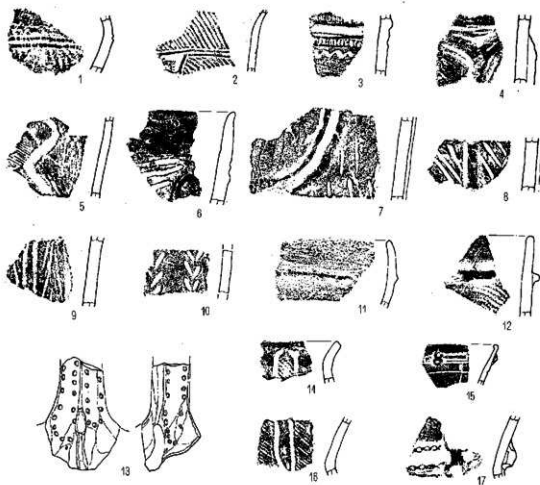
3は角押文を特徴とする胴部破片。4は原体Lの無節縄文を地文として、やや曲線的な隆帯が



第139区 縄文早期条痕文土器(3)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調査 外壁/内壁	胎土	備考
28	C-4	楕体	取		十字/条状	砂・白・せんい(多)	
29	山形	*	*		*	*	
30	表体	*	取付近		*	*	
31	表体	*	胴		十字	*	
32	C-4	*	*		*	砂・白・せんい	
33	A-2	*	*		*	砂・せんい(多)	
34	山形	*	*		*	砂・白・せんい(多)	
35	C-4	*	*		*	*	
36	表体	*	*		*	*	



第140図 縄文前、中、後期土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器質調査 外観/内面	胎土	備考
1	A-1	深鉢	胴	R1単線縄文・短節浮線文	ナデ	砂・白	
2	2H	〃	〃	集合乱線・三角印筋文	〃	砂・白	
3	5A	〃	〃	角押文	〃	〃	
4	Y 5	〃	〃	陸帯・L系乱縄文	〃	砂・白	
5	B-4	〃	〃	乱線・乱線	〃	〃	
6	2H	〃	口縁	陸帯・乱線	〃	〃	
7	3H	〃	胴	〃	〃	〃	
8	A-6	〃	〃	〃	〃	砂	
9	A 4	〃	〃	乱線	〃	〃	
10	Y-5	〃	〃	「ハ」の字文	〃	砂・白	
11	Y-6	〃	口縁	羽籠乱線・縄文(?)	〃	砂	
12	A-5	〃	〃	陸帯・LR単線縄文	〃	砂・白	
13	5A	〃	把手	刺突	〃	砂	
14	B 4	〃	口縁	乱線→L系浮線縄文	〃	砂・白	
15	A-5	〃	胴	L系浮線縄文→乱線	〃	砂・白・金	
16	A-2	〃	口縁	短線文・波線縄文	ミガキ	砂	
17	B-4	〃	胴	刺突文	ミガキ/ナデ	〃	

貼り付けられている。6は平縁の口縁部破片であり、隆縁文と短沈縁文による文様が描かれる。10には逆「八」の字状の短沈縁文が縦位に規則的に配されている。11・12は口縁下に細隆起線ないし隆帯がめぐるものであり、胴部には縄文が施されている。口縁上部はともに無文帯を形成しているが、前者は内湾し、後者は直線的に開く。13は深鉢形土器の縁部に付けられたと考えられる把手の一部である。断面三角形をなし、外面には棒状工具による刺突文が施されている。

#### 第V群土器（第140図14～17）

縄文時代後期の土器である。

14・15は平行する2本の沈縁によって曲線的な文様が描かれるものである。14は口縁上部が強く外傾する平縁の口縁部破片であり、沈縁間にはL R単節縄文が充填施文される。15はL R単節縄文を地文として沈縁文が施されたのち、沈縁間を滑り消している。

16は外反しながら大きく開く平縁の口縁部破片である。口縁上部に一条の紐縁文がめぐり、一部に「8」の字状の貼り付け文が加えられている。紐縁文直下にはL R単節縄文による縄文帯がめぐっている。内・外面との横方向を中心とするていねいな器面調整が行われ、器面は平滑に仕上げられている。器厚は3～5mmと薄手のつくりである。17はくびれ部に「8」の字状の貼り付けと二条の紐縁文が施された胴部破片である。甕形土器の頸部破片である可能性も考えられる。くすんだ褐色を呈し、外面は研磨されている。

（百瀬志幸）

## （2）縄文晩期～弥生初頭

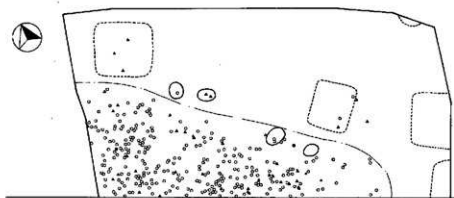
今回の調査では、調査区のはほぼ中心、斜面下のやや凹地状を呈する低地に、径およそ25m×15mの長円形の範囲で、縄文晩期後葉～弥生中期初頭の上器を主体として出土する土器集中区が検出された。しかし、南半は農道下となるため未調査に終わり、西側についても、調査区外となるため、土器集中区の正確な範囲は捉えられていない。

遺物は、そのほとんどが、黒色土層（Ⅲ層）内に含まれ、暗褐色土層（Ⅳ層）内には、晩期以後の土器は存在しないことから、Ⅳ層最上面を基盤として、Ⅲ層堆積とともに、遺物の堆積が進行したものと推察される。遺物には多量の土器、91点の石器、及び3点の土製品があり、土器には完形品は1点のみみられず、混然一体となって出土するその状態は、土器棄て場の様相を帯び、それを覆づける現象として、半完形の土器の出土がみられることや（第145図）、土器の接合関係が、傾斜方向とは無関係で、流れ込みによる土器の堆積状況を示さないことなどが挙げられよう。（第141図）なお、遺物の分布は晩期第VI群土器と、弥生I、II類土器では、微妙なズレがあり、時期によって土器、石器の投棄場所が移動した可能性もある。（第141、142図）

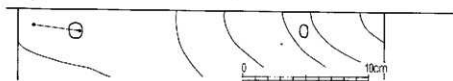
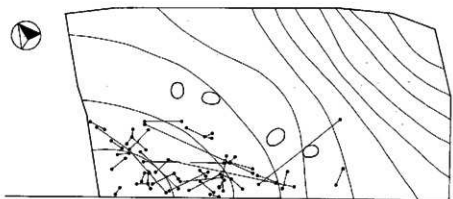
### 小竪穴出土土器

#### 第2号～第7号小竪穴の遺物（第146図）

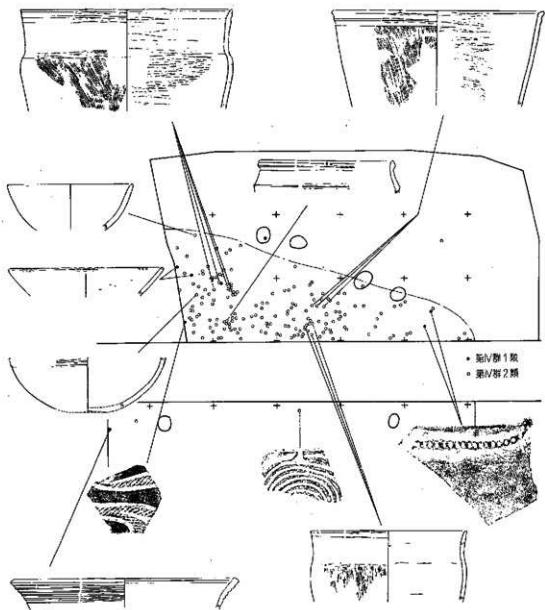
第2号～第7号小竪穴出土の遺物は、量的には少なく、中・下層からの出土はほとんどみられないため、明確な時期決定はできないが、出土遺物のほとんどは、晩期中葉～弥生中期の遺物である。以下、各小竪穴ごとに、遺物の説明を行いたい。



第141图 土器集中区遺物出土状況

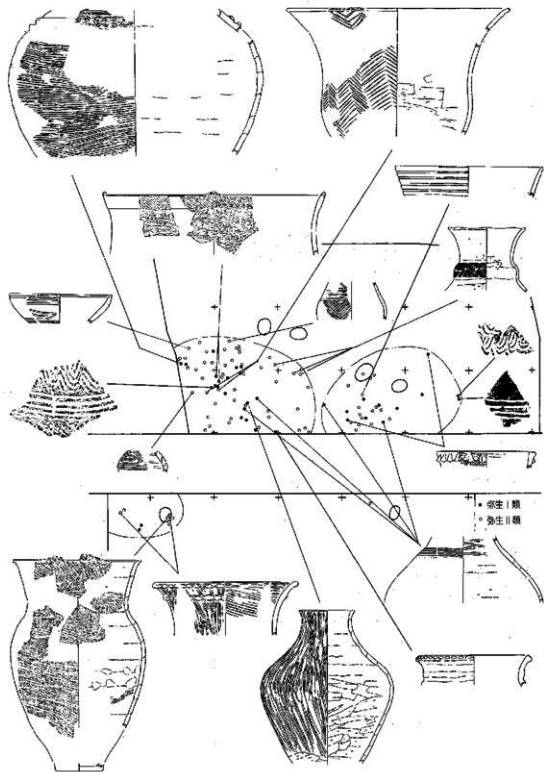


第142图 出土土器接合關係

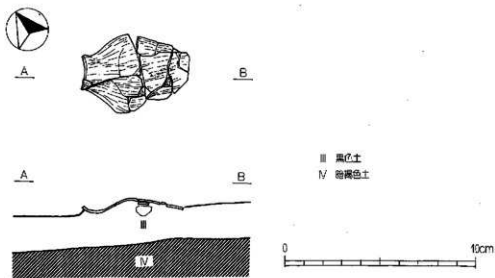


第143号 晚期土器出土位置图





第144图 弥生土器出土位置图



第145図 壺形土器出土状態図

(1)第2号小壁穴 (第146図1~8)

遺物を多出した小壁穴であるが、検出面からの出土が多い。中層から出土した土器片は、図示しなかったが、第VI群II類土器に比定される無文土器の破片が2点出土している。検出面及び上層からの出土土器には、第VI群II類及び、弥生I、II類土器がある。1は口縁下に、縦密条痕風の条痕が施された口縁部の直立する深鉢である。2、3は、無文の深鉢、及び壺?の破片、6、7は植物茎の束とも考えられる施文具による条痕が施され、8の壺の肩部には、ヘラ?の施文具により、羽状条痕風の文様が施文される。時期的には、1~6が第VI群II類、7が弥生I類土器、8が弥生II類土器に含められ、時期的な幅があり、小壁穴に付随する遺物というより、土器集中区からの混入と考えられる。

(2)第3号小壁穴

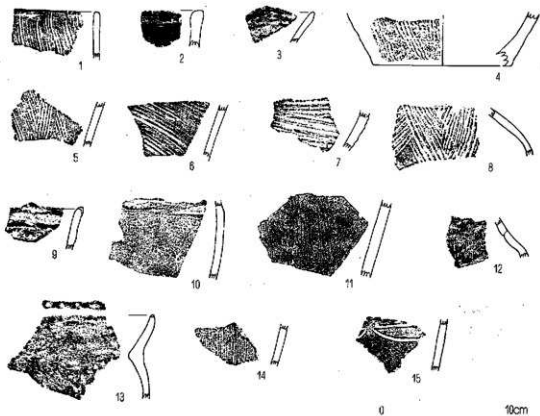
第3号小壁穴出土の遺物は、いずれも細片であり、図化しなかったが、第VI群II類に属するとと思われる無文の深鉢の破片が3点出土した。

(3)第4号小壁穴 (第146図9~14)

第4号小壁穴からは、第VI群II類に属する深鉢及び壺形土器の破片が10片幅出土した。そのうち4点について拓影を載せている。9は深鉢の口縁部で、小突起を有し、口縁下には浅い沈線が2条巡る。10は肩に稜を有した無文の深鉢であり、内面はケズリ、外面は、ケズリ→ナデを施すことによって仕上げられる。また、12は、無文の壺の頸部~肩部にかけての破片と思われ、内外面ともナデによって仕上げられている。

(4)第5号小壁穴 (第146図13、14)

第5号小壁穴からは、5点の土器が出土した。灰胎陶器も1片出土しているが、検出面よりの出土であり、主体となるのは第VI群I、II類に属する土器である。13は床面直上から出土しており、外方に開く口縁部と、屈曲して肥厚した頸部に特徴をもつ、また口唇にはキザミも施されて



第146図 小型穴、ピット群出土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	断面調整 外質/内面	胎土	備考
1	2 S	碗鉢	口縁		細密角直線/+ナ		
2	"	"	"		+ナ		
3	"	盃?	"		"		波状口縁
4	"	碗鉢	底部		細密点線/+ナ		
5	"	"	胴部		糸縷/+ナ		
6	"	"	"		糸縷/+ナ		
7	"	盃?	胴部		糸縷/+ナ		
8	"	盃	胴部	へらによる条痕	+ナ		
9	4 S	碗鉢	口縁		+ナ		
10	"	"	口縁		+ナ/ケズク		
11	"	"	胴部		ミガキ/+ナ		
12	"	表	胴部		+ナ		
13	5 S	碗鉢	口縁		"		
14	"	"	胴部		細密、点線/+ナ		
15	7 1	碗鉢?	胴部	比喩	+ナ		

いる。女鳥羽川遺跡に類例があり、第VI群I類土器に含まれる可能性が強いといえよう。なお、中層からは細密条痕の破片14も出土している。

#### (5)第6号小竪穴

第6号小竪穴からの遺物はほとんど無く、わずかに無文の深鉢破片(第VI群II類)、縄文を有する壺?の細片(弥生第II類)、及び、平安時代の内面黒色処理の杯の細片などが出土しているが小竪穴の層属時期としては、晩期～弥生中期初頭の土器集中区と、ほぼ同時期が想定される。

#### (7)第7号小竪穴

第7号小竪穴から出土した土器には、中期第IV群及び晩期第VI群II類土器が数点みられた。いずれも紀片であるため、図示しなかったが、検出面の層位からみて、晩期に含まれる可能性が高いといえよう。

なお、小竪穴ではないが、15はP<sub>2</sub>より出土した有文土器である。沈線によって向かい合うレンズ状の文様が施され、内外とも丁寧なナデによって仕上げられる。色調は内外とも黒褐色を呈し、整形、治土などからみて、晩期に属するものと考えられる。

### 土器集中区

#### 第VI群土器

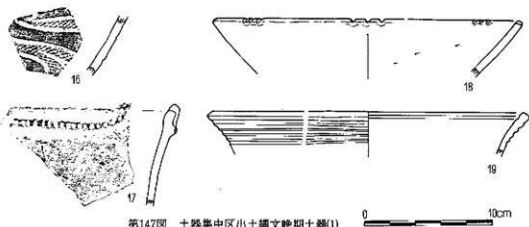
晩期中葉～末期にかけての土器である。水I式に比定される土器(II類)と、それ以前の土器(I類)に分けた。

#### 第I類土器(第146図)

出土量は少なく、A-2、A-5、A-6、B-6、Yグリッドより散在して出土した。16は、磨滑縄文手法による雲形文を施した大河系土器の鉢(もしくは浅鉢)の破片である。内面にも丁寧なミガキが行われており、外面には一部、赤彩の痕跡が残る。内外面とも暗褐色を呈し、治土には細かな長石、石英、雲母を含む。焼成良好な精製土器である。17は、口縁下の凸帯上にキザミを持ち、凸帯の連結部の口端には小突起を有する。内面は、ケズリの後にミガキが行われ、外面もミガキで仕上げられる。色調は、内外面とも淡黄褐色を呈し、長石、石英、褐鉄鉱をわずかに含む。この種の土器は、従来、吉胡貝塚発掘の所見から、古湖晩期IIAとして、東海系の土器と考えられてきたが、最近の研究では、中瀬に主体的な土器であることが明らかにされている。また、時期については、百瀬氏の設定した第6段階(百瀬 1984)に相当し、晩期中葉に位置づけられよう。18は、口端に6単位、連続する3ヶ所の押圧の加えられた浅鉢である。押圧は、断面の丸みを帯びた棒状工具によるものと思われる。内面はケズリ→ナデ、外面はケズリ→ミガキが施されており、色調は黒褐色、焼成の良好な土器である。胎土には細かな長石、石英を含む。19は、百瀬長秀氏の教示によれば、女鳥羽川段階に比定される土器である。口縁内側に1本、外側に5本の沈線が巡っており、口端は面取りがなされる。口縁はかなり外反しており、深鉢、もしくは鉢の口縁部を考えられよう。色調は淡黄褐色、胎土には、石英、長石、砂粒を含む。

#### 第II類土器

晩期後葉～末葉、水I式に比定される土器である。量的には晩期後葉～弥生中期初頭にかけての土器集中区出土土器の半数以上を占める。主体となるのは細密条痕を有する深鉢及び無文深鉢



第147図 土器集中区出土縄文晩期土器(1)

土器観察表

番号	発掘区	種類	部位	文様構成要素	器面調整 外面/内面	胎土	備考
16	Y-5	鉢?	胴部	すり出し縄文	ミガキ	長石・雲母(多)	外面水形
17	A-2	口縁	口縁	口縁下の凸帯の上にミガキ	ミガキ	長石・雲母(少)	
18	B-5	浅鉢	口縁	口縁に6単位の手止	ミガキ/ナゲ	石・雲母(多)	
19	A-5, Y-2	深鉢?	口縁	外側5本、内面1本の沈線	?	長石・砂	断面瓦れる

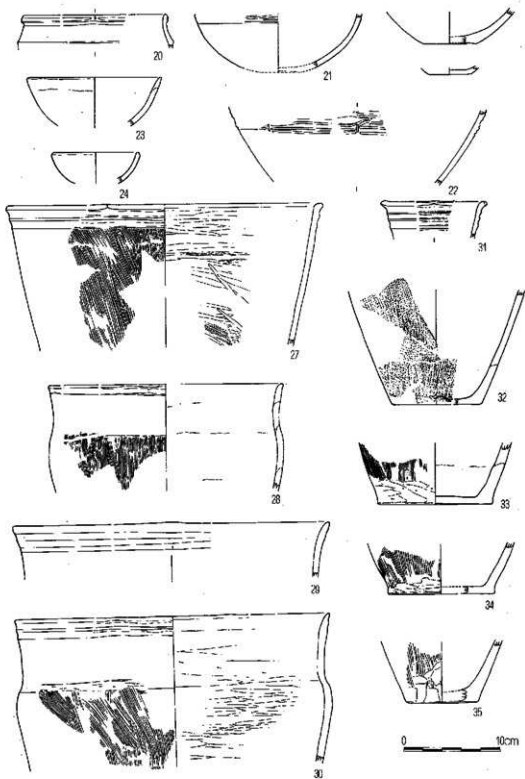
であり、少量の有文・無文の浅鉢がこれに伴う。以下、浅鉢、深鉢の順に出土土器の説明を行っていきたい。

浅鉢 (第148図、150図)

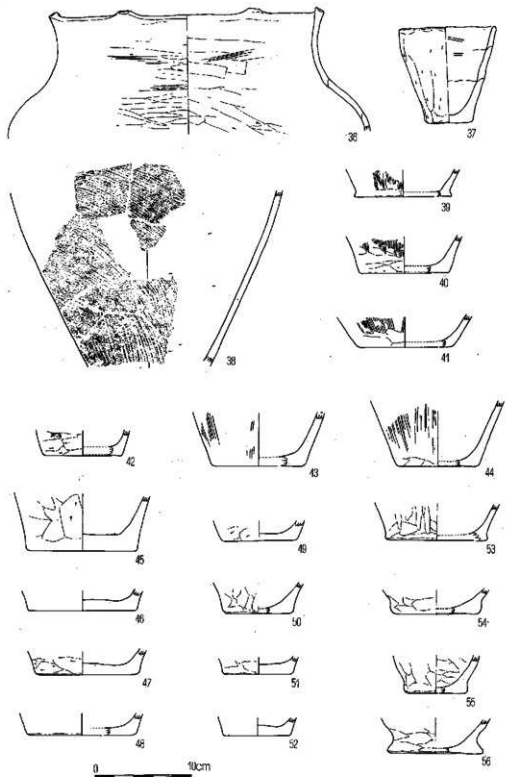
いわゆる浮線網状文を指標とするものと、無文の2種がある。深鉢との組成比はおおよそ1:9ほどで、特に、浮線網状文の山土が非常に少なかったのが本遺跡の特徴であるといえよう。

浅鉢の種：有文浅鉢 (20~22、57~66)

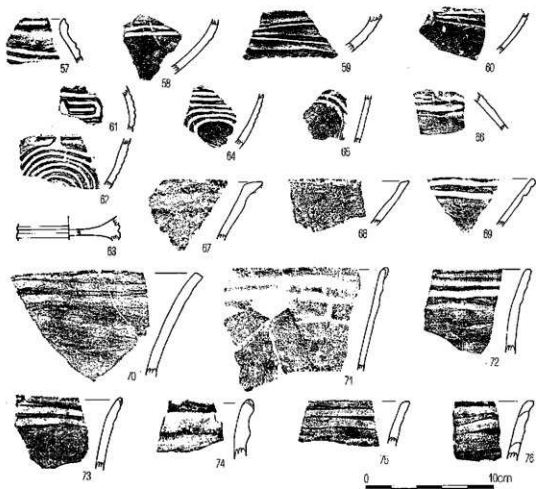
明瞭な浮線網状文を呈するものは存在せず、文様は、沈線及び浅い陽刻によって施される。20は口縁部に口外帯を有し、肩の張る器形で、肩には陽刻による一本の横走する隆線がみられるが下部の文様帯は不明である。内外面との明褐色を呈する土器で、胎土には、長石、石英、雲母、褐鉄鉱が含まれる。器面はやや荒れており、焼成は普通である。21は、肩の張らない器形が予想され、口縁部、底部を欠損するが、わずかに文様帯が窺える。文様は、沈線によって施文される。内外面とも丁寧にミガキの施される土器で、色調は暗褐色、胎土には、長石、石英、雲母を含む。22は、レンズ状の凹部、横走する沈線及び沈線を区切るタテの刻みといった文様構成をもつ。淡黄褐色を呈する大型の浅鉢で、器面のミガキは雑である。胎土には、長石、石英を含み、焼成は普通。また、拓影の57は、20とはほぼ同様な器形が予想される。58~60は、いずれも丁寧なミガキの施される土器であるが、文様は、58が沈線風、59、60が浅い陽刻によるもので、一般の浮線網状文とは異なった様相を呈する。なお、25は有文浅鉢の底部と思われる、わずかに上げ底状となる。この他、浅鉢では無いが、61~65は無頸壺、もしくは甕とも予想される有文土器であり、61~63は、出土状態、及び、内面の炭化物の付着からみて、同一個体と予想される。肩部には丁字文風の文様及び、その上部に刺突の列点文が窺え、胴下半には縄文が観察される。なお、底部は高台が付き、横走する沈線が施される。また、壺と思われる破片66も出土しており、22と同様、横走



第148图 土器集中区出土縄文晚期土器(2)



第149图 十器集中区出土繩文晚期土器(3)



第150図 十器塚中区出上縄文晩期土器(4)

土器観察表

番号	発掘区	種類	部位	文様構成要素	特徴詳説 外面/内面	胎土	備考
57	A-5	浅鉢?	口縁	沈線	ナデ	灰・砂	
58	A-2	"	"	"	ミガキ	灰・石・雲(少)	
59	A-5	"	胴部	彫り込みの浅い網状文	"	"	
60	A-5	"	"	"	"	"	
61	Y-4	"	"	沈線	"	灰・石・雲	
62	"	"	"	"	"	"	同一層位 内面灰化物
63	"	"	底部	"	"	"	
64	A-3	"	胴部	"	ミガキ/ナズリ	灰・石・砂	
65	A-4	"	"	"	ミガキ	石・砂	内面灰化物
66	A-5	帯	肩部	沈線	ナデ	灰・石	
67	Y-7	浅鉢	口縁	"	ナデ/ナズリ	凸面割腕?	
68	B-5	"	"	"	ナデ	灰・石(多)	
69	A-4	"	"	沈線(2本)	ナデ	灰・石・砂	
70	A-4	深鉢	"	沈線(2本)	ナデ/ミガキ	灰・石・砂	
71	A-4	深鉢	口縁	隆起風の沈線(2本)	ナデ/ミガキ	灰・石・砂	
72	"	"	"	"(6集)	ナデ	灰・石・砂	
73	"	"	"	沈線(2集) 小穴施	ミガキ/ナデ	灰・石・砂	
74	A-1	"	"	沈線、白粉、キザ?	ミガキ	灰・石	
75	A-4	"	"	沈線	ナデ	灰・石・砂	
76	A-6	"	"	"	"	"	



する沈線を遮断するキザミがみられる。この2点については、文様からみて、いわゆる浮線網状文より後出的要素を示すといえよう。

浅鉢b種：無文浅鉢（第148図23、24、26、第150図67～69）

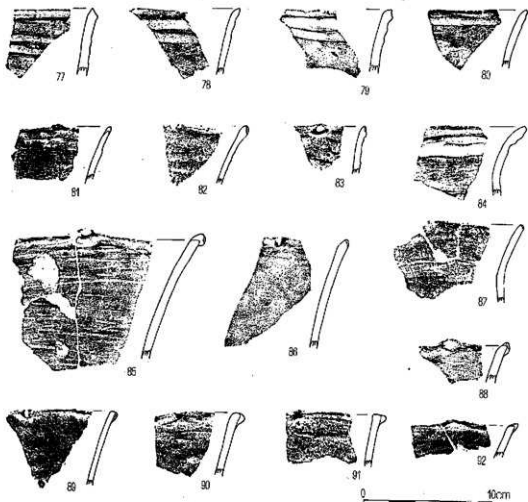
23は、破片から図上復元したもので、推定口径13.9cmを計る。破片から見た限りでは、舟形は早さず、内外面とも、ナデによって仕上げられる。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石、石英、砂粒を含み、口縁下の内面には炭化物の付着がみられた。24は推定口径9.4cmの小型の浅鉢で、内外面ともミガキが施される。その他、浅鉢、もしくは鉢と思われる破片の拓影67～69がある。67は、口端が外方に開き、口縁下のくびれ部には、凸帯剥落の痕跡が窺える。68は口端に面取りが施され、ケズリ痕の顕著な口縁部破片である。また、69は、口縁下に2条の沈線の施される土器である。これら3点の土器は帰属が明確でなく、第VI群I類に含まれる可能性も大きいといえよう。

深鉢（第148、149、153、154図）

土器集中区出土器のうち、主体をなす土器である。整形は、細密条痕、ミガキ、ケズリの三種に大別され、量的には、細密条痕を有する深鉢が、全深鉢の半数近くを占めると予想される。口縁は、口外帯及び口外帯に類する装飾を有するものと有さないものがあり、また、2～3条の沈線帯を持つものが多い。胎土には、長石、石英、砂粒及び雲母、褐鉄鉱が普遍的にみられ、色調は、暗褐色、灰褐色、茶褐色系統のものが多い。以下、細密条痕深鉢、無文深鉢の順に説明を加えた後、口縁形態の違いによりa種～g種に分類してみたい。

細密条痕深鉢（27、28、30、32～35、38～44、17～136）

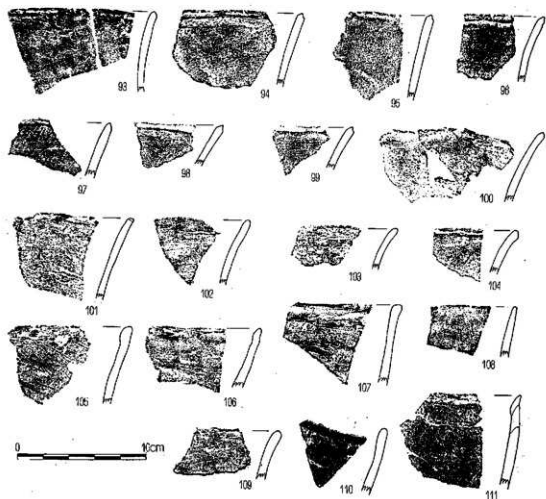
全体の器形を窺えるものは1点もなかったが、胴上半を図上復元できるものが3個体存在した。器形は、肩がわずかに張り、稜を有するものが一般的で、27のように底部から直線的に口縁部まで延びるものは少ない。また、整形の方向については、口縁部のナデ、ミガキがヨコ方向、肩部以下の細密条痕が肩部付近で右下がりの斜方向もしくはタテ方向、底部付近ではタテ方向に施されるものがほとんどであるが、117、126、127のように、肩部で横方向に施されるものもある。なお、体部に雷文モチーフを有する細密条痕深鉢は、わずかに小破片を5点数えるのみであり、肩部に文様帯を有する細密条痕深鉢が1点も存在しないことと共通して、本遺跡を特徴づける傾向であるといえよう。底部（32～35、39～34）については、底径10cm前後のものが多く、網底痕を有するものが6点（33～35、40、42、43）に認められる他は、ケズリ、ミガキによって仕上げられる。図上復元の3点について説明を加えれば、27は、口外帯及び口縁下に2条の沈線帯を有し、外面には細密条痕、内面にはナデ及びミガキが施され、沈線内にもナデが行われる。内外面とも淡灰褐色を呈する土器で、胎土には長石、石英、雲母、褐鉄鉱を含む。28は肩のやや張る器形で、丸みを帯びた口唇下には、沈線が一本みられ、ナデが施されている。外面はヨコナデ及び細密条痕、内面はナデによって仕上げられる土器であり、色調は内面暗褐色、外面暗褐色、胎土には長石、石英、雲母を含む。なお、外面肩部には、黒色炭化物のは付着が観察された。30は、口径32.8cmを計る大型品で、肩に稜を有している。口縁には2条の沈線がみられ、内面はケズリ→ミガキ、外面は細密条痕によって仕上げられており、色調は茶褐色、胎土には、粗い長石、石英を含む。



第151図 土器集中区出土縄文晩期土器(5)

土器観察表

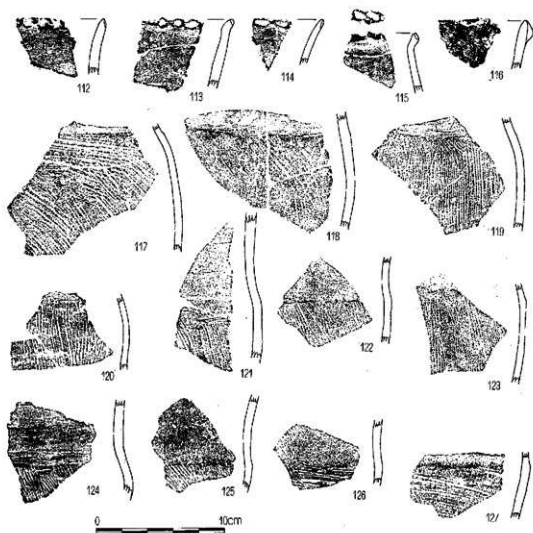
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器底形状 外底/内底	出土	備考
77	A-3	深鉢	口縁	退化した波線	ナデ/ミガキ	灰・石・砂	
78	A-5	"	"	沈線(2条)	"	"	
79	A-2	"	"	"	ナデ/ミガキ	"	
80	B-6	"	"	退化した波線	ミガキ/ナデ	灰・石(少)	
81	A-6	"	"	小突起	ナデ	灰・石・砂	
82	"	"	"	キヤミ	"	"	
83	A-3	"	"	波線(2条) 小突起	ナデ	"	
84	A-4	"	"	退化した波線	ナデ/ミガキ	灰・砂・焼	外周炭化物
85	"	"	"	細文・小突起	ミガキ	"	
86	"	"	"	キヤミ	"	"	
87	Y-7	"	"	キヤミ	ナデ	灰・石・砂	
88	A-4	"	"	小突起	"	灰・石・焼	
89	A-3	"	"	キヤミ	ミガキ	灰・石	外周炭化物
90	A-4	"	"	小突起	ケズリ	灰・石・砂	
91	"	"	"	小突起	ナデ/ケズリ	"	
92	A-5	"	"	小突起	ミガキ	灰・石	



第152图 上野集中区出土縄文晩期土器(6)

土器観察表

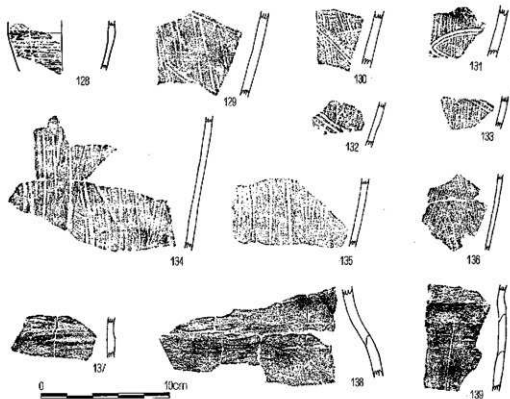
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器型調整 外側/内面	胎土	備考
93	A-5	深鉢	口縁	縞文	ナデ	長・石・砂	
94	"	"	"	"	ミガキ	"	外側灰化物
95	A-4	"	"	"	ナデ	砂(多)	
96	A-6	"	"	"	"	長・石・砂	
97	B-6	"	"	"	ナデ/ミガキ	"	
98	A-4	"	"	"	"	砂粒(多)	
99	"	"	"	"	ミガキ	長・石・砂	
100	A-5	"	"	"	"	長・石・砂(多)	器底口縁
101	A-4	"	"	"	ケズリ	長・石	内側灰化物
102	A-4	"	"	"	ナデ	"	
103	A-4	"	"	"	ミガキ	長・石・砂	
104	A-6	"	"	"	"	長・石・縞(少)	
105	A-5	"	"	"	ミガキ/ナデ	長・石・砂	
106	A-4	"	"	"	ナデ	"	
107	A-3	"	"	"	ケズリ	"	
108	B-5	"	"	"	ナデ	"	
109	A-4	"	"	"	ミガキ/ナデ	長・石・縞	
110	A-2	"	"	"	ミガキ	石・砂(少)	器底口縁
111	B-5	"	"	"	ナデ	長・石・砂	



153岡 土器集中区出土縄文晩期土器(7)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整 外見/内面	胎土	備考
112	B-5	椀鉢	口縁	浮引状の押痕	ミガキ/ナデ	長・砂	
113	"	"	"	口縁に連続押痕	ナデ	"	
114	A-4	"	"	"	ミガキ	長・焼(少)	
115	A-2	"	"	"	ミガキ/ナデ	長・石(少)	
116	A-4	"	"	小突起を有する	ナデ	石・砂・焼	
117	"	"	肩部	"	細密なミガキ	長・砂	
118	"	"	"	"	"	長・石	外面・炭化物
119	"	"	"	"	"	長・砂・焼	"
120	"	"	"	"	"	砂(少)	
121	"	"	"	"	"	長・石・焼	
122	A-5	"	"	"	"	長・石・砂	
123	"	"	"	"	"	"	
124	A-4	"	"	"	"	"	内面・炭化物
125	A-5	"	"	"	"	"	内面・炭化物
126	A-4	"	"	"	"	"	
127	B-5	"	"	"	"	"	外面・炭化物



第154図 土器集中区出土縄文晩期土器(8)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面状態 外面/内面	粘土	備考
128	A-5	鉢鉢	肩部		縦筋条痕/ミガキ	長・短(少)	
129	A-3	〃	腹部	雷文(3-4回)	縦筋/ミガキ	長・短・砂	
130	A-4	〃	〃	〃(2-3本程)	縦筋条痕/ナデ	長・砂	
131	3日	〃	〃	〃(2本程)	〃	長・砂・麻	
132	A-4	〃	〃	〃(3本程)	〃	長・砂(少)	
133	B-4	〃	〃	〃(2本以上)	〃	長・砂	
134	A-5	〃	〃		条痕(排物至1)/ナデ	〃	
135	3日	〃	〃		〃	〃	
136	A-5	〃	〃		条痕(竹質)/ナデ	〃	
137	A-3	〃	肩部	無文	ナデ/ケズリ	〃	
138	A-5	〃	〃	〃	ミガキ	長・砂・砂	
139	〃	〃	〃	〃	ミガキ/ナデ/ケズリ	長・砂(少)	

なお、細密条痕ではないが、竹管による条痕の施工された、肩に稜を有する小型の深鉢(第150図57)も存在する。また、第149図38は、深鉢調下半と思われ、全面に施文される条痕の施文具は、植物茎を束ねたものである可能性が高い。内面暗茶褐色、外面暗褐色を呈し、内面はケズリ→ナデが施される。胎土は、長石、石英がやや目立つが、条痕の方向、器形などは、細密条痕深鉢に類似する為、第VI群II類の中に含めた。なお、(第154図136)の条痕文土器については、134、135が、軟弱な植物茎、136が竹管による施文と思われ、弥生I類土器に含められる可能性もあるが、器形は深鉢形を呈することが予想され、胎土も細密条痕深鉢に類似することから、第VI群II類の中に含めた。

#### 無文深鉢(第149図36、37、45~56)

出土量は多いが、器形を窺えるものはほとんど無い。36は、大型深鉢であり、確認ができるだけでも胴部の最大形33.7cmを計る。肩が張り、壺に近い器形を呈しており、やや外反する口縁には、6単位の突起がみられ、踵部に押圧が加えられる。内外面ともナデ整形、色調は暗褐色を呈し、胎土には長石、石英を含む、なお、外面には、黒色炭化物の付着が口縁~肩部にわたって部分的に観察される。37は小形深鉢で、器高、口径ともに1.3cmを計る。内面はナデ、外面は下→上方向のケズリが施され、輪積み痕も顕著に認められた。色調は暗褐色を呈し、胎土には石英、長石、砂粒を含む土器である。

また、底部には、45~56がある。形態としては、直線的に底部に至るもの42~52と、端部が外側に張り出すもの53~56の2形態に大きく分けられる。整形は、ケズリ痕を残すものが多いが、ナデ及びミガキを施すものも見られる。底部裏側には、12点中7点に網代痕、2点に木葉痕が観察され、45は、両者が観察される。網代痕を有するものには、さらにその上に、ケズリ、ナデを行うものが多い。他に、肩部として、拓影137~139がある。137、139は肩が張らず稜を有するタイプで、細密条痕深鉢に類似した器形が予想されるが、138はナデ肩となる。

全般的な傾向として、無文深鉢型土器は、内面が、ケズリ、ミガキ、外面が、ナデ、ミガキ整形を施すものが多く、胎土は細密条痕深鉢と大差ない。

#### 口縁(第148~153図)

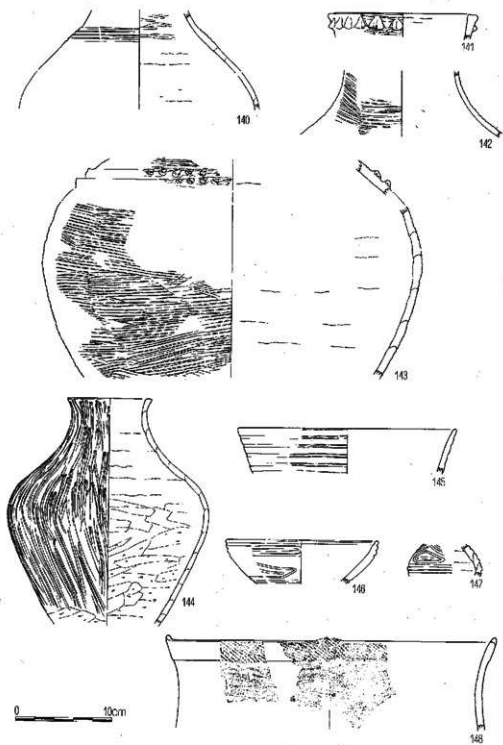
口縁部形態のみで、細密条痕深鉢と無文深鉢には分けられないため、口縁部形態をa種~g種に分け分けを行いたい。

#### 口縁a種(27~31、70~79)

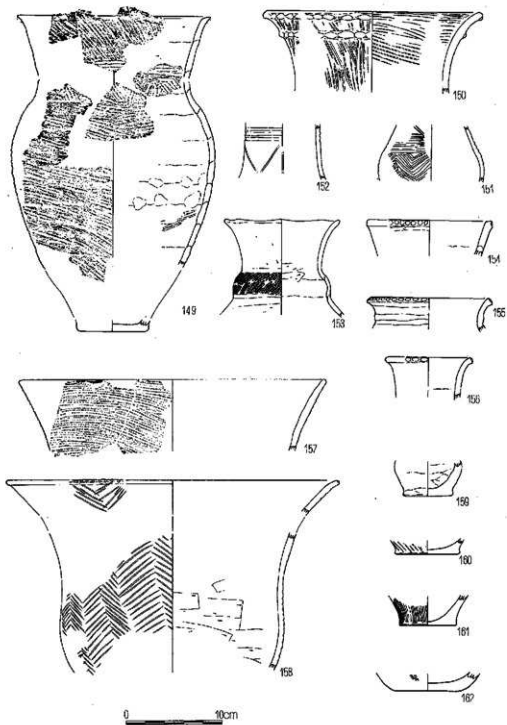
口縁下に2条~3条の沈線帯のみられるもので、2条のものかほとんどである。沈線といっても浅いものが多いが、27、31、71、72、74、79などは、やや彫りが深く、沈線寛が隆線状を呈する。また、27、31、73、24には、口外帯及び、口外帯を意識した小突起、キザミなどがみられる。なお、77~79は口縁に面取りが施され、尖い口唇を有するのが特徴である。これら口縁a種は、27、28、30の例や、胎土、整形などからみて、細密条痕を伴うものが多いと予想されよう。

#### 口縁b種(80~84)

口縁a種に似るが、口縁の沈線帯が痕跡的となったものである。81~83には小突起及びキザミ押圧がみられる。a種の退化現象として捉えることも出来よう。

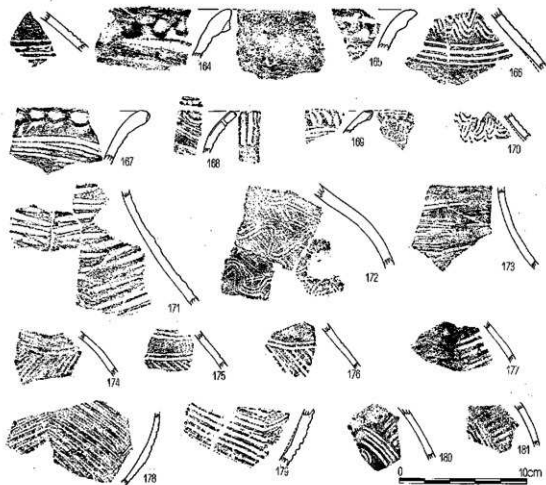


第155图 土器集中区出土弥生土器(1)



第156图 土器集中区出土弥生土器(2)

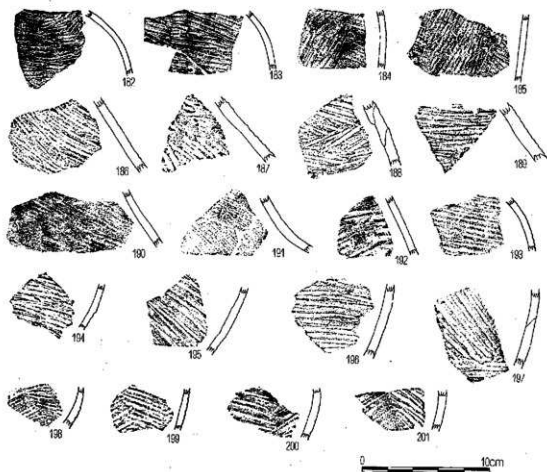




第157図 土器集中区出土弥生土器(3)

土器観察表

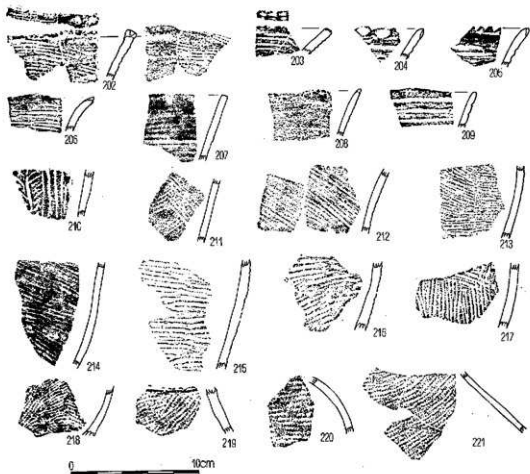
番号	発見区	器形	部位	文様構成要素		胎土	備考
				器面側面	外側/内側		
163	A-2	甕	肩部	波線(4本)	ミガキ/ナテ	長石・褐	
164	Y-7	甕	口縁	凸帯上に波線押圧	波線/角底	長石・砂(多)	器面側面
165	A-5	甕?	甕	〃	角底?/ナテ	石英(多)	
166	A-5	甕	胴部	波文・横線文(筆状凡)	ナテ/?	石・黄・砂(多)	内面側面
167	A-2	甕	甕	波文(横線凡)	/?	〃	〃
168	A-3	甕	口縁	口縁に波線押圧	条線/ナテ	石・黄・砂(多)	
169	B-4, E	甕	甕	短文/タテ平(縁・口縁押圧)	竹筭/ナテ	石英(多)	器面側面
170	A-5	甕	甕	内面押圧凸帯上キヤミ	角底(横線凡)/ナテ	〃	器面側面
171	甕	甕	胴部	斜位の波文	条線/ナテ	長石・砂	器面側面
172	A-4	甕	胴部	斜位の波文	角底/ナテ	長石	器面側面
173	A-3	甕	胴部	斜位の波文	角底/ナテ	長石	器面側面
174	A-6	甕	甕	横線・斜位の条線	ナテ	長石(多)	
175	D-5	甕	甕	横線・斜位の波線	〃	長石・砂	器面側面
176	甕	甕	甕	〃	〃	〃	器面側面
177	A-5	甕	胴部	縦線・斜位の条線	角底(竹筭)/ナテ	長石(少)	
178	A-3	甕	甕	〃	角底(横線凡)/ナテ	長石(多)	内面側面
179	A-3	甕	甕	〃	角底(斜向)/ナテ	長石(少)	
180	Y-3	甕	甕	波文	〃	長石	器面側面
181	甕	甕	甕	〃	〃	〃	器面側面



第158区 土器集中区出土弥生土22(4)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整 外周/内周	胎土	備考
182	B-5	盆	肩部		条状(横い)/ナテ	長・石(多)	内縁部
183	"	"	"		"	"	
184	"	"	腹面	短位羽状?	"	"	
185	"	"	"	"	"	"	
186	A-5	"	腹部		条状(輪状?) / ナテ	"	
187	Y-7	"	"		"	"	
188	A-3	"	"	短位羽状条痕	"	"	
189	B-6	"	"		"	"	
190	A-3	"	"		条状(輪状?) / ナテ	長・石(少)	
191	A-5	"	"		条状(輪状?) / ナテ	長・石(少)	
192	A-3	"	"		条状(輪状?) / ナテ	"	
193	A-5	"	肩部		"	長・石	
194	4区	盤?	腹部		条状(輪状?) / ナテ	"	
195	A-4	"	"		"	"	
196	"	"	"		条状(輪状?) / ナテ	"	内縁部
197	A-3	"	"		"	"	
198	"	小皿?	"	短位羽状条痕	条状(竹筒?) / ナテ	長・石(多)	
199	A-5	盤?	"		条状(輪状?) / ナテ	長・石(少)	
200	B-5	"	"		条状(輪状?) / ナテ	長・石(多)	
201	"	"	"		"	"	



第159岡 土器集中区出土弥生土器(5)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	断面調査 外面/内面	検 査	備考
202	A-5	甕	口縁	口縁に突起及び刺突	糸 糸状/糸状	長・石・雲(多)	
203	B-5	?	?		糸状(竹管?)/ナテ	長・石・砂	
204	A-3	?	?	口縁にレンズ状の押印	糸状/ナテ	長・石(稀)	
205	A-4	?	?	口縁にヘラキザミ	糸状(棒状瓦束?)/ナテ	長・石・雲(稀)	
206	B-5	?	?	口縁に刺突圧痕	糸状/ナテ	長・石	
207	A-3	甕?	?		糸状(棒状瓦)/ナテ	?	
208	A-3	鉢鉢?	?	突起(4本)	ナテ/ミガキ	石・長・雲(多)	
209	A-3	?	?	突起(3本以上)	ナテ/ナズリ	石(多)	
210	B-6	甕?	胴部	縦向き(縦砂羽状突起)	ナテ	長・石・雲(少)	
211	A-3	甕?	?	縦向き?	ナテ?	長・石(少)	
212	?	?	?		糸状(棒状瓦?)/ミガキ	長・石	
213	A-4	?	?		糸状(竹管を束ねた?)/ミガキ	長・石(少)	
214	?	?	?		糸状(棒状瓦?)/ナテ	?	
215	A-3	?	?		糸状(棒状瓦束を束ねる?)/ナテ	長・石・砂	
216	?	?	?		糸状(棒状瓦?)/ナテ	長・石・雲(多)	
217	Y-4	?	?		?	長・石・雲(少)	
218	B-5	?	胴部付近		縦文(LR)/ナテ	長・石・雲(多)	
219	B-6	鉢鉢	胴部		?	長・石(多)	
220	A-5	甕	胴部		?	長・石・雲(稀)	
221	B-4, 6	甕?	胴部?		?	長・石・雲(多)	器の破片

#### 口縁c種 (85~92)

沈線帯を有さないが、口端には、小突起及び、キザミ、押圧などが加飾されるものである。キザミ、押圧を有するものは、概して口縁の外反度が大きい。

#### 口縁d種 (93~99)

沈線帯を有さず、小突起、キザミ、押圧などもみられないが、口唇外側には浅い沈線状の面取りが施され、口唇の尖る一群である。a種の77~79とも共通して、概して口縁の外反度の小さいものが多い。

#### 口縁e種 (100~111)

無文素口縁で、a~dに含まれないものを一括して集めた。100、110は波状口縁である。細密条痕を伴うものは少ないと予想されよう。

#### 口縁f種 (112~115)

口唇外面に、押し状のキザミ及びレンズ状の押圧を加えたものである。晩期終末期のトナが原遺跡及び経塚遺跡などに類例が認められるため、第VI群II類の中に含めた。

#### 口縁g種 (116)

1点のみの出土であるが、外面口縁下には、コブ状の貼りつけ突起が存在する。播磨時期は明らかではないが、c種のバリエーションとしても捉えられるため、第VI群II類の中に含めた。

### 弥生土器

松本平における弥生文化波及期の様相は未だ明らかにされてはおらず、縄文土器と弥生土器の境界については問題とされるであろうが、近年、山形村磨沢遺、及び松本市針塚遺跡の発掘によって、下伊部の林里式に比定し得る土器が松本平においても存在することが予置されるため、分類については、波及期の林里式に対比される土器を第I類、中期初頭の庄ノ畑式に対比される土器を第II類土器として分類してある。ただし、林里式として設定されているうちの水I式に比定される土器は、今回の分類では便宜上晩期に含まれるものとし、先述の第IV群II類の中に含めてあるが、調査の所見では時期的に相伴するか否かは判然としなかった。

#### I類土器 (第155~159図) 林里式に比定される土器である。

##### a: 遠賀川系の土器 (140、163)

壺形土器の破片が2個体出土している。140は、3片の破片より区上復元したもので、やや玉ネギ形に胴部の張る壺形土器の頸部~胴上半であり、色調は黄色~灰褐色を呈する。肩上部には、貼り付け文風の突帯が4条みられ、器表面のみでなく、突帯間の沈線部分にも丁寧なミガキが施され、器面は滑沢を帯びる。また内面にはヨコナデが施され、頸部には部分的にミガキを施される。遠賀川系の土器ではあるが、胎土は、条痕壺144などに近似しており、在地の土器である可能性が高い。また、拓影163も、遠賀川系土器の破片と思われ、植物茎と想定される施文具により、4条の沈線が施され、さらにその上にミガキも施されている。

##### b: 東海系条痕文土器。

壺王・水神平式に比定され得る土器で、壺形土器が多い。

(1)壺形土器 (141~143, 164~166, 171, 177, 178)

141は壺形土器の口縁部で、直立する口縁、口端のナデによる凹みなど、壺王式に類した特徴を有しており、断面三角形を呈する突帯上には指頭圧が下方から上方に向かって加えられ、やや袋状を呈する。胎土には大粒の石英、長石を含み、東海系の胎土に類似するが、色調は淡赤褐色、焼成は良好で、東海地方からの搬入品というより、模倣品である可能性が高い。143は、大型壺の胴部であり、壺王水神平式土器に特有の胴部形態を呈する。肩には押し引き状の刺突を施す2条の突帯が貼りつけられ、肩部及び胴部には、植物茎の束と思われる施文具により、横走する条痕が全面に施文される。胎土には径1~2mm程度の長石、石英粒が目立ち、暗褐色を呈する土器である。なお、肩部破片は、胴部と接合面を有さないが、胎上、条痕の種類、器厚などからみて、同一個体と思われるため、図上復元して実測図に示した。

拓影で示した164は、大型壺の口縁部であり、やや丸みを帯びた口唇下には、断面三角形の押突帯を有する。外面には、植物茎の束と思われる条痕が施され、内面にも条痕(櫛状具)が施されるのが特徴であり、II類に含めることも出来よう。また、拓影の166、167は、水神平式特有の波状文を有する壺頸部で、櫛状具によって施文される。特に、166は、波状文下に、櫛状具による横線帯も見られ、水神平式の中でも新相を呈する土器であるといえよう。

142、171、は頸部、177、178は胴部破片であり、177、178の胴部破片には羽状条痕が観察される。条痕施文具は、142が二枚貝もしくは櫛状具、171は幅の広い櫛状具、177が半截竹管、178は彫りの深い櫛状工具が想定される。なお、櫛状具及び櫛歯状工具の名称については、棒状工具などを束ねるもしくは並べて櫛状効果を表すものについては櫛状具、板状の櫛歯状工具が想定されるものについては櫛歯状工具の名称を使用してある。

(2)変形土器 (202~204)

量的には少ない。202は口端に突起部を有し、刺突が施される、内外両面に櫛状の条痕が施される土器で、淡褐色を呈する。203は、口辺に押し引き文が施され、器外面には竹管状工具による条痕がみられる。淡褐色を呈し、最も東海に近い特徴を有した壺口縁である。204は口唇にレンズ状の押圧が加えられ、器外面には植物茎と思われる条痕が施される。

これらの土器は、東海系条痕土器といっても、胎土、焼成などからみて、東海地方からの直接の搬入品とみられる土器は少なく、伊那谷、もしくは当地方で作られた模倣品である可能性が高い。また御社宮寺遺跡の報告で示されているような器内面の刺突も顕著にみられた。

c:東日本系の土器 (146~148)

146、147は、沈線により施文される。器形は、146が高台付浅鉢、147が壺形もしくは丸底浅鉢を呈すると想定される。146は内外面とも丁寧にミガキが施され、内面口縁部に一条の沈線を有し、147は外面ミガキ、内面ナデが施される。石川日出氏の致示によれば、これらの土器は宮城県の本木河津遺跡出土土器に対比でき、東北地方との関連が予想される。148は、深鉢(壺)形を呈すると予想され、肥厚した口縁にLRの縄文を施文し、口唇に三角形の突起を有する土器である。内外面ともミガキが施され、暗褐色を呈し、外面口縁下には炭化物の付着がみられる。関東や、

北陸地方に採掘の求められる土器であり、下伊那林里遺跡に、細片ではあるが、類例が存在するため、第Ⅰ類に含めた。なお、このように、口縁が肥厚し、縄文の施文される土器は、庄ノ畑、横山城遺跡などに於ても存在するが、本例とは若干異なり、口縁には突起を有さず、口縁下には条痕が施される。

d：その他の土器（144、145、208、209）

在地の土器と思われるもの、及び上記3種に含められない土器である。

144の壺形土器は、片側半分のみ存在し、外面を上に向けて、横たわる状態で出土した。（第145図）しかし、出土状況は、他の土器片に混在したものであり、遺構には伴わない。

口径8.8cm、胴最大21.1cm、底部を欠損するが、現高23.8cmを計る。粘土紐接合痕が明瞭に観察され、内面はナデ及び左から右方向のケズリ、外面は軟弱な植物繊維による条痕が施される。色調は淡灰褐色、胎上には、長石、石英、砂粒を含み、細密条痕深鉢の胎土に類似することから在地の土器と思われる。なお、外面の肩部から胴上半にかけてはタール状の煤の付着がみられた。

145及び、拓影の208、209は、いずれも口縁下に数条の沈線のみられる壺形土器で、208は小突起を有する。この種の土器は県内でも散見される他、尾張及び三重県地方でも、大地式に伴い出土する。

Ⅱ類土器（第156～159図）庄ノ畑式に比定される土器である。

a：条痕を有する土器

胴部破片が多く、Ⅰ類との区別の不明確なものが多い。

(1)壺形土器（150、151、168～170、172～174、182～201）

150は広口壺の口縁部である。口辺及び口縁下には、2条の低い押圧凸帯が存在し、外面にはタテ、内面にはヨコ方向の条痕が施される。順序としては凸帯は条痕施文後に粘りつけられ、その後指頭圧が加えられる。条痕施文具は、外面が植物茎の束、内面が櫛状具が想定されよう。松本市中山出土の土器（中山考古館蔵）に類似する土器である。また、151は推定器高が20cmにも満たないと予想される小型壺形土器で、頸部に三角形のモチーフを有し、胴下半は櫛状具による縦位羽状条痕が施される。淡黄褐色を呈し、胎土には石英粒が多く含まれる。

拓影の168～170は、いずれも口縁部であり、168は大型壺、169、170は小型壺と予想される。168は、凸帯を有さず、口辺には指頭圧が加えられる。169は口縁下に貫通孔を有し、口端には押引文、また、口縁内外面に文様化した条痕が施される。170は、凸帯上に、棒状工具の押圧がみられ、口唇内側に押引文を施すのが特徴である。

他に、肩部に波文を有する条痕壺172なども存在している。水Ⅰ式の深鉢の雷文モチーフに類似するが、器形は壺形土器であり、横走する波文として捉えられるため、弥生第Ⅱ類の中に含めた。地文の条痕は、半截竹管もしくは植物茎によるものと思われる。

182～201は、頸部及び、胴部破片である。条痕の施文具は多種にわたる。このうち182～185は同一個体の肩部～胴部にかけての破片である。条痕は櫛状具により浅く施され、胴部では羽状をなす。また、198～201にも羽状条痕が施される。

なお、これらの他に、やや新相を呈する土器179～181が存在する。条痕は文様化し、180、181には弧文と思われるモチーフが4本の櫛歯状工具によって描かれる。

#### (2) 壺形土器 (149)

壺形にするにはやや問題があるが、深鉢と壺の中間形態を示す条痕土器(149)が、1点存在した。二枚貝もしくは櫛状具による条痕が施され、頸部の文様帯には斜条痕を交互に重ねた羽状条痕風の文様がみられる。茶褐色～黒褐色を呈する土器で、長石、石英、雲母を多く含み、焼成はやや悪である。

#### (3) 鉢形土器 (157、158、205～207、211～217)

157は、4本単位の櫛歯状工具により条痕の施される土器で、灰褐色を呈し、胎土には長石、石英、雲母を含む。口唇に、ナデによる軽い面取りがなされるのが特徴で第一類土器に含まれる可能性もある。158は壺形に近い鉢形を呈する土器であり、器表面には、ヘラ状工具によるシャープで彫りの深い条痕が、縦位羽状に施される。また、口唇には、棒状工具によるキザミが施される。色調は暗褐色、胎土には長石、石英粒を含む土器である。

この他、口縁部破片としては、拓影の205、206、207がある。205は口唇にキザミが加えられ、器外面の条痕は棒状工具によるものと思われる。206は、口唇の一部を外方につまみ出す土器で、口唇が尖るのが特徴である。207は、直線に外方に開く口縁で、口端には面取りがなされ、条痕は櫛状具により施される。また、211～217は、鉢形土器の胴部破片と思われるものを集めたものである。

#### (4) 底部 (160～162)

第II類に属すると予想される底部は3点出土した。このうち、161には、木葉痕が観察される。

##### b: 縄文を有する土器 (153、218～211)

瓢形土器をはじめ、縄文を有する土器が数点存在した。153は口縁部のかなり外反する瓢形土器で、口縁は8単位と想定される波状口縁をなす。また縄文はLR縄文で、頸部には粘土紐接合痕が明瞭に観察される。暗褐色を呈する土器であり、胎土には長石、石英粒が目立つ。また、拓影の218～211には、いずれもLR縄文が施文される。

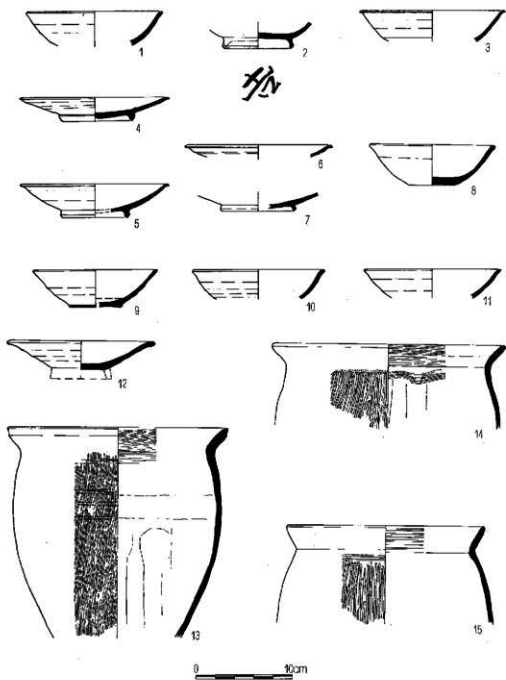
##### c: その他の土器 (152、154～156、159、210)

152は、頸部に3条の沈線帯、及び沈線による三角形の文様が施される土器で、山形村唐沢遺跡出土土器に類例が求められよう。唐沢遺跡では水神平式に共伴したが、文様は新相を帯びるので、第II類に含めた。

154～156は、口端にレンズ状の押圧の施される壺形土器であり、晩期終末期の深鉢口縁部に系譜が求められよう。庄ノ畑遺跡、横山城遺跡などに類例が認められる。

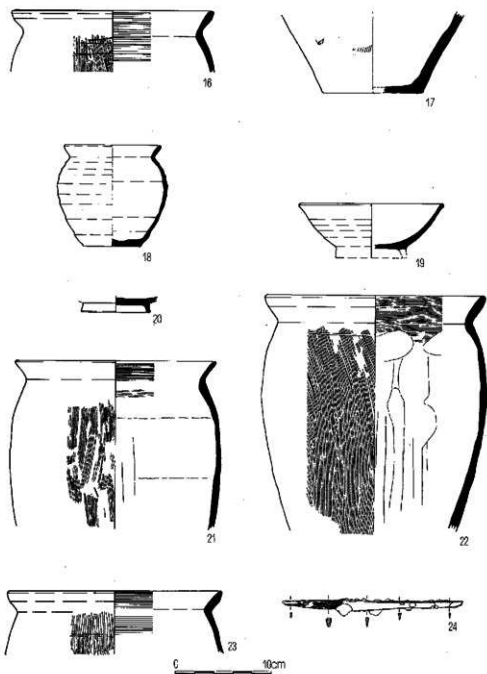
159は、小型壺の胴下半と思われる。縄属時期ははっきりせず、晩期終末期まで遡る可能性もある。また、210は、1点のみの出土であるが、沈線による羽状文が施されており、松川町宮坂頭出土土器に類例が求められる。

(前田清彦)

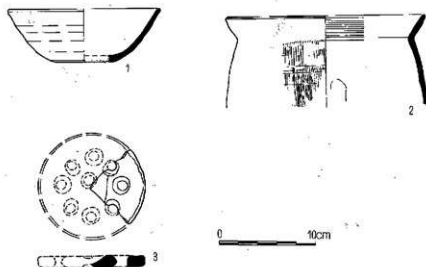


第160图 第1、2号住居址出土土器（1：1号、2～15、2号）





第161图 第2、3、4号住居址出土遗物  
(16-18、2号、19、3号、20~24、4号)



第162図 遺構外出土遺物

### 3 平安時代 (第160～162図)

今回の調査では、平安時代の住居址が4軒検出されたが、出土した土器はわずかなものであり、よって図示できるものも少ない。

種別は、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器があり、種別も貧弱で、土師器では、杯・甕が、黒色土器では、杯・高台杯(碗)が、須恵器では、甕・生やけの上師質須恵杯(杯は全て生やけ)が、灰釉陶器では、皿・碗・長頸瓶・刀子等である。

出土した土器で、全般にわたるものは、土師器甕と黒色土器のみである。甕は、マキアゲ成形され、胴部内面を上下ナデ調整された後、胴部上方から口頭部にロクロ成形する。内面口頭部付近にロクロを使用した櫛目(一般にハケ目)が施され、外面胴部に上下の櫛目(カキ目)を施している。口径と胴径差が少なく、同径に近い。このタイプは4軒の住居址から出土しており、小型甕を除けば、このタイプのみしか出土していない。黒色土器(内面のみ)が多く、杯・高台杯(碗)ともに存在し、土師杯は小片で数が少ない。灰釉陶器は、ほとんどが2号住居址内からの碗2個体・皿6個体出土しており、8個体中、7個体が猿投産で、碗1個体が東濃産(外底部に墨書)である。成形手法的特徴から黒笹90号窯址のもののみである。以上から11世紀前半から中頃と推定されるが、最近の灰釉陶器の研究から、10世紀前半から中頃に推定することはできないだろう。

(寺島俊郎)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	口径	形状の特長	手法の特徴	1-粘土・2-色調・3-焼成	備考
1	1号生原土 三色土層	高六 平	13.7	-	-	○	・体部はゆるやかに内湾し上上がり、口縁付近でわずかに外反する。	・水洗き ・口縁は斜方向に口縁から下は上下方向にヘラミガキを行っている。 ・外壁のワロコウを回転ナデによって横している。	1. 1.5cm以下の砂を含む 2. 外一赤褐色 内一黒色 3. 良好	焼一尾
①	2号生原土 灰胎No93	瓶	-	-	6.7	○	・高さが比較的矮小く、内面下部が内湾する。	・外蓋部・胴部にヘラ削り調整がされる。 ・刷毛一削け塗り	1. 硬密 (0.5cm以下の砂を含む) 2. 削一白色 外一白色 内一黄白色 3. 良好	・外蓋部に(古)の骨片 ・蓋一枚あり ・底一底部のみ ・底一枚焼
②	灰胎 No81	瓶	14.6	-	-	○	・胴部と胴部の腹で開折し、上部で口縁部は大きく外反する。	・外蓋部にヘラ削り調整 ・刷毛一削け塗り	1. 硬密 (6mm位の石を含む) 2. 削一灰白色 外一淡黄色 内一黄白色 3. 良好	・底一枚削 ・口縁片 ・底一枚焼
③	灰胎 No87 P-1, 14	皿	14.9	2.4	7.1	○	・体部は直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。 ・高さは三角形を呈する。	・体部全面まで回転ヘラ削り調整 ・外蓋部は回転ヘラ削り ・付け合せの器、外蓋部の半分を回転ナデ調整 ・刷毛一削け塗り	1. 硬密 2. 削一灰白色 外一灰白色 内一明緑色 黄白色 3. 良好	・蓋一枚あり ・底一枚の片 ・底一枚焼
④	灰胎 No89	皿	14.4	3.5	8.6	○	・体部はゆるやかに内湾し、口縁は外反する。底部は大い。 ・高さは三角形の腹部をヘラ削りされた状態を呈する。	・体部全面まで回転ヘラ削り調整後、回転ナデ仕上げがなされている。 ・外蓋部へラ削り調整後回転ナデ仕上げがなされている。 ・刷毛一削け塗り	1. やや粗 (3cm以下の石をおおかに含む) 2. 削一灰白色 外一灰色 内一黄白色 3. 良好	焼一尾
⑤	灰胎	皿	14.8	-	-	○	・体部は直線的に開くものと認められ、口縁付近でわずかに内湾する。底部はやや外反する。	・口縁付近まで回転ヘラ削り調整が行われている。 ・刷毛一削け塗り	1. やや粗 (0.5cm以下の砂を含む) 2. 削一灰白色 内一明緑色 3. 良好	焼一皿部のみ ・底一枚焼
⑥	灰胎 No86	皿	-	-	7.2	○	・体部は直線的に開く。 ・高さは細く、内面下部が内湾する。	・体部は回転ヘラ削り調整がされる。 ・多量部は回転ヘラ削り調整がされる。 ・刷毛一削け塗り	1. やや粗 (0.5cm以下の砂を含む) 2. 削一灰白色 外一灰白色 内一明緑色 3. 良好	・蓋一枚 ・底一枚削 ・底一枚焼 ・上蓋と同一体 体と思われる
⑦	土層 部	平	12.7	4.25	-	○	・底部は比較的小さくゆるやかに内湾しながら上上がり、口縁はわずかに外反する。	水洗き	1. 1.5cm以下の砂を含む。 器上の粒を多く含む。 2. 外一黒色 内一白色 3. 軟質	・焼一尾 ・高切り或 ・底があまりよく、 器面が残れている。
⑧	土層 部	平	12.6	3.9	5.6	○	・体部は直線的に開きたり上上がり口縁は外反しない。 ・外蓋部部にワロコウを明確に痕す。	・水洗き ・内面にはワロコウが使用されていると思われる。	1. 2cm以下の石を含む。 2. 灰褐色、黒色 3. やや軟質	・焼一尾削 ・高切り削
⑨	灰胎 器	平	13.3	-	-	○	・体部はゆるやかに内湾して上上がり口縁付近でわずかに外反する。	水洗き	1. 1.1 - 2.0cm位の砂を含む。	・焼一皿削

番号	種別	種別	口径	質量	長さ	ロゴ	形態の特長	手法の特長	1. 色 2. 形状 3. 重量	備考
㉔	黒色七部	弁	13.7	-	-	○	・胴部からは縁部にかけて唇部になっている。 ・体部はゆるやかにたらし上がり、口縁付近でわずかに外反する。	・水抜き ・口縁より下方2cmまで裏方穴、口縁より内径へ上下のヘラミガキ	1. 赤・黒・白 2. 赤土粒をわずかに含む。 3. 外一灰色、黒色 内一黄灰色、黒灰色 3. 重量	・鏡一口縁穴
㉕	黒色七部	高台杯	14.6	-	-	○	・体部は直線的に開き、口縁付近から水平に近く外へ開く。 ・口縁はやや厚手	・水抜き ・内面胴部から口縁部にかけて裏方穴、後、口縁から内径へ上下ヘラミガキ	1. 1.1cm以下の石を含む。 2. 外(上)黄褐色(下)灰白色 内一黒色	・赤印紋 ・底面一部割取
㉖	土師器	甕	22.9	-	-	○	・体部はゆるやかに内傾しながら開きたり上がり、胴部上方から内傾する。 ・口縁はわずかに内折して開く。胴部は三角形をなす。 ・最大径は口縁。	・マキアゲ成形 ・上下調整後、内面縁下の所より頸部までロクロナデ仕上げがされる。 ・内口体部、胴部下にロクロによる磨目が施されている。 ・外口体部に底位の磨目がほどこされる。	1. 1.1cm以下の石を含む 2. 外一赤褐色 内一赤茶褐色 3. 良好	
㉗	甕	甕	23.8	-	-	○	・体部は胴部よりわずかに外反しながら内傾し胴部に至る。 ・口縁部はわずかに外反する。	・マキアゲ成形 ・上下調整が胴部まで行われる。 ・内口縁部にロクロによる磨目が施されている。 ・外口体部には底位の磨目が施される。	1. 1.1cm以下の石を含む 2. 黄褐色 3. 良好	鏡一口縁一肩部 ノミ
㉘	甕	甕	23.6	-	-	○	・体部は直線的に内傾し、胴部手前でわずかに内傾しながら胴部に至る。 ・口縁部は直線的に開くが他に比べ全体に軽微である。厚みが少ない。	・マキアゲ成形 ・上下調整が胴部まで行われ、後にロクロナデ仕上げがされる。 ・内口縁部のみロクロによる磨目が施される。 ・外口体部に底位の磨目が施されている。 ・口縁縁部にヘラがみられている。	1. 2cm以下の石を含む。 2. 外 赤褐色 内 黒褐色 3. 良好	鏡一口縁穴
㉙	甕	甕	23.4	-	-	○	・体部は胴部よりゆるやかに内傾し胴部に至る。口縁はわずかに外反する。 ・口縁部部に一帯の沈みが施される。	・マキアゲ成形 ・上下調整が胴部付きまで進まれ、後にロクロナデ仕上げ。 ・内傾口縁・胴部下方にロクロによる磨目が施されている。 ・外口体部に底位の磨目が施される。	1. 2.2cm以下の石を含む 2. 外一赤褐色 黄茶褐色 内一赤茶褐色 3. 良好	鏡一口縁穴
㊀	甕	甕	-	-	10.5	○	・体部はゆるやかに内傾しながらたらし上がり、胴上部で内傾し胴部に至る。 ・口縁は直線的に開く ・全体に軽微 ・ロクロ磨を長く施す。	・マキアゲ後水抜き成形	1. 1.1cm以下の石を含む。 2. 黒褐色 3. やや軽微	鏡一尾
㊁	小型甕	小型甕	9.75	10.6	6.0	○	・体部は唇部の底部より直線的に開きながらたらし上がる。	・マキアゲ成形 ・たらし上がり5cmほどヘラ削り調整が行われる。	1. 4cm以下の石を含む 2. 外一赤褐色 内一黄白色 3. 良好	鏡一尾 ・外面胴部に黄褐色の付着物がある。 ・内外面とも磨面が施されている。

番号	種類	砂粒 (口径)	高さ	底径	ロク ロク	形態の特徴	手法の特徴	1-粘土 2-色調 3-気泡	備考	
3	3号生刷柱 黒色 土器	穴	4.8	-	-	○	・体部はゆるやかに内湾してたち上がり、口縁に直る。 ・口縁はほとんど外反しない。	・水抜き ・口縁より下方3.00位まで横方向に、口縁より内側まで上下方向にヘラ1ガキを行っている。	1. 3.00以下の砂を含む。 2. 外一帯褐色 内一帯色 3. 良好	底一帯(高台金穴) ・赤褐色を残す。
2	土師器	横	22.5	-	-	○	・体部は直線的にたち上がり、胴部上方よりゆるやかに内湾し頸部に至る。 ・口縁部は	・粘土マキアゲ成形後、内面には上下ナゲ調整。 ・内面の口縁・胴部付近にロクロ使用による磨目が全面に施される。	1. 1.00以下の砂を含む。 2. 外一帯褐色 内一帯茶褐色 3. 良好	横一帯部
3	鉄器	刀子	18.9	0.7	0.3		・ほとんど完全に壊っており、基部が欠損している。 ・基部に亀裂が柄の外装部を斜めに破す。			
4	4号生刷柱 黒色 土器	高台 穴	-	-	6.1	○	・四角部の高台を有する。	・水抜き ・付け高台 ・赤褐色を帯びたナゲ調整によって施されている。	1. 5.00以下の砂を含む。 2. 外一帯褐色 内一帯色 3. 良好	横一帯部のみ
2	土師器	横	20.6	-	-	○	・体部は直線的にたち上がり、胴部付近でゆるやかに内湾して口縁部に直る。 ・口縁部はゆるやかに外へ開く。	・マキアゲ成形後、内面に上下ナゲ調整後、内面自厚より口縁部は同様にナゲ調整。 ・内側部下方より口縁にかけ、ロクロ使用した磨目が施されている。 ・外面胴部上方には縦位の磨目が施されている。 ・外面胴部に上下磨目が施されている。	1. 2.00以下の砂を含む。 2. 一帯赤褐色 3. 中や良質	横一口縁付近
3	土師器	横	22.0	-	-	○	・胴部より直線的に内傾し、頸部に直る。 ・口縁部はゆるやかに外反する。 ・胴部には口縁部は厚みである。	・マキアゲ成形 ・内口縁・胴部下方にロクロによる磨目が施されている。 ・外面胴部に縦位の磨目が施されている。	1. 2.00以下の砂を含む。 2. 外一帯赤褐色 内一帯赤褐色 3. 良好	横一口縁付近
1	土色 土器	横	15.8	5.05	6.9	○	・体部は、ゆるやかに内湾してたち上がり、口縁は外反しない。	・水抜き ・たち上がり5.00にヘラ削り調整。 ・内口縁より下方3.00位は横方向、口縁より内側へ上下方向にヘラ1ガキ。	1. 0.50以下の砂を含む。 2. 外一帯褐色 内一帯色 3. 一良好	・横一帯
2	土師器	横	20.4	-	-	○	・体部はゆるやかに内傾し、頸部に至る。 ・口縁部は直線的に開く。 ・口縁部部に1帯の気泡が施されている。 ・全体に磨目	・マキアゲ成形 ・胴部下方へ上下ナゲ調整後、ロクロナゲが施される。 ・外面胴部に縦位の磨目が施される。	1. 0.50以下の砂を含む。 2. 茶褐色 3. 良好	横一帯部
3		縦径 厚み	11.2	1.2			・8個の孔がまわり、中央に1つの孔があるものと推定される。	・タテラ作りと思われる。 ・ふちへへラをあてられている。 ・胴部ともヘラナゲ仕上げが施されている。	1. 2.00以下の砂を含む。 2. 茶褐色 3. 良好	横一帯部

## 2) 石器

### (1) 縄文時代早期 (第163、164区)

押型文土器の包含層であるV下層～VII層最上層で出土した石器を押型文期の石器としたい。32点の石器が出土し、その内訳は石鏃11、尖頭石器3、石錐2、スクレイパー16である。

石鏃(1～11)基部への抉り込みの状態により分類される。1～4の抉りの深いもの、5～7の浅いもの、8～10の平基である。平面形では基部への抉りの深いものが正三角形、浅いものが二等辺三角形、平基のものがずんぐりした正三角形を呈する。種別式にしばしば伴出する局部磨製のものも出土していない。完形品が多く、欠損品は鋳を欠くものが目につく。

尖頭状石器(12～14)先端を鋭利に作出し、刺突具として使用されたと考えられるもの。先端以外は調整は単純である。13・14は石鏃の基部欠損品とも考えられる。

石錐(15・16)15は柄部を作出し、16はない。ともに原石面を残し、調整は雑である。

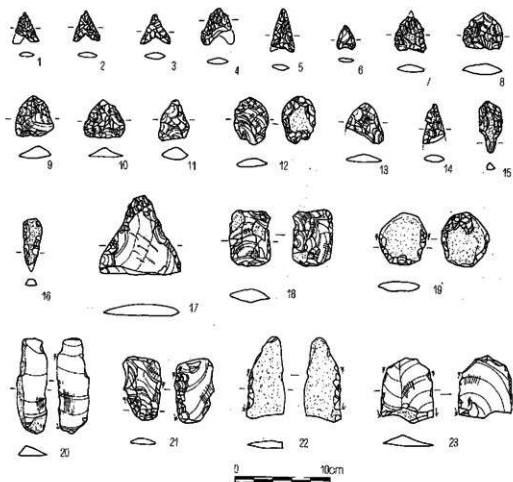
スクレイパー(17～32)縦長の剥片を使用し、縁辺に刃部を有するものが多い。第1次剥離された剥片をほとんど加工することなくその鋭利な縁辺を刃部として使用するもの(21、23～25、27)と、縁辺に調整を施しているもの(18～20、22、26、28～30)がある。原石面を残すものも多く(19、20、22、26)、特に19、22は扁平小形の黒曜石の原石に直接刃部を作出したものである。刃部はともに外湾刃である。

(小林康男)

### (2) 縄文時代晩期～弥生時代初頭(第165～171区)

縄文晩期末葉～弥生中期初頭にかけての土器集中区からは、計95点に及ぶ石器が出土した。出土状況は、多量の上器片に混在しての出土であるが、分布は土器ほどに集中傾向はみせず、土器集中区全域にわたって散在して出土している(第141区)。また、器種別の分布傾向としては、打製石斧の中の石鏃状のものが、いずれもA-3及びY-6グリットからの出土であり、土器分布と比較すれば、弥生時代に含まれる可能性が強いといえる他は、特別な偏在傾向はみられない(第141区)。石器の内訳は、石鏃16点、石錐1点、スクレイパー21点、打製石斧38点、横刃形石器12点、磨製石斧2点、尖頭状石器2点、不明石器1点及び石製品としての破片2点であり、磨石・凹石・石皿などの出土は全くみられなかった。なお、土器集中区からは、晩期末葉～弥生初頭にかけての土器の他に、縄文時代早期～晩期中葉にわたる土器、及び、平安時代の土師器、須恵器の出土もみられたが、土器の出土量から推察して、石器のほとんどは晩期末葉～弥生中期初頭に属するものと考えたい。

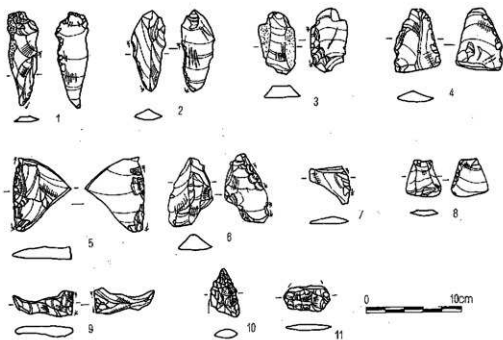
石鏃(第165区1～17、18)計16点の出土をみており、すべて黒曜石製の打製石鏃である。形態別には、飛行機鏃1点(1)、有茎凹基の三角形鏃4点(2～5)、小型凹基三角形鏃3点(6～8)、細身の三角形鏃3点(9～11)、扁平凹基三角形鏃2点(12～15)、剥片を利用した平基三角形鏃1点(14)、ずんぐりした重量感のある石鏃1点(14)及び不明1点(13)がある。ただし、飛行機鏃及び、有茎の三角形鏃などは、晩期～弥生中期にかけて特徴的な石鏃であるが、12、



第163図 押型文土器包含層出土石類(1)

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
1		石	黒曜石	16	13	3	0.2	
2	A2	石	黒曜石	16	14	3	0.3	
3	A1	石	黒曜石	16	16	3	0.3	
4	石	石	黒曜石	18	17	3	0.6	
5	4H	石	黒曜石	23	13	4	0.7	
6	A1	石	黒曜石	13	10	2	0.1	
7	A1	石	黒曜石	19	17	4	11.0	
8	石	石	黒曜石	20	21	6	2.1	
9	4H	石	黒曜石	22	21	6	2.1	
10	A1	石	黒曜石	21	22	6	1.6	
11	石	石	黒曜石	22	17	7	1.7	
12	A2	尖頭状石	石	25	19	8	2.1	
13	石	石	黒曜石	21	20	4	1.4	
14	3F	石	黒曜石	21	12	4	0.8	
15	A1	石	黒曜石	22	12	4	1.4	
16	A1	石	黒曜石	25	10	4	0.2	
17	A2	スタレイパー	石	42	43	6	11.0	
18	石	ピュヌスキーパー	石	30	22	7	5.0	
19	A1	スタレイパー	石	28	25	5	5.3	
20	石	石	黒曜石	20	16	6	4.5	
21	石	石	黒曜石	34	21	4	4.0	
22	A2	石	黒曜石	44	24	4	4.0	
23	A1	石	黒曜石	34	29	6	8.5	

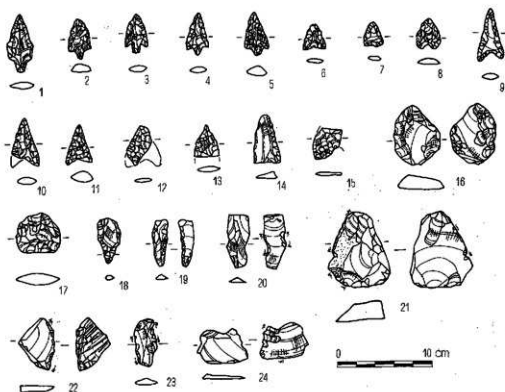


第164図 押型文土器包含層出土石器(2)

石器観察表

番号	発掘区	種類	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	A 1	スクレイパー	花崗石	50	17	3	3.2	
2	?	?	花崗石	43	13	6	3.5	
3	?	?	?	33	20	6	3.9	
4	?	?	?	34	25	7	4.5	
5	?	?	?	39	31	7	7.0	
5	6H	?	?	37	24	8	5.1	
7	A 1	?	?	30	22	4	1.9	
8	A 5	?	?	20	9	3	1.4	
9	A 1	?	?	14	33	5	1.9	
10	C 4	石 鏃	?	26	15	5	1.8	
11	?	?	?	14	25	3	1.3	





第165図 土器集中区出土石器(1)

石器観察表

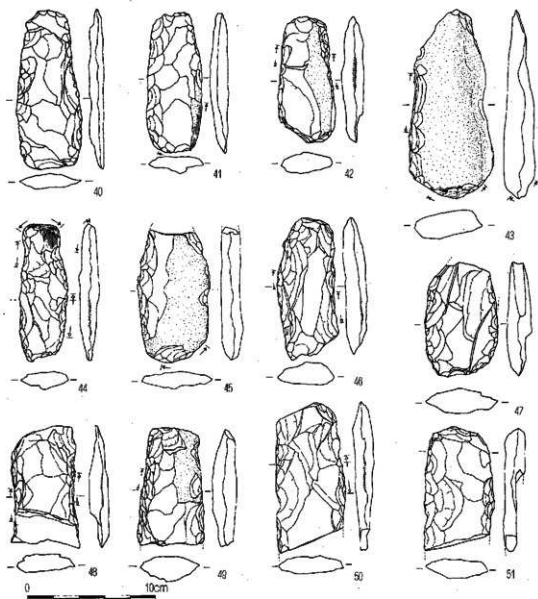
番号	発掘区	種類	材質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種類
1	A-5	石 槍	土 質 石	3.1	1.4	0.4	1.1	
2	D-6	石 槍	土 質 石	2.1	1.2	0.4	0.8	
3	2号住	石 槍	土 質 石	2.1	1.2	0.4	0.5	
4	B-5	石 槍	土 質 石	2.3	1.2	0.3	0.5	
5	B-5	石 槍	土 質 石	2.3	1.3	0.6	0.8	
6	A-3	石 槍	土 質 石	1.2	1.2	0.3	0.2	
7	A-3	石 槍	土 質 石	1.3	0.9	0.2	0.2	
8	D-4	石 槍	土 質 石	1.6	1.3	0.3	0.6	
9	A-3	石 槍	土 質 石	2.7	1.4	0.3	0.8	
10		石 槍	土 質 石	(2.5)	(1.6)	(0.4)	0.9	
11	2号住	石 槍	土 質 石	2.1	1.4	0.6	0.8	
12	1号住	石 槍	土 質 石	(1.2)	(1.2)	0.2	0.3	
13		石 槍	土 質 石	1.7	1.4	0.3	0.6	
14	Y-7	石 槍	土 質 石	2.5	1.4	0.4	1.3	
15	A-1	石 槍	土 質 石	(1.6)	(1.9)	(0.2)	0.5	
16	3号住	矢 頭 状 石 器	土 質 石	3.2	2.5	0.8	5.7	
17	A-3	石 槍	土 質 石	2.1	2.4	0.8	3.2	
18		石 槍	土 質 石	2.4	1.2	0.3	0.9	
19	A-3	ヌグレイター	土 質 石	2.5	0.8	0.3	0.4	
20	Y-6	石 槍	土 質 石	2.8	1.1	0.3	1.5	
21	Y-5	石 槍	土 質 石	4.6	3.3	1.0	16.0	
22	A-1	石 槍	土 質 石	2.7	1.9	0.3	1.6	
23	A-5	石 槍	土 質 石	2.5	1.1	0.4	0.5	
24	A-2	石 槍	土 質 石	1.8	2.6	0.3	1.5	



第166図 土器集中区出土石器(2)

石器観察表

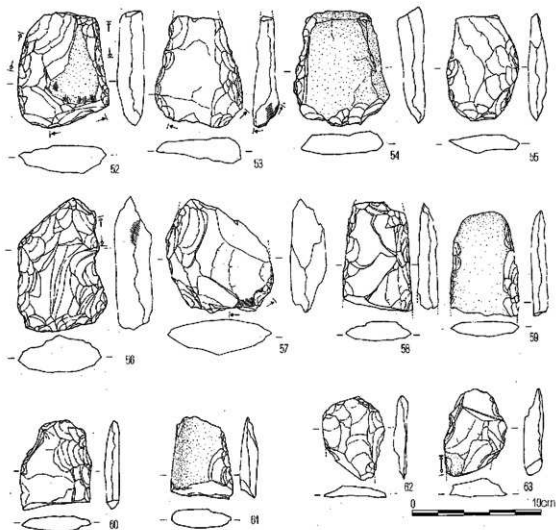
番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
25	A-5	スクレイパー	黒曜石	2.0	3.2	0.2	2.5	
26	A-4	■	■	3.0	3.5	0.5	5.0	
27	1号棟	■	■	1.7	2.0	0.4	2.0	
28	A-5	■	■	2.6	1.5	0.6	3.5	
29	■	■	■	4.0	2.0	0.8	5.0	
30	Y-4	■	■	3.4	3.8	0.6	7.3	
31	■	■	■	2.0	2.3	0.5	3.2	
32	A-1	■	■	3.0	1.4	0.4	1.0	
33	Y-7	■	■	3.6	1.2	0.3	1.0	
34	D-5	■	■	3.9	2.5	0.7	5.2	
35	■	■	■	4.0	1.9	0.4	3.0	
36	■	■	■	3.7	3.0	0.5	6.0	
37	B-6	■	■	2.0	3.5	0.2	3.5	
38	A-3	■	■	2.7	4.2	1.0	11.	
39	Y-6	■	■	2.3	3.1	0.7	4.	



第167图 土器集中区出土石器(3)

石器观察表

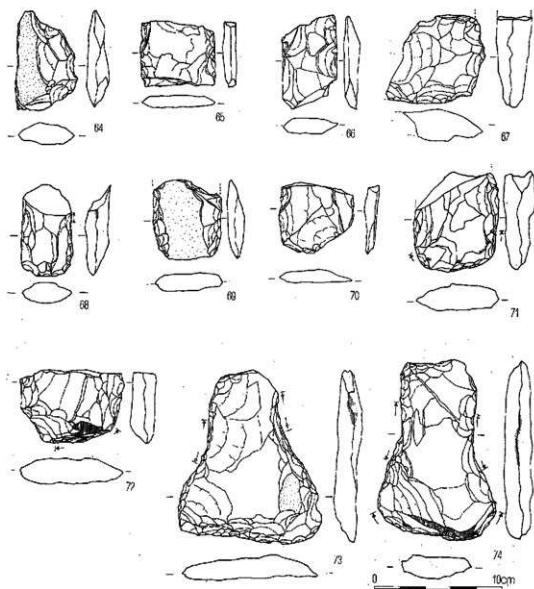
序号	发掘区	编号	石质	长度 (mm)	宽 (mm)	厚度 (mm)	重量 (g)	特征
40	A-4	打製石斧	片岩	12.4	5.0	1.3	78	
41	×	×	蛇紋岩	11.0	4.3	1.4	60	
42	Y-7	×	頁岩	10.0	4.5	1.3	89	
43	×	×	×	24.9	0.6	2.4	268	
44	A-3	×	綠泥砂岩	10.8	3.7	1.5	69	
45	×	×	頁岩	(10.5)	5.7	1.7	121	
46	A-5	×	×	(11.2)	4.5	1.7	120	
47	A-6	×	×	(8.8)	5.7	1.9	110	
48	×	×	×	(3.5)	5.3	1.5	87	
49	×	×	綠泥砂岩	9.0	3.1	1.5	120	
50	A-3	×	綠泥砂岩	10.8	3.7	1.5	59	
51	B-4	×	×	(9.7)	5.5	1.5	87	



第168岡 土器集中区出土石器(4)

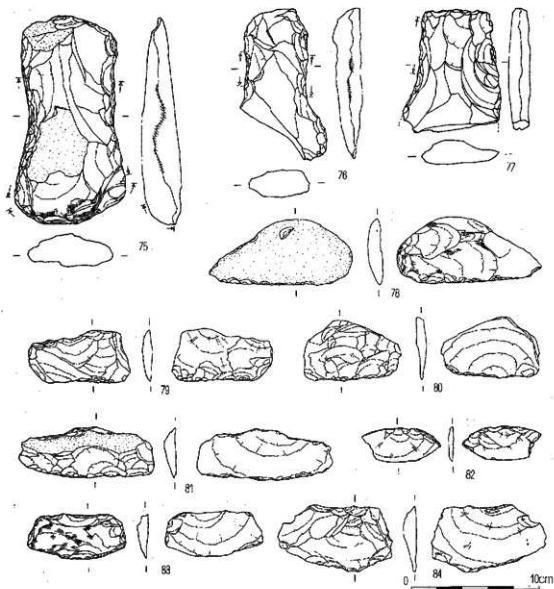
石器觀察表

番号	発掘区	種別	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
52	B-5	打製石片	頁岩	8.9	7.1	2.1	160	
53	R-5	"	"	(8.7)	6.9	2.3	130	
54	"	"	粘板岩	8.9	7.1	2.0	180	
55	B-6	"	頁岩	(8.3)	5.6	1.5	72	
56	Y-7	"	"	10.4	6.9	2.9	233	
57	B-6	"	"	(8.9)	(8.2)	(2.7)	223	
58	A-3	"	"	(8.3)	3.4	1.6	101	
59	A-1	"	中粒砂岩	(8.3)	(5.4)	(1.2)	80	
60	Y-4	"	頁岩	(7.0)	5.5	1.1	62	
61	B-5	"	"	(6.3)	4.9	1.3	52	
62	I-5	"	"	(6.5)	4.9	1.0	36	
63	A-2	"	"	(6.8)	4.8	1.5	54	



第169网 土器集中区出土石器(5)  
石器观察表

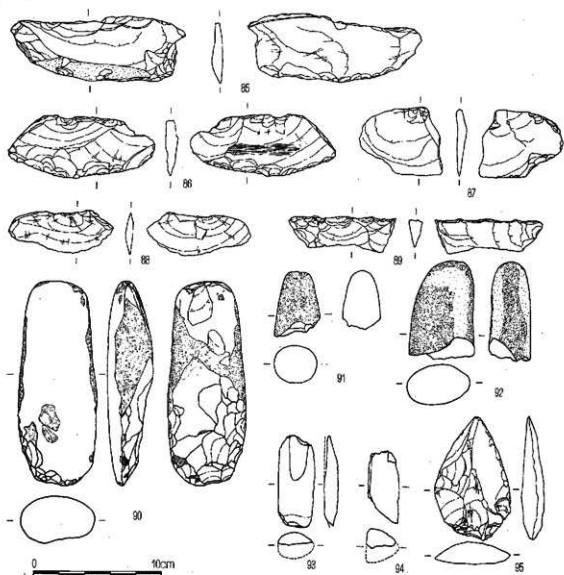
番号	発掘区	種類	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	種別
64	A 4	打製石片	細粒凝灰岩	(7.8)	(4.8)	1.7	68	
65	B 5	打製石片	頁岩	(9.1)	5.9	1.0	51	
66	A 4	打製石片	細粒砂岩	(7.3)	4.3	1.2	48	
67	A 1	打製石片	頁岩	(7.0)	(6.2)	(2.6)	136	
68	A 5	打製石片	硬砂岩	(7.1)	4.1	1.7	65	
69	B 6	打製石片	細粒凝灰岩	6.2	5.4	1.3	64	
70	3 II	打製石片	頁岩	(6.5)	5.8	1.0	42	
71		打製石片	頁岩	(7.8)	6.6	2.5	182	
72	B 6	打製石片	頁岩	(5.7)	8.1	1.9	118	
73	A 3	打製石片	頁岩	13.4	11.2	2.0	304	
74		打製石片	頁岩	14.2	9.3	2.2	290	



第170岡 土器集中区出土石器(6)

石器観察表

番号	発掘区	種別	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
75	Y6	打製石片	頁岩	16.3	8.6	3.0	498	
76	A3	"	"	11.7	5.6	2.2	(170)	
77	Y6	"	細粒砂岩	(8.8)	(7.6)	1.6	(163)	
78	A1	磨刃石片	細粒砂岩	11.0	5.1	1.1	62	
79	Y7	"	粗粒砂岩	7.5	4.1	0.8	38	
80	"	"	頁岩	7.7	4.2	0.8	36	
81	A1	"	粗粒砂岩	10.2	4.0	0.9	42	
82	7S	"	頁岩	5.7	2.7	0.4	10	
83	A6	"	粗粒砂岩	7.7	3.4	0.7	28	
84	A4	"	"	8.9	5.2	1.0	46	



第171图 土器集中区出土石器(7)

石器观察表

序号	发现区	类别	石质	高(m)	长(m)	厚(m)	重量(g)	特征
85	A3	黄方砂石器	灰	13.5	5.0	0.8	76	
86	A3	"	"	11.8	6.7	1.0	88	
87	A6	"	褐灰岩	(6.3)	5.2	0.7	30	
88	A4	"	黄	8.2	3.1	0.6	16	
89	A5	"	"	8.4	2.6	1.0	22	
90	A2	磨制石斧	粗粒砂岩	16.0	6.2	3.6	522	
91	A4	"	"	(4.7)	3.4	3.0	84	
92	"	磨制小斧?	"	(6.8)	5.0	3.2	208	
93	"	打刀?	绿帘角闪岩	(8.1)	(2.8)	(2.2)	35	
94	"	"	砂板岩	5.7	(2.4)	(2.2)	22	
95	"	尖锥状石器	灰	9.7	5.9	1.8	88	

15の扁平な凹基三角形鏃は、調査区東側の押型文土器集中区の上面からの出土であり、早期に含まれる可能性もある。なお、側辺が扇状に加工されるものは1点も見られない。

石鏃(第165図18)1点出土したのみである。黒曜石製で、つまみ部を有し、鏃部断面は、扁平でやや不整形な変形を呈する。長さ2.4cm、重さ0.9gを計り、完形品である。

スクレイパー(第165図19-24、第166図)計21点の出土をみた。いずれも黒曜石製である。縦長剥片を利用したもの(20、29、33-35)や、横長剥片を利用したもの(22、23、27)など素材は様々であり、原石面を残すものが約半数の9点にみられた。一側面のみ刃部を有するものが多いが、(20、23、26、27)の4点は、二側面に刃部が作り出される。刃部形態は、直刃7点(21、26、27、32、33、35、39)、内湾刃3点(20、25、36)、外湾刃7点(22、24、29、31、36-38)であり、直刃及び外湾刃を持つものが多い。なお、38については、全体に加工が施され、形状が整えられている。

打製石斧(第167-170図)最も多量に出土をみた石器であり、計38点に及ぶ。石材は、頁岩製が最も多く26点を数え、他には細粒砂岩製5点、粗粒凝灰岩製2点の他、蛇文岩、粘板岩、珉質粘板岩、中粒砂岩、硬砂岩製が、それぞれ1点みられる。形態は、短冊形を呈するものがほとんどであるが、楕形(52-54、77)及び分銅形(73-76)も存在する。全体に、粗雑な作りであり、厚手のものが多く、自然面を残すものが11点ある。特に、楕形及び分銅形のもの、刃部も厚く、激しい使用の痕跡が窺え、刃先は土ずれによる丸みを帯びたものが多い。中でも、73-77の5点は、形態、重量などからみて、石鏃と呼ぶにふさわしいものであり、いずれも両側縁のくびれ部に磨痕を有するのが特徴である。全般的な傾向として、刃部が厚手に作られるものには、刃部の磨耗、刃こぼれが激しく、一口に打製石斧といっても、薄手のものと厚手のものとは用途を異にする可能性を示唆することが出来る。なお、特異なものとして、基部に磨痕を有する44がある。形態的には一応短冊形の部類に属するといえるが、磨痕を有する基部わきの両側面には、浅い持ちを有し、あるいは刃部と基部が、逆向きとも考えられ、装着方法が問題となろう。

横刃形石器(第170図78-171図89)計12点の出土をみた。頁岩製のもが6点と一番多く、次に細粒砂岩製が4点、他には、凝灰岩製及び泥岩製が、それぞれ1点ある。製作技法としては、いずれも大型剥片を利用したものであり、裏面に丁寧な二次加工を施すものは少ない。自然面は、全体に残すもの78、背部側に残すもの81、84、刃部側に残すもの85及び自然面を残さないもの79、80、82、83、86-89があり、自然面を持たないものについては、いずれも二次加工によって背が作出されるのが特徴である。刃部形態は、直刃4点(78-80、85)内湾刃1点(89)、外湾刃6点(81-84、86、88)及び不明1点(87)があり、外湾刃を有するものが多い。なお、78、83、86については、いずれも横方向の磨耗痕が観察され、使用法(もしくは装着法)を考える上で興味深い。

磨製石斧(第171図91、92)2点出土している。90は細粒砂岩製で、製法によって形を整えた後、敲打調整を行い、さらにその上に研磨を施している。形態は大形給刃石斧と似ており、断面楕円形を呈して、刃部は円刃となるが、表面が丁寧に研磨を施すのに対して、裏面は剥離面を多く残している。また、91は全面敲打によって仕上げられている。乳棒状石斧の基部であろう。



尖頭状石器（第171図）黒曜石製の小型品の1点（16）と、頁岩製の大型品1点（95）がある。16は、長さ3.2cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを計る。尖頭状石器という名称を使用したか、あるいはスクレイパーに含めることもできよう。95は、長さ9.7cm、幅5.9cm、厚さ1.8cmを計り、尖頭状を呈するが、衝鋒には刃部調整のための二次加工が施されず、尖頭器といったイメージには程遠い。尖頭形の打製石斧あるいは横刃形石器としても捉えることができ、帰属の定かでない石器である。

その他の石器として1点が出土している。半欠品であるが、自然面の広範囲に、敲打痕が観察される。敲石、もしくは乳棒状石斧の基部とも考えられよう。

石刀（第171図93、94）石製品として、石刀の一部と思われる小破片が2点出土した。93は珪質頁岩製で、断面は卵形を呈すると予想され、94は粘板岩製で、断面は三角形を呈すると思われる。

（前田清彦）

### （3）土製品

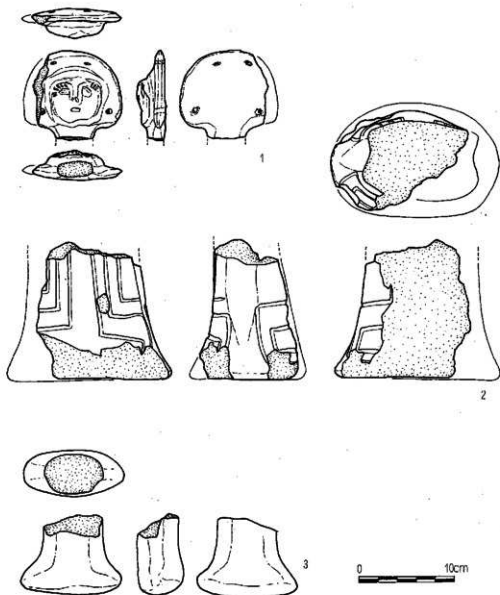
福沢遺跡からは、晩期終末～弥生中期初頭にかけての土器集中区より、土偶2点、及び土偶の可能性を有する産格不明の土製品1点が出土している。しかし、他の土製品の出土はみられず、中でも、茅野市御社宮寺遺跡、駒ヶ根市荒林沢遺跡などで多量に出土し、晩期終末期においても特徴的な遺物と想定される土製円盤の出土は1点のみみられなかった。

#### （1）土偶（第172図1、2）

2点とも、晩期後葉から弥生中期初頭にかけての土器集中区から、多量の土器片及び石器に混在して出土しており、遺構には伴わず、土器と共に単に投棄されたものと推察される。

1はA-3グリッドより出土した土偶の頭部で、頸部以下を欠き、頭部左側面についてもわずかに欠損する。現長4.7cm、厚さ1.5cm、頭部幅推定5.2cmを計り、該時期に特徴的な表情を有した優品である。顔面はほぼ方形に形作られ、顔面部上縁には、大きな翼状の張り出しが巡る。そして、そこには左右対称の4ヶ所に、表面から表面にかけての、細い棒状工具による貫通孔が穿たれる。顔面の意匠は、眉と鼻がT字状の隆帯上にキザミを施すことによって表現され、眼及び口は、浅い凹みによって表現される。なお、この種の土偶には、鰓面意匠を施すことが一般的であるが、本例には施されない。頭部は断面楕円形を呈し、下方に延びるのが特徴的で、形態から見ても、下伊勢店沢原出土の有髻土偶のように、短小な体部を有する可能性が強いといえよう。全体に、ナデによって仕上げられ、暗褐色を呈し、焼成は良好、胎土には細かな長石、石英、雲母粒を含む。なお、類例としては、唐沢原の他に、大町市柿ノ木出土の土偶があり、眉、鼻の表現などは、水遺跡出土の有髻土偶にも類似することから、本例は、容器形土偶出現直前の、晩期終末～東海系糸原文土器波及期あたりに位置づけられると想定される。

2は、A-6グリッド出土、現存高7.3cm、底部の推定幅8.6cmを計る土偶胴下半で、中空にはならず中実の土偶であり、欠損品ながらも重量感に富む。平面形は、やや上げ底状を呈する安定した底部から内方にくびれ、そこから胴上半に向かって直線的に延びており、容器形土偶の彫部



第172図 土製品

を連想させる。また断面形は、底部では長円形、胴半ばでは両側面が削り取られて内方に凹み、扁平な分形形を呈している。文様は、表面は欠損が激しいものの、表裏ともに、両側から、コの字重ね状の文様が沈線によって描かれている。仕上げは、底部を除いて、ミガキが施されており、底部裏面のみはナデによって仕上げられる。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好、胎土には、長石、石英、砂粒を含む。なお、本例の類品としては、山梨県金の尾遺跡出土（山梨県博・物別展図録・1983）の、容器形土偶と形態を同じくする中実土偶が挙げられ、位置づけとしては東海系条痕文土器波及期あたりが想定されよう。

## (2) 性格不明の土製品 (第172図3)

3は、晩期後葉～弥生中期初頭にかけての土器集中区の南端Y-4グリッドから出土しており、形態からみて、土偶の脚部とも考えられるが、安定性が無く、文様も全く見られないため、性格不明の土製品として扱った。現存高4.2cm、幅5.3cm、厚さ2.4cmを計り、丸みを帯びた逆T字状を呈する。全体にミガキが施工されるようだが、器面がやや荒れているため判然としない。褐色を呈し、胎土には、長石、石英、砂粒を含むが、焼成はやや悪である。

(前田清彦)

## 8 調査の成果と課題

### 1 福沢遺跡における初期弥生文化の立地環境

立地環境が集落にどのような影響を及ぼしたかを把握することは該地の歴史の流れを解明していくうえで必修な要素となる。そしてこのことは生活基盤を自然界に委ね、地形・地質・水利・植生・気象など自然の諸条件の微妙な変化に影響を被り易い古代においては特に重要なことと考える。そのような意味から私たちは初めての遺跡に出会った際には、まず周辺の立地環境を読み、ある程度予測をする。この予測は多くの場合、実際行なわれる発掘調査の成果と一致するのであるが、時として外れることがあり、新たな疑問を投げかけられる運命に出会う。

埴尻東地区の遺跡を概観すると、2つの異なる形態に大別されよう(古田向井、1983)。即ち、東山から椋敷付近にかけては浸食に伴う開析扇状地が発達しており、日照の良好な台地縁部には柿沢東、五輪堂、峯窪、剣ノ宮、田川などの縄文中期を代表する遺跡が分布している。これに対し椋敷から広丘野村付近にかけては枯梗ヶ原台地に沿って2段から3段の河岸段丘が発達しており、低位段丘を水田地に利用した高出遺跡の黒崖、北原、一夜窪、裏ノ原、社宮寺をはじめとして対岸の中島、上木戸遺跡など松本市寿赤城山と並んで松本平でも有数の弥生密集地帯となっている。このように埴尻東地区の代表的な諸遺跡は川川の河川が形成した地形に依存している観が強い。

福沢遺跡のある長敷地区東部は田川の支流河川である鑄物師屋川が開析した谷状地形に位置し、田川の本流からは多少離れているため上記の形態分類が必ずしもあてはまらないが、強いて分類すると前者に近い。従って遺跡も今回の調査前には高地に普遍的な縄文時代と平安時代の複合遺跡として捉えられていた。しかし調査の結果、本遺跡にはさらに縄文晩期～弥生初頭にかけての文化層も存在していることが判明し、しかも資料として貴重な一括資料が得られたことから該期の遺跡として無視できないものとなった。そこで本稿では周辺の弥生初期における集落立地と本遺跡の弥生資料の在り方を若干検討してみたいと思う。

#### 弥生初期における集落立地

松本平において該期の遺跡立地を取り上げ、その性格を論じたものに松本市寿赤城山がある(藤沢宗平、1971)。松本市寿と埴尻市片丘の両地籍にまたがる赤城山は、高ボッチ山塊の前面に横たわる一つの丘陵性山地形をなしており、この付近にみられる単純な西斜面という地形をやや複雑

第5表 塩尻東地区各遺跡の地形による分類(塩尻町誌の分類による)

地形区分	遺跡
高原性遺跡地	枹沢区 枹沢東、大原、東山区-妻木沢
渓谷性遺跡地	金井区-三川浦、下西条区-久野井、朝久保、ちんじゅ、鏡宮、長敷区-稲沢。
丘陵性遺跡地	上西条区-茅塚、粟ノ宮、金井区-五輪堂。
準低地性遺跡地	上西条区-船町。
低地性遺跡地	下西条区-船、砂田、碧ノ内・枝敷区-中島。

にしている。この地にはエリ穴、石行、宮前、横山城、寺平といった諸遺跡が分布しており、縄文後晩期から弥生期に推移する過程での立地環境が関与する要素を捉えるにはまさに好都合といえてよい。

一般に縄文文化が弥生文化に推移する過程では、前者の文化を全く廃して新たに後者の文化が出現するというのではなく、縄文文化の中に弥生文化を特徴づける要素が加わり、それを活用していくなかで徐々に縄文的性格を脱して弥生的性格を帯びていくという経路をとる。その要素として例えば弥生式土器、水田稲作、金属器などが登場したのである。中でもとりわけ寒冷化に向かい採集経済の生活基盤に不安を感じる当時においては、安定収穫を約束される水田稲作は大きな魅力であったにちがいない。しかも当時の地形の形成を概観すると縄文中期から晩期にかけて砂層の堆積が旺盛に進行し、自然堤防状地形を残した後、静穏な堆積時期を迎え広大な後背湿地状低湿地を展開させることになった。このことは水稲生活にとってまさに魅力的な土地条件となるのである。

主河川による上部砂層の盛んな堆積作用によって、それに合流する支谷が、主流河川の氾濫原への谷口で割断され、池沼ないしは湿地化するという現象がある。多くの弥生遺跡の場合、このような2河川の合流付近に形成させた湿地が選ばれているのであるが、弥生初期に限定した場合はいわゆる山地を流れる自然流が平地に下る場所が選ばれている。藤沢はこのような地形をさらに詳細に、山麓縁がやや複雑な地形をなし、小流ではあるが山地の斜面を流下して小谷をつくり、その途中でテラス状の地形を残し、さらに平地に移るところに小湿地がつくられている場所が初期的水田稲作には好適の地形と記述しており、同類地形の代表に明科町七貴地区塩川原の原および同家原の荒井をあげている。そしてこの意味から赤城山もやはり横断する3小流と山麓縁から湧水する水によって谷の部分に低湿地を形成しており、初期水田の条件を備えているといえよう。彼らの住居はかかる谷地形の両側の台地上や中腹ないしは山麓に占め、水田をその傍の湿地に求めたということになる。

ではこのような地形条件に適合する箇所を塩尻東地区に探してみよう。資料は少し古くなるが「塩尻町誌」1937による遺跡区分を用い代表的な遺跡を第7表に表す。これと弥生初期の遺物が出土した遺跡を照らし合わせてみると「渓谷性遺跡地」に分類された下西条のちんじゅ、鏡宮、長敷の稲沢のみがこれに該当する。両者は共に、それぞれ田川の支流にあたる矢沢川、鱒師屋川によって開析された小支谷の入口に位置し、僅かな稜丘をもって前面の水田地帯を臨んでいる。位置的には田川扇状地を挟んで両山麓際と離れているが地形環境は非常に類似したものがあ

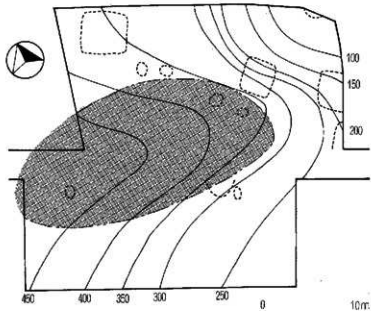
り、しかも前述した縄文文化から弥生文化へ推移する要素を強くもっているところといえよう。

#### 福沢遺跡の弥生資料の在り方

福沢遺跡付近の地形、特に河川と等高線の相対関係をみてみると、堂の前遺跡付近ではほぼ東西方向に走っていた等高線が福沢遺跡ではNW-SEの方向性が強くなる傾向がみられる。これは現在もっと西方で流向を北へ変える河流が、おそらく当時は福沢付近が谷口になっており流向を変えていたことを示しているのではないだろうか。もしそのような環境であれば谷口の部分は湿地形となっており、水田稲作に利用されることも自然の成り行きといえる。そこで該期の居住区と出土遺物の産出過程が新たな問題となってくる。

第173図は調査区各箇所を剥削された層序断面図を基礎データに縄文期、即ちローム層直上の面を復元し、等高線図によって表わしたものである。弥生包含層堆積時直前の等高線（第105図）と比較してみると、後者が緩やかに南西方向へ傾斜する単一面を示しているのに対し、前者には中央付近に西へ開口する浅谷地形が明瞭にみられる。この浅谷は東側が急傾斜で西側が緩傾斜という楕円状を呈し、おそらく一定の流れをもつ河流の存在よりもむしろ流速が著しく低下する状態、即ち湿地であった可能性が強い。このことはトレンチ内のセクションで確認されたローム面直上の黒青色埴壇土の存在にも裏付けされている。そしてさらにおもしろいことにこの浅谷部がちょうど弥生遺物出土区域にあたるのである。

出土遺物は産状から原地性のものとは考え難い。そこで仮りに異地性のものと想定すると自然流入もしくは投棄（廃棄）のいずれかということになる。投棄の場合、もし地表が湿地のような軟弱地盤であれば遺物はさまざまな角度で定着し、方向性が一定ではなくなることになる。これに対し流入の過程では、通常の層流においてもあるいは地盤のクリープのような動きの場合でも、



第173図 縄文晩期～弥生遺物密集川土地域  
(等高線はローム面)

ほとんど水平定着をする。例外的に乱流や土石流のような過程もあるが、付近の地形あるいは遺物の産出状態から考えるとまず無関係である。このようなことから今回の福沢遺跡に関しては、多少の例外は認められるが、概して遺物の産状は水平方向を呈する傾向があり、可能性としては異地からの自然流入という考えが最も無難なところであろう。

以上のことを勘案すると次のようになる。湿地環境にあった浅谷部を利用し稲作を始めた当時の生活居住区は一段高い段面上(堂の前遺跡の立地面)にあり、浅谷埋積後、地形の変化に伴い何らかのプロセスで遺物が一定方向から搬入され堆積を繰り返していった。該期の集落跡が検出されず、また遺物包含層である第III層黒色土層の異常な産状などからこのような推察が引き出されよう。そしてこのような堆積を何度か繰り返して僅かに微高地状になったこの区域に平安期の居住区が設けられたものであろう。

(鳥羽嘉彦)

## 2) 土器について

### (1) 押型文土器の層位的観察

**押型文土器の出土層位** 福沢遺跡の押型文土器の包含層は第V下層～第VII最上層にわたっている。土器が集中的に出土したのはA1、A2地区である。この地区は自然地形的にみた時、かなり強い斜面となり、両方に向かって落ち込んでいるが、地層の堆積状態は安定しており、V～VII層は明確に分層することができた。第V層黒色土、20～30cm、第VI層褐色土、15～50cm、第VII層褐色土、15cmであり、層厚が厚い第V、第VI層は上・下に区分した。

では、第3、4表により各類別ごとに層位的状況をみたい。

帯状施文構成のものは、山形文に限られている。横位の帯状施文が大半を占める。出土層はVI上層を中心とし、V層にわたり出土している。これに対し、縦位の帯状施文はVII最上層を主体に、VII上・下層にわずかながらみられる。こうした在り方は、後述する密接施文の細かな山形文の出土状態と同一傾向を示している。しかも、ここで資料化した20～23の土器は、遺物の項でも述べたごとく、縦位密接のバラエティーの中で扱えられる可能性を多分に含んでいるため、累計する際、考を要しよう。異方向の帯状施文土器は、わずか2片出土したのみであるが、VおよびVI上層から各1片出土している。このように帯状施文された土器群は、第VI上層からV層にかけて主体的に出土し、押型文土器包含層としては上位の部分からの出土が目立つ。

以下密接施文を検討してみよう。

山形文は、山が大きく、部厚なもの(122、44～50、54～58など)、山が小さく、細かなもので器壁は薄いもの(59～97など)、の2種が主体をなし、縦位の密接施文が大半を占める。このほかに、異方向密接(110～113)なものや薄手で特異なもの(51、52)がわずかに存する。山が大ききものは、ほぼ完形品の122が第VII最上層から出土していることもあって、第VII最上層が出土層の中心をなし、第VI下層でもわずかに出土があり、この同層で8割を占めている。一方、細かな山形文は、第VI上と第VII最上とに分かれ、第V下、第VI下にも少量ではあるが出土しており、第V～第VIIの包含層全層にわたって含まれている。このほか、異方向密接施文土器は、4片中、第VI

上層に3片がみられ、佐の1片は第VI下層に存する。包含層の上位に位置しており、注意される。また、口縁部から細かな山形が施文される51、52は第VI上層から出土しており、その特異性と相俟って今後注意されよう。

楕円文は、器壁が形厚く、大粒の円形と、小粒で穀粒状をなすものがある。大粒の楕円文は、大多数が第VII上層から出土し、この層位を主とすることが分かる。小粒のものは2片のみであるが、ともに第V層に含まれている。格子目文は、4片出土したのみで、明確な傾向は読みとれないが下層部に中心をもつようにも見受けられる。

市松文は、第123図の大破片が第VII最上層から出土したこともあるが、第VII最上層をその中心とする。しかし、第VI上層にもややまとまった資料が得られており、第VI下層でも出土がみられる。第VII最上層を主体としながらもかなり上層まで分散している。他の文様に見られない在り方である。

上層と下層の土器群 以上、土器の施文方法から分類した土器群と出土層との関連性を概観した。それによれば、第VI上層と第VI下層とを境として、大きく第V層～第VI上層と第VI下層～第VII最上層とに2分割が可能のようである。すなわち、下位の第VI下層～第VII最上層では密接施文の大きな山形文、楕円文、市松文が主体をなして出土し、上位の第V層～第VI層にかけては帯状施文構成をとる山形文が主として出土した。なお、縦位密接の細かな山形文および市松文は、下位にわたって出土がみられた。下位の層から出土した縦位密接の山形文・楕円文・市松文は、器壁が厚く、焼成が悪いもので、いわゆる立野タイプの押型文土器である。また上位の層から出土した帯状構成をとる土器は、薄手で、焼成が良い横沢タイプのものであった。このような層位の観察からは立野式一横沢式という時間的順列が把握されたものとする。なお、両層に主体を

第6表 押型文土器出土表(帯状施文のもの)

土器 層位	山形文			計
	横位帯状	縦位帯状	異方向帯状	
第V中	7	1	1	9
第V下	7	0		7
第VI上	20	2	1	23
第VI下	3	1		6
第VII最上	0	(3)		(3)
計	39	4(3)	2	45(3)

第7表 押型文土器出土表(密接施文のもの)

土器 層位	山形文				楕円文		格子目	市松文	縄文	密接	無紋	計
	大きな山形	細かな山形	異方向密接	特異な山形	大粒	穀粒						
第V中	1				1	1	1	2			(N5)	(N5) 6
第VI上		3	3	2	1	1	1	2		8		20
第VI下	9	10	1		1		1	2		15		48
第VII下	15	3			1		1	8		13		42
第VII最上	57	18			10			21	1	16	1	124
計	82	34	4	2	13	2	3	45	2	59	7	239

占める縦位密接の細かな山形文は、薄手、固く焼きしまっているものと、やや厚手で焼きが甘いものがあり、これは2分類があるいは可能かとも思えるが、分析が不充分であるため明確でない。

縦文・摺糸文の出土は上・下位両層とも類似しており、とりたてて特徴はみい出せない。強いていえば、下位に摺糸文がやや多目であるといえようか。

このように、今回の調査では、小範囲の調査であったにもかかわらず、現在、押型文土器研究での焦点の一つともいえる立野式と燧状式との編年関係が、立野式→燧沢式となる可能性の強い結果を得ることができた点は、大きな収穫であった。

(小林康男)

## (2) 縄文早期条痕文～後期土器について

### 第Ⅱ群土器について

第1類土器は、いわゆる「連続瓜形文」それに類似する刺突文により、波状ないし横位の文様が施されるものであり、本類A種は柏畑式土器に、B種もA種に近い時期の所産と考えられる。

第2類土器は、結条体圧痕文を特徴とするものであり、同時報告されている堂の前遺跡での所見をもとにすれば、茅山上層式土器以降に位置づけられよう。

第3類土器は、貝殻条痕文系土器の中でも後出的な要素であると考えられる。

第4類土器および第5類土器は、茅山上層式土器を含めて、貝殻条痕文系土器の中でも新しい段階の土器群と考えられる。

### 第Ⅲ群土器について

縄文時代前期の土器である。第140図1は前期末葉、十三菩提式土器に、同2は前期終末期の土器にそれぞれ比定される。

### 第Ⅳ群土器について

縄文時代中期の土器である。第140図3は燧沢式、同4は新道式土器である。同図5～13は中期後半の土器であり、5は曾利Ⅳ式、6～10は曾利Ⅴ式、11・12は加曾利Ⅴ系土器の終末に位置づけられる土器にそれぞれ相当する。13は中期終末の所産と考えられる托手。

### 第Ⅴ群土器について

縄文時代後期の土器である。第140図14・15は後期初頭、称名寺式土器である。同図16・17は後期前半、堀ノ内式土器に比定される。

## (3) 晩期終末～弥生中期初頭の土器

今回の調査で得られた晩期終末～弥生中期初頭にかけての遺物は、松本平では未だ発見例の乏しい時期の遺物であり、当地方の弥生時代黎明期を考える上での貴重な資料となった。以下、出土土器について若干の検討をし、さらに、市内出土の晩期～弥生中期前葉にかけての土器と比較しながら当地方の弥生文化波及期の土器を概観することによって簡単なまとめをしたい。



## 第VII群II類土器

典型的な浮線網状文土器を有さず、また深鉢口縁の口外帯、沈線帯には衰退の様相が読みとれることから、浮線網状文土器衰退後の土器相として捉え得る可能性があるという指摘を百瀬長秀氏よりうけた。このような土器相は、樞王式土器を多出した飯島町うん坂II遺跡などにおいても同様みられ、浮線網状文浅鉢より、細密条痕を示標とする深鉢の方が、長い寿命を有すると予想される。ただし、同じ松本平でも、大町市のトチガ原遺跡では、浮線網状文土器と樞王式類似の土器が共存しており、必ずしも普遍的な現象ではないことが窺える。

### 弥生第I類土器

遠賀川系土器、東海系条痕文土器、東日本系の土器といったように土器相はバラエティーに富み、東海地方のみでなく、東日本からも土器の動きがあることは興味深い。また、遠賀川系土器及び水神平系土器についていえば、整形、胎土などからみて、東海地方そのものの搬入品とは考えられず、おそらく伊那谷あたりで1クッションにおいて、中部高地の晩期の土器と接触した後に模倣され、その後松本平に持ち運ばれた土器であると推察される。また、水神平系条痕文土器には壺形土器が多いのが特徴的で、これは松本平においては普遍的にみられる現象であり、東日本とも共通して、文化の担い手が壺形土器であったことが予想されよう。なお、半完形で出土した条痕壺については、遠賀川系の壺形土器と、針塚遺跡にみられるような東日本系の条痕壺の両者の特徴を兼ね備えており、興味深い。

### 弥生第II類土器

条痕文土器には、在地化のかなり進んだ様相が読みとれる。特に、大型壺のみならず、小型壺も出現することは、庄ノ畑式を特徴づける要素だといえる。また、口端にレンズ状の押圧を加える無文の壺形土器も諏訪、松本地方の庄ノ畑式に特有の土器だといえよう。なお、縄文帯を有した甗形土器は、東日本に系譜が求められ、この時期に至っても、東からの土器の動きがあったことが窺える。

## 市内出土の晩期～弥生中期前葉にかけての土器

塩尻市内には、数ヶ所の該時期の遺跡が知られるが、その中でも内容の豊富な3遺跡について概観したい。

### ちんじゅ遺跡（第174図）

市内下西条地区に存在する遺跡で、発掘資料では無いが、晩期～弥生前期末の土器の出土をみる（小林ほか1984）。浮線網状文土器には口外帯がみられず、龍川遺跡出土土器に近い様相を呈し、口縁内に沈線を施す深鉢も存在することから、水I式の中でも古相を呈した土器が主体をなすといえよう。また、1の壺形土器は、水道管の穴を掘る際に出土したもので、口縁をわずかに欠損する他は完形であり、単独出土ではあるが、再葬墓及び壺棺に利用された可能性もある。器表面には、刈谷原遺跡の壺形土器や、針塚遺跡の壺形土器に施される条痕に類似した細い半截竹管による条痕文が施され、胴部外面には炭化物の付着が、また、底部には二次加熱の痕跡が窺える。弥生第I類に併行する土器だと言えよう。

### 平出遺跡 (第175、176図)

縄文中期及び古墳時代で有名な遺跡であるが、復元住居の建てられる辺りからは、弥生中期初頭～前葉にかけての遺物がかなり出土している。第175、176図は、既報告資料を再実測したものの他、若下の未報告資料を加えている(大場ほか1955、小林ほか1983)。時期的には、ほぼ庄ノ畑式に比定される土器が多いが、やや新相を示す土器も存在する。

3、19～23は、東海西部に系譜の求められる土器で、3、19～22については、搬入品の可能性もある。3は、口縁に押し引き文、内面に横位羽状条痕を有した押田凸帯文土器であり、外面の条痕整形などから判断して、岩滑式に比定されよう<sup>21)</sup>。また、19、20は厚口鉢口縁部であり、岩滑式のメルクマールともなる器種である<sup>22)</sup>。21、22は、美濃型貝田町式に比定される土器で、内面に佛歯状土具による押し引き文を施すのが特徴である。これらの土器相は、岐阜県美濃加茂市の二ツ塚遺跡で採集された土器群に近似し(紅林弘1979)、ストレートな姿で搬入されている点から見ても、搬入経路として木曾谷が選ばれたことが十分に測される<sup>23)</sup>。なお、23の鉢形土器についても、胴部には横位羽状条痕が施され、美濃型貝田町式の鉢の影響が認められ、布具痕を有した鉢底部34も、美濃・尾張方面からの土器伝播を裏づけるものである。

また、いわゆる庄ノ畑式に相当する土器6～11、26～33も多数存在し、特に9の壺形土器頸部文様は、東海東部の丸子式に系譜の求められるものであることは興味深い。

なお、新相を呈する土器としては、図化した壺形土器1、4や、拓影の12～18が挙げられよう。これらは後述する銭宮遺跡の平沢タイプの壺形土器に類するものと思われ、庄ノ畑遺跡や横山城遺跡ではほとんどみられず、また、刺突文を有さないことから、緑ヶ丘遺跡の主体をなす土器よりは古くおかれる可能性があり、今後、時期、分布ともに問題とされる土器であるといえよう。

### 銭宮遺跡 (第177図)

ちんじゅ遺跡と同じく、下西条地区に存在する遺跡である

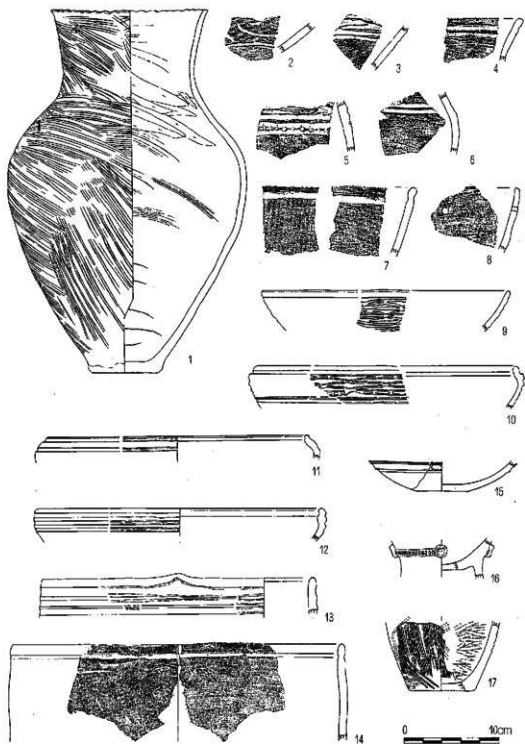
1は胴部に細密条痕の施される深鉢形土器で、口縁部には6単位と思われる突起部を有する。報文では庄ノ畑式とされるが、やや古相を帯び、針塚遺跡に類例のあることから、林里段階におかれる可能性もあろう。

2の壺形土器は、発掘資料ではないが、その後の調査により、土器出土地点から小壜穴が1基確認され、再葬墓の可能性もある。須和田式平沢タイプの土器で、胴上半は、孤文、羽状文、縄文などで飾られ、胴下半は条痕が施される。この種の土器は、阿島式の分布が狭いのに対して、関東～東海、北陸にまで広く散見され、土器の東から西への動きが窺える。

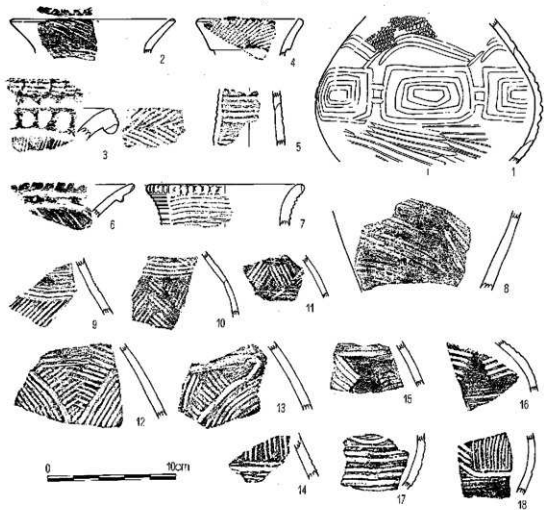
また、3～11は、石川秀雄氏採集の土器である。3の壺形土器口縁部は庄ノ畑式に比定されよう。

以上、福沢遺跡の土器、及び市内出土の晩期終末～弥生中期前葉の土器を概観してみると、松本平における弥生文化波及期の特徴をまとめると、次のことが言えよう。

- (1) 土器の動きは、必ずしも西日本から東日本への一方的な動きではなく、松本平という地理的環境が重視される。



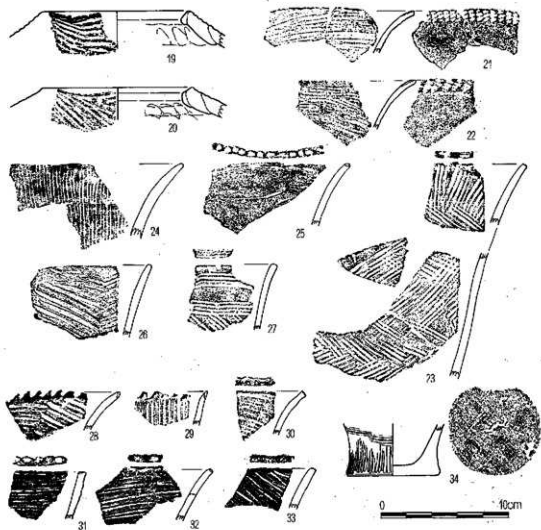
第174図 ちんじゅ遺物出土土器



第175図 平出遺跡出土土器(1)

土器観察表

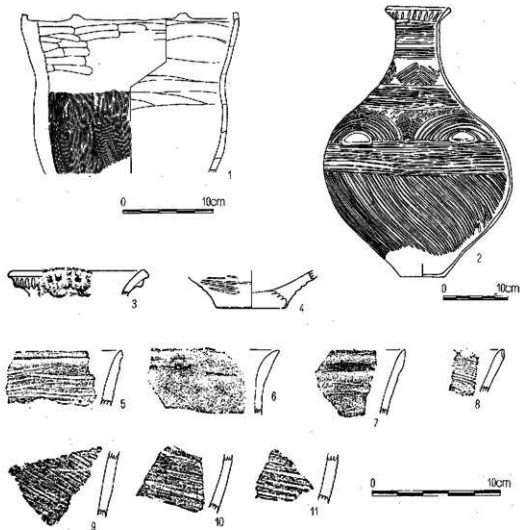
番号	発掘区	種類	部位	文様構成要素	器底文様 外底/内面	胎土	備考
1		埴形瓦	胴部	と単位の間文・白粉の化粧	内底・縦文/ナデ	長・石・砂(多)	内面化粧
2		山	口縁部	口縁内側にナデ	条痕(ヘリ?) / ナデ	長・石(少)	内面化粧・漆喰
3		広口壺	口縁部	洋瓦凸部・内面滑石状赤灰	条痕(器底)/条痕(器底)	長・石(多)	口縁引き
4		埴形瓦	口縁部	洋瓦凸部・内面滑石状赤灰	純文(LR)/ナデ	長・石	
5		山	胴部	凸部(上キヤ)・口縁にナデ	条痕(器底)/ナデ	長・石・雲	内面化粧
6		山	口縁部	凸部(上キヤ)・口縁にナデ	条痕(器底?) / ナデ	長・石・雲(稀)	赤胎
7		山	口縁部	口縁に條状具の押印	条痕(器底)/ナデ	長・石(稀)	
8		山	胴部	滑石および斜位の条痕	条痕(器底)/ナデ	長・石	
9		山	胴部	滑石および斜位の条痕		石(多)	外底化粧
10		山	胴部	滑石および斜位の条痕		長・石(稀)	
11		山	胴部	滑石および斜位の条痕		石(多)	
12		埴形瓦	胴部	滑石文下に斜文		長・石・雲	瓦・體
13		埴形瓦	胴部	滑石文		長・石	
14		埴形瓦	胴部	滑石文?		長・石(多)	
15		山	胴部	滑石文?		長・石(少)	
16		山	胴部	北端(内面)に条痕	条痕(器底)/ナデ	長・石	内面化粧
17		山	胴部	北端(内面)にナデ条痕		長・石	
18		山	胴部	北端(内面)にナデ条痕		長・石	



第176回 平出遺跡出土土器(2)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	製造法	外底/内面	胎土	備考
19		写口縁	口縁		高板(柳状具)/オサエ		石・灰(多)	
20							灰・石・砂(多)	
21			内面に柳葉状工具の押引文		高板/ナテ (柳葉)/ナテ		灰・石・砂	
22							灰・石・砂(多)	
23			横位斜状高板、口縁押引き				灰・石(無)	
24			縦位高板		高板(竹管)/ナテ			未調査
25			口縁にレンズ状の押印		ナテ			外面灰化物
26			横位斜状高板		高板(柳状具)/ナテ			
27			横位および斜位高板		高板(柳状具)/ナテ		灰・石	
28			口縁にキザ?		高板(柳状具)/ナテ		灰・石・砂(少)	
29			縦位高板、口縁にキザ?		高板(柳状具?)/ナテ		灰・石(少)	
30			口縁押引き		高板(柳状具)/ナテ		灰・石	内面灰化物
31			器体?		口縁内面にレンズ状押印		灰・石・砂	未調査
32					口縁にレンズ状押印			
33					高板(柳状具?)/ナテ			
34			器体		高板(三本輪)/ナテ		灰・石(少)	再調査



第177区 銭宮遺跡出土土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器底調整 外周/内底	胎土	備考
1		甕鉢		口縁に6単位位の突起	ナテ・細密条痕/ナテ	砂(少)	外面灰化物
2		甕鉢		器文・条状文など	条状(条状具)/ナテ	〃	縄代灰
3	表層	盆	口縁	凸部上に棒状ノミの押痕	ナテ	長・石(多)	
4	〃	〃	底部		条痕 /ナテ	〃	内面ハジケ
5	〃	深鉢	口縁		条痕(横物置)/ナテ	長・石・灰(多)	
6	〃	〃	〃		クズリーナテ	長・石・砂	
7	〃	〃	〃		ナテ→ミガキ	〃	
8	〃	鉢		口唇にレンズ状の押痕	細密条痕/ナテ	長・石・砂	
9	〃	〃	胴部		条痕/ナテ	長・石・砂	
10	〃	〃	〃		〃	長・石・灰(多)	
11	〃	〃	〃		〃	〃	

- (2) 東海地方からの直接の搬入品は少なく、伊那谷、諏訪地方で一度フィルターをかけた土器が搬入される。
- (3) 東海地方からの直接の搬入品と考えられるものには、木曾谷継由の搬入ルートも！分子想される。

(前田清彦)

註 佐藤由紀夫は、水神平式としている。(佐藤1984)

註2)このような厚口鉢は、横山城遺跡、こぶし畑遺跡、庄ノ畑遺跡など、松本、諏訪地方で散見される。

註3)木曾・小沢原遺跡で、遠賀川系土器、水神平式土器が共伴して出土しており、また、こぶし畑の報文などでも指摘されている(小松1974)

### 3) 石器について

#### (1) 晩期終末～弥生中期初頭の石器

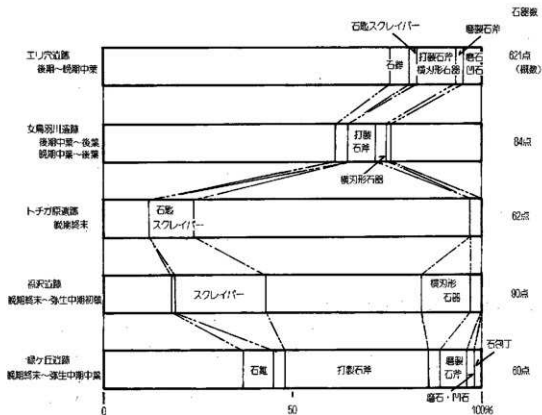
今回の調査によって十勝集中区より出土した石器は、総数95点を数えた。その石器組成をみると、性格不明の石器及び石製品を除けば、石鏃17.8%、石錐1.1%、スクレイパー23.3%、打製石斧42.2%、横刃形石器13.3%、磨製石斧2.2%となり、凹石、磨石、石皿などの出土をみず、打製石斧が顕著にみられるのが特徴といえる。以下、松本平における後、晩期～弥生中期にかけての石器組成の変化を追いながら、南信地方との比較も行って、簡単なまとめをしたい。

まず、松本平における後、晩期～弥生中期中葉にかけての5遺跡(福沢遺跡も含む)の組成を図に表してみた(第178図)。トチガ原遺跡を除いて、いずれも数時期にまたがる遺跡であり、単一時期ごとの変化を追えないところに問題はあるが、大まかな傾向は窺えるので概観してみたい。

#### 石器組成の変遷

まず、後期前葉～晩期前葉を主体とするエリ穴遺跡(数量は概数)では、石鏃が75%を占めており、打製石斧、横刃形石器が合わせて10%にも満たないのに対して圧倒的優位を占める。これは、後期中葉～後葉、及び晩期中葉～後葉を主体とする女鳥羽川遺跡でも同様に窺える傾向であり、後期～晩期中葉にかけての、石鏃主体の石器相を読み取ることが出来る。ただし、女鳥羽川遺跡では、磨石、凹石の合計が24%にも達し特徴的であるが、これは遺跡の立地・性格の違いによるものとも考えられよう。また、エリ穴遺跡では、石鏃の製作法的な性格が示唆されており、他の遺跡と同様な扱いをするには問題があるかもしれないが、この時期の石鏃の多出傾向は女鳥羽川遺跡の事例などからみても否めない事実であろう。

ところが、晩期後葉～終末に位置づけられるトチガ原遺跡となると、石鏃主体の石器組成は逆転し、打製石斧主体の石器組成となる。石鏃12%に対して、打製石斧は73%を占めており、驚くほどの変化が窺える。1軒の住居址の一括出土器ということで、これが遺跡全体の様相を示すかどうか疑問しいが、石鏃の減少、打製石斧の爆発的増加の傾向は窺えよう。次に、トチガ原遺跡とはほぼ時を同じくする晩期後葉から、さらに弥生中期初頭まで続く福沢遺跡の石器組成であるが、



第178図 石器組成、変遷図

石鏃と打製石斧にのみ注目すれば、やや時期的に下る弥生中期前葉を主体とする緑ヶ丘遺跡の名器組成と、先のトチガ原遺跡の石器組成との、ほぼ中間的な様相を示すことが示唆できよう。石鏃はやや増加し、打製石斧が主体をなすが、トチガ原遺跡ほど多量に存在しない。その他に目立つ傾向としては、福沢遺跡では、横刃形石器、スクレイパーの多出を指摘することもできる。

最後に緑ヶ丘遺跡であるが、阿島式併行の中期前葉の土器を主体とするこの遺跡では、石鏃は福沢遺跡より更に増加し、ほぼ打製石斧と同程度の組成比を示す。他には、横刃形石器の減少、磨製石斧の増加の傾向が窺え、特に、太形蛤刃石斧と、石包丁の出現は特徴的である。

### 器種別にみた組成変化

次に、石器の種類別に、時期的な変化を、県内の晩期～弥生中期前葉にかけての石器組成と比較しながらみてゆきたい。まず、石鏃と打製石斧の変化であるが、後～晩期前葉にかけて主体をなす石鏃が、晩期終末期において逆転し、打製石斧が主体となる傾向は、松本平だけでなく、東海系条痕文土器の波及経路となった南信地方でも同様に窺える。東北信地方では、この時期になっても、未だ石鏃主体の石器相を堅持するようだが、晩期終末期における諏訪・伊那谷地方の岡谷市経塚遺跡、飯島町うどん坂II遺跡、駒ヶ根市荒神沢遺跡では、トチガ原遺跡と同様な石器組成が見られ興味深い。また、これら4遺跡では、いずれも東海地方の極王式に比定され得る条痕文土



器を件出していることから、石器組成の変化には、東海地方との関連も予想されよう。次に石錐や石匙であるが、いずれの遺跡においても出土量は乏しく、量的に少ないと言えるので、組成の変化を論ずるほどの傾向はみられない。スクレイパーも同様、福沢遺跡では顕著な存在であったが、遺物としての取り扱いには、調査者の主観、及び整理作業の進捗などがかなり左右すると予想され、石器組成の中での変化を、特別重要視することはできないであろう。横刃形石器は、エリ穴遺跡及び女鳥羽川遺跡（報文では剥片石器として取り扱われる）にも見られ、中期以後存続する遺物であると予想される。組成比に占める割合は、福沢遺跡で高くなり13%を占めるが、緑ヶ丘遺跡（報文では片刃の半有形石器として取り扱われる）では3%に減少する。福沢遺跡とは同時の、下伊那林里遺跡でも、横刃形石器は10%近く存在し、石鍛様の打製石斧も多数存在することから、これらは、弥生文化波及期を特徴づける遺物であるとも考えられよう。ただ、横刃形石器については、磨製石包丁の代用としての用途を想定するむきもあるが、縄文中期にまで遡って系譜のたどることの出来る石器であり、また、東海地方においても、遠賀川系の弥生文化波及以前の五貫森貝塚、吉胡貝塚などで同様な石器が顕著に存在することが確認されており（杉原ほか1964）、縄文農耕論の未だ結着のつかない現在、石包丁的な用途のみ論ずることは危険であろう。

次に磨製石斧についてであるが、福沢遺跡までの4遺跡では、いずれも1~3%で微量な存在であったものが、弥生中期前葉の緑ヶ丘遺跡では7%に増大する。この中には太形輪刃石斧も含まれており、また、緑ヶ丘遺跡では他に磨製石包丁も1点みられることから、弥生的石器組成に妥容しつつある姿を読み取ることができよう。ただ、諏訪地方では、すでに弥生中期初頭の庄ノ畑式の段階で磨製石包丁の存在をみる（庄ノ畑遺跡）が、松本平では、同時期に位置づけられる横山城遺跡、こぶし畑遺跡及び本遺跡では磨製石包丁の存在はみられず、弥生系の石器の松本平への波及時期については、今後の調査結果に委ねられよう。

なお、凹石、磨石については、トチガ原遺跡、福沢遺跡で1点も見られないのが特徴であったが、女鳥羽川遺跡を除くその他の遺跡ではいずれも5%以内に納まり、後期~弥生中期前葉にかけて、量的には、さほど普遍的でない石器といえる。

以上、石器組成を概観してみても、福沢遺跡の石器組成は、松本平における弥生文化波及期の過程を示しているといえる。近年、松本平でも、弥生時代前半期の発掘調査も増加してきており、土器と共に、石器からも、弥生文化の波及を考えてゆくことが今後の課題といえよう。

（前田清彦）

## 9. まとめ

福沢遺跡の調査は、800cm<sup>2</sup>と小範囲ではあったが幾つかの重要な成果を納めることができた。

遺跡の立地については、前述した堂の前遺跡に隣接し、すでに報告されているように向遺跡は同一遺跡として展開していた可能性が高い。そうした目でみた時、堂の前遺跡の空白期間の遺物が、この福沢遺跡には多いことに気づく。すなわち、堂の前で少なかった押型文期の遺物、条痕文系の中の柘畑式が出土し、晩期～弥生初期、平安時代の遺構、遺物が多く存在した。こうしたことから両者は相互補完的関連性をもった地域であったことがうかがえる。

以上、成果について概観する。

縄文時代早期では、押型文期の遺構、遺物が多量に出土した。特に、出土土器は、下層に立野式、上層に縄文式が得られ、両者の編年関係に新しい資料を提供した。また、ほぼ完形で出土した山形文を縦位密接施文した立野式土器、胴部上半部の神宮寺タイプの土器は、押型文土器を論じるうえで欠かせない資料となろう。

縄文晩期から弥生初頭の遺物群は、近時、針塚、ちんじゅなど松本平でも新資料が増加しているが、これら新知見を加えるものである。晩期の遺物では、浮線網状文の欠装が特徴としてあげられ、弥生初頭では、東海系土器の波及期に東日本の影響のある土器も混在しており、土器の動きは西側からのみならず東側からもあり、混在した状況を読みとることができる。いずれにしても混乱状態にある該期土器の考証のための有力な資料となろう。また、これらの土器群に共伴した石器群も特徴あるものであった。過渡的なこれら石器群は、弥生文化の確立期に向かっている生産活動の在り方を明確に示したのものとして極めて貴重である。

平安時代の遺跡は、住居が密集して発見され、平出・吉田向井など低平地での遺構の在り方は比較的明瞭に把握されつつあるが、山間地のそれは不明確な部分が多かった。最近調査された鼻屋敷とともに、性格究明のための好資料となろう。

(小林康男)

## 第3節 青木沢遺跡

### 1 位置(第179図)

青木沢遺跡は東山地区南方の松井沢地籍にあり、標高は885mと比較的高所に位置する(塩尻駅付近720m)。

塩尻宿の東端にある仲町交差点で国道20号線(旧中山道)と分かれて国道153号線(旧三州街道)を伊那路へ約1km程度行くと左手にみどり湖温泉街の看板が目にとまる。みどり湖はそこを左手に入り、約600m程の坂道を登り切ったところに広がる湖で、田川の流れをせき止め造成した灌漑用のため池である。田川の河流はこの付近を境に、下流では流速が弱まり堆積が始まることによって扇状地状の台地を形成するようになる。これに対し上流側では浸食作用が大きく深い開析谷を形成している。湖の奥手にある田川浦鉱泉の脇を抜け、この谷に沿って約1.5km程登ると谷は行き止まりに近づき、左手からは松井沢、右手からは青木沢が下流し田川に合流する地点が出る。この付近は河流に沿って狭長な台地が続いており、段々地形が水田や畑地に利用されている。

青木沢遺跡は田川右岸の松井沢によって形成された舌状の台地上に展開する。田川の現河床とは比高差12mを有し、平均傾度6°と急峻な台地である。背後には杉林が続き、この林間に開かれた道を登り詰めるとちょうど高ボッチ登り口にあたる国道20号線に出ることができる。

この付近は中央道長野線塩尻トンネルの塩尻側出口にあたり、中央道もちょうど遺跡地を通過することになったため今年度、中央道関連発掘調査と当園場整備事業関連発掘調査がほぼ時期を同じくして隣どうしの畑で実施されることになった。

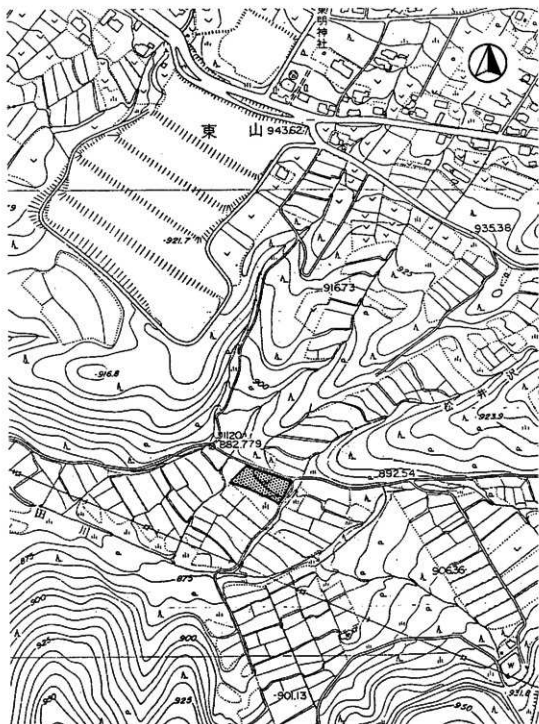
最後に「青木沢遺跡」の命名について誤りが生じているため注釈しておきたい。前述したように田川を挟んで右岸が松井沢地籍、左岸が青木沢地籍であるが、遺跡の立地する場所は右岸の台地上で松井沢地籍である。左岸の青木沢地籍においては過去に遺物が出土した例は伝え聞くが、現在は水田が展開しているためその確認は難しく遺跡として捉えることはできない。従って対岸の松井沢地籍に「青木沢遺跡」が命名されていることは、その是非はともかく混乱のある程度避けることはできている。ちなみに「松井沢遺跡」というのは松井沢の上流にあり、巨離にして約1km離れた別遺跡である。

(鳥羽嘉彦)

### 2 過去の調査経過

青木沢遺跡の文献への初出は、昭和31年刊行の信濃史料第1巻上、考古資料編の地名表への記載である。これ以前に、塩尻地区内をくまなく調査し、地区内の遺跡、遺物の在り方を詳細に論述した塩尻町誌(昭和12年刊行)には、青木沢遺跡の記述がないので、この遺跡が知られるようになったのは、これ以後のことと思われる。

信濃史料には、台地上に立地し、縄文中期の加曽利E式土器・土偶・打製石斧が出土しているとしている。この後、昭和53年に東山区が東山開墾百年祭を記念して発刊した「東山開墾百年沿革史」の東山戦後の開拓と青木沢増反開田の項に「青木沢開田時に出土した縄文土器」の説明が付された。葉の写真が掲載されている。この写真の資料は小松定男氏所蔵の遺物で、土偶・土器・



第179区 青木沢遺跡調査地区図 1 : 5000

打製石斧がみられた。このため、発掘調査終了後であったが、小松氏宅を訪れ、これらの遺物を拝見し、同時に採集時の状況等についての説明を聞くことができた。小松氏によると、これらの遺物は、昭和10年代に今回発掘調査した地区に道路をはさんで隣接した水田を開田する際、深掘りをした部分から出土したものであるとのことであった。採集された遺物は、後に報告されている神子柴型石斧、縄文晩期に属する土偶、そしてミカン箱2個分ほどの土器片が出土し、また長さ50cmほどの石剣も出土したという。このうち土器は学校に寄付し(未見)、石剣は東京の博物館に寄贈したとのことであった。青木沢遺跡を理解するうえで貴重な資料といえよう。

さて、昭和50年代に入り、中央道長野線が青木沢遺跡の周辺に計画されたことにより、県教育委員会の数次にわたる現地調査が実施された。特に、昭和54年、県教育委員会文化課関指導事務の調査では、黒曜石の散布が3,800m<sup>2</sup>にわたることが確認され、土器片が採集された。そして、この調査中、特筆されるのは尖頭器が1個採集されたことで、本遺跡が先土器時代にも属しているのではないかと考えられるようになったことである。

昭和59年、塩尻市教育委員会の発掘調査に先立ち、隣接地を長野県埋蔵文化財センターによる中央道長野線関連の発掘調査が実施された。長野県埋蔵文化財ニュースNo. 9によりその概要をみると、東西に長い3.5×1.6m、深さ30cmの長方形を呈した竪穴状遺構が検出されている。遺物としてはII層の黒色土中より縄文時代早期の土器片が少量と石鏃、黒曜石片が得られている。また、盛二中やII層からは長さ5ないし8cmの楕円形と木葉形の尖頭器が数点出土したという。

以上がこれまでの調査の概要であるが、このような表面採集の結果、先行した中央道用地内での調査により、青木沢遺跡が先土器、縄文時代を中心とする遺跡であることが判明した。

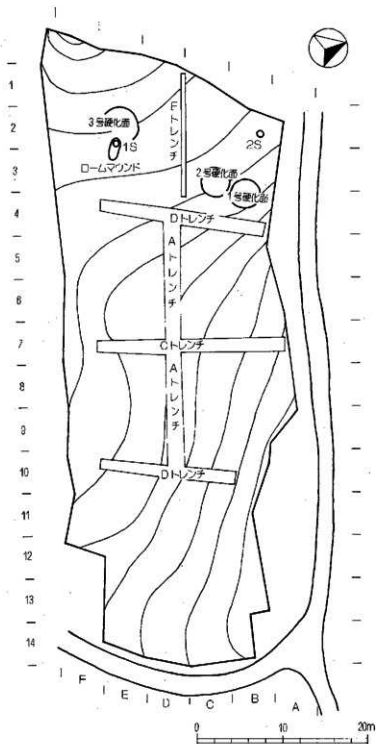
(小林康男)

### 3 調査概要

青木沢遺跡は、塩尻市東山地域にあり、田川が開析した谷あい位置する。ここは、谷に沿って狭小な台地が続いており、本遺跡は、支流松井沢が本流へ合流する地点に形成されたテラス状の白地に立地する。

調査の結果、遺構は、円形硬化面3基、小竪穴2基、ロームマウンド1基である。遺物は、縄文時代早期から後期の土器片と弥生時代の半環形の土器が出土した。石器は、先土器時代では、尖頭器2、ナイフ形石器6、ブレイド1である。縄文時代では、鏃41、石匙1、スクレイパー1、打斧6、特殊磨石6、磨石1、凹石1、砥石1の計86点が出土した。

調査範囲の東部と西部を除く全地域に大小様々な礫が見られ、検出は困難であった。礫が非常に多い中央部には、遺物はほとんど見られず、土層観察のため東西に幅2m、長さ25m、深さ130cmのトレンチとそれに垂直な3本のトレンチを設けた。調査範囲は、全体的に暗褐色土層、ローム層と堆積しており、遺物は、旧石器時代弥生時代にかけて、黒褐色土層から主に出土しており、時期による層位の違いは判断できない。ただし、時期によって集中的に遺物の出土する地域が認められる。縄文前期土器は、E-0、1とF-0、1グリット、縄文後期D-12、13、E-12、13グリット、弥生土器は、A、B、C-2、3、4グリットに集中して見られる。旧石器は、E-11、12、13からややまとまって集中している。縄文中期土器は、散在している。



第180図 青木沢遺跡遺構全体図

遺構は、伴出土器が見られず、時期判断はできない。

最後に、本遺跡は、旧石器の出土する遺跡として知られており、今回の調査でもそれを確認した。また、過去に出土した種子柴型の石器1点と、尖頭器1点を確認した。

(三村 洋)

#### 4 発掘区の設定

遺跡の地形を概観すると中央を横切る農道を挟んで北側は、やや急な尾根状地形を呈し、段差のある水田に利用されている。おそらく松井沢によって上方から押し出されてきた土砂が平地に至り、徐々に堆積したと推察され、遺跡の残存する可能性はほとんどないと感じられた。従って農道以南でテラス状に張り出す台地を今回の調査区域とした。ちなみに発掘区の南隣りは中央道用地内となり圃場整備の対象外である。

調査に先立ち区域内の試掘調査が行われた。それによると北側では深さ20cmで表土が礫層にかわり、また南側でも深さ60cmでやはり礫層にあたった。礫層は下位に行くに従って密になることから遺跡の可能性は礫層下にはほとんどないと判断して、礫層の直上で掘ることとした。

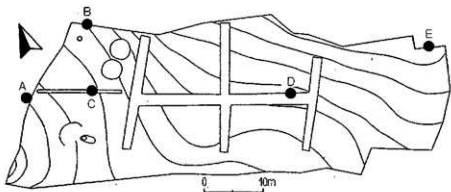
まずバックホーによる表土除去が行われた。調査区中央部ではかなりの巨礫(max80cm)を含むおびただしい礫群が広がっており、ほとんど遺構の可能性も薄かったが、これに対し東側と西側では表土が厚く礫群をほとんどみないままローム層まで続いていたため、調査の主体をこの東側と西側とすることとした。尚、調査と平行して土層の堆積状態と遺物包含層を確認するために発掘区のはば中央域において東西方向に幅2mのAトレンチを、これと交わる方向に同じく幅2mのB-Dトレンチを設定し、またAトレンチの延長上の西区に幅50cmのEトレンチを設定し、それぞれを掘り下げた。

グリッドは5m間隔で北から南へA-F、西から東へ1-14を設定し、調査総面積は1,800m<sup>2</sup>である。

#### 5 土層(第181図)

本遺跡の層序は上位から暗茶褐色土(表土)、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、褐色ロームに識別される。このうち第II層の黒褐色土層が遺物包含層にあたり先土器時代から弥生時代に至るすべての文化層が本層に集約されている。即ち、先土器時代最末期の遺物包含層は本層最下部に、縄文時代早期～後期は本層の中部から上部に、そして弥生時代の包含層は本層最上部にそれぞれ設定することができ、それらは明瞭に区別される。本層は発掘区中央域で非常に薄層であるが、東西両域へ向かうに従って層厚になり遺物の分布を限定している。このことは生活面と地形環境の関係を探えていくうえで極めて重要な手掛りとなろう。

第IV層～第VII層はローム層であるが、円礫や砂を多量に含むことからかなり水の影響を受けており、水成の2次ロームと考えられる。第VII層までを掘り下げたところ湧水があり、それ以降の掘り下げを中止した。ローム層中には古土壌を示唆する黒色バンドが見つからず、かなり変化の激しい堆積環境にあったことが推察される。



調査地点

レベル

cm

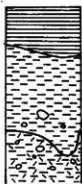
— 50



E



A



B

— 200

— 250

— 300



C



D

平面図 1/666

断面図 1/20

第181号 青木沢遺跡層序断面図



- I層…暗茶褐色（表土）。多少砂質の部分が見られる砂壤土。  
 II層…黒褐色壤土。小礫を僅かに含む。最上部に巨礫が密集する。  
 III層…暗褐色土。II層とIV層の漸移層。礫は中円礫。  
 IV層…シルト質ローム。中円礫を多く含む。  
 V層…砂質ローム。含礫粗粒砂。礫はmax 2 cmの細礫～中礫。  
 VI層…粘土質ローム。酸化鉄の赤色斑点がみられる。  
 VII層…ローム質含礫砂土。粗粒砂。礫はmax 15 cmの重円礫。

（鳥羽嘉彦）

## 6 遺構

### 1) 円形硬化面

#### (1) 第1号円形硬化面（第182図）

本遺跡は調査区の北西端に位置し、南側には第2号硬化面が隣接している。調査区は緩く南側へ傾斜する台地であるため、本遺構の標高は最も高い位置にあり、しかも若干傾斜を有している。第II層の黒褐色土は本遺跡の遺物包含層にあたり、縄文早期から弥生の長期地積を示しているが、調査当初に出土した弥生式完形土器付近の掘り下げをさらに進めていったところ約10cm下位より硬化面が検出された。連続性はあまりなかったが、かなり広範囲に分布している可能性があったため精査をしたところ硬化面の断続箇所群小のピットを有していることが確認された。このピットを追跡したところ硬化面を中心としては階段状に分布していることが判明した。

プランは径3.8m以上の円形プランを呈する。ピットはすべて小型のものが、おそらく傾斜地であるため流れたものと思われる。

焼土・周溝など住居を決定する施設は検出されず、また遺物も硬化面直上から出土したものがなく遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

（鳥羽嘉彦）

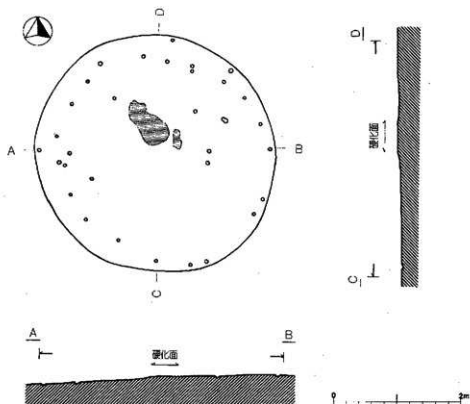
#### (2) 第2号円形硬化面（第183図）

本遺跡は調査区の北西寄りであり、第1号硬化面の南隣りに位置している。第1号円形硬化面の範囲を追跡するため周囲を精査していたところ、約3m南側に硬化面を検出する。この硬化面はかなり広範囲に連続して分布するもので第1号硬化面のそれに比べてかなり良好な保存状態にあったものである。第1号円形硬化面と同様、硬化面を取り巻くように群小のピット群の存在が認められた。

プランは東西4.0m、南北3.5mの楕円形を呈する。面は僅かに南西側へ傾き、中央に硬化面を有しているが周囲は締っていない。硬化面はN-30°-Eの方向を長軸に、長径2.8m、短径1.4mの不整楕円形状に広がっており、形状を見る限り特異性はみられない。ピットは径8cm、深さ5cmの規模のものを標準としてほとんどが楕円状の断面を呈している。

焼土、遺物の出土がなく、遺構の性格は不明である。

（鳥羽嘉彦）



第182区 第1号円形硬化面

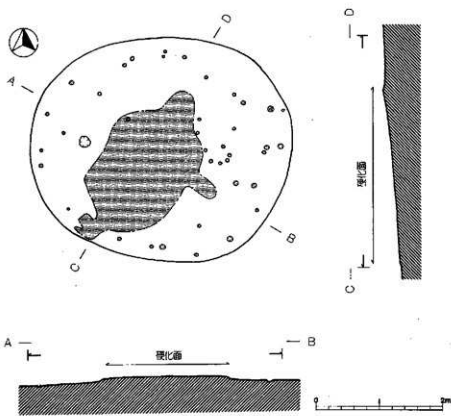
(3) 第3号円形硬化面 (第184図)

本遺構は調査区の南西寄りに位置し、検出された3箇所の円形硬化面の中では最も低所にある。第II層の黒褐色土の原平を進めていったところ最下部付近に硬化面を検出する。硬化面に連続性は認められなかったが、限られた範囲の中に点在しているところから、おそらく当初は連続的に分布していたものが傾斜であるためより低所へ流れて崩れたものと推定される。硬化面を中心として環状にピット群が検出され、これをもって円形プランを看取し得た。西側は比較的良好に保存されていたのに対し、東側はピット、硬化面ともに消滅してしまい輪郭を追うことはできなかった。本遺跡では唯一検出されたローママウンドが本遺構の東側に隣接しており、第1号小竪穴が掘り込まれている。

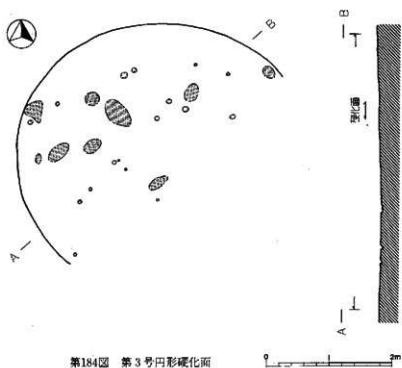
東側の硬化面が消滅しているためプランを確認することはできないが、ほぼ径4.5mの円形ないしは楕円形を呈するものと思われる。面は僅かに西へ傾くが平坦面をなし、凹凸の少ないよく締った床面である。ピットは他のものと同様、径4~10cmの掘鉢状を呈する群小のピットが面上に散在する。焼土は中央よりやや東寄りで硬化面よりやや浮いたレベルで検出されたが痕出状態から硬化面に付随するものとは考え難いものであった。

以上3ヶ所に検出された円形硬化面は、ピットが環状に確認されたところから何らかの遺構であると考えられたが、焼土・周溝・壁などの付随施設が伴わず、遺構の性格を決定するに及ばなかった。

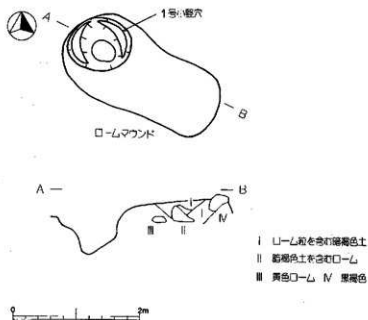
(鳥羽嘉彦)



第183図 第2号円形硬化面



第184図 第3号円形硬化面



第185図 ロームマウンド、1号小竪穴

## 2) ロームマウンド (第185図)

本址は、E-2、3グリットにかけて検出された。検出段階で暗褐色土層にローム質の円形の広がりを見つけた。東西方向に地層確認のため、半割りをし、ロームの正確な範囲を確かめた。その結果、純粋なローム部と暗褐色土混りのローム部に分けられた。また、ローム部下部の落ち込みは、確認できなかった。また、第1号小竪穴によって西側が掘り込まれている。両者とも検出面は、暗褐色土だったが、第1号小竪穴の方が、ロームマウンドの検出面より上にあった。

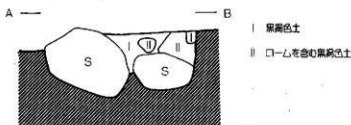
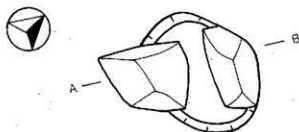
(三村 洋)

## 3) 小竪穴 (第185、186図)

今回の調査で検出されたのは2個である。S1は、E-2、3グリット、S2は、B-2グリットに位置する。S1の検出面は、暗褐色土層、覆土が黒褐色土で、ロームマウンドを掘り込んでいる。平面形は、東西方向を主軸とする楕円形で、壁中腹にテラスを2ヶ所持ち、深さ68cmの底に達している。S2の検出面は、暗褐色土層、覆土は黒褐色土である。65cm以上の標高が2個見られる。平面形は円形、断面形はコップ状を呈し、深さ36cmである。

S1には、出土遺物は無く、S2からは、土器片が数片出土した。

(三村 洋)



第186図 第2号小竪穴

## 7 遺物

### 1) 先土器時代 (第187, 188図)

今回の調査で得られた先土器時代に属する遺物は、ナイフ形石器6、尖頭器3、神子柴型石斧1、剥片1の計11点である。このうち、10の尖頭器と11の神子柴型石斧は調査前に採集されていたものである。

ナイフ形石器 1は縦長剥片を素材とし、打面部側を基部とする。長さ3.5、幅1.3、厚さ0.3、刃長1.9cm、重量1.7gで、黒曜石製。縦長剥片を斜めに折断し、パルプを除去している。素材のもつ正面右側の鋭い縁辺を刃部として残し、他の周縁に入念なブランティングを施している。基部裏面にわずかな調整を施している。2も1と同じく縦長剥片を素材とし、ブレイドの両端を折断し、素材のもつ縁辺を刃部とし、他の残りの縁辺にブランティングを加えている。基部の裏面に調整を施す。長さ3.3cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、刃長1.2cm、重量1.4gの黒曜石製。3も、1、2と同様のナイフ形石器の基部破片である。右側の縁辺には丁寧なブランティングを施すが、左側は折断面をブランティングの代わりにしている。現在長1.4cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重量0.5gの黒曜石製。4は、比較的小型の縦長剥片を使用し、正面左側の鋭い縁辺をそのまま残し、他の縁辺にブランティングを加えている。打面部側を先端部とし、素材使用法が1～3と異なる。裏面の基部には細部調整が施されている。長さ2.9cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、刃長1.8cm、重量

1.0gの黒曜石製。5は、横長の剥片を素材として使用し、両側縁に加工を施している。いわゆる切出形を呈する。長さ1.9cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、重さ1.3gの黒曜石製。6は、縦長で部厚い剥片を使用し、正面左側の縁辺の1部を刃部としたもの。長さ2.0cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、重さ3.1gの黒曜石製。

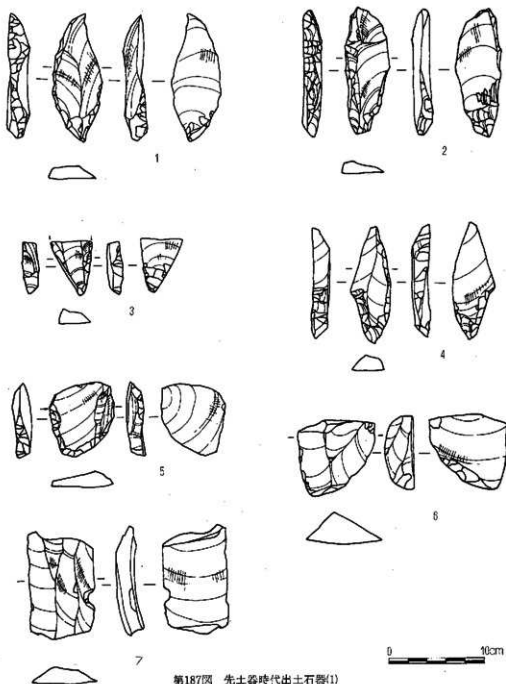
尖頭器 8は先端部の折損品。木ノ葉形を呈し、両面調整が施され、断面形は凸レンズ状に整形されている。調整は粗雑。現在長3.5cmで黒曜石製。9は、基部の破損品。現長5.0cm、幅5.0cm、厚さ1.0cmの大形品。入念な押圧剥離によって調整され、第1次剥離痕を残さない完全な両面加工品である。器形はシンメトリーではなく、右辺基部の曲線がやや乱れ、内弯気味となっている。基部は尖頭状をなし、最大幅は基部寄りにあるものと考えられる。21.9g、チャート製。10は、発掘調査以前に採集されていたものである。長さ6.4cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmの完形品で、石材は凝灰岩。全身磨耗が著しく、剥離面が不明瞭である。器形はほぼシンメトリーで整った形をしている。最大幅は中央部分にあり、この部分が最も厚く、基部は薄く仕上げられている。基部は丸味をおび、先端も鋭利さを欠いている。器体の調整は雑で、裏面には原石面を残している。

神子柴型石斧 (11) は今から50年ほど前、地元の小松定男氏(塩坊市東山)によって採集されたもので、今回発掘した地区の道路をはさんで隣接する水田を開田するために掘り下げた際に出土し、保管されていたものである。全長17.5cm、最大幅5.6cmで、330gの完形品である。断面形は、最大厚3.2cmの中央部が三角形を呈し、刃部、頭部とも三角形気味のレンズ状をなしている。刃部および頭部が研磨されており、一部胴下半部まで研磨がおよんでいる。特に刃部は良く研磨されており光滑をはなっている。刃部形態は、正面刃縁は直線的で、平面刃形は丸形である。石材は細粒砂岩製である。

#### 出土状態 (第189区)

先土器時代の遺物の出土層位は、第II層黒色層の下層で、地表下40~70cmの部分からである(第5項参照)。発掘調査前に行った数回の表面採集ではかなりの量の剥片が得られており、尖頭器も1点ではあるが採集されていたため、本調査に期待がもたれた。しかし、発掘調査で得られた遺物の量は予想を下回るものであった。また、先土器時代の遺物は縄文時代の遺物に混入する状態での出土であった。今回の調査および事前に採集された遺物は、ナイフ形石器、尖頭器・神子柴型石斧・剥片で、量的にはそれぞれが数点づつであり、広範囲に調査区を設定した割には出土は少なかったといえる。

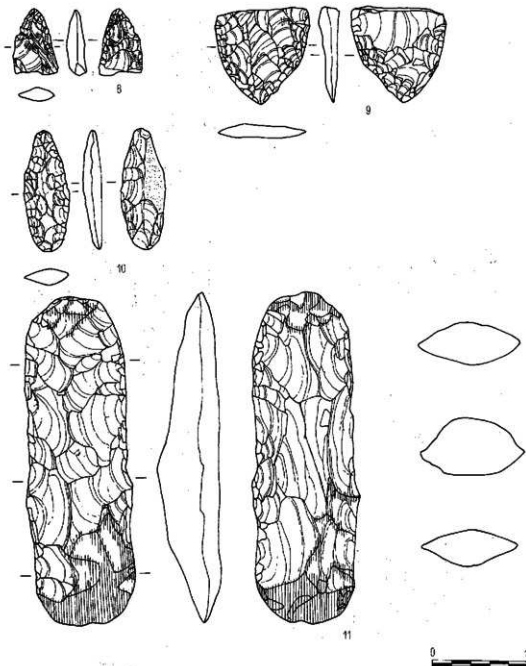
遺物の平面的分布を第189図によってみると、分布の中心が調査区の東端と西端とに別かれて2地点みられる。およそ40mほどの距離差があり、東端のI地点は約15×15mの範囲に、西端のII地点からは15×15mの範囲にそれぞれ石器が出土している。微地形的には遺跡立地の項で述べられているように両地点はそれぞれ異なった沢に面した傾斜面であり、自然環境上からは二分されるべきものかもしれない。しかし、出土石器が極めて少量であり、しかもII地点から出土したナイフ形石器と尖頭器は明らかに時期差が存在している。なおかつ、この尖頭器と関連性をもつと推定される神子柴型石斧は約100mほどの遠距離地点から採集されている。また、中央道に関連して調査した下方の地点でも何本かの尖頭器の出土が伝えられている。今回扱えられた2ヶ所の石器



第187図 先土器時代出土石器(1)

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (cm)	広さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	C12	ナイフ形石器	黒燧石	5.4	1.3	0.3	1.7	
2	"	"	"	3.3	1.1	0.3	1.4	
3	F0	"	"	1.4	1.1	0.4	0.5	
4	E3	"	"	2.9	1.9	0.4	1.0	
5	C3	"	"	1.9	1.5	0.4	1.3	
6	E14	"	"	2.0	2.0	0.8	3.1	
7	E1	製作	"	2.8	1.7	0.5	2.5	



第188圖 先土器時代出土石器(2)

石器観察表

番号	発掘区	種類	材質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
8	K12	尖頭鏃	黒曜石	3.5	2.3	0.8	5.3	
9	E 2	"	チャート	5.0	5.0	1.0	21.9	
10	丸塚	"	凝灰岩	6.4	2.4	0.9	13.5	
11	"	神下塚燧石斧	砂岩	17.5	5.6	3.2	330.0	



出土地点が当時の人間行動の有意な痕跡を示したものと断じるには消極的にならざるを得ない。遺物包含層が浅く、しかも傾斜地であったため自然流失や後世の開墾、畑の耕作により遺物のプライマリーの地層はすでに破壊されてしまったものと考えの方が妥当であろう。

(小林康男)

## 2) 縄文時代

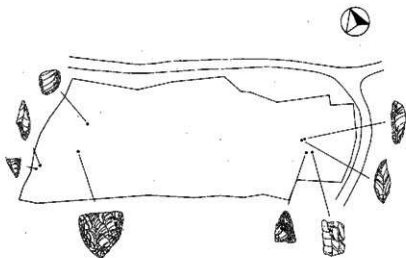
### (1) 土器

本遺跡に対する今時の発掘調査により、縄文時代早期から後期にわたる各期の土器破片が検出された。ここでは、それらを主に文様によって、第I群土器～第II群土器に分類し、説明を試みた。詳細は以下に示すとおりである。

#### 第I群土器 (第190図1～5)

縄文時代早期前半、押型文系土器である。出土総数は9片ときわめて少ない。内訳は粗大楕円押型文の施されるもの5片、格子目状沈線文の施されるもの1片、縄文が施されるもの1片、無文のもの2片となっている。E-2グリットおよびD-14グリットから出土している。

1～3は粗大楕円押型文が施された胴部破片であり、楕円の粒径はそれぞれ14×10mm、12×8mm、10×6mmとなっている。胎土に砂粒・石英・長石などを含むものの、器壁は硬くしまる。4は格子目状沈線文が施されるもの。色調灰褐色を呈し、器厚5mと薄手のつくりである。5はRL単筋縄文が施された胴部破片。



第189図 先土器時代遺物分布図

## 第II群上器(第190~192図6~45)

縄文時代早期後半~末葉の二器である。第1類~第7類土器に細分された。

### 第1類土器(第190、191図6~19)

沈線文や細隆起線文などにより、幾何学的な文様が施されるものである。F-0グリット~D-2グリットを中心とした分布が観察された。A~D種に分布される。

A種(第190図6) 細沈線による幾何学的な区画文の内に、太沈線や結節沈線が充填されるものである。

6は細沈線による区画文の内に、太沈線が充填される胴部破片であり、刻目のある隆起線によって縦位・横位区画される。暗茶褐色を呈し、焼成は硬くしまる。

B種(第190図7~9) 中紐の沈線によるやや曲線的な区画文の内に、太沈線が充填されるものである。

7は波状をなす口縁部破片。中紐の沈線によるやや曲線的な区画文の内に太沈線が充填され、要所に刺突文が加えられている。二唇部には棒状工具による押圧がなされている。8・9は本種に含まれる胴部破片である。くすんだ褐色、暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・金雲母・植物繊維を含む。器厚9mm、焼成はおおむねふつうである。

C種(第190、191図10~17) 太沈線による幾何学的な区画文の内に、同様の太沈線や結節沈線が充填されるものである。a・bの2種に細分される。

C a種 区画文の内に太沈線が充填されるもの(10)。区示した1片のほかその出土は不明である。10はくすんだ褐色を呈する胴部破片であり、器厚7mmをはかる。焼成はふつう。

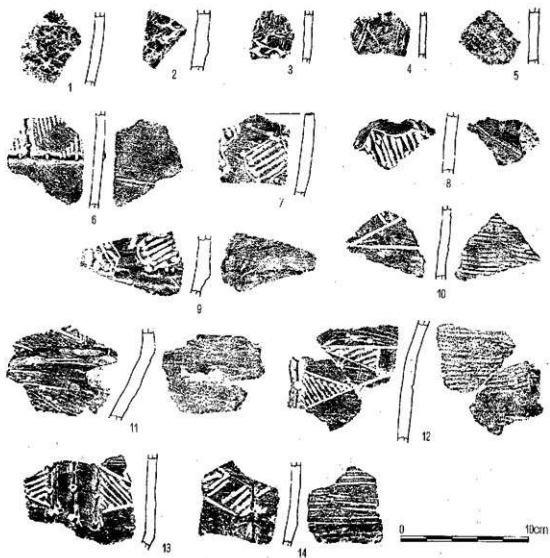
C b種 区画文の内に結節沈線が充填されるもの(11~17)。11は「段」部を有する胴部破片。12~14は細隆起線による縦位区画文が加えられた胴部破片であり、12・13の細隆起線には竹管状工具による円形刺突文が施されている。太沈線による三角形の幾何学的区画文の内には、押引状をなすルーズな結節沈線が充填される。16は横位にめぐらした隆帯により文様帯が区画されるもので、「段」部と同様の施文効果を生んでいる。17は円形刺突文が加えられた太沈線による縦位区画文を有している。暗茶褐色ないしくすんだ褐色を呈し、焼成はおおむねふつう。

D種(第191図18・19) 細隆起線によるやや曲線的な区画文の内に、結節沈線が充填されるものである。

18・19は同一個体と考えられる胴部破片。結節沈線によって充填される細隆起線区画の要所には、竹管状工具による斜方向からの刺突文が加えられている。くすんだ灰褐色を呈し、表面に斜方向の夤痕文をとどめている。器厚7~9mmをはかり、焼成はふつう。

第2類土器(第191図20) いわゆる「連続爪形文」により、波状ないし横位の文様が構成されるもの。図示した1片がすべてである。

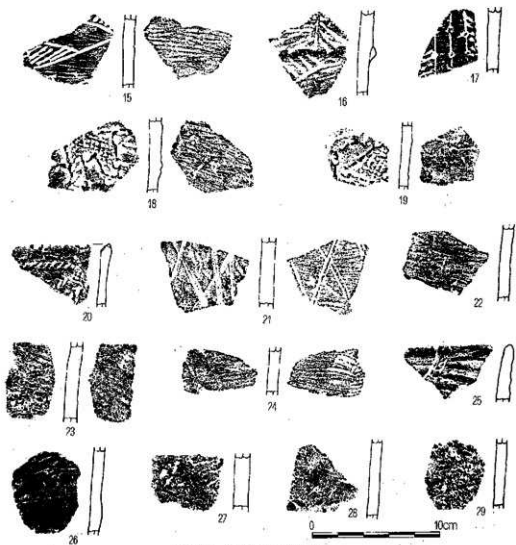
20は平縁の口縁部破片であり、「連続爪形文」を口縁上部には横位、その下段には波状にそれぞれめぐらしている。「内削げ」状をなす二唇部には、「連続爪形文」と同一の工具により綾形状の文様が加えられる。くすんだ褐色を呈し、胎土への植物繊維の混入は少ない。器厚7mm、焼成は良好とはいいがたく、器壁はやや脆弱である。



第190図 遺構外出土器(1)

土器観察表

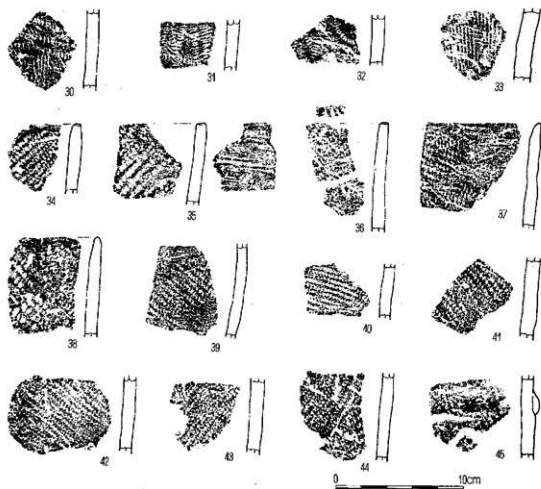
番号	発掘層	器形	部位	文様構成要素	断面観察 外置/内面	粘土	備考
1	要領	胴体	肩	横太極門文	ナテ	砂・石・黒	
2	E-2	"	"	"	"	砂・石・黒・灰	
3	E-2	"	"	"	"	"	
4	D-14	"	"	格子目状紋	"	砂・石・黒・全	
5	D-14	"	"	RL準的縄文	"	砂・石・全	
6	IX	"	"	高肥線・新比線・太比線	ナテ/角張・ナテ	砂・石・せんい (混)	
7	F-1	"	口縁	中環状線・太比線・斜横	ナテ	砂・石・せんい	
8	F-2	"	口縁	"	ナテ/角張	砂・石・全・せんい (少)	
9	F-1	"	"	太比線・横文	"	砂・石・全・せんい	
10	C-1	"	"	太比線	"	砂・石・全・せんい (少)	
11	F 0	"	"	太比線・斜筋沈線	網眼/角張	砂・石・白・せんい	
12	A-1	"	"	網眼蛇目・太比線・斜筋沈線	ナテ/角張	砂・石・白・せんい	
13	F-1	"	"	"	"	砂・石・白・せんい	
14	F-1	"	"	"	"	砂・石・白・せんい	



第191図 遺構外出土土器(2)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面状態 外面/内面	胎土	備考
15	F-0	胴体	胴	太沈線・細点沈線	横線/直線	砂・石・白・せんい	
16	D 4	"	"	"	角肌/ ナテ	砂・石・金・せんい	
17	D-1	"	"	"	ナテ	"	
18	F-0	"	"	斜線起筋・斜線沈線・斜突	ナテ/直線	砂・せんい	
19	F-0	"	"	"	"	砂・石・せんい	
20	C-4	"	口縁	濃線斜突文・斜筋	ナテ	砂・白・せんい(少)	
21	C 11	"	胴	斜字点状沈線	角肌→ナテ/角肌	砂・山・せんい(やや多)	
22	E-11	"	"	"	角肌/ 直線	砂・金・せんい	
23	胴体	"	"	"	"	砂(多)・せんい	
24	E-1	"	"	"	"	砂・石・金・せんい(少)	
25	E-13	"	口縁	"	ナテ	砂・金・せんい	
26	E 1	"	胴	"	直線	砂・石・金	
27	C-14	"	"	"	ナテ	砂・白・せんい(やや多)	
28	C-1	"	"	"	"	"	
29	D-1	"	"	"	"	砂・白・石・せんい	



第192区 遺構外出土土器(3)

土器観察表

番号	発掘区	層別	部位	文様構成要素	表面調整 外壁/内面	胎土	備考
30	E-2	障林	胴	障林環状文・糸文	ナテ	砂・白石・せんい	
31	E-2	〃	〃	ナテ→障林環状文	ナテ	砂・白・せんい(小)	
32	E-2	〃	〃	〃	〃	砂・せんい	
33	表層	〃	〃	障林及筋糸文	〃	砂・白・せんい(やや多)	
34	C-4	〃	口縁	1.R早期廻文・割目	〃	砂・石・せんい(多)	
35	E-2	〃	〃	〃	ノミ割	砂・白・せんい	
36	C-14	〃	〃	〃	ナテ	砂・金・せんい(多)	
37	F-0	〃	〃	R.L. 障 環 状 文	〃	砂・石・せんい(やや多)	
38	H-14	〃	〃	〃	〃	〃	
39	F-0	〃	胴	〃	〃	砂・金・せんい(少)	
40	C-2	〃	〃	〃	〃	砂・金・せんい	
41	D-12	〃	〃	〃	〃	砂・せんい(少)	
42	表層	〃	〃	〃	〃	砂・せんい	
43	C-14	〃	〃	1.R 平 筋 環 状 文	〃	砂・石・金・せんい(多)	
44	C-14	〃	〃	〃	〃	砂・金・せんい(多)	
45	B-14	〃	〃	R.L. 障 環 状 文	〃	砂・白・せんい(多)	

第3類土器(第191図21) 沈線文によって文様が構成されるものである。図示した1片がすべてである。

21は格子目状をなす浅い沈線文が内・外面に施される胴部破片。裏面には横方向の条痕文をとどめるもの、表面の条痕文はナデ調整により磨り消されている。明褐色を呈し、胎上への植物繊維の混入が顕著である。器厚は10~12mmをはかり、厚手のつくりである。

第4類土器(第191図22~24) 貝殻条痕文のみをとどめるもの。

22は表面のみ、23・24は裏面みに条痕文をとどめる胴部破片である。表裏両面に条痕文をとどめるものは皆無である。茶褐色あるいは明褐色を呈し、胎土に砂粒・金雲母・植物繊維などを含む。23は焼成不良、24は比較的硬くします。

第5類土器(第191図25~29) 無文ないし擦痕文のみをとどめるものを一括した。

25は円頭状をなす口縁部破片。26は器面に擦痕文をとどめている。色調は茶褐色を呈するものが多く、胎土に砂粒・石灰・白色不透明効子・植物繊維などを含む。焼成は、比較的良好にする。26を除き、他は概して不良である。器厚は平均8mmをはかる。

第6類土器(第192図30~33) 絡糸体圧痕文が施されるものである。ここでは文様施文の特徴から、燃糸文が施されるものも含めた。出土総数は絡糸体圧痕文が施されるもの6片、燃糸文が施されるもの1片とその出上はきわめて微量にとどまっている。表採された1片を除き、他はすべてE-2グリットより出上している。

30は絡糸体圧痕文とともに、同一原体による燃糸文が施された胴部破片。31は縦位・横位・32は血線的な絡糸体圧痕文がそれぞれ施文されている。33は原体Rの燃糸文が縦位に施されるもの。色調はくすんだ褐色などを呈し、器厚は10mm前後をはかる。裏面はいいない器面調整が行われ、平滑である。胎上への植物繊維の混入はそれほど顕著にはみられない。

第7類土器(第192図34~45) 縄文が施されるものを一括した。B・C-14グリット等集中した分布をみせていた。

34~38は口縁部破片である。34~36は角頭状、37・38は円頭状を呈し、前者は口唇部に棒状工具による押圧を施している。39~45は本種に伴う胴部破片であり、45には扁平な隆帯が横位にめぐらされている。34~36・43・44はLR単節縄文、37~42・45はRL単節縄文がそれぞれ施文される。暗茶褐色あるいは茶褐色を呈し、胎土に多量の植物繊維を含むものが多い。器厚は9~10mm。39・42が比較的硬くしめるものの、他は焼成の不良なものによって占められている。

第III群土器(第193図) 縄文時代前期の土器を一括した。第1類~第3類土器に分類される。

第1類土器(第193図46~53) 縄文時代前期初頭に位置づけられるものである。

薄手・無文を特徴とし、いわゆるオセンベ土器と称されている一群の土器。46~53はすべて胴部破片であり、器厚4~5mmと薄手のつくりである。灰褐色を呈するものが多く、胎土に砂粒および微量の植物繊維を含む。器面には斜方向を中心とする擦痕をとどめている。

第2類土器(第193、194図54~78) 縄文時代前期前半の土器である。

54は3箇一對の山形状をなす小突起がつけられた口縁部破片であり、口縁上部から胴部にか

て半截竹管による平行線文が施されている。平行線文は一部曲線化し、コンパス文状をなしている。55は櫛歯状工具による連続刺突文が施されるものであり、文様は三角形・菱形状を呈するものと考えられる。口縁は大きな波状をなし、一部に54と同様の小突起がつけられている。

56～78は縄文が施されるものである。5・57・75は円頭状をなす口縁部破片、他は胴部破片。異なる原体を用いて冚状縄文を描出するものが多いものの、中にはループ文的なものや菱形をなすものなども若干みとめられる。色調はくすんだ褐色・明茶褐色などを呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を含む。植物繊維の混入は認められない。内面に横方向を中心とするていねいな器面調整が行われるものが多い。焼成はおおむねふつうである。

第3類土器（第195図79～86） 縄文時代前期後半の土器である。

79～84は類い条線を地文として、3～4条を単位とする細い結節状浮線文が施されるものである。79～81は大きな波状を呈する口縁部破片。口縁に沿って3条の浮線文がめぐり、以下胴部にかけて同様の浮線文を垂下させている。色調は茶褐色。表面は研磨されており、平滑に仕上げられている。85・86は太い浮線文が貼り付けられるもの。85は大きな波状をなす口縁部破片であり、半截竹管の穴側によって爪形状の押印文を施している。内面は79～84同様、研磨が加えられている。

第IV群土器（第195図87～第196図101）

縄文時代中期の土器を一括した。

87・88は半截竹管による集合沈線文が施されるもの、89・90は平行沈線文が施されるものである。くすんだ褐色などを呈し、胎土に砂粒・石英・黒雲母を含む。焼成は良好とはいえない。

91は口縁に沿って隆帯がめぐるものであり、胴部には多条の沈線文を横位にめぐらしている。92～95は縄文を地文として、平行沈線文や低い隆帯が施されている。94は結節縄文を地文とするものである。

96は角押文を特徴とする胴部破片であり、同心円状・山形状の隆帯が加えられている。97・99は同一個体の口縁部破片。隆帯と沈線文により文様が構成され、99は地文に縄文をとどめている。100・101は同種の胴部破片である。

第V群土器（第197図102～117）

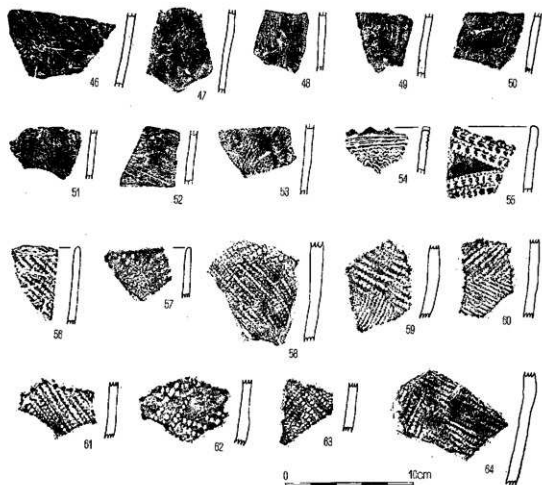
縄文時代後期の土器を一括した。

第1類土器（102～110） 縄文時代後期初頭の土器である。

102は口縁部破片。他は胴部破片。二本1組の平行する沈線により曲線的な文様が描かれるものであり、102～107は充填縄文、108は磨消縄文がそれぞれ施されている。比較的ていねいな器面調整が行われるものが多く、研磨痕をとどめるものが一般的である。器厚5～7ほどをはかり、全体に薄手のつくりである。

第2類土器（111～117） 縄文時代後期前半の土器である。

111・112は深鉢形土器の口縁部破片。111は一部で波状をなし、逆「く」の字状に内傾する口縁

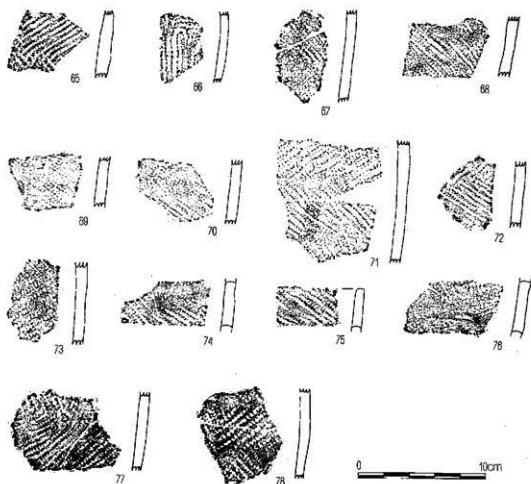


第193図 遺構外出土土器(4)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調査 外形/内面	胎土	備考
46	R-1	深鉢	胴		ナテ (指痕)	砂-せみい(黒)	
47	C-14	?	?		?	?	
48	C-14	?	?		?	?	
49	F-0	?	?		?	?	
50	F-0	?	?		?	?	
51	C-14	?	?		?	?	
52	F	?	?		?	?	
53	E-1	?	?		?	?	
54	E-2	?	口縁	平行波線文・コンパス文	ナテ	砂-白	
55	E-1	?	?	連続扇状文	?	?	
56	F-3	?	?	L・R扇状文	?	?	
57	?	?	?		?	砂-白	
58	D-2	?	胴	L・R・R L扇状文	ナテ	?	
59	E-1	?	?	?	?	?	
60	R-0	?	?	L・R扇状文	?	?	
61	D-2	?	?	?	?	?	
62	C-14	?	?	?	?	?	
63	?	?	?	?	?	?	
64	C-3	?	?	?	?	?	





第194号 遺構外出土土器(5)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素		土	備考
				線型要素	外区/内区		
65		酒杯	口	LR・RL単線横文	ナナ	砂・白	
66	F-1	〃	〃	〃	〃	〃	
67	E-1	〃	〃	〃	〃	〃	
68		〃	〃	RL単線横文	〃	〃	
69	D-2	〃	〃	LR・RL単線横文	〃	〃	
70		〃	〃	〃	〃	〃	
71	D-E-1	〃	〃	〃	〃	〃	
72	C-3	〃	〃	〃	〃	〃	
73	D-1	〃	〃	〃	〃	〃	
74	D-1	〃	〃	〃	〃	〃	
75	D	〃	口縁	RL単線横文	〃	〃	
76	E-2	〃	胴	LR単線横文	〃	〃	
77	D-2	〃	〃	LR・RL単線横文	〃	〃	
78	D-1	〃	〃	〃	〃	〃	

上部の波頂下には「V」字形刺突文が施されている。113は曲線的な沈線文によって文様が構成される胸部破片。114・115は壺形土器の頸部破片であり、くびれ部を中心として1～2条の細い隆線をめぐらしている。114の胸部には多条の沈線文によって弧状の文様が描かれ、部分的に縄文が充填されている。また、115の口頸部には「V」字状の隆線が貼り付けられているものと考えられる。

116・117は同心円状ないし曲線的に施された沈線文間に磨消縄文が加えられるものである。縄文は原体LR。外面暗褐色、内面明褐色を呈し、器面は研磨されている。器厚は4～5mmと薄手。

(百瀬忠幸、三村 洋)

## (2) 石器 (第198～202図)

縄文時代に属する石器は、石鏃41、石匙1、スクレイパー31、砥石1、打製石斧6、特殊磨石6、磨石1、凹石1の計86が得られている。これらの石器は、耕作土下のII層属から発見され、その分布はA～Fの1～4、11～14区に集中し、5～9区からの出土は少なかった。つまり調査区域の東端と西端とに分かれていた。

石鏃 基部への挟り込みの状態から、挟りのない平基のもの1～5、浅い半月状の決らのもの6～24、深いU字状の決らのもの25～32、凸基状を呈するもの33～37の4種類がある。側縁形は直線状をなすもの(7、18、25、26、30、31)と、外弯するもの(12、16、17、19、26)、突出部のあるもの(8)があり、外弯するものが多い。作りは丁寧なものが多いが、原石面を残すもの1、部厚いもの5、11.3大きな剝離痕をそのまま残すもの15、20などはやや粗雑な作りである。完形品27、欠損品13で、破損率33%である。

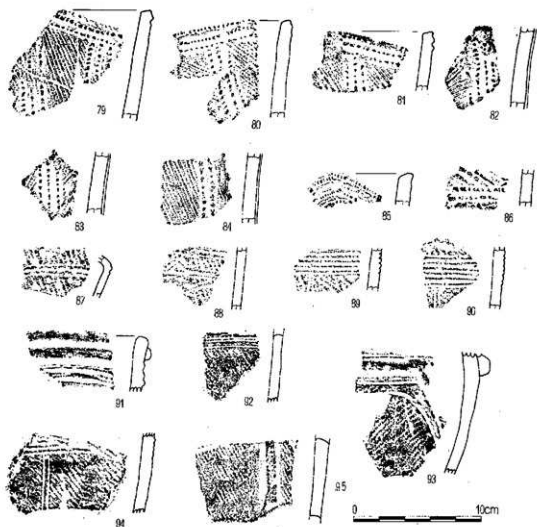
石匙 1点のみである。42は壟型で、縁辺に細かな調整を加えた精巧なものである。刃部は直線状をなす。

スクレイパー 形状は統一せず、不揃いである。ほとんどのものが剝片を余り加工することもなくそのまま使用している。このために形態的な均一性がないのであろう。やや縦長の剝片を使用したもの、横長のもの、石核を使用したものなどがあり、第1次剝離された鋭い縁辺をそのまま使用している。刃部の形状をみると、直線状を呈するもの(44～47、57、68、69)、外弯するもの(48～50、64、71)、内弯するもの(75)があり、これらは10mm以上の使用部分がある。10mm以下の使用部分を呈するものには52、54、68がある。43は、大きな剝片の縁辺に細かな2次加工を施し、刃部を作出している。横型の石匙かとも考えられるが、柄の作出がないためスクレイパーに入れておいた。

砥石 6は全ての面に磨ぎをもつ。よく使いこまれている。弥生以降のものであろうか。

打製石斧 77～79～81は短円形を呈し、78は小形で、82は肩にくびれをもつ。ともに作りは粗雑で、表裏面に第1次剝離面を大きく残し、細部加工は余りなされていない。80は刃部に磨痕が観察される。D、Eグリッドの1、2区を中心に出土している。

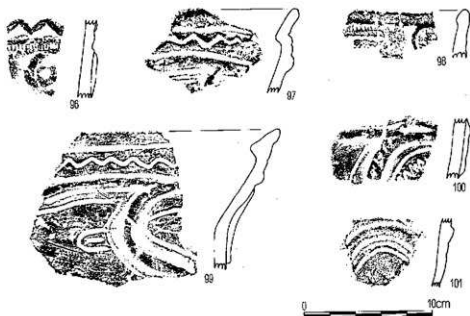
特殊磨石 83～88の6点とも断面楕円形の礫を使用し、その長軸部の一面に研磨面を有する。完形品は、83、87、88の3点で、磨面をみると、83は幅1.9～2.2、長さ15cmと細長いのに対し、87は幅4.8、長さ11.0、88は幅3.8、長さ11.6cmと幅広で、長さはやや短かい。こうした機能面の



第195圖 這構外出土土器(6)

土器觀察表

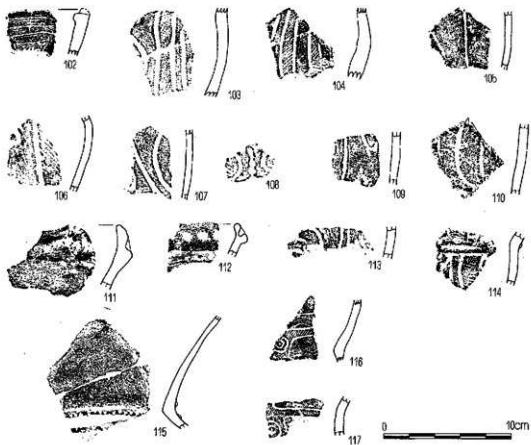
番号	発掘文	器形	部位	文様構成要素	断面観察 外側/内側	胎土	備考
79	R-F-1	碗鉢	口縁	点状・約50度作線文	ノミガキ	砂	
80	E-0	〃	〃	〃	ノミガキ	砂・内	
81	E-0	〃	〃	〃	ノミガキ	〃	
82	F-1	〃	胴	〃	ノミガキ	〃	
83	F-1	〃	〃	〃	〃	〃	
84	E-1	〃	〃	〃	〃	〃	
85	E-2	〃	口縁	浮線文	〃	砂	
86	F-2	〃	胴	〃	ノミガキ	砂・白	
87	F-9	〃	〃	集合状線	ノミガキ	砂・石・白	
88	E-0	〃	〃	〃	〃	砂・石・白・黒	
89	E-0	〃	〃	平行波線	〃	〃	
90	F-0	〃	〃	〃	〃	〃	
91	E-2	〃	口縁	隆起・波線	〃	砂・白	
92	〃	〃	胴	〃	〃	〃	
93	F-0	〃	〃	地隠し・平行波線	〃	砂・白	
94	E-11	〃	〃	上ノ草部線文・隆起	〃	砂	
95	E-12	〃	〃	上ノ草部線文・隆起	〃	砂・白	



第196圖 遺構外出土土器(7)

土器觀察表

番号	発見区	器形	部位	文様構成要素		胎土	備考
				文様構成要素	胎土		
96	D-2	縁飾	隅	角状文、波帯	十字	砂・石・土	
97	C-14	■	1144	波帯、縁飾	■	砂	
98	E-13	■	■	三角状文	■	■	
99	C-14	■	■	波帯、縁飾	■	■	
100	D-14	■	■	■	■	■	
101	E-11	■	■	■	■	■	



第197区 遺構外出土土器(8)

土器観察表

番号	発掘区	種類	部位	文様構成要素	器底/口縁 外面/内面	胎土	備考
102	E-15	浮鉢	口縁	波線・L, R半周文	2ガキ/ナア	砂	
103	E-2	〆	柄	R L半周文→波線	2ガキ	砂・白	
104	〆	〆	〆	〆	1ガキ	〆	
105	D-3	〆	〆	波線・L, R半周文	2ガキ/ナア	砂	
106	C-2	〆	〆	波線→L, R半周文	1ガキ	砂・白	
107	E-3	〆	〆	〆	2ガキ/ナア	〆	
108	D-2	〆	〆	斜文・L, R半周文→波線	〆	〆	
109	C-10	〆	〆	波線	1ガキ	〆	
110	F-2	〆	〆	〆	2ガキ	〆	
111	E-3	〆	口縁	斜文	ナア	砂	
112	E-2	〆	〆	〆	2ガキ	砂・白	
113	F-0	〆	底	波線	ナア	〆	
114	D-1	〆	底	斜文・波線・横文	2ガキ	〆	
115	E-12	〆	〆	波線	〆	〆	
116	E-15	〆	〆	波線横文	〆	砂	
117	E-13	〆	〆	〆	〆	〆	

幅、長さは礫の形態に左右されるものであろう。ともに磨面はザラザラしている。この磨面と自然面との角に打痕が残されることがあり(8.4)、また両端に打痕をもつもの(85~88)もある。88は凹孔があり、凹石との兼用品。

凹石 89は1面に磨削による小さな4孔がある。他の面は磨石として使用されており、全面にわたって研磨が認められる。

磨石 断面円形で、円筒状の磨石である。

(小林康男)

### (3) 土偶 (第203図)

神子柴形石斧と同様、50年ほど前に、発掘地区北側の現在水田となっている台地を開田する際に出土した土偶である。小松定男氏所蔵品を御好意により実測させて頂いた。現長10.8cmを計り、頭部、右腕及び右足の一部を欠損するが、ほぼ体形の窺える優品である。胴は、厚い長方形の粘土板で作られ、それに粘土塊を貼りつけることによって手足が形作られる。本例は中空とはならないが、肩が張り、手を折り曲げ、手足が短く丸くまとめられるのは、東北地方晩期の遮光器土偶に近似した形態だといえる。なお、肩にはし字状の隆帯が貼付けられ、肩を強調し、乳房の表現がみられないのも興味深い。体部には、文様は一切見られず、全体に丁寧なミガキが施される。また胎土も精選されており、ごくわずかに砂粒を含むのみである。色調は黒褐色を呈し、表面はミガキのため、鈍い光沢を帯びる。

このようなタイプの土偶は、他にあまり類例をみないが、板状土偶と遮光器土偶の特徴を兼ね備えており、縄文晩期に属するものと考えられる。なお、発掘調査では、晩期の土器の出土をみなかったが、土偶と一緒に石剣、及び多量の土器が出土したということであり(未見)、今後これらの土器を検討してみる必要があろう。

(前田清彦)

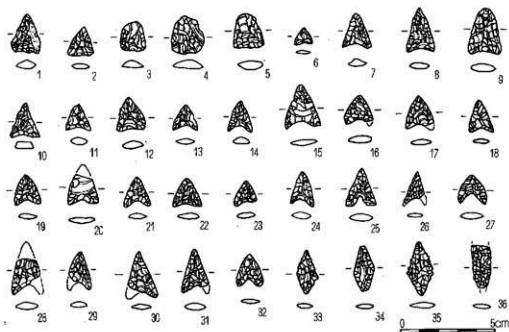
## 3) 弥生時代

### (1) 土器 (第204図)

調査区の北西側において散在して出土した弥生土器は、表土削平時に発見された完形の壺以外、全て破片資料であり、量的にも少ない。器種は、壺1点と、碗とも思われる底部破片1点の他は、壺のみである。神村透氏の教示によれば、いずれも、後期前半・座光寺原式に比定される。

1は、表土削平時に検出されたほぼ完形を呈する壺であり、口径25.5cm、器高28.6cmを計る。頸部には一段の栴檀波文が、断続して逆時計回りに施文されている。そして内面は刷毛整形が行われ、口唇には細かな刻みが施されており、外面の口縁下から肩上半にかけては黒色炭に物の付着が認められた。神村透氏の教示によれば、このように口頸部に2段の文様帯が集中するのは、天竜川系の弥生土器の特徴であり、また、口唇の刻目が後期にまで残存するのは、下伊那よりも、上伊那〜諏訪地方的な様相を示すといえる。色調は内外匠とも暗褐色を呈し、胎土には長石、砂粒をわずかに含み、焼成は普通で、底部に木葉痕を残す土器である。

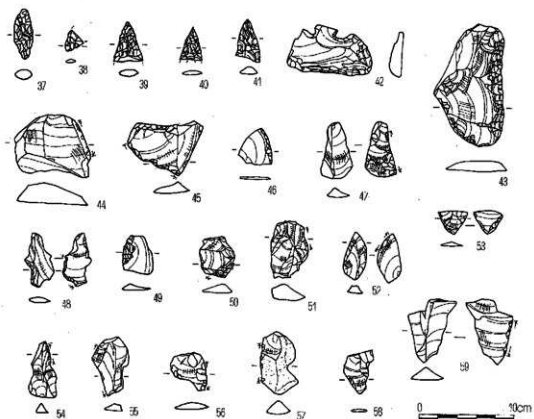
2は、壺の頸部〜胴部にかけてであり、竇状文下には、波状文、もしくは竇の羽状文のくずれ



第198圖 遺構外出土石器(1)

石器觀察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
1	F-0	石 鏃	花崗石	2.1	1.6	0.6	1.1	
2	C-2	石 鏃	花崗石	1.5	1.4	0.3	0.8	
3	B-3	石 鏃	花崗石	1.6	1.3	0.4	0.7	
4	E-3	石 鏃	花崗石	2.0	1.7	0.5	1.5	
5	D-6	石 鏃	花崗石	1.8	1.6	0.5	1.5	
6	E-1	石 鏃	花崗石	0.9	1.0	0.2	0.2	
7	A-3	石 鏃	花崗石	1.8	1.6	0.4	0.8	
8	D-12	石 鏃	花崗石	2.3	1.8	0.4	1.0	
9	A-3	石 鏃	花崗石	2.5	1.8	0.5	1.3	
10	C-0	石 鏃	花崗石	1.8	1.6	0.4	0.9	
11	F-2	石 鏃	花崗石	1.5	1.3	0.4	0.8	
12	D-1	石 鏃	花崗石	1.8	1.5	0.5	0.9	
13	F-6	石 鏃	花崗石	1.3	1.3	0.3	0.5	
14	B-4	石 鏃	花崗石	1.6	1.3	0.3	0.4	
15	E-12	石 鏃	花崗石	2.3	1.9	0.3	1.3	
16	D-14	石 鏃	花崗石	1.5	1.5	0.4	0.8	
17	D-1	石 鏃	花崗石	1.8	1.4	0.3	0.5	
18	D-12	石 鏃	花崗石	1.7	1.4	0.3	0.6	
19	D-1	石 鏃	花崗石	1.7	1.4	0.3	0.3	
20	I2-9	石 鏃	花崗石	2.2	1.6	0.3	0.9	
21	B-3	石 鏃	花崗石	1.6	1.5	0.3	0.5	
22	D-1	石 鏃	花崗石	1.5	1.6	0.3	0.4	
23	D-2	石 鏃	花崗石	1.3	1.2	0.3	0.4	
24	E-1	石 鏃	花崗石	1.9	1.3	0.4	0.5	
25	F-2	石 鏃	花崗石	1.9	1.6	0.4	0.8	
26	F-0	石 鏃	花崗石	1.8	(1.4)	0.2	0.3	
27	C-13	石 鏃	花崗石	1.5	1.5	0.3	0.5	
28	D-2	石 鏃	花崗石	(2.9)	(1.6)	0.4	1.0	
29		石 鏃	花崗石	2.0	(1.3)	0.3	0.7	
30	D-2	石 鏃	花崗石	2.5	1.4	0.3	0.8	
31	D-12	石 鏃	花崗石	2.3	(1.5)	0.4	0.8	
32	D-4	石 鏃	花崗石	1.7	1.4	0.2	0.5	
33	D-11	石 鏃	花崗石	2.3	1.1	0.3	0.8	
34	D-12	石 鏃	花崗石	2.4	1.1	0.3	0.7	
35		石 鏃	花崗石	2.8	1.4	0.3	0.8	
36	C-4	石 鏃	花崗石	2.2	1.0	0.2	0.9	

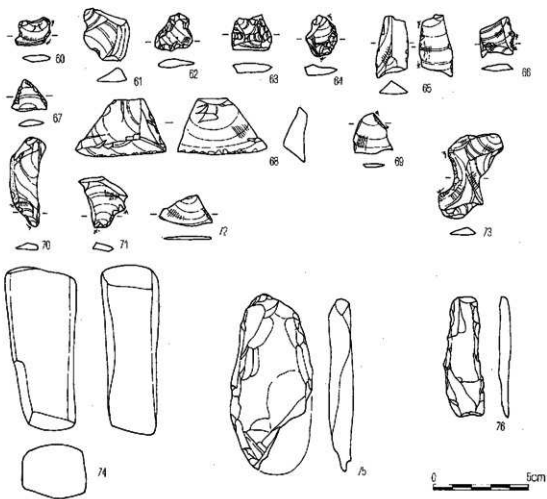


第199図 遺構外出土石器(2)

石器観察表

番号	発掘状況	種別	石質	長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
37	B-8	石 鏃	玉 曜 石	2.6	1.1	0.5	1.2	
38	C 10	※	※	1.2	0.9	0.2	0.2	
39	D-13	※	※	2.1	1.5	0.4	1.0	
40	C-7	※	※	1.7	1.1	0.2	0.6	
41	F-2	※	※	2.3	1.3	0.4	0.9	
42		石 鏃	チ ャ ー ト	2.4	4.4	0.7	8.3	
43	C-14	スタレインバ	玉 曜 石	6.4	3.2	0.6	24.3	
44	F-1	※	※	3.3	3.7	1.1	14.0	
45	C-2	※	※	2.9	3.6	0.6	10.2	
46	F-1	※	※	2.0	1.8	0.1	2.2	
47	E-12	※	※	2.9	1.8	0.6	2.2	
48	B 6	※	※	2.8	1.3	0.3	1.8	
49	D-13	※	※	2.0	1.6	0.3	1.1	
50	C-3	※	※	2.1	1.8	0.4	2.0	
51	F-2	※	※	3.0	1.9	0.8	6.5	
52	E 4	※	※	2.6	1.2	0.4	2.1	
53	F-12	※	※	1.2	1.5	0.2	1.3	
54	E-2	※	※	3.3	1.5	0.6	3.3	
55	C-14	※	※	3.1	1.9	0.4	3.0	
56	B-3	※	※	2.9	1.9	0.3	2.3	
57	F-1	※	※	3.3	2.0	0.7	6.2	
58	F-14	※	※	2.3	1.4	0.2	1.9	
59	F-12	※	※	3.4	2.1	0.5	4.0	

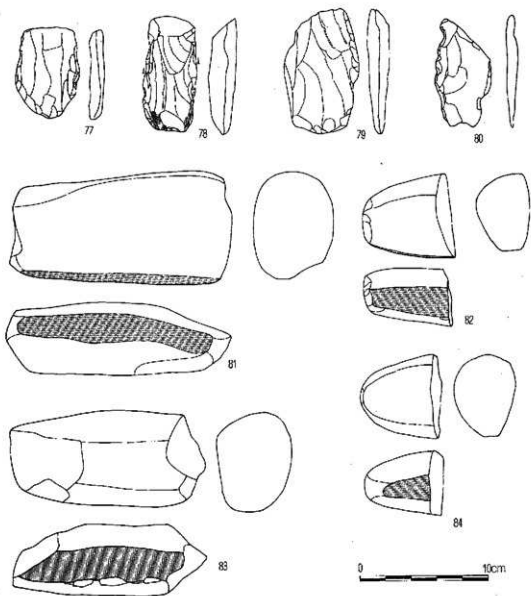




第200圖 遺構外出土石器(3)

石器観察表

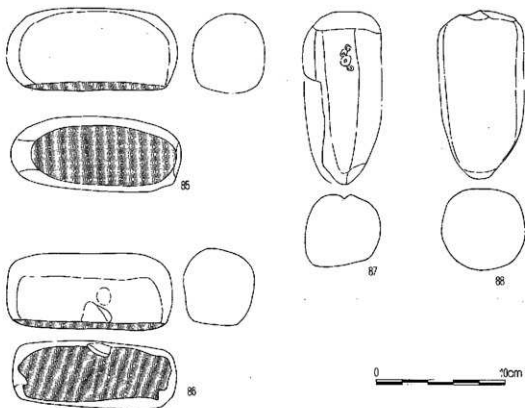
番号	発掘区	種別	石質	高さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
60	E-1	スタレイバー	黒曜石	1.4	1.6	0.3	2.0	
61	F-0	※	※	2.8	2.3	0.7	5.3	
62	H-4	※	※	2.0	2.0	0.4	2.1	
63	E-2	※	※	1.9	2.1	0.5	3.1	
64	E-3	※	※	2.2	1.6	0.6	2.0	
65	E-1	※	※	3.3	1.5	0.7	5.0	
66	F-15	※	※	2.1	1.8	0.3	1.1	
67	B-8	※	※	1.7	1.9	0.3	1.5	
68	F-0	※	※	3.0	4.7	1.1	13.0	
69	F-1	※	※	2.1	1.8	0.2	2.8	
70	C-12	※	※	4.7	1.5	0.3	4.8	
71	F-0	※	※	2.6	2.0	0.3	4.0	
72	E-0	※	※	1.6	2.7	0.2	1.0	
73	F-0	※	※	4.5	2.9	0.4	5.2	
74	D-2	礎石	網走砂岩	8.5	3.7	2.8	120.0	
75	D-1	打撃石	頁岩	9.5	4.3	1.3	48.0	
76	E-1	※	※	6.3	1.9	0.6	8.0	



第201圖 這構外出土石器(4)

石器觀察表

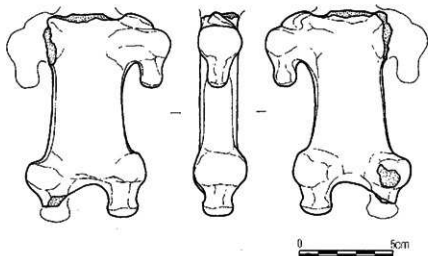
番号	発掘区	種別	石質	長さ (mm)	口 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特徴
77	D-1	打製石片	頁岩	7.0	5.0	1.2	44	
78	E-2	"	"	9.1	4.1	2.1	87	
79	D-13	"	"	8.8	3.8	1.7	89	
80	E-1	"	"	9.0	4.4	0.8	76	
81	C-4	特殊磨石	安山岩	8.4	17.0	6.3	146	
82	E-11	"	中粒砂岩	5.7	0.7	4.2	276	
83	C-4	"	"	7.6	15.3	3.9	130	
84	D-2	"	細粒砂岩	6.4	5.9	4.8	231	



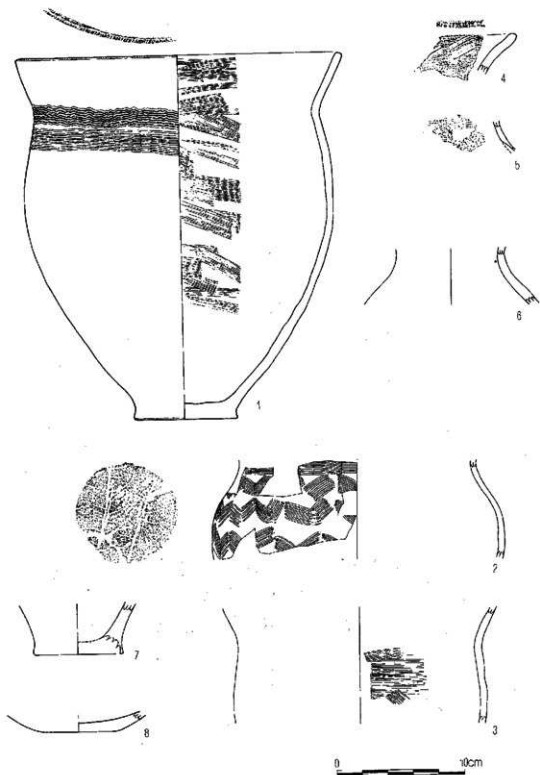
第202図 遺構外出土石器(5)

石器觀察表

番号	発見区	種類	材質	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴
85	D-12	磨石	中粒砂岩	6.6	12.4	5.6	810	
86	E-12	磨石	粗粒砂岩	6.3	13.0	5.6	640	
87	D-1	石	安山岩	13.7	6.1	5.7	530	
88	C-10	磨石	砂岩	13.2	6.6	6.4	590	



第203図 土偶



第204图 弥生土器

とも観察される文様が、櫛描の短線文によって描かれる。胴部最大径23cmを計り、色調は内外面とも暗褐色、長石、石英、砂粒を含み、焼成は良好。外面の肩部には、炭化物の付着が観察される。また3も2と同じく臺で口縁、胴下半を欠損する。器面は内外とも荒れが激しく、内面に、わずかに刷毛整形の痕跡が残ったのみであった。色調は淡黄褐色、胎土には長石、砂粒を含み、焼成はやや悪である。

4は、今回の調査で出土した、唯一の壺形土器であり、頸部のみ遺存するが、文様はみられない。内外面ともナデによって仕上げられ、色調は暗褐色、胎土には長石、石英、砂粒を含み、焼成は良好である。

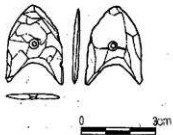
5、6は、いずれも壺の破片の拓影で、5は口縁部、6は頸部に相当する。5の口縁下には、櫛描の短線文が左下がりに施文され、口唇には刻みが施される。また6の頸部は、櫛描簾杖文の下部に波長の長い波状文が施される。

7、8は、底部であり、7は内外面にヘラミガ施され、臺、もしくは壺の底部と考えられる。8は、7と同様、内外面にヘラミガキが施され、枳とも考えられる底部破片であるが、弥生後期前期において、このような底部形態を有する器種は、あまり存在せず、土師器の可能性もある。

(前田清彦)

## (2) 石器 (第205区)

弥生時代に属する石器として、磨製石鏃が1点出土している。調査区北西端、B-2グリッドからの出土であり、弥生土器の分布と重なる。長さ3.1cm、幅2.3cm、厚さ0.2cmを計り、中央には一孔の貫通孔が、両側から穿たれる。珪質粘板岩製で、一部剝利面をそのまま残す箇所もみられるが既ね全体に研磨が施され、研磨方向は、刃部に直交する方向であることが多い。



(前田清彦)

第205図 磨製石鏃

## 8 調査の成果と課題

### 1) 遺跡の地形環境

旧石器時代の遺跡は、その多くが平野や高原といった広大な平拓域に立地する傾向があり、起伏の大きな谷地形などに立地するものは極めて稀である。塩尻市内においても現在までに確認されている旧石器時代の遺跡は6ヶ所あるが、青木沢遺跡を除くとすべて盆地中央部の台地上にあり前者の立地環境と類似したものが見い出せる。しかし出川の形成した深い開析谷の奥に位置し、山々に挟まれた狭小な台地上に立地する青木沢遺跡のような類例はあまり見つからず、特異な立地環境であるといえる。換言すれば旧石器時代の生活領域としては、あまり適していない場所と

もいえよう。しかし今回の調査により、青木沢遺跡の旧石器文化は貴重な資料を数多く提供している。立地の特異性、あるいは複雑な地形環境がどのようにこの不適地の遺跡をささえていったのか。本稿ではこのような問題点を踏まえ、遺跡と地形の形成プロセスについて若干、検討をしてみることにする。

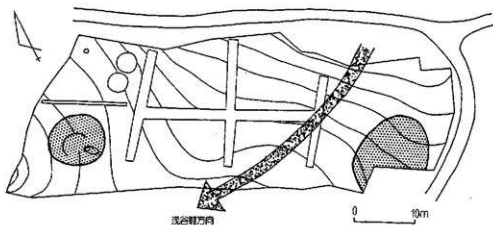
発掘調査区の地形を概観すると、中央付近に斜面方向へ延びる舌状の微高地部がある。Cトレンチの北側あたりから徐々に高くなり、次第に高低差をもちながら南側の調査区外へと続いている。この微高地を境として調査区は2つの浅谷状地形に分けられ、東側は緩い低下を維持しながら道まで続き、また西側はより大きな角度で落ち込みをみせている。この地形は東側に流下する松井沢と西側に流下する小河川によって支配されており、両河川がそれぞれ現在より内寄りを通れた時期があったことを示唆している。もちろん遺跡の立地するテラス状の台地の基盤を堆積したのは松井沢のほうであったことは上方に延びる谷が松井沢側へ優勢に続いていることで容易に判断される。西側的小河川は松井沢に比して水量が小さいので、遺跡全体に影響を与えたことはほとんどないと思われるが、勾配が急な分だけ浸食量が大きく、出水時の突発的な影響は遺跡、とりわけ西側にかんがりの影響を及ぼしていたと推察される。

これらの河川による地形形成は遺跡地の層序断面にも明瞭に表わされている。前項ですでに触れたように、青木沢遺跡には地表から珉茶褐色土（表土）、黒褐色土、暗褐色土、シルト質ローム、砂質ローム、粘土質ローム、ローム質含礫砂土という層序がみられ、遺物は旧石器、縄文、弥生とすべて第II層の黒褐色土に集約されており、第I層および第III層には極く僅かに含まれているのみである。第IV層以下の所謂ローム層中にはトレンチをかなり深く入れ様子をみたが、残念ながら遺物の存在は認められなかった。

ローム層はそれが運搬・堆積された時代の著しい環境の変化をよく表わしており、比較的静穏な堆積環境にあったと思われるVI層堆積期を除けばすべて河川堆積物として捉えることができ、なかでも礫の混入が特に多いIV層・VII層の時期は明らかに河道が支配していた環境が推察される。礫はそのほとんどが安山岩であり、稀に第三系の砂岩がみられる。

黒褐色土は礫が僅かに介在する壤土であり、一転して植生の盛んな比較的静穏な深域になったことを示唆している。しかも層序断面でみられるようになり長い期間、堆積を繰り返していたものである。しかし木層最上部には径60cmを超える巨円礫が密集しており、再び出水や土石流が何度か起こっている。暗褐色土はローム堆積環境から黒褐色土の静穏な時期への移行期に形成された層であろう。

次にこれらの土層の堆積状況を水平方向に追ってみる。遺物包含層である第II層の層厚の増減が最も注目されよう。第II層は中央の微高地付近では層厚を著しく減少させほとんど存在していない。これに対し河川の浅谷状窪地においては、その窪みを埋積すべく厚さを有する。ここで注意したいことは第II層中には砂質の部分ほとんどなく水の影響を被った層ではないということである。従ってこのような土壌が埋積上という性格を有するのはどのような時であろうか。しかもさらに理解し難いのは浅谷の底付近ほど第II層が薄く、微高地から降りかけた斜面上のほうがむしろ層厚になることである。このような一見、相矛盾する事実は堆積の単純なプロセスのみで



第206図 旧石器出土範囲（アミ部）

は形成されず、堆積後の河川の浸食や氾濫、あるいは地入りや口崩れ、さらには植生などが基因する地形改変が関係する場合が多く、それらを十分に考慮する必要がある。青木沢遺跡の場合、まず考えられることは河川の氾濫に伴ない、それまで堆積を続けてきた黒褐色土が削平され流されてしまったことである。現在のローム面の地形が当時も同じであった確証はないが、もし仮りに等高線にみられる地形が当時もある程度残されているとすると、ローム面上に均一で堆積した黒褐色土はまず微高地部が削平される。また浅谷底部も水が引いた際の小流の河道となるはずであるから浸食をまぬがれない。この考えによると黒褐色土の層厚の変化はある程度説明がつく。

以上の推察をもとに青木沢遺跡の地形形成をまとめると次のようになる。IV層堆積時、もしくはそれ以後に両河川の活動は盛んになり、遺跡の内側、37ちかなり中央付近にまで河道が接近してきた。その結果、浅谷地形にみられる2つの窪地を形成した。その後、一転して比較的静穏な時期を迎え、III層からII層に及ぶ層厚な黒褐色壤土の堆積を進めたが、II期堆積の末期には再び河川活動が旺盛になり、遺跡地へおびただしい巨礫を搬入させるような大規模な氾濫を繰り返し、また同時に浸食作用を進めることにより黒褐色土に複雑な起伏地形を形成したのである。現在はその上に均一厚の表土を被覆し、起伏を覆い隠している。

旧石器時代遺物の出土密集地域は第206図のように示されるが、微地形的にみると浅谷地形を挟んで両側に延びる微高地の、共に西斜面上に位置する。当時の松井沢がこの浅谷を支配していたのかどうかは判明しないが、仮にそうだとすると明らかに生活範囲が2分割されることになる。また前述の推測がもし正しいとすれば微高地上にも旧石器の範囲が展開する可能性も多いにある。次の項で述べる出土遺物からの検証も踏まえたうえで解明を図っていきたい。

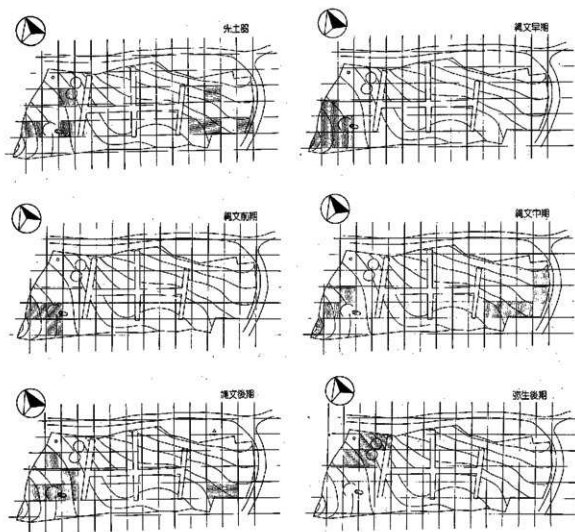
（鳥羽嘉彦）

## 2) 遺跡立地の変遷（第207図）

今回の調査によって得られた資料は決して多いものではなかったけれど、先土器時代から弥生

時代まで長時間にわたる遺物が出土した。これらの冬時期ごとの資料の分布状況を図化したものが第207図である。以下、これに基づいて、時期ごとの分布の特長をみてみたい。

先土器時代、ナイフ形石器を主体とする茂呂系文化と神子栄系文化との遺物が出土しており、両者は、立地的には大差のない分布状況を示している。すなわち、調査区の両端地区に分布の中心をもち、混在して出土している。茂呂系文化期の遺物の広がりは比較的小範囲と考えられるが、神子栄系文化の遺物は、事前に採集された遺物の散布状況を考慮に入れば、東側を中心として、南北に長い分布を示しているともいえそうである。また、中央道長野線調査区域内の尖頭器の在り方をも考慮して、先土器時代の在り方を再検討する必要がある。



第207図 遺物出土変遷図



縄文時代早期 押型文、条痕文期の遺物が得られている。この時期の遺物の分布は西側の調査区に集中しており、先土器時代の分布範囲からはかなり小範囲となっている。押型文は高山寺系かと思われる巨大な椀口文で、条痕文系の二器は鶴が島台式、柏畑式が得られている。今回の調査区の中では西側斜面の最も低地にある。今年度調査された堂の前、権沢刃遺跡でもこの時期の遺物が同様の低地域の斜面で集中的に発見されており、今後、こうした比較的不安定な地形への立地は注目されるべきであろう。

縄文時代前期 早期より、より一層小範囲に遺物の散布に限られている。散布地域は早期の在り方を継承しており、地域的にはほとんど変化はない。いわゆるオセンベ土器、黒浜式、存尾式諸磯C・C以降が出土しており、前期後半期の極盛期ともいわれる諸磯A・B期の遺物がみられないことは特徴としてあげられる。この時期の低斜面への立地問題は、すでに古くから指摘されていることであり、本遺跡もこれを再確認したことになった。

縄文時代中期 中期初頭に属する梨久保、九兵衛尾根、猪沢、新道が出土し、中葉、後葉の遺物は全く認められない。遺跡の拡散するといわれ、松本平の遺跡の半数近くが中期中、後葉によって占められていることを考えると、その片鱗さえみられないことはこの遺跡の大きな特徴といえそうである。遺物の分布は、東、西両地域に分かれ、小舌状台地の両縁辺に立地するといえる。南北両地域が未調査のため、中期集落の典型といわれる環状に散布地が巡っているのかははっきりしない。いずれにしても、早・前期の極部的展開が、舌状台地全体を舞台とするものに拡大したことはいえよう。ただし、遺物の僅少性、住居等の遺構の未発見は、この時期に果して住居地としてこの遺跡が営まれていたかを疑問にさせる。山間地の小舌状台地上で少量の遺物を有し、明確な住居を持たない、こうした遺跡は、いわゆるキャンプ地ないし生業活動地域としての可能性が強いものといえるだろう。

縄文時代後期、後葉初頭の弥生寺、掘ノ内前期の遺物が少量採集されている。出土地域は、中期前半期に類似する。面的拡がりはむしろ拡大したといえるかもしれない。

弥生時代後期 座光寺原式の二器が出土し、西端地区の小範囲に分布する。先土器から縄文時代で西側に立地する場合、最も低位のE・F～1・2区で出土したのに対し、弥生時代に入ってから立地は微地形的にはやや高位のB・C 2～4区に所在している。わずかな移動があったのかもしれない。狭小な小間地域に弥生時代の遺跡が残される例は、東山代官山・太子山などがあげられ、山尻から流れ出る小流が山間を出るところ、すなわち谷口や山麓縁に沿った湧水ないし扇頂付近に主として所在するといわれている。当遺跡での在り方も、この好例といえよう。

さて今回の青木沢遺跡の調査によって得られた遺物群を概観すると、時代・時期の変換期にあたる時の遺物が残されていることに気づく。すなわち、先土器終末期、早期終末期、前期末～中期初頭、後期初頭、そして弥生時代後期である。こうした時代の結節点を中心としてわずかな遺物を出土する遺跡の在り方は、もっと注意されてよい。

(小林康男)

### 3) 土器

第I群土器は、縄文時代早期前半、押型文系土器である。沈線文および縄文の施されるものについては不明な点を残すが、巨大な楕円押型文が施文されるものは、押型文系土器の中でもその終末に位置づけられている高山寺式に、あるいはそれに併行する土器に比定されるものと考えられる。

第II群土器は、縄文時代早期後半～末葉の土器であり、時間的に一定の幅をもたせている。第1類土器は早期後半、貝殻条痕文系土器であり、ほぼ鶴が島台式に相当する。ただし、第190図6は先行する野島式に含まれるものかもしれない。第2類土器は、いわゆる「連続瓜形文」を特徴とするものであり、東海地方を中心として分布する粘炷式に併行するものであろう。第3類土器については、時間的位置を決しえないが、おそらく貝殻条痕文系土器の中でも新しい段階のものと思われる。第4類・第5類土器の多くは第1類～第3類土器に伴う剝面破片ないし、埴製土器と考えられる。ただし、一部第6類・第7類土器の時期のものを含んでいる可能性も否定しえない。第6類・第7類土器は貝殻条痕文系土器に後続する、早期末葉の所産と考えられる。

第III群土器は、縄文時代前期の土器である。第1類土器は早期終末を含めた前期初頭に位置づけられる。第2類土器は前期前半に位置づけられるものであり、第193図54は黒浜式、同55は有尾式に比定される。縄文施文を特徴とする56～78はこれらに伴う粗製的な土器と考えられ、類例は塩尻市・男屋敷遺跡、第11号住居址出土土器に求められる。第3類土器は前期後半の土器である。79～84は猪籠C式に、85・86は前期終末の土器にそれぞれ比定されよう。

第IV群土器は、縄文時代中期の土器を一括したものである。89～95は中期初頭に位置づけられ、梨久保式、九兵衛尾根式に比定される。96は角押文を特徴とし、猪沢式に相当する。三角押文を特徴とする98、沈線文と隆帯によって文様が描かれる97・99～101はそれぞれ新道式に比定される。

第V群土器は、縄文時代後期の土器である。第1類土器は後期初頭、赤名寺式に、第2類土器は後期前半、掘ノ内式にそれぞれ相当する。

(百瀬忠幸)

## 9 まとめ

山間地に所在する小舌状台地に立地した青木沢遺跡は、先土器から弥生後期まで長期間にわたる遺物が得られた。

まず、先土器時代の遺物の出土が目される。松本平では該期の遺物の集中出土は高山第1地点、北の原の2ヶ所のみであった。今回の発見はこれに次ぐもので、特に、複数のナイフ形石器、尖頭器は貴重である。また、以前、採集され、今回も関連遺物の出土した種子榮系文化の遺物は、最近、話題になった柿沢出土の同期の尖頭器群と併せ考えると、この地域に該期文化の遺跡がかなり濃密に分布していたことを示すもので、特異な地域といえる。

縄文早期から後期の遺物は、量的に僅少で、住居も未発見のため、集落遺跡というよりは、キャンプないし作業活動のための遺跡ではなかったかと考えられる。ここで注目されることは、各時代の極盛期といわれる時期の遺物がなく、時代の変換期の遺物が得られていることである。類

例を集積し、再検討されるべき課題と思われる。

また、弥生時代の遺物が出土したことも特異性としてあげられよう。狭隘な谷間にこうした弥生の遺跡が残されたことも、生産活動空間と関連して注意される。

以上、遺物量は僅少であったが、他遺跡にはみられない特異性を有する遺跡であったと考えられる。

(小林康男)

## 第IV章 結 語

今回の発掘調査は、塩尻東地区は場整備事業に起因する1年次の柿沢東遺跡を中心とする4遺跡に続く、2年次の堂の前遺跡、福沢遺跡、青木沢遺跡である。

最初に堂の前遺跡より調査を進めた。この地籍は、長秋地区の集落を形成する旧五千石街道より、800m東部の谷間に入った南向きの緩斜面に位置する。調査は5月16日から6月27日の1ヶ月少々の期間に於て、梅雨の季節とはいえ天候に恵まれた。当遺跡より検出された遺構は多くしかも集中的に群をなしている。中でも縄文早期後半の集落址は松本平では初の発見であり、ここから出土した遺物はこれからの研究の基礎となり得る。特に縄文早期といえば生居の形成をしはじめたところで、せいぜい3～4mの円形が一般的であるが、今回検出されたものは長さ13mにも及ぶものでおそらく全国でも最大級に入るものと思われる。

福沢遺跡については、堂の前遺跡と隣接しており手前約200mに位置し、地形的には前記と同じくやや緩斜面となり遺構面が深くなっている。調査は6月4日から7月14日を主に実施し、天候は曇り空が前回よりも多かった。この遺跡は、堂の前に比べれば遺構遺物の件数が比較的少なかった。作業的には遺構面が深く、また捨て土の処理について農道を決んでの作業になったため困難を極めた。当遺跡からは縄文時代早期の押型文土器、晩期～弥生初頭の土器群、石器群が比較的まとまって出土し該期研究の基礎的資料になり得るものと考えられる。また縄文晩期より弥生初頭のものと思われる土偶の頭部が出土し調査参加者の歓びをさそった。

青木沢遺跡は、このは場整備地区でも準高冷地に展し、国道20号線よ東山区南側の谷間で中央道長野線環状トンネル近くに位置する。隣接地に於ては果樹産文化財センターがすでに中央道関連で発掘調査済となっている。発掘調査は7月13日～9月3日迄お盆を中心に好天に恵まれ連日炎天下に於て、夏休みの大学生の協力を得て進められた。この付近は直径50cmに及ぶ巨礫が多量に有り発掘作業に支障をきたした。出土した遺物の中でも旧石器末期のものと思われる狩猟用の尖頭器、ナイフ形石器の2種は市内ではこれまでに出土例はあるが珍しいものであった。

今回の調査はそれぞれ特色ある遺構・遺物が検出され、この地の歴史を解明するいくつかの資料を提供してくれた。しかし本来、記録保存の立場から十分な調査が必要とされるべきものが、限られた予算内で期間が設定されてしまうため、その全容を調査することは困難であり遺憾であった。知り得た資料を地域の皆さんに最大限に活用されることを願います。

最後に今回の調査のため御協力をいただいた長秋・東山区民の方々、学生の皆さんに無事調査が出来ましたことに謝意を表する次第です。

(中野 栄)

参考引用文献

- 愛知県教育委員会 1983 愛知県古蹟跡群分布調査報告Ⅲ  
安孫子昭一 1982 「子母口式土器の再検討」(『東京考古』1)  
井関弘太郎 1983 「弥生時代～古代における稲作の地形環境」(『地理』28-10)  
太田真幸・河西清光 1966 「緑ヶ丘遺跡」(『長野県考古学会研究報告』1)  
大場勝男ほか 1955 「平出」  
大森利球ほか 1937 「埴尻町誌」  
岡本勇 1962 「横須賀市吉井城山第一貝層の土器(一)」(『横須賀市博物館研究報告』第6号)  
形原達雄(袋川流域)発掘調査編 発掘調査会編 1982 「愛知県清都市形原遺跡発掘調査報告書」  
可児通宏他 1982 「関東地方の押型文土器と燃米文土器」(『概報・掘沢遺跡』)  
神村達 1957 「豊丘村林里遺跡」(『長野県考古学会誌』4)  
" 1967 「長野県立野遺跡の捺型文土器」(『石器時代』4)  
桐原健池 1971 「元宮神社東遺跡」(『中央道調査報告書・上伊那宮田地区』)  
倉田芳郎編 1981 「東京・石川天野遺跡3次調査」(駒沢大学考古学研究室)  
紅村弘 1979 「東海先史文化の諸段階」資料編Ⅱ  
小林達雄 1966 「多摩ニュータウン遺跡調査報告」  
小林康男他 1984 「平出遺跡考古博物館紀要第一集」  
" 1983 「史跡平出遺跡」(埴尻市教育委員会)  
小松俊他 1974 「松本市今井こぶし畑遺跡調査概報」(松本市教育委員会)  
齊藤志著「日本史小百科・墳墓」近藤出版社  
佐々木藤雄他 1982 「向原遺跡第一分冊」(神奈川県教育委員会)  
笹沢浩 1975 「男女倉遺跡C地点」(『男女倉』)  
笹沢浩他 1975 「長野県中央道報告書一環訪その4-1」  
佐藤山起夫 1984 「静岡県三ヶ日町殿相遺跡出土の土器について(上)」(『古代文化』36-9)  
佐藤勉信 1977 「中島平」(飯田市教育委員会)  
島田哲男 1982 「吉田向井」(埴尻市教育委員会)  
杉原莊介・外山和夫 1964 「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡」(『考古学集刊』2-3)  
鈴木克彦 1972 「堂場遺跡調査報告書」(町田市史編さん委員会)  
" 1978 「子母口式土器の検討の必要性」(『多摩考古学』13)  
瀬川裕市郎・関野哲夫 1975 「元野遺跡発掘調査報告書」(沼津市教育委員会)  
瀬川裕市郎 1976 「清水柳遺跡の上器と石器―野島式土器と銘条体圧紋文土器について」(『沼津市歴史民俗資料館紀要』1)  
1982 「子母口式土器再考」(同6)  
1982 「条体文土器」(『縄文文化の研究3、縄文土器1』)  
関 章 1981 「中曾根Ⅱ遺跡発掘調査報告書」(二戸市教育委員会)  
関野哲夫 1980 「縄が鳥台式土器区分への覚書」(『古代探査』)

- 戸沢充則 1955 「橘沢押型文遺跡」(『石器時代』2)
- 戸田哲也 1984 「大入遺跡発掘調査報告書」(大入遺跡発掘調査刊)
- 鳥羽嘉彦他 1983 「吉田向井」(塩尻市教育委員会)
- 友野良一 1978 「カゴ田」(飯島町教育委員会)
- 富樫幸晴 1982 「縄文の集落の大型住居」(『考古学ジャーナル』203)
- 中村良幸 1982 「大杉住居」(『縄文文化の研究』8)
- 長崎元広 1979 「中部地方における縄文前期の竪穴住居」(『信濃』31-2)
- 1980 「縄文集落研究の系譜と展望」(『駿台史学』50)
- 長野県考古学会 1967 「須坂安源寺」
- 榎崎彰一・斎藤孝正 1983 「猿投窯竊年の再検討について」(愛知県陶磁資料研究紀要2)
- 野口行雄他 1983 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-NO14遺跡」(日本)千葉県埋文センター)
- 原嘉藤他 1972 「女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書」(松本市教育委員会)
- 原田達 1980 「トチガ原遺跡立ち合い調査」(『借馬遺跡Ⅱ』)
- 藤沢宗平 1971 「松本盆地における縄文文化から弥生文化への推移」(『志茂樹博士喜寿記念論集』)
- 毒島王明 1983 「子母口式土器の検討(上)」(『土曜考古』7)
- 堀込正行 1976 「小笠穴考(2)」(『史館』6)
- 松本盆地団体研究グループ 1977 「松本盆地の第四紀地質」(『地質学論集』14)
- 宮本長二郎 1983 「古代の住居と集落」(『講座日本技術の社会史7・建築』)
- 百瀬長秀他 1983 「東日本における黎明期の弥生土器」(『第4回三県シンポジウム』)
- 百瀬長秀 1984 「エリ穴遺跡」(『長野県史1-3』)
- 〃 1984 「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開」(『長野県考古学会誌』49)
- 八木光則 1975 「いわゆる『特殊磨石』について」(『信濃』28-4)
- 和田博秋他 1982 「長野県中央道発掘調査報告書・茅野市その5」

# 圖 版



堂の前遺跡遠景



調査地区全景





第1号住居址



第2号住居址



第4号住居址



第6号住居址



第3·5·7号住居址



第8号9号住居址



繩文早期住居址群



10号住居址



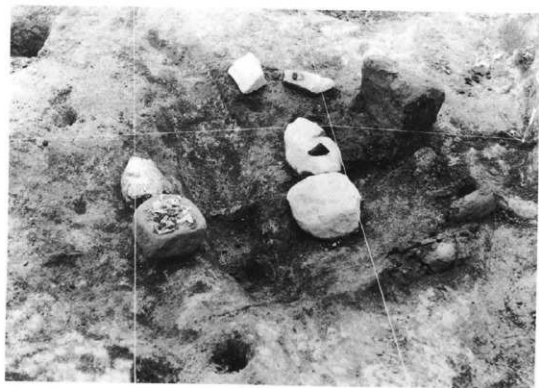
第11号住居址



第12号住居址



中世遺構



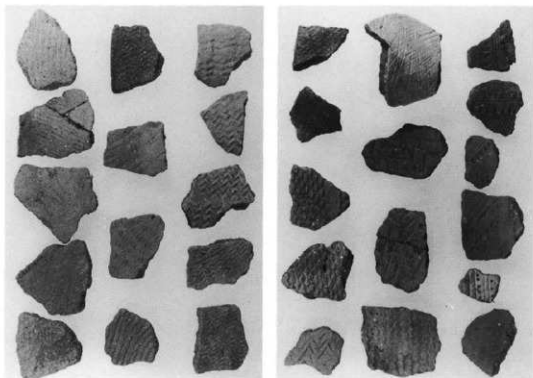
第1号火葬墓



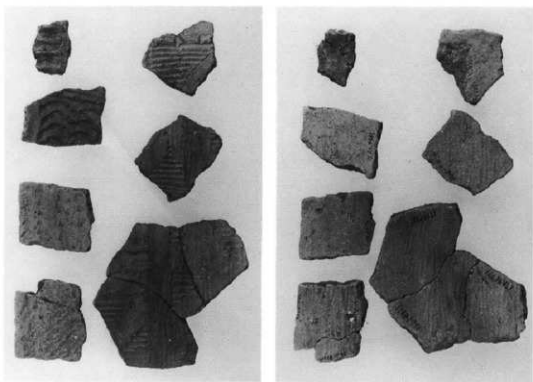
第16号小竖穴



绳文早期尖底土器（第I群土器）

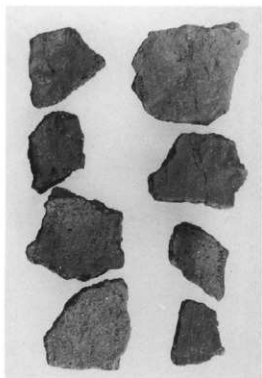


第I・II群土器

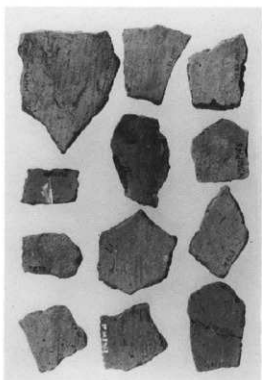
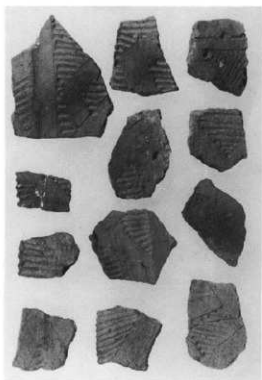


第III群土器(1)

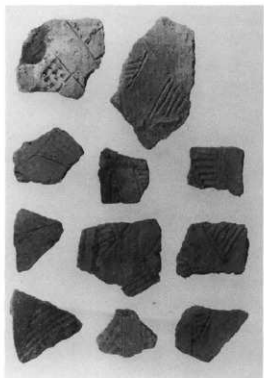




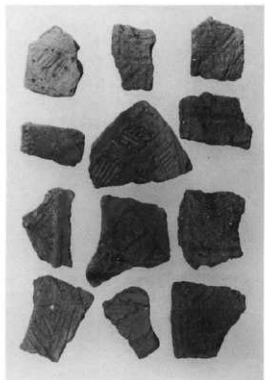
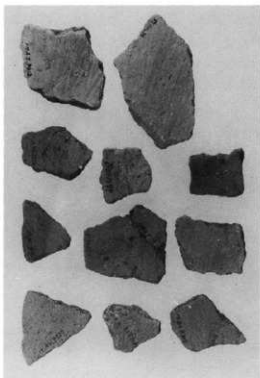
第III群土器(2)



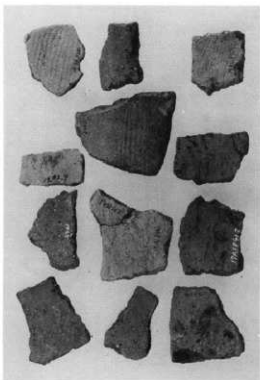
第III群土器(3)

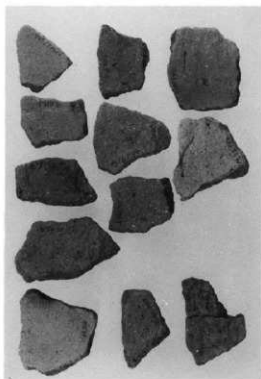
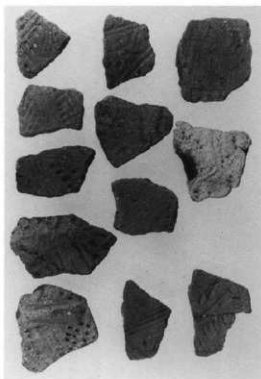


第III群土器(4)

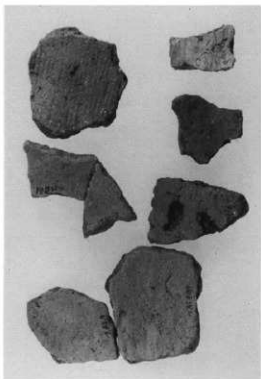
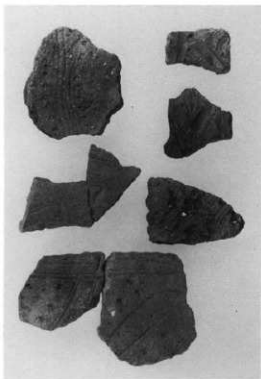


第III群土器(5)

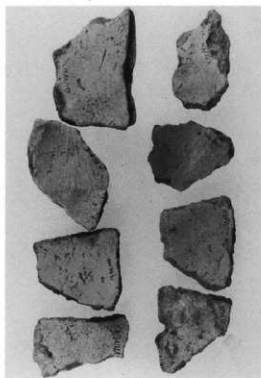




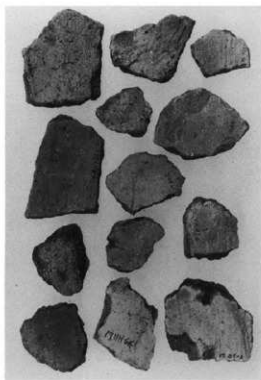
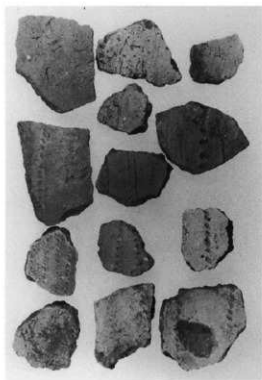
第Ⅲ群土器(6)



第Ⅲ群土器(7)



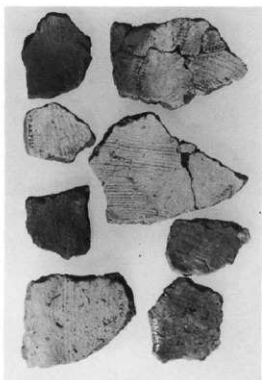
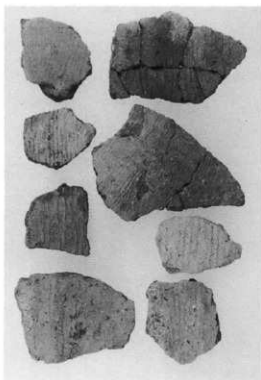
第III群土器(8)



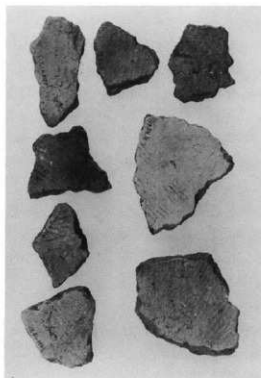
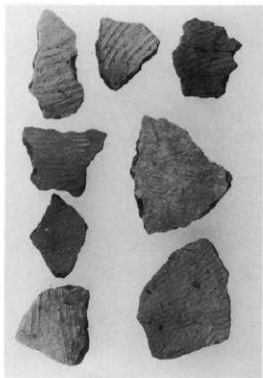
第III群土器(9)



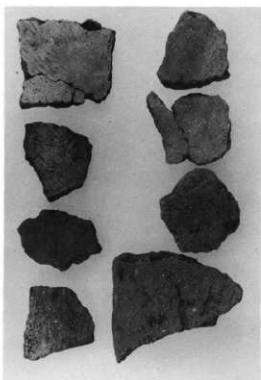
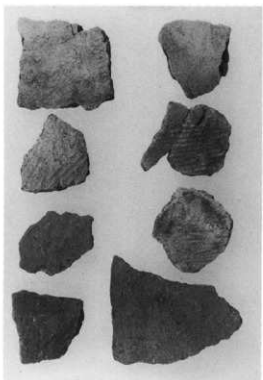
第III群土器00



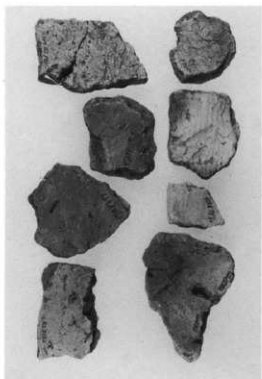
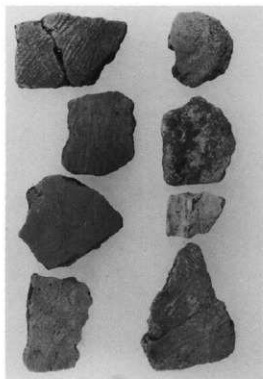
第III群土器01



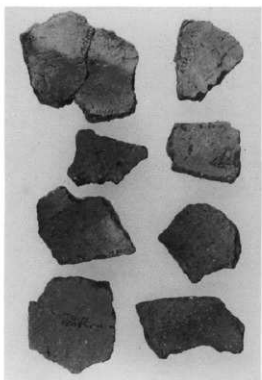
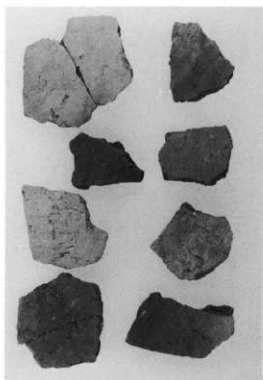
第III群土器02



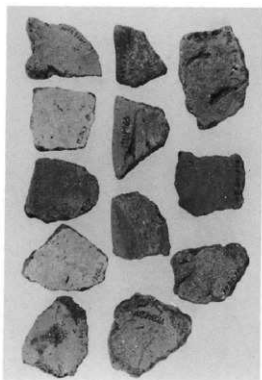
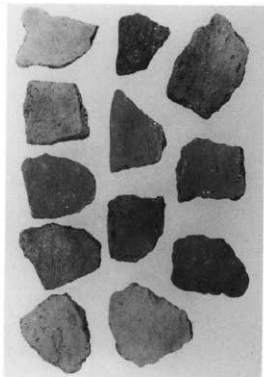
第III群土器03



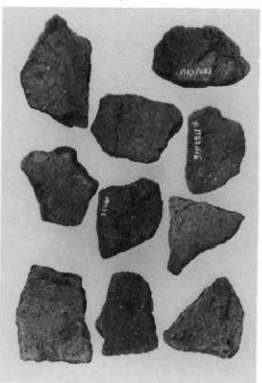
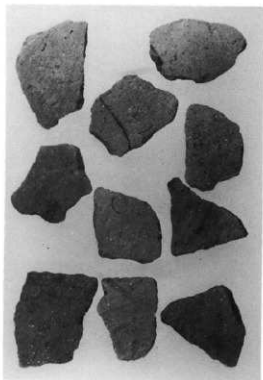
第Ⅲ群土器00



第Ⅲ群土器09

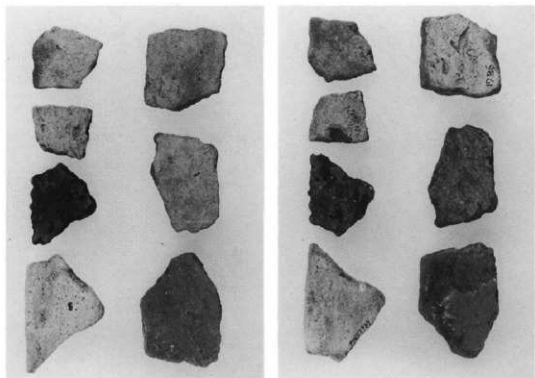


第III群土器2506

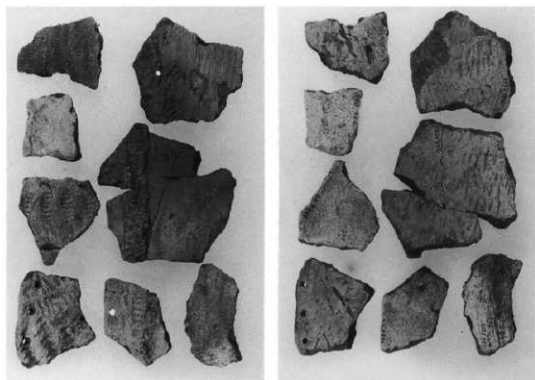


第III群土器2507





第三群土器08



第三群土器09